広島市の文化財　第28集

広島市安佐北区高陽町所在

末光遺跡群発掘調査報告

1984.3

広島市教育委員会

はしがき

広島市の発展にともない，なだらかな丘陵の続く高陽町一帯は，高陽ニュータウンをはじめ，多くの宅地開発が行われています。現代の人々にとって住みよいところは，古代の人々にとつてもまた同様に住みよい場所であらたと思われます。事実そのことは，このあたり一帯に多くの遺跡が存在しているところからも，うかがい知ることができます。末光遺跡群もこうした遺跡のひとっであります。この度，末光遺跡群が宅地開発にともなって消滅することになったので，記録保存することとし，広島市教育委員会が発掘調査を行いました。その結果，古代住居跡や墳墓などがみつかり，古代における高陽町一帯のようすを知る資料が，またひとつ加えられました。

今回の調査にあたり，ご指導を賜りました諸先生方並びに発掘作業，整理作業に従事していただいた方々，その他調査にあたってご援助いただいた多くの方々に厚くお礼申しあげます。この報告書が歴史研究や郷土理解のために役立てば幸いです。

昭和59年3月

広島市教育長　藤　井　　尚

例　　言

1．本書は，広島市安佐北区高陽町諸木，末光及び岩上における宅地造成工事に伴い，昭和55，58年度の２ヶ年にわたり，実施した末光遺跡群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，広島市高陽町岩上土地区画整理組合から委託を受けて，広島市教育委員会が実施した。

3．発掘調査において出土した人骨の鑑定は，長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸講師から玉稿をいただき，その結果をIX章として掲載した。

4．上記３を除く本書の執筆は，桧垣栄次，幸田淳，橋本義和が分担して行い，文責については文末に記した。また，編集は，橋本が行った。

5．出土遺物，遺構の実測，製図及び写真等は，桧垣，幸田，橋本が各々分担して行った。

6．本書掲載の末光遺跡群全景の航空写真は，はにわ会会員井手三千男氏から提供を受け，Ｄ地点の航空写真は，スタジオ・ユニに委託した。

7．遺物写真のうち，Ａ－２地点１，Ｂ地点43，44は１／6，他は１／３とした。

8．第１図は建設省国土地理院発行の50,000分の１，海田の地形図を複製したものである。

目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に　1

Ⅱ　位 置 と 環 境　3

Ⅲ　Ａ 地 点 遺 跡　6

　１．Ａ－１地点遺跡　6

　２．Ａ－２地点遺跡　24

Ⅳ　Ｂ 地 点 遺 跡　35

Ⅴ　Ｃ 地 点 遺 跡　68

Ⅵ　Ｄ 地 点 遺 跡　72

Ⅶ　Ｅ 地 点 遺 跡　77

Ⅷ　岩　上　城　跡　87

Ⅸ　広島市末光遺跡群Ｂ地点出土の弥生時代人骨　90

Ⅹ　考　　察　96

挿　図　目　次

第１図　末光遺跡群の位置と周辺の主要遺跡　2
第２図　末光遺跡群遺跡配置図　5
第３図　Ａ－１地点トレンチ及び遺構配置図　6
第４図　Ａ－１地点第１号住居跡実測図　7
第５図　Ａ－１地点第２号住居跡実測図　8
第６図　Ａ－１地点第３号住居跡実測図　9
第７図　Ａ－１地点第４号住居跡実測図　折り込み
第８図　Ａ－１地点第５号住居跡実測図　折り込み
第９図　Ａ－１地点出土サイドスクレイパー実測図　11
第10図　Ａ－１地点出土土器実測図(1)　19
第11図　Ａ－１地点出土土器実測図(2)　20
第12図　Ａ－１地点出土土器実測図(3)　21
第13図　Ａ－１地点出土土器実測図(4)　22
第14図　Ａ－２地点遺跡地形図　24
第15図　Ａ－２地点遺構配置図　25
第16図　Ａ－２地点第１～７号土壙実測図　26
第17図　Ａ－２地点第１～７号土壙断面実測図27
第18図　Ａ－２地点第８号土壙実測図　28
第19図　Ａ－２地点第９号土壙実測図　29
第20図　Ａ－２地点第10号土壙実測図　30
第21図　Ａ－２地点第11号土壙実測図　31
第22図　Ａ－２地点第11号土壙出土土器実測図　32
第23図　Ｂ地点遺構及ぴトレンチ配置図　34
第24図　Ｂ地点第１号住居跡実測図　36
第25図　Ｂ地点第２号住居跡実測図　37
第26図　Ｂ地点第３号住居跡及び第４号土壙実測図　39
第27図　Ｂ地点第４号住居跡実測図　40
第28図　Ｂ地点第１号土壙実測図　41
第29図　Ｂ地点第２号土壙実測図　42
第30図　Ｂ地点第３号土壙実測図　43
第31図　Ｂ地点第５号土壙実測図　44
第32図　Ｂ地点第６号土壙実測図　45
第33図　Ｂ地点第７号土壙実測図　45
第34図　Ｂ地点弥生墳墓配置図　46
第35図　Ｂ地点第１号墓実測図　47
第36図　Ｂ地点第２号墓実測図　47
第37図　Ｂ地点第３号墓実測図　48
第38図　Ｂ地点第４号墓実測図　48
第39図　Ｂ地点第５・６号墓実測図　49
第40図　Ｂ地点第７号墓実測図　50
第41図　Ｂ地点第８号墓実測図　51
第42図　Ｂ地点第９号墓実測図　52
第43図　Ｂ地点第10号墓実測図　54
第44図　Ｂ地点出土土器実測図(1)　61
第45図　Ｂ地点出土土器実測図(2)　62
第46図　Ｂ地点出土土器実測図(3)　63
第47図　Ｂ地点出土土器実測図(4)　64
第48図　Ｂ地点出土土器実測図(5)　65
第49図　Ｂ地点出土土器実測図(6)　65
第50図　Ｃ地点土壙実測図　68
第51図　Ｃ地点出土土器実測図　70
第52図　Ｄ地点遺構配置図　72
第53図　Ｄ地点住居跡実測図　73
第54図　Ｄ地点土壙実測図　74
第55図　Ｅ地点遺構配置図　76
第56図　Ｅ地点第１・２号住居跡実測図　78
第57図　Ｅ地点第１号土壙実測図　79
第58図　Ｅ地点第２号土壙実測図　80
第59図　Ｅ地点第３号土壙実測図　80
第60図　Ｅ地点第４号土壙実測図　81
第61図　Ｅ地点第５号土壙実測図　81
第62図　Ｅ地点第１号住居跡出土鉄斧　84
第63図　Ｅ地点第１号住居跡出土鉄鏃　84
第64図　Ｅ地点出土土器実測図　85
第65図　岩上城励地形測量及び遺構配置図　88
第66図　遺跡分布図　91

図　版　目　次

PL.1　末光遺跡群全景（航空写真）
PL.2　a.　A－1地点第1号住居跡
　　b.　A－1地点第2号住居跡
PL.3　a.　A－1地点第3号住居跡
　　b.　A－1地点第4号住居跡
PL.4　a.　A－2地点遠景（調査後）
　　b. A－2地点近景（調査後）
PL.5　a. A－2地点第1・2号土壙
　　b. A－2地点第3～7号土壙
PL.6　a. A－2地点第8号土壙
　　b. A－2地点第9号土壙
PL.7　a. A－2地点第10号土壙
　　b. A－2地点第11号土壙
PL.8　a. B地点遠景（調査前）
　　b. B地点近景（調査前）
PL.9　a. B地点第1号住居跡
　　b. B地点第2号住居跡
PL.1O a. B地点第3号住居跡
　　b. B地点第4号住居跡
PL.11 a. B地点第4号住居跡
　　b. B地点第4号住居跡
PL.12 a. B地点第1号土壙
　　b. B地点第2号土壙
PL.13 a. B地点第3号土壙
　　b. B地点第4号土壙
PL.14 a. B地点第5号土壙
　　b. B地点第6号土壙
PL.15 a. B地点第2号住居跡内土壙
　　b. B地点第3号住居跡内土壙
PL.16 a. B地点弥生墳墓群第1～9号墓
　　b. B地点弥生墳墓群及ぴ第7号土壙
PL.17 a. B地点第1・3号墓
　　b. B地点第2号墓
PL.18 a. B地点第4号墓
　　b. B地点第5・6号墓
PL.19 a. B地点第7号墓
　　b. B地点第8号墓
PL.20 a. B地点第9号墓
　　b. B地点第10号墓
PL.21 a. B地点第10号墓下層人骨出土状態
　　b. B地点第10号墓上層人骨出土状態
PL.22 a. D地点全景（航空写真）
　　b. D地点近景（調査前）
PL.23 a. D地点住居跡
　　b. D地点土壙
PL.24 a. E地点近景（調査前）
　　b. E地点近景（調査後）
PL.25 a. E地点第1・2号住居跡
　　b. E地点第1号土壙
PL.26 a. E地点第2号土壙
　　b. E地点第3号土壙
PL.27 a. E地点第4号土壙
　　b. 岩上城跡遠景
PL.28　A－1地点出土土器
PL.29　A－1地点出土土器
PL.30　A－2地点及びC地点出土土器
PL.31　B地点出土土器
PL.32　B地点出土土器
PL.33　B地点出土土器
PL.34　B地点出土土器
PL.35　B地点出土土器
PL.36　E地点出土土器及び鉄器
PL.37　B地点第10号墓出土人骨

表　目　次

表１　Ａ－１地点出土土器観察表　12

表２　Ａ－２地点土壙計測表　28

表３　Ｂ地点出土土器観察表　55

表４　Ｅ地点出土土器観察表　82

表５　大　腿　骨　90

表６　大腿骨計測値　92

表７　大腿骨計測値　92

表８　大腿骨計測値　93

表９　土壙の規模と住居跡の位置関係　98

表10　住居跡の規模と平面形　99

Ⅰ　は　じ　め　に

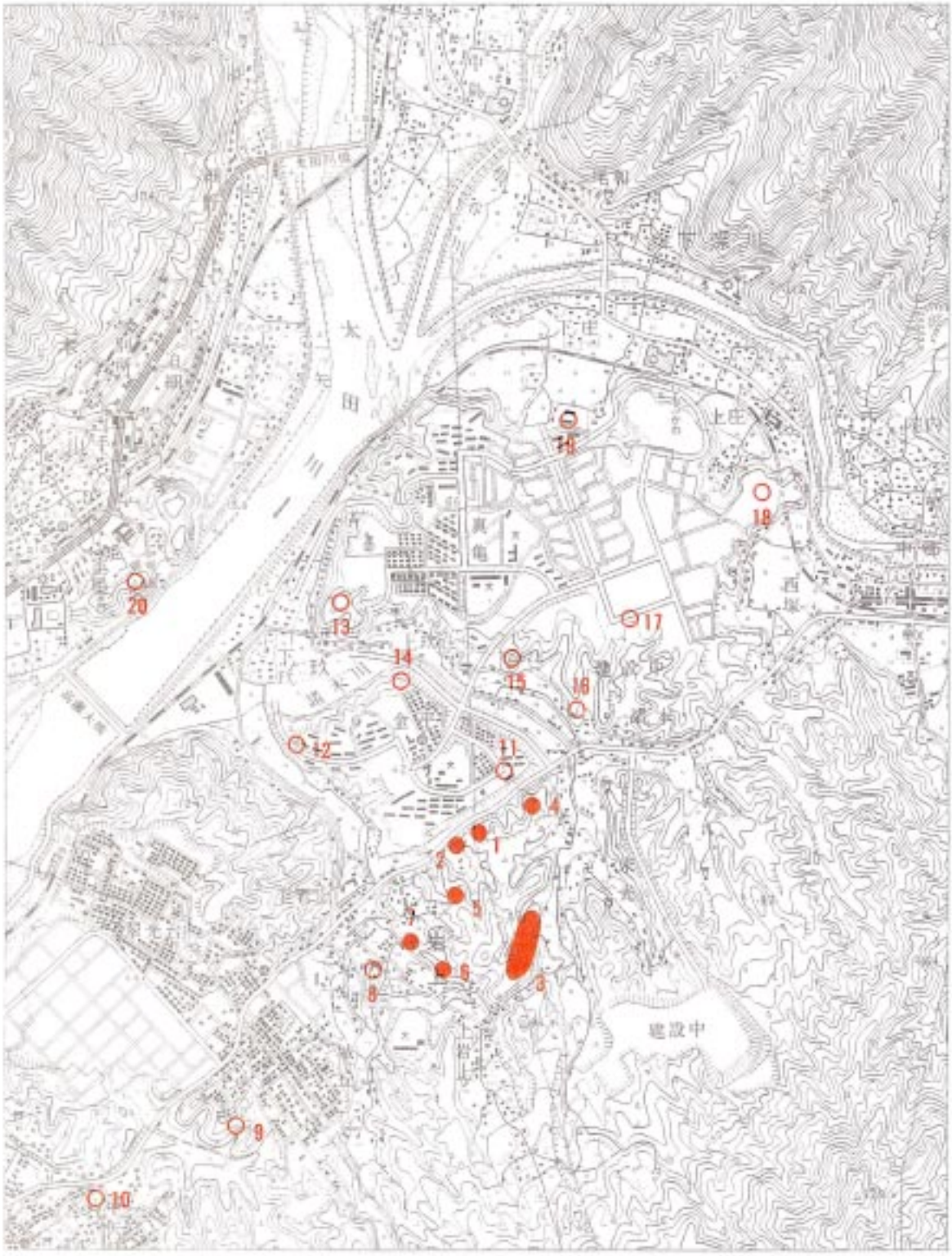
広島市教育委員会では，昭和54年３月，広島市安佐北区高陽町諸木，末光，岩上地区の造成計画を知り，分布調査を行った結果，埋蔵文化財の存在の可能性があることがわかった。そこで，造成主である広島市高陽町岩上土地区画整理組合（以下組合という）と施工主である株式会社熊谷組と遺跡の取り扱いについて協議を行い，これと並行して試掘調査を実施した。その結果，６ヶ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。その後埋蔵文化財の取り扱いについて組合と再三協議を重ねたが，地理的条件等から設計変更は不可能であり，記録保存もやむなしとの結論に達した。これをうけて，広島市教育委員会は，昭和55・58年の２ヶ年で発掘調査を実施することになった。

発掘調査は，工事を急ぐところから順次着手していき，昭和55年５月～７月にA地点を，同９月～昭和56年１月にB地点を，５月にC地点を調査し，昭和58年４月～６月にD・E地点及び岩上城跡の調査を実施した。

調査の実施に係る関係者は，下記のとおりである。

調査委託者　　広島市高陽町岩上土地区画整理組合
調査主体　　広島市教育委員会
調査担当係　　広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係
調査関係者　　信井正行　　社会教育部長（現中央図書館長）
　　森脇昭之　　社会教育部長
　　成田鉞雄　　社会教育課長（現青少年センター館長）
　　上川孝明　　社会教育課長
　　佐藤普門　　社会教育課主監
　　有谿盈雄　　社会教育課文化財係長（現馬木公民館長）
　　木原　亮　　社会教育課課長補佐兼文化財係長
調　査　者　　桧垣栄次　　社会教育課文化財係主事
　　幸田　淳　　社会教育課文化財係主事
　　橋本義和　　社会教育課文化財係主事
調査補助員（順不同）
　　吉岡肇，清水池アキエ，沖川義登，瀬垣昭義，住川努，西村雄太郎，谷本正夫，住川幸恵，迫井秀吉，蔵本節美，吉広ナミヨ，城山志信，桑田テル子，住川香代子，重本君子，井手文子，重本キヨミ，石丸千代子，城山正則，城山ヨシ子，倉本節枝，山本敏昭，中藤喜代子，坂本七五登，三浦君子，河合淳子，河合五十鈴，橋本礼子，河田キミエ，土井勝子，山村久登，織田恵子，上林陽子，岡原節子

なお，広島市高陽町岩上土地区画整理組合，株式会社熊谷組，高陽公民館，保存科学研究会理事宇野栄氏，広島県文化財保護指導員三野丈一氏，小田一義氏，はにわ会会員井手三千男氏のほか多くの方々には，調査を円滑に進めるため多大なご配慮を頂いた。さらに，報告書作成にあたっては，広島大学考古学研究室，長崎大学医学部解剖学第２教室，横浜市三殿台考古館，（財）広島県埋蔵文化財調査センター三枝健二氏，広島県立高陽高等学校教諭中田昭氏等から広範な教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。（橋本）



1．末光遺跡群A - 1地点，2．同A - 2地点，3．同B地点，4．同C地点，5．同D地点，
6．同E地点，7．岩上城跡，8．岩上貝塚，9．高陽台遺跡群A地点，10．中矢口遺跡，
11．大井遺跡，12．地蔵堂山遺跡，13．恵下山遺跡群，14．山手遺跡，15．寺迫遺跡，
16．諸木遺跡群，17．西山・北山遺跡群，18．亀崎遺跡，19．狐ヶ城遺跡群．20．八木城跡

第１図　末光遺跡群の位置と周辺の主要遺跡

II 位 置 と 環 境

広島市域を流れる県西部最大の河川太田川は，広島県北西部の冠山（標高1339ｍ）に源を発し，多くの支流を合わせつつ，広島市北部の可部，高陽町付近で根の谷川，三篠川と合流し，広島デルタを形成しながら広島湾に流れ込んでいる。

この太田川の東西には，阿武山（標高586.4ｍ）・武田山（標高410.9ｍ）・ニヶ城山（標高483.2ｍ）など400～500ｍの山々が連なっており，それらの山々から延びた急峻な尾根が150～200ｍあたりでややゆるやかになり，東岸の高陽町周辺では，100ｍ以下の低丘陵が河岸にまで迫っている。

また，太田川は昭和40年に大氾濫し，この時，高陽町域は大きな被害をうけている。このように灌概・治水技術の発達している昨今でさえ，ある程度の規模をもつ河川を制御することは困難であったようで，それにもまして，土木技術が未熟であった往古では，本河川下流域の沖積地は安定しておらず，稲作等を行うのには適していなかったと考えられる。そのうえ，弥生時代後期頃には，この周辺でも人口が飛躍的に増加し鉄器等の農工具の発達も著しいものであったようで，これ以前は中山貝塚など低位に位置する小河川周辺の湿地等を可耕地にしていたと考えられる人々が，小河川を遡上しながら新しい可耕地をもとめ，集落を丘陵上で営みつつ，その傍の谷間で水田耕作を行ったと思われる。このことは，高陽町一帯から検出された多くの遺跡が，小河川の流れる谷あいを見おろす丘陵上に立地していることからも明白で，今回報告する末光遺跡群もまたこうした遺跡のひとつである。

末光遺跡群は，広島市安佐北区高陽町大字末光-岩上および諸木にまたがって散在している。本遺跡群はニヶ城山から北に派生した丘陵上に位置しており，遺跡群をはさむように東西両側には，岩ノ上（落合）川，襟面（諸木）川と呼ばれる小河川が流れており，この地域としては比較的広い可耕地を形成している。また，北側はニヶ城山から延びてきた丘陵が若干落ち込み鞍部となっており，南側は大きな谷がはいり込んでいる。末光遺跡群は，Ａ～Ｅ地点の５地点からなり，昭和55，58年度の発掘調査の結果，Ａ・Ｂ地点は竪穴式住居跡及び墳墓からなる遺跡であり，Ｃ地点は土壙で，Ｄ・Ｅ地点は竪穴式住居を中心とした遺跡であることがわかった。そのほかに，中世山城（岩上城跡）も確認されている。

以下，末光遺跡群周辺に所在する主要な遺跡について概括してみたい。

本遺跡群の所在する高陽町一帯では，先土器・縄文時代の遺跡はほとんどみられず，わずかに弘由貴跡から縄文土器が出土している(注1)。市域においても，縄文時代の遺跡としては，比治山貝塚争中山貝塚など数例が確認されているのみで，現在のところ住居跡等の遺構は検出されていない。しかし，弥生時代にはいるとこの高陽町域においても遺跡の数は急増するが，そのほとんどが後期に属するものであり，中期の遺跡として弘住遺跡の弥生配石遺構が知られているにすぎない(注2)。

さて，末光Ａ－１，Ｂ，Ｄ，Ｅ地点遺跡と同様に住居跡を伴う遺跡としては，高陽ニュータウシ造成時に見つかった大井Ｂ地点遺跡山手Ａ地点遺跡真亀遺跡群，寺迫遺跡西山遺跡北山遺跡等があげられる。これらは，いずれも標高50～80ｍの低丘陵上に位置しており，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡からなっている(注3)。このほかには、城前遺跡，高陽台遺跡群，中矢口遺跡が住居跡を伴う遺跡である。このうち特に，城前遺跡からは，弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての10×８ｍを測る太田川下流域最大級の方形プランを有する竪穴式住居跡が２基見つかっている(注4)。また，高陽台遺跡群Ｂ地点においては，弥生時代後期後半頃の竪穴式住居跡とともに太田川下流域初見の高床式の建物跡が検出されている(注5)。

では，末光遺跡Ａ－２・Ｂ地点と同様に墳墓を中心とした遺跡としては，西願寺遺跡群，高陽台遺跡群，

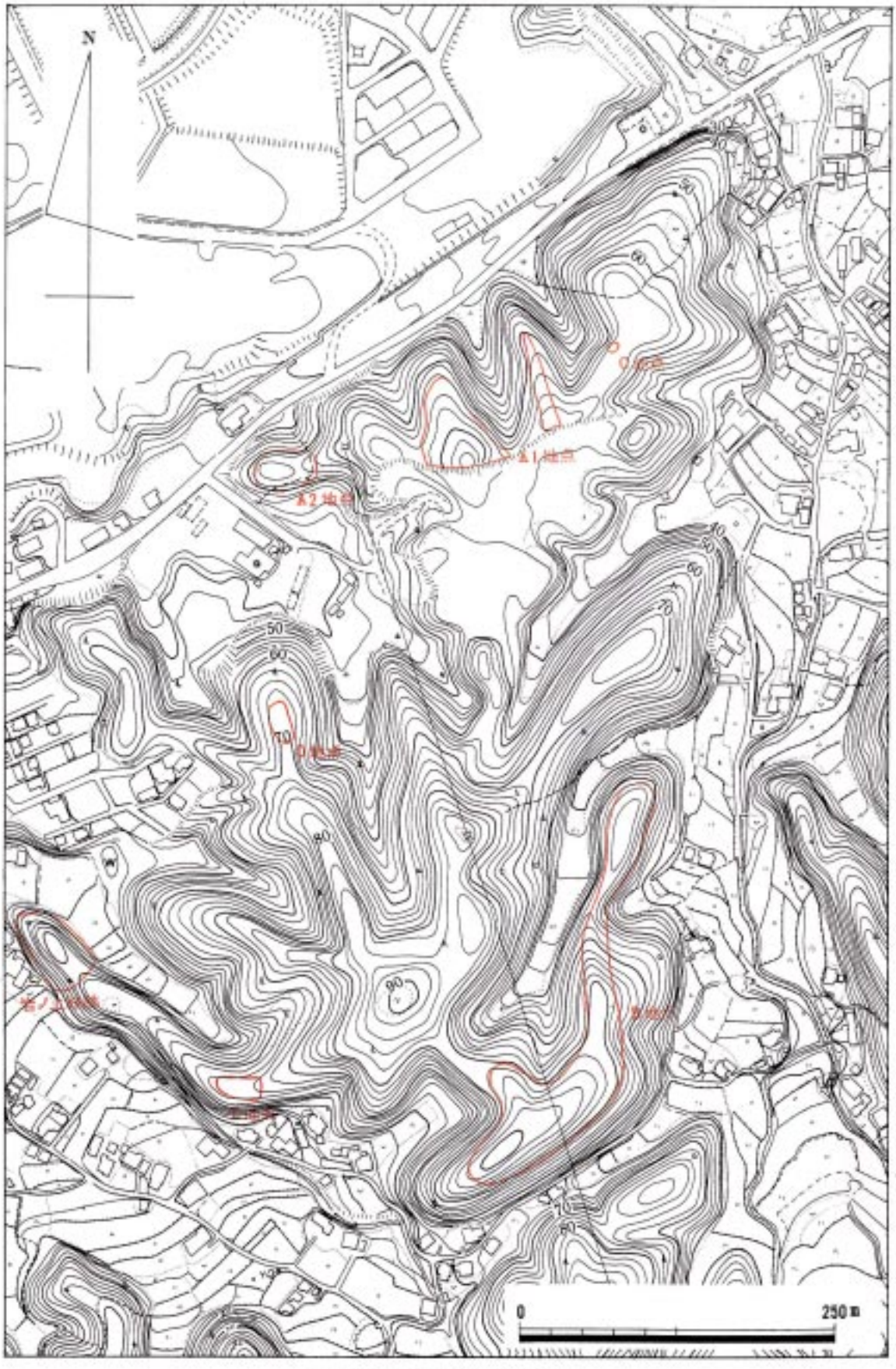
禅昌寺西遺跡があげられる。西願寺遺跡群は，弥生時代から古墳時代前半にかけて営まれたもので，県内で（注6）
も希少な河原石で構築された竪穴式石室をはじめとし，箱式石柏や土壙墓などで構成されている。高陽台遺（注7）
跡群Ｂ地点は，箱式石棺及び粘土槨で，禅昌寺西遺跡は箱式石棺及び土壙墓で構成されたもので，ともに弥（注8）
生時代後期から古墳時代前半期にかけて営まれたものである。

なお，末光遺跡群からは，Ａ～Ｅ地点遺跡のほかに中世山城である岩上城跡が確認されている。このような山城は，この高陽町域においても，恵下山城跡・地蔵堂山城跡・諸木城跡・亀崎城跡等が見いだされてお（注9）
り，市域では現在までのところ約150の山城が見つかっている。

一般的に安芸国内の中世山城は，東国に本拠をおいていた武士たちが，文永11年（1274）の蒙古襲来を契機として，安芸国内の所領に本拠を移し，その拠点として築城され始めたもので，その後，これらの武士たちは，たびたび抗争を起こし，その都度離合集散を繰り返しつつ，自己の所領拡大を図っていった。しかしながら，江戸時代にはいると徳川幕府の強力な中央集権国家の成立により，この山城も，元和元年（1615）の一国一城令を境に，急速に衰退し，その役割を失っていた。（橋本）

（注）

1. 広島市教育委員会「弘住遺跡発掘調査報告」1983
2. 同上
3. 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977
4. 広島市教育委員会「中矢口遺跡発掘調査報告」1980
5. 広島市教育委員会「高陽台遺跡群発掘調査報告」1982
6. 広島県教育委員会「西願寺遺跡群」1974
7. 注5と同じ
8. 禅昌寺西遺跡発掘調査団「禅昌寺西遺跡発掘調査報告」1980
9. 広島市教育委員会「山城」1982



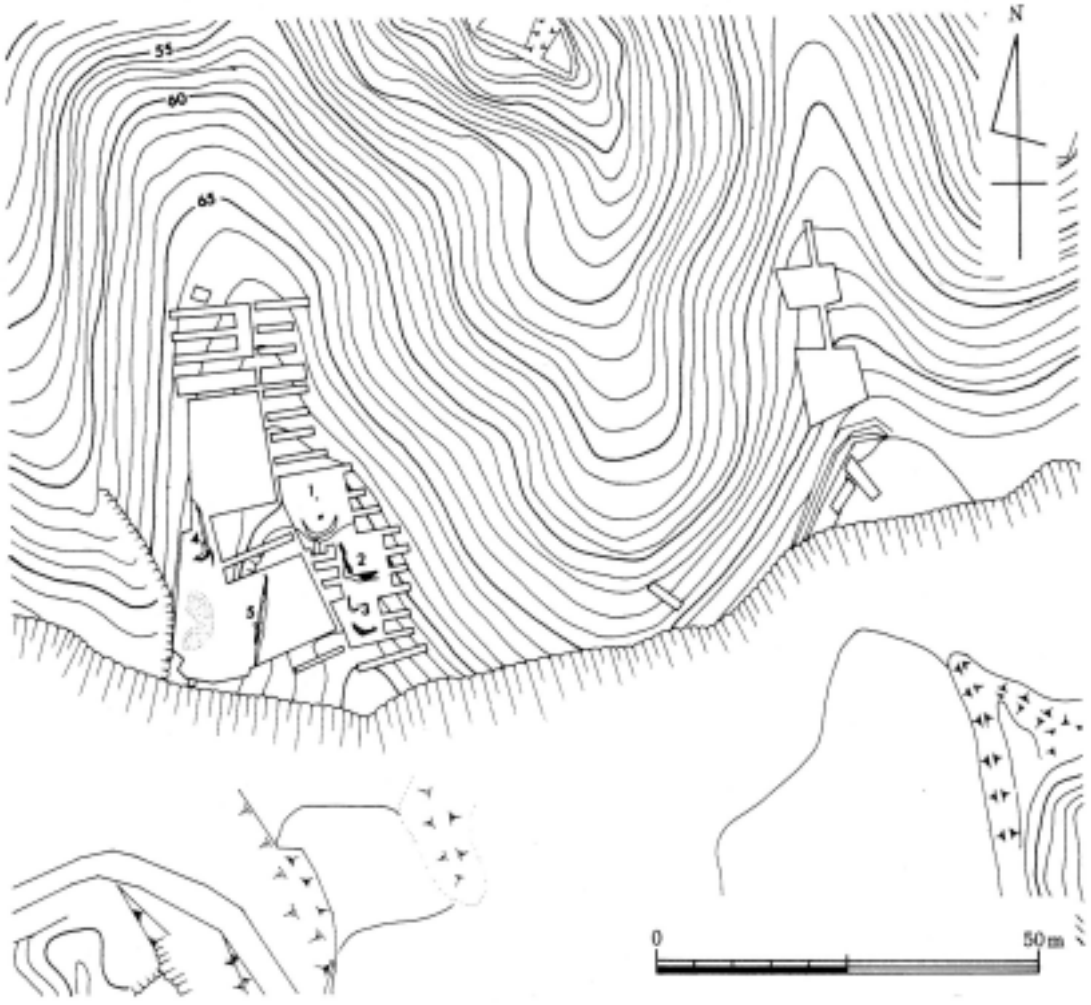
第２図　末光遺跡群遺跡配置図

Ⅲ　A　地　点　遺　跡

A－1地点遺跡の概要（第3図）

A－1地点は，末光遺跡群の最地儲に位置し，諸木川によって形成された狭小な谷に向かって開いた小支谷の谷奥に派生した2本の小支尾根上に立地している。西側の尾根は試掘調査によって，尾根上に集落跡が存在することが推定された。調査は試掘調査の成果を参考に，西側の尾根は尾根線を中心に東西に分割した後，2m毎に幅2mのトレンチを設定し，東側の尾根（椎木山地区と呼称する）は，尾根線にトレンチを設定し，必要に応じて拡張を行うこととした。

調査の結果，西側の尾根上及びその斜面から5軒分の住居跡を検出した。尾根上に検出された住居跡は北から第1～3号住居跡，斜面から検出された住居跡は北から第4，5号住居跡と呼称することとした。遺物は，主にこの住居跡内に見られるが，第5号住居跡下方の斜面に多く集中して出土した。椎木山地区からは遺物のみが出土した。なお，調査区域の南端部は，土取り工事による崖面で，危険が予想されたため，調査範囲から除外した。



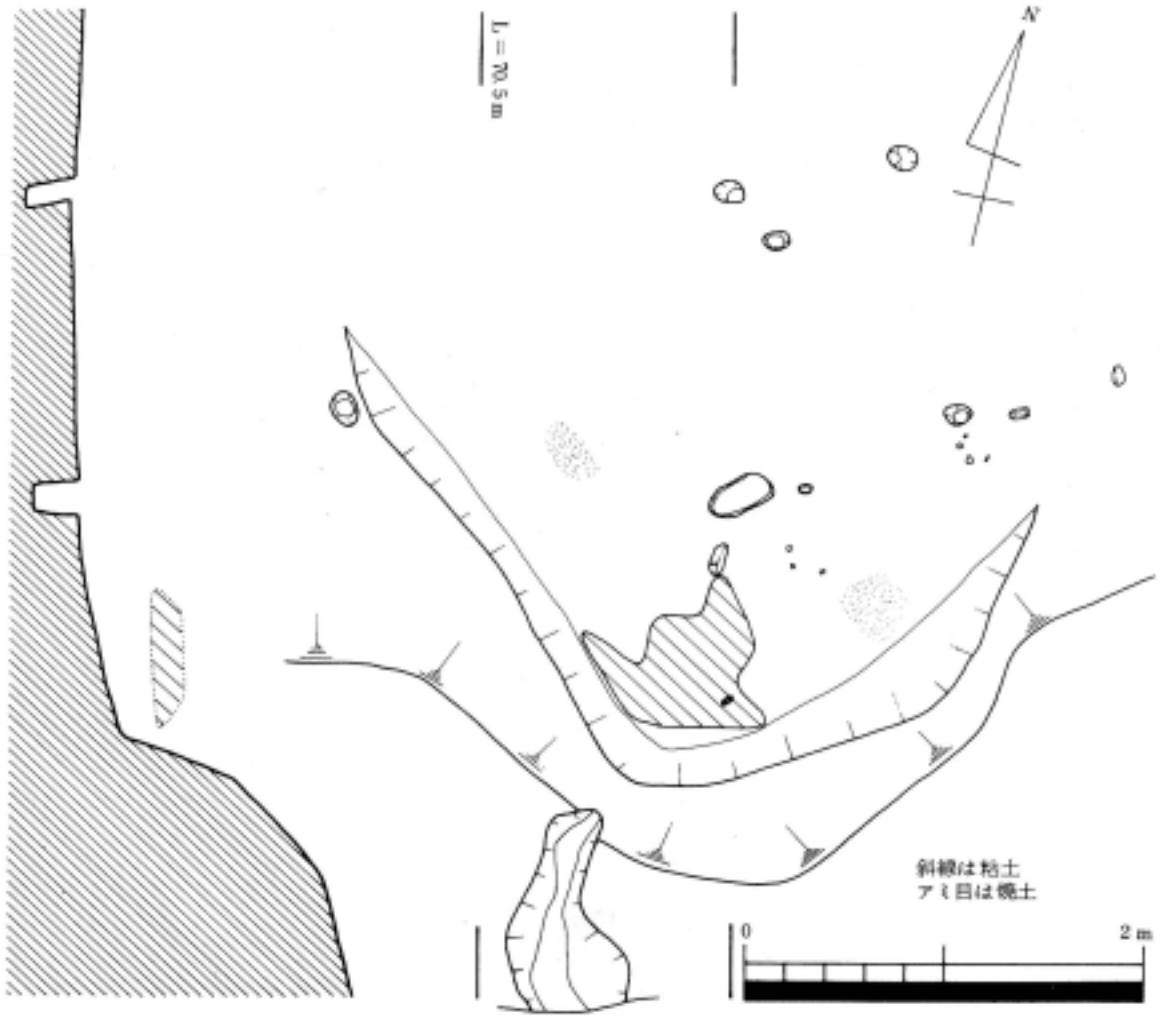
第3図　A1地点トレンチ及び遺構配置図

遺　　構

１．第１号住居跡（第４図）

尾根中心線よりやや東側斜面に寄った部分から検出された。地山を南側の高い方から約1.2m掘り込んで床面としている。斜面となる部分に造られているため，東側・北側の掘り方は見られない。検出した西側と南側の掘り方の長さは各々３m，２mを測る。南西コーナーは若干鋭角的に検出され，全体のプランは整っているとは言い難いが，方形プランを意識したものと考えられる。床面からは，小ピットが数力所検出されたが，柱穴と考えられるピットは，床面申央部の１ヵ所しか見られない。このため，本住居の規模は明らかにすることはできない。

遺物は，掘り方南西コーナー付近から，赤色粘質土と混じった状態で出土した。土器は破片のみで完形品は見られなかった。赤色粘質土は，比較的多量にまとまって出土しており，土器製作用の粘土の可能性が考えられる。

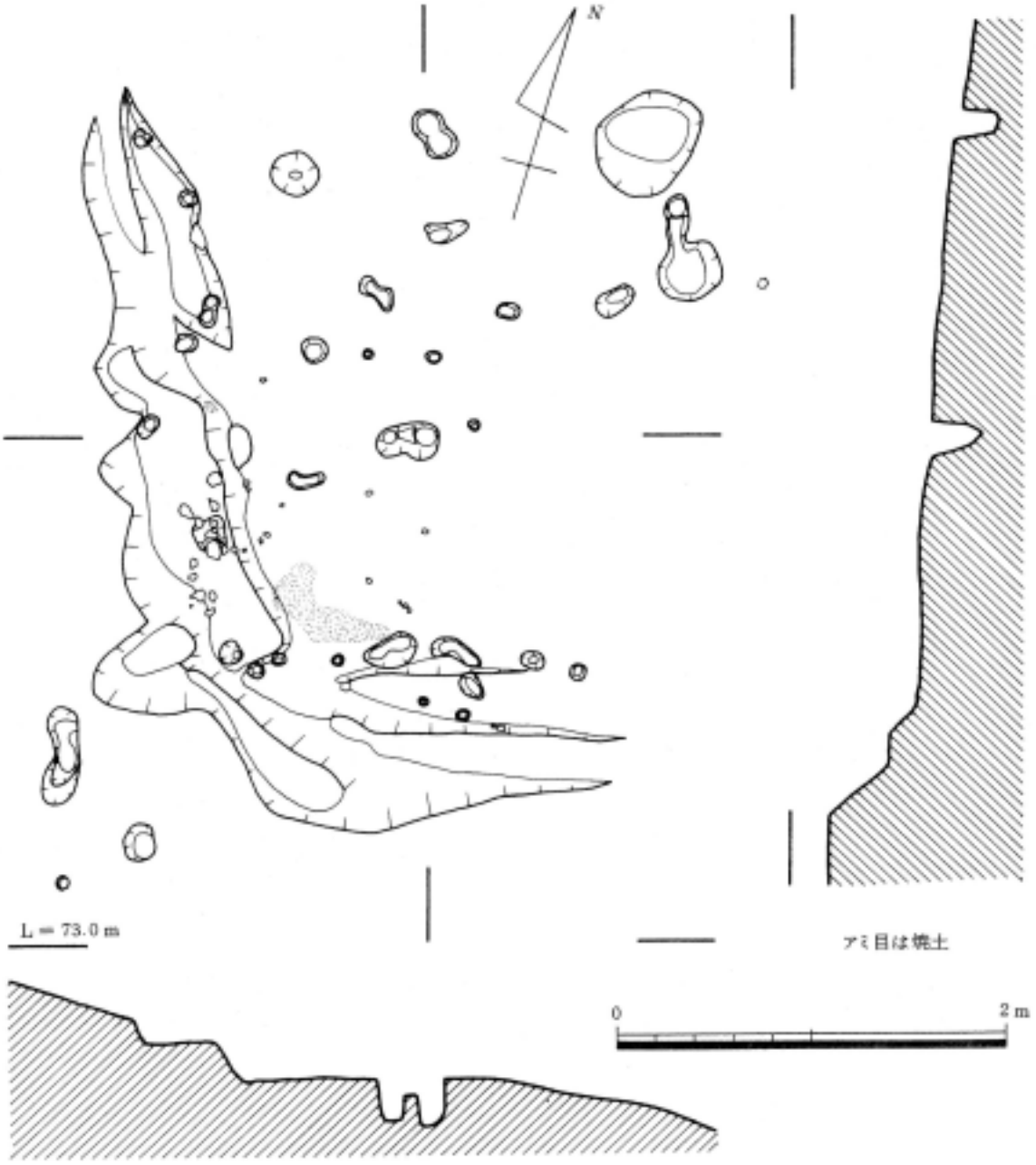


第４図　Ａ－１地点第１号住居跡実測図

２．第２号住居跡（第５図）

本住居跡は,第１号住居励の南側に隣接して,尾根中心線からやや東側斜面に寄った部分から検出された。地山の高い部分を約30㎝掘り込んで床面としている。地山が東，北側にゆるやかに傾斜しているため，東側と北側の掘り方は見られない。検出された西側及び南側の掘り方の長さは，明瞭に検出されないが，各６m，３mを測る。

掘り方上端から床面までに２段の狭い平坦面が見られる。この状態から，本住居は少なくとも３軒の重複がうかがえるが，明確にすることはできなかった。床面からは多数の小ピットが検出されたが，柱穴と考えられるピットは見られなかった。検出された掘り方の形状は，方形又は隅丸方形を呈しているが，明確にすることはできない。



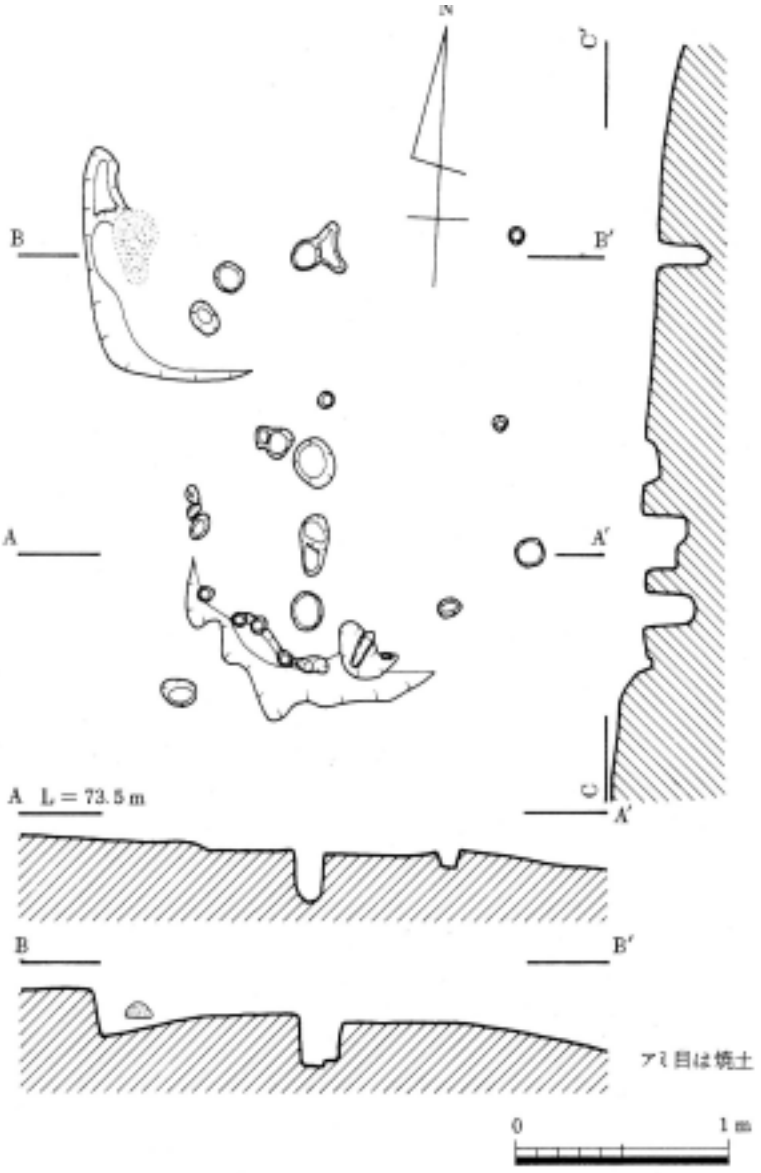
第５図　Ａ－１地点第２号住居跡実測図

遺物は，掘り方壁面付近に出土したが，破片のみであった。

３．第３号住居跡（第６図）

本住居跡は，第２号住居赫の南側に隣接して，尾根線中央よりやや東側斜面に寄った部分から検出した。堀り方と考えられる落ち込みは約1.5m離れて２ヵ所でほぼＬ字状に検出きれた。北側の掘り方は，最高で24㎝掘り込んでおり，西及び南辺が検出され，長さは各1.5ｍ，１ｍを測る。南側の掘り方は，最高で15㎝掘り込んでおり，西及ぴ南辺が検出され，長さは各々１ｍを測る。各掘り方の周辺から小ピットが検出きれたが，柱穴と考えられるピットは見られなかった。この掘り方の検出状態，小ピットの検出状態，床面の凹凸が著しいことなどを考え合わせると，住居跡とすることは困難と言わざるを得ない。

遺物は，土器細片の他，南側の掘り方直近から砥石２点が出土した。



第６図　Ａ－１地点第３号住居跡実測図

４．第４号住居跡（第７図）

尾根中央より約10ｍ下った西側斜面から検出された。地山の高い方を最高で37㎝掘り込んで床面としている。壁に接して一部に壁溝が見られる。斜面に造られているため，床面の大部分は失われており，幅約１ｍ，長さ約5.5ｍの狭い床面が検出されたにすぎない。床面からは柱穴は検出できなかった。検出された掘り方は，東壁にあたり，両端がわずかに屈曲しているところから，東壁はほぼ全体が検出されたと考えられる。このことから，本住居跡は，１辺約６ｍの方形又は隅丸方形のプランを呈するものと思われる。

遺物は，床面より土器細片が少量出土したのみである。

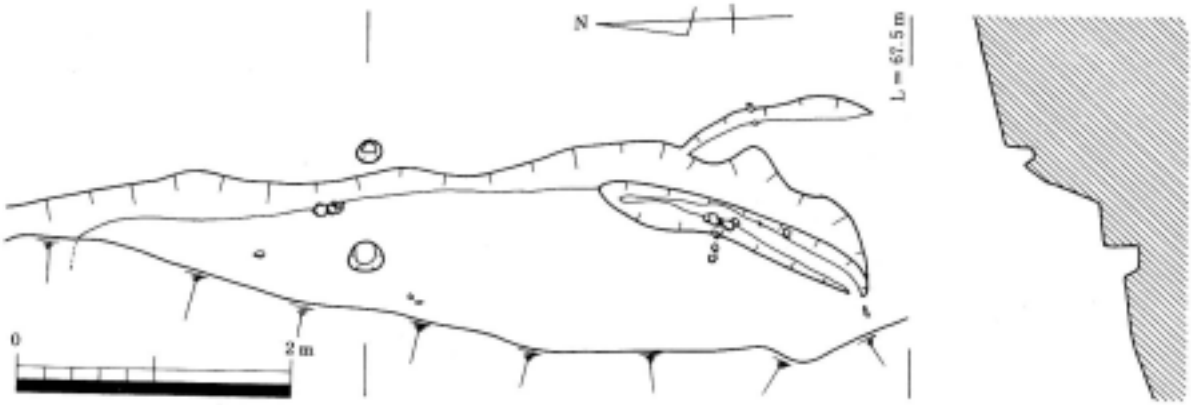
５．第５号住居跡（第８図）

本住居跡は、３号住居跡の西側約10ｍ，尾根線より約６ｍ下った西側斜面より検出された。地山の高い方

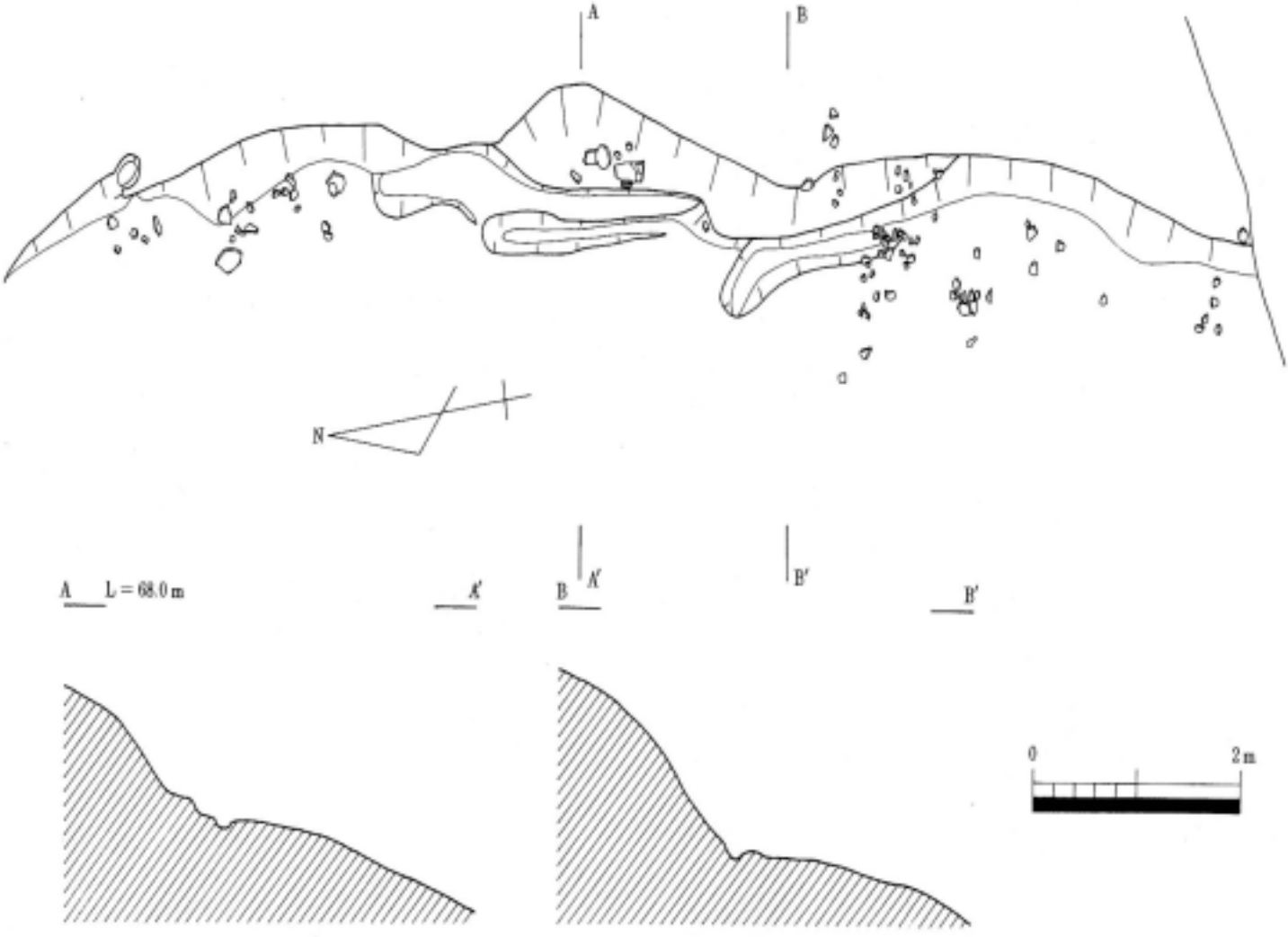
を最高で66㎝掘り込んで，ほぼ南北方向に一直線状に長さ12.5ｍの落ち込みが検出された。この落ち込み下端に接して２ヵ所で短い溝が検出された。この落ち込みは，さらに南側に伸びているが，崖面となり危険なため検出することはできなかった。床面は傾斜をもって検出され，その範囲は明確に検出することはできなかった。床面より柱穴は検出することはできなかった。以上のことから，本住居跡を住居跡と断定することは困難と言わざるを得ないが，遺物の出土，壁溝と考えられる溝が検出されたことから，住居跡の可能性が強いと言える。この場合，住居の平面プラン，規模は明確にすることはできない。しかし，掘り方，壁溝の検出状態から３軒の重複が考えられよう。

遺物は，掘り方直近に並行して検出されたが，全て破片の状態であった。

なお，本住居の約６ｍ下方から，多量の土器が破片の状態で出土した。この土器群は，この住居に伴う可能性が考えられる。



第７図　Ａ－１地点第４号住居跡実測図



第８図　Ａ－１地点第５号住居跡実測図

遺　　物

本地点からは，調査区域のほぼ全域にわたって遺物が出土した。特に西側斜面からは破片の状態で多量に出土した。遺物は大部分が土器類で占められており，その他の遺物は，砥石２点，刃器１点のみであった。

土器類の内訳は，甕形土器が多く，次いで壷形土器で，少量の高坏，甑が見られた。

サイドスクレイパーは，Ａ－１地点内表面採集されたもので，結晶質の粗い安山岩系石材を用いており，全長5.7㎝，幅2.6㎝，厚さ約0.8㎝を測る。

平坦な自然面を打面とし，剥片下辺に背面側から比較的純い角度のリタッチが施され，直線状の刃部を作り出す。背面及び主要剥離面はほぼ同一の剥離方向を示し，共に打点部附近で細かなステップを起こす。打撃方向に対する石理方向は順目を示す。

自然面のカーブ，背面及び打面の状況等から，拳大前後の安山岩亜円～円礫を表材に，母岩分割→自然面対打面の剥片剥離が想定される。

出土状態から，弥生時代後期前半頃と考えられる。



第９図　Ａ－１地点出土サイドスクレーパー実測図

表1

A－1地点　出土土器観察表

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
1	1　住	甕	口径　13.2 器高　不明	「くの字」状に強く外反する口縁部をもち，端部は上下に肥厚しつつ平たくおさめている。	磨滅が著しく調整法不明，頸部屈曲部の約1cm下方に波状文を施しているが，磨滅のため条数については明らかではない。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　不良
2	1　住	甕	口径　14.0	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部はやや丸みを帯びながらも平たくおさめている。	表面　磨滅のため不明 内面　胴部はヘラ削り。	外面　橙褐色 内面　褐色 胎土　良好 焼成　軟調
3	1　住	甕	口径　12.0 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部はやや丸みを帯びながらも平たくおさめている。	磨滅が著しく調整は不明であるが，内面胴部はヘラ削り。	内外面とも褐色 胎土　良好 焼成　軟調
4	1　住	甕	口径　15.1 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部はやや器厚を減じつつ丸くおさめている。	磨滅が著しく調整法不明。	内外面とも褐色 胎土　良好 焼成　不良
5	2　住	甕	胴部最大径 21.5 底径　8.2 器高　不明	卵形の胴部とし，底部はやや凸気味としており，不安定な器形としている。	外面　ハケ調整 内面　ヘラ削り	内外面とも暗褐色 胎土　良好 焼成　やや軟調 器壁外面スス付着
6	2　住	甕	口径　11.6 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部はわずかに肥厚し平たくおさめている。	外面は横ナデ，内面口縁部は横ナデ，頸部屈曲部以下は斜方向のヘラ削り。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　やや軟調
7	2　住	壷	口径　14.0 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部は下方にやや拡張し，平たくおさめている。	外面　横ナデ 内面　屈曲部まで横ナデ， 以下はヘラ削り。	内外面とも暗褐色 胎土　良好 焼成　良好
8	5　住	壷	口径　23.0 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部はやや肥厚しつつ平たくおさめている。	外面は口縁部から胴部最大径あたりまで横ナデ，以下はヘラナデを施している。内面は磨滅のため不明。頸部屈曲部より約1cm下方に3本のヘラによる刻みが施されている。3本単位の刻みが全体で何カ所であるかは不明。	外面　赤褐色，黒斑あり 内面　橙色 胎土　良好 焼成　やや軟調

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
9	3 住	壷	口径 19.4 器高 不明	強く外反する口縁部をもち端部は肥厚しつつ平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面と暗褐色 胎土 やや不良 焼成 軟弱
10	4 住	甕	口径 14.5 器高 不明	ゆるやかに外反する口縁部をもち，端部は器厚を保ちつつ，やや丸みを帯びながらも平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	外面 橙褐色 内面 褐色 胎土 やや不良 焼成 不良
11	4 住	甕	口径 10.1 器高 不明	ゆるく外反する短かい口縁部をもち，端部は器厚を保ちつつ平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。頸部屈曲部より約0.5cm下方ぬ「ノ」字状の刻みが施されている可能性がある。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 不明
12	5 住	甕	口径 17.0 器高 不明	ゆるく外反する口縁部をもち，端部は肥厚しつつ平たくおさめている。	磨滅により調整法は明瞭ではないが，外面は口縁部より施文部までは横ナデ，以下はヘラナデと思われる。内面は不明であるが，胴部はヘラ削りと思われる。頸部屈曲部より約1cm下方に2条のクシ歯による「ノ」字状の刻みが施されている。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 軟調 胴部にスス付着
13	5 住	鉢(?)	口径 22.0 器高 不明	ほぼ垂直に立つ胴部からゆるく外反する口縁部をもち端部に至って下方に拡張しやや凹気味に平たくまとめている。内面頸部屈曲部は明瞭な稜線を有している。	外面は口縁端部より頸部屈曲部までは横ナデ，以下は縦方向のナデ，内面は口縁端部より頸部屈曲部までは横ナデ，以下は横方向のヘラ削り。	外面 黄褐色 内面 暗黄褐色 胎土 やや不良 焼成 やや軟調
14	5 住	壷	口径 22.6 器高 不明	外反する口縁端部を上方にほぼ垂直に拡張し，幅約4cmの施文帯としている。	内外面とも横ナデを施している。施文帯のほぼ中央部に3条の波状文を施し，その下に径約1mmの竹管の刺突をめぐらせている。	内外面とも明黄褐色を呈する。 胎土 良好 焼成 やや軟調
15	5 住	壷	口径 27.4 器高 不明	強く外反する短かい口縁部をもち，端部は肥厚しつつ平たくまとめている。	外面は口縁端部より頸部屈曲部までは横ナデ，以下は縦方向のナデを施す。端部は4条の凹線を施す。内面は頸部までは横ナデ，以下はヘラ削り。	内外面とも橙色 胎土 良好 焼成 良好

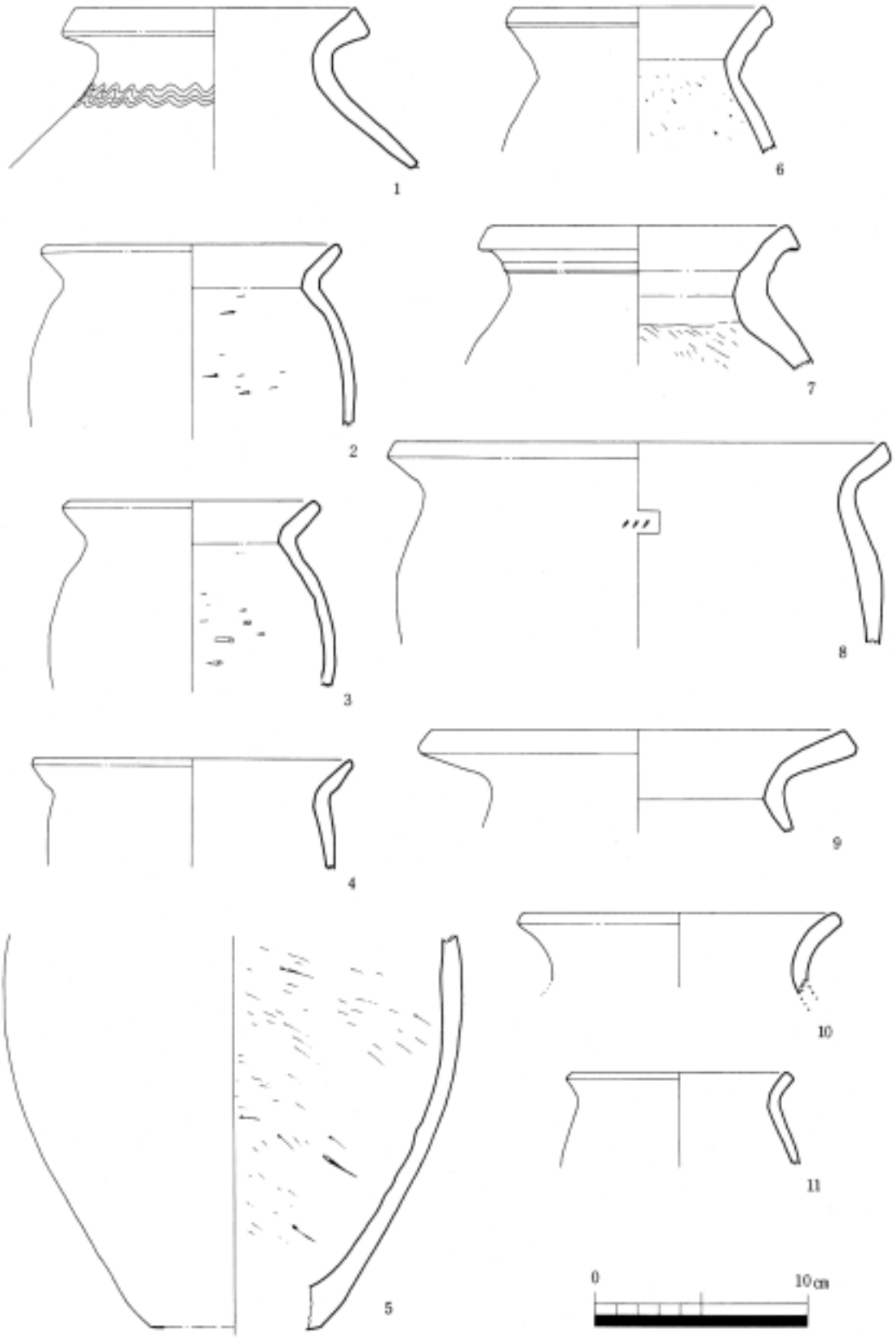
No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
16	5住	甕	器高　不明 底径　7.2	球形の胴部に高台状の底部を貼り付けている。	外面はナデ調整，内面はヘラ削り。	外面　淡褐色 内面　灰褐色 ススが付着 胎土　良好 焼成　良好
17	5住	壷	口径　18.2 器高　不明	ゆるやかに外反する口縁部をもち，端部は平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	外面　赤褐色 内面　褐色，黒斑あり 胎土　やや不良 焼成　不良
18	5住	甕	器高　不明 底径　3.6	胴部は卵形を呈し，底部はやや凹底を呈する。胴部と底部は接合している。	外面はヘラナデ，内面はヘラ削りを施す。底部と胴部の接合痕が見られる。	内外面とも橙色 胎土　やや不良 焼成　軟調
19	西斜面土器群	壷	口径　9.2 器高　9.7 底径　3.0	ゆるく外反する口縁部をもち，端部は薄くなりつつ丸くおさめている。胴部最大径は器高のほぼ中位におく。全体に球形を呈し安定した印象を与える。	磨滅のため調整不明。口縁部は横ナデ，胴部上半部にヘラ削りの痕跡が見られる。	内外面とも橙色 胎土　やや不良 焼成　軟弱
20	西斜面土器群	鉢	器高　不明 底径　5.6	わずかに外反する口縁部をもち，底部は凹底としている。器高に比して，最大径が大きくずんぐりした感を与える。	内面は磨滅のため調整不明。外面は口縁部は横ナデ，胴部は縦方向のナデ，底部は周辺はヘラ削り，中心部は指頭による整形を行っている。	外面　橙色～淡褐色 底部　黒色 内面　橙色 胎土　良好 焼成　やや軟弱
21	西斜面土器群	壷	口径　26.2 器高　不明	ほぼ直角に近く外反する口縁部をもち，端部は肥厚しつつ平たくおさめている。	内面は磨滅のため調整不明。外面は横ナデを施している。頸部屈曲部から1.5cm下方に「ノ」字状の長さ7～8mmのヘラによる刻みを施している。	内外面とも暗黄褐色 胎土　良好 焼成　やや軟弱
22	西斜面土器群	甕	口径　12.5 器高　14.8～14.5 底径　4.4	胴部は卵を呈し，ゆるく外反する短かい口縁部をもち，端部はやや薄くなりつつ丸くおさめている。底部はわずかに凹底を呈している。外面頸部屈曲部より1cm下方でにぶい稜線が見られる。	磨滅のため調整不明。内面胴部はヘラ削りと思われる。	内外面とも橙色 胎土　良好 焼成　軟弱 胴部下半スス付着

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
23	西斜面 土器群	壷	口径　14.2 器高　不明	ゆるく外上方へ伸びる口縁部をもち，端部に至ってわずかに肥厚し平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡橙色 胎土　良好 焼成　やや軟調
24	西斜面 土器群	甕	口径　12.5 器高　不明	ゆるく外反する短かい口縁部をもち，端部は器高を保ちつつ平たくおさめている。	内外面ともナデ調整。	外面　橙色 内面　暗褐色 胎土　良好 焼成　やや軟調
25	西斜面 土器群	甕	口径　13.6 器高　不明	強く外反する口縁部をもち端部は肥厚しつつやや丸くおさめている。口径に比して胴部最大径は小さい。	口縁部は内外面とも横ナデ，以下は磨滅のため不明。	外面　明褐色 内面　黄褐色 胎土　良好 焼成　やや軟弱
26	西斜面 土器群	高坏	不　明	高坏の脚部と思われる。	磨滅のため調整不明。径11㎜の円形の透かしは，外面から穿たれており，内面に粘土の盛り上がりが残存している。全体の配置は不明であるが，残存する部分から８か所に穿たれていたものと思われる。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　軟弱
27	西斜面 土器群	甕	口径　13.9 器高　不明	わずかに外反する口縁部をもち，端部は丸くおさめている。	内面は磨滅のため調整不明。外面は口縁端部から1.8cm下方まで横ナデ，以下は縦方向のナデを施している。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　やや軟弱
28	西斜面 土器群	甕	口径　14.6 器高　不明	ゆるく外反する短かい口縁部をもち，端部はわずかに薄くなりつつ丸みを帯びながらも平たくおさめている。	外面は口縁部より施文部までは横ナデ，以下はハケ状工具による調整を施し，その後クシ歯状工具による押し引きによる施文を行っている。内面は口縁端部より頸部屈曲部までは横ナデ，以下はヘラ削りを施している。	内外面とも暗褐色 外面にススが付着 胎土　良好 焼成　良好
29	西斜面 土器群	壷	口径　14.2 器高　不明	外反する口縁端部を内側上方へ強く折り曲げ複合口縁としている。端部は薄くなりつつ丸くおさめている。	内外面ともナデ調整。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　やや軟弱

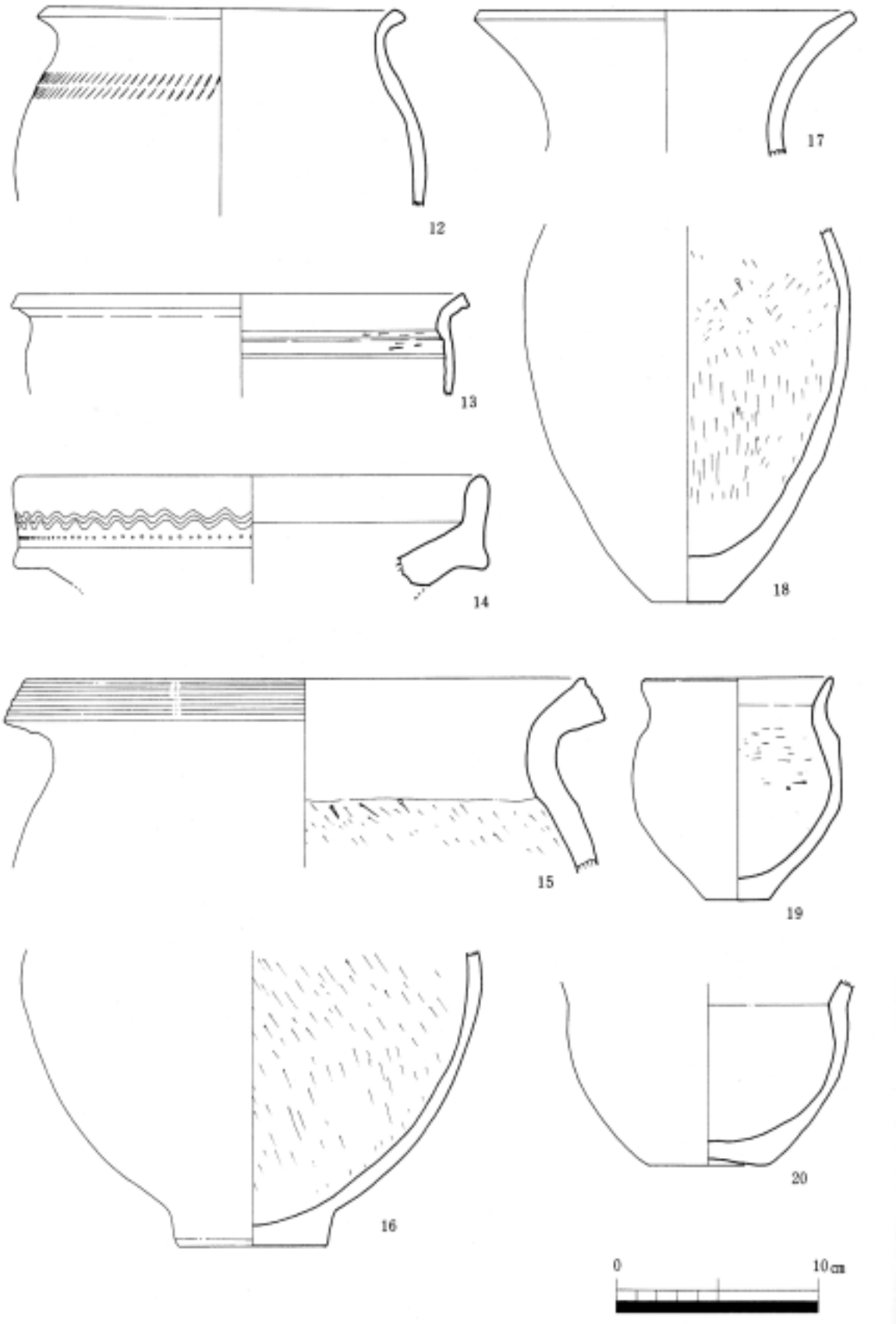
No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
30	西斜面 土器群	壷	口径　8.8 器高　不明	外反する口縁端部を内側上方に強く折り曲げて複合口縁としているものと思われる。	内外面ともナデ調整。	外面　暗赤褐色 内面　暗灰色 胎土　良好 焼成　やや軟弱
31	西斜面 土器群	甕	底径　3.2	わずかに凹気味の底部としている。	内面は磨滅のため調整不明。外面は胴部はヘラナデ，底面はナデ調整を施している。底部と胴部の接合の際の痕跡が見られる。	内外面とも暗褐色 外面にスス付着 胎土　良好 焼成　やや軟弱
32	西斜面 土器群	不明	底径　4.8	凸気味の底部としている。	内面は磨滅のため調整不明。外面はヘラナデ，底部と胴部を接合する際上方へナデ上げており，接合時の痕跡が見られる。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　やや不良
33	西斜面 土器群	甑	底径　4.6 孔径 6～14㎜	甕又は壷形土器の底部を穿孔して甑としている本地点で唯一の出土である。	磨滅のため調整不明。底部の孔は焼成前に外側から穿たれている。	内外面とも暗褐色 胎土　やや不良 焼成　軟弱
34	西斜面 土器群	不明	底径　4.8	平底であるが，底面に凹凸が見られる。	磨滅のため調整不明であるが，底部内面中央は棒状工具による圧痕が見られる。	内外面とも橙褐色 胎土　良好 焼成　軟弱
35	西斜面 土器群	壷	口径　16.2 器高　不明	外反する口縁端部を上方内側に拡張し，複合口縁としている。頸部屈曲部に，幅2.4cmの突帯を貼り付け，格子状の刻みを施している。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡橙色 胎土　良好 焼成　軟弱
36	調査区内	壷	口径　15.4 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部に至って上下に垂直に拡張し，幅1.8cmの施文帯としている。口縁端部を拡張したため，口縁内面に明瞭な稜線が見られる。	外面は横ナデの後，口縁端部に４条の凹線をめぐらせている。頸部屈曲部の下方に細かい「ノ」字状のヘラによる刻みをめぐらせている。内面は口縁部は横ナデ，頸部屈曲部から下位はヘラ削りを施している。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　良好
37	椎木山地区	鉢	口径 器高	わずかに外反した短かい口縁部をもち，端部をわずかに薄くなりつつ丸くおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　不良

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
38	椎木山地区	壷	口径　17.2 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部は平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　不良
39	椎木山地区	壷	口径　8.8 器高　15.3 底径　2.6	胴部は卵形を呈し，ゆるやかに外反する短かい口縁部をもち，端部は平たくおさめている。底部はわずかに凸底を呈する。	外面は口縁端部から2.1㎝下方までは横ナデ，以下は縦方向のナデを施している。内側は口縁端部から頸部屈曲部までは横ナデ，以下はヘラ削りを施している。外面頸部屈曲部から7㎜下方に長さ5㎜の細かい「ノ」字状の刻みがめぐらされている。	外面　暗褐色 内面　橙色 胎土　良好 焼成　やや軟弱
40	椎木山地区	甕	口径　11.2 器高　15.3 （推定） 底径　2.4	胴部は卵形を呈し，「くの字」状に外反する口縁部をもち平たくおさめているが，一見複合口縁状としている。	磨滅のため調整不明。口縁部は横ナデ，以下不明。	内外面とも橙色 外面にスス付着 胎土　良好 焼成　やや軟弱
41	調査区内	壷	口径　16.0 器高　不明	ゆるく外反する口縁端部を内側上方へ折り曲げで施文帯とし，複合口縁としている。	磨滅のため調整法の看取は困難であるが，口縁内面は横ナデ，施文帯に長さ1.4㎝のクシ歯状工具による押し引き施文が見られる。	内外面とも橙色 胎土　良好 焼成　不良
42	椎木山地区	壷	口径　17.2 器高　不明	ゆるく外反する口縁端部を内側上方に拡張し，端部は薄くなりつつ丸くおさめており，内面に明瞭な稜線が見られる。複合口縁を意識したものと思われる。	磨滅のため調整不明。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　不良
43	調査区内	壷	口径　10.8 器高　不明	わずかに外反する口縁部をもち，端部は外下方にわずかに拡張し平たくおさめている。	磨滅のため調整不明。	内外面とも褐色 胎土　良好 焼成　不良
44	椎木山地区	壷	口径　14.2	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部はわずかに上方へ拡張しており，内面ににぶい稜線が見られた。一見複合口縁状を呈している。	外面はナデ，内面は口縁端部から頸部屈曲部まではナデ，以下は磨滅のため調整不明。	内外面とも赤褐色 胎土　やや不良 焼成　軟弱

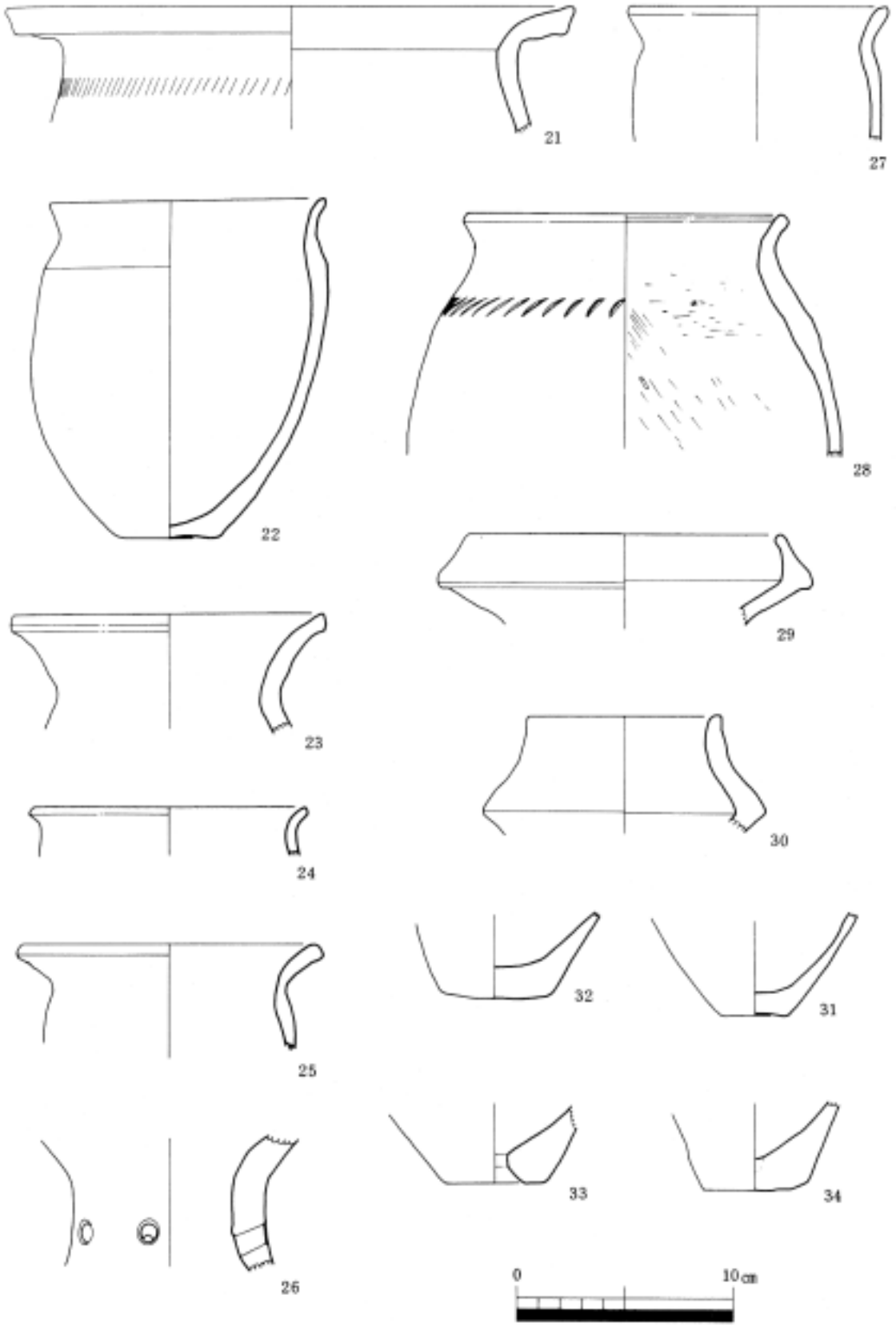
No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備　考
45	調査区内	壷	口径　8.0 器高　不明	ゆるく外反する短かい口縁部をもち，端部は薄くなりつつ丸くおさめている。	外面は口縁部より頸部屈曲部までは横ナデ，以下は縦方向のナデを施している。内面は口縁端部から頸部屈曲部までは横ナデ以下はヘラ削りの後，粗いナデを施している。	内外面とも橙褐色 胎土　良好 焼成　良好
46	調査区内	壷	口径　9.6 器高　不明	わずかに外反する口縁部をもち，端部はわずかに薄くなりつつ平たくおさめている。	外面は縦方向のハケ調整，内面は口縁端部から5cm下方までは横ナデ，以下は縦方向のハケ調整を施している。	内外面とも明赤褐色 胎土　やや不良 焼成　やや不良



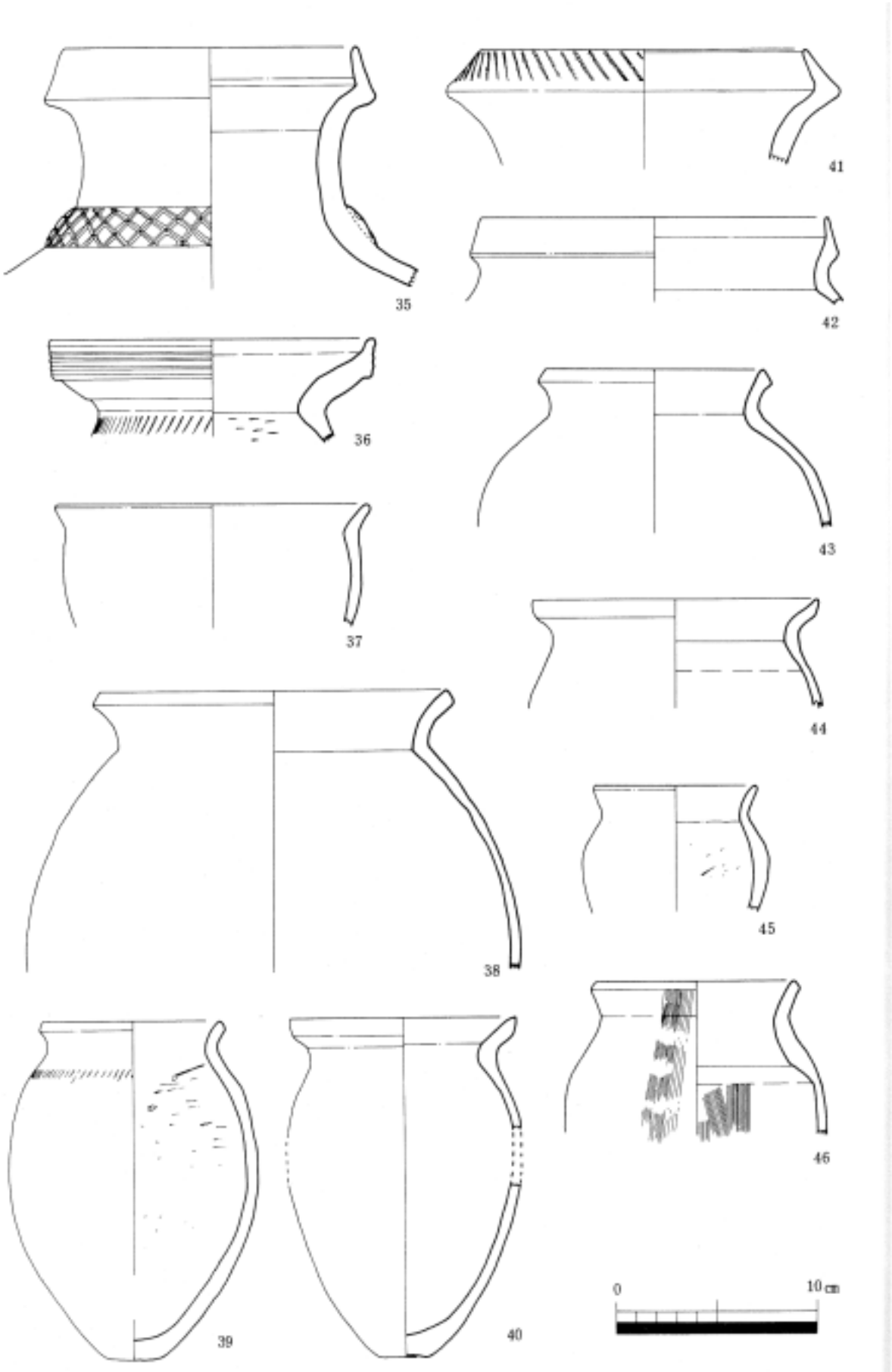
第10図　A－1地点出土土器実測図（1）



第11図　A－1地点出土土器実測図（2）



第12図　A－1地点出土土器実測図（3）



第13図　A－1地点出土土器実測図（4）

小　　結

本地点は，以上のように住居跡５軒からなる集落であることが考えられた。しかし，検出された遺構は明瞭な竪穴式住居として検出されたものは見られず，特に２号住居跡，３号住居跡，５号住居跡については，住居跡としての疑義が残るものの，本報告では住居跡として扱うこととしたことを断わっておかねばならない。また，本地点の南側は，土取り工事のため削平をうけており，この部分には，本来良好な尾根が展開していたことから，遺跡の中心は消滅した部分にあったと考えられよう。したがって，本地点は，この部分の周辺にあたりわずかに残存したものと思われる。

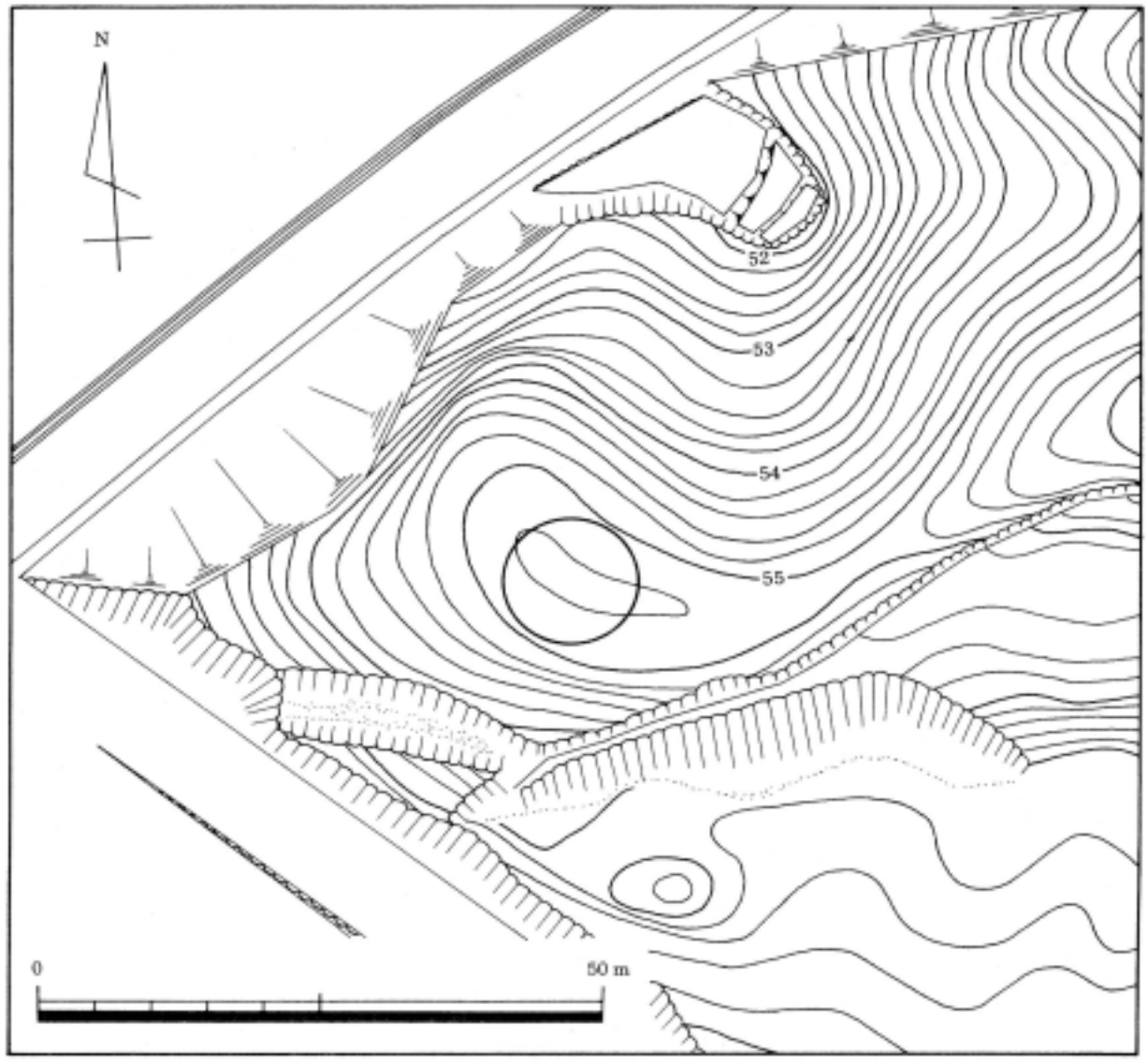
さて，本地点から検出した遺構は，住居跡５軒分である。これら５軒の内，２号住居跡，３号住居跡，５号住居跡については，２～３軒の建てかえの痕跡が見られ，最大で10軒分が想定された。しかし，各遺構の新旧関係については明らかにすることはできなかった。次に立地の点から見れぱ，本地点は，小支谷の谷奥に延ぴる小支尾根に位置し，周囲の眺望がきかない立地であることが指摘される。このような位置は、現在までに確認された遺跡が，諸木川によって形成された沖積地に面して展望のよい位置にあるか，又は比較的広い湧水点をもつ谷に面しているという特徴から見れば，極めて悪い立地であると言わざるを得ない。したがって遺構の残存状態の悪さを合わせて考えれば，これらの遺構が集落の中心的な存在ではなかった可能性もうなづけよう。

さて，本地点が営まれた時代については，出土した土器の特徴は，次の様にあげられよう。①器種については甕形土器，壷形土器が大部分を占める。②焼成は軟弱な土器が多い。③「くの字」状に外反するロ縁部の端は平たくおきめられているものや，④「くの字」状に外反するロ縁端部は薄くなりつつ丸くおさめられているものがある。⑤内面胴部はヘラ削り，口縁部は横ナデを施している。以上の特徴が指摘される。これらの特徴から，本地点出土の土器は上深川Ⅱ類，Ⅲ類に類似しているといえよう。量的には③の特徴をもつ土器が多く，④の特徴をもつ土器が少量混じっている。したがって，以上のことから，本地点は弥生時代後期中頃を中心に後期後半にかかる時に営まれたものと推定されよう。（桧垣）

Ａ－２地点遺跡の概要

Ａ－２地点は，Ａ地点の西約150ｍの北西に向かって突出した小尾根先端部に位置している。昭和54年度に実施した試掘調査の結果，尾根と直交する溝状遺構の一部及び頂部において土壙が１基確認されていた。このため，墳頂部を中心に四分割して調査区を設定し発掘調査を行った。

調査の結果，溝状遺構，階段状遺構及び土壙10，弥生墳墓１が検出された。



第14図　Ａ－２地点遺跡地形図

遺　　構

溝状遺構は，尾根が狭くなった部分から尾根と直交するように南北方向に，幅1.5ｍ，深さ0.5ｍ程度の規模で検出され，墓域の設定のための溝と考えられる。また，溝状遺構の南半部には，第10号土壙が位置している。

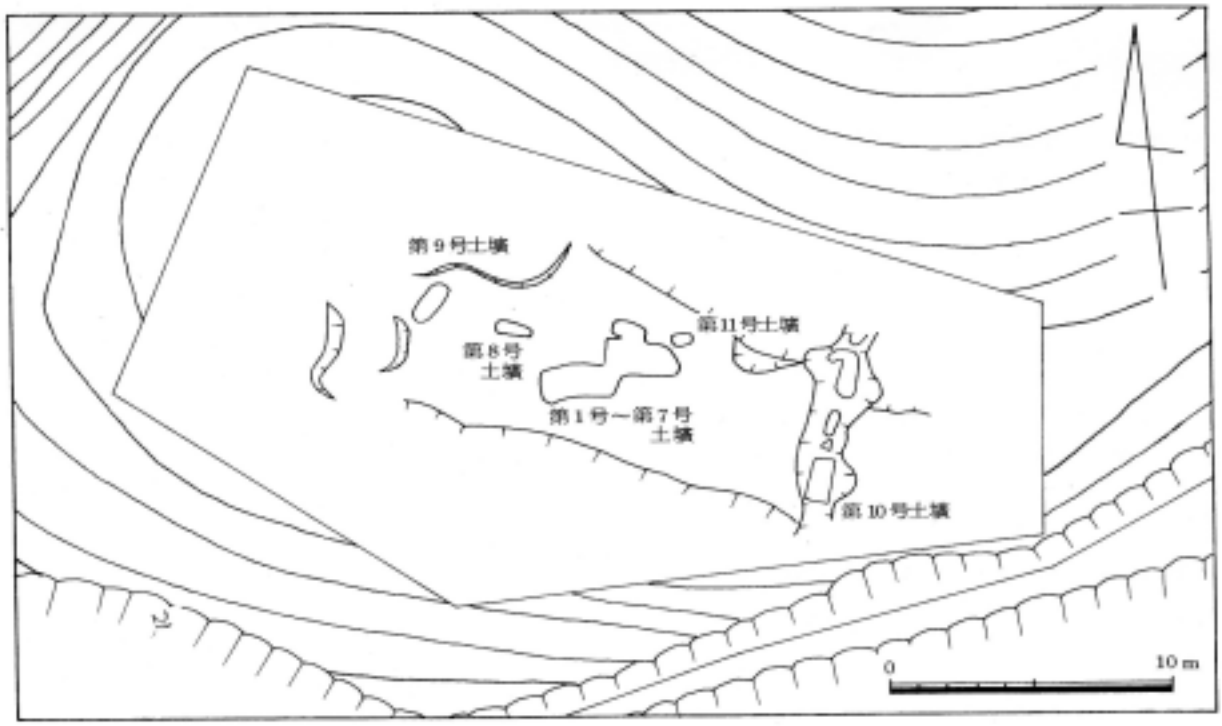
本墳墓の主体は全て土壙である。その規模等は別表に示したが，これを見ると，土壙は，長さ2ｍ前後の大型のものと，１ｍ前後の小型のものとの２種類に分けることができる。大型の土壙は５基あり，第２・第３・第４・第９・第10号土壙がこれにあたる。なお，第３号土壙は残存部はわずかであるが，他の大型の土壙と同程度の幅をもっていることから，大型の土壙に分類した。また第４号土壙は，床面中央に幅30㎝～40㎝，長さ1.5ｍ程の範囲で赤色顔料が散布きれていた。

次に主軸の方向についてみると，第2・第4・第5・第7・第9号土壙が東西を中心に北に20°，南に15°の範囲の中に納まっている。また第１・第６・第10号土壙は，南北を中心に東西25°の範囲の中にある。第３号土壙はほぼ北西一南東の方向を示している。

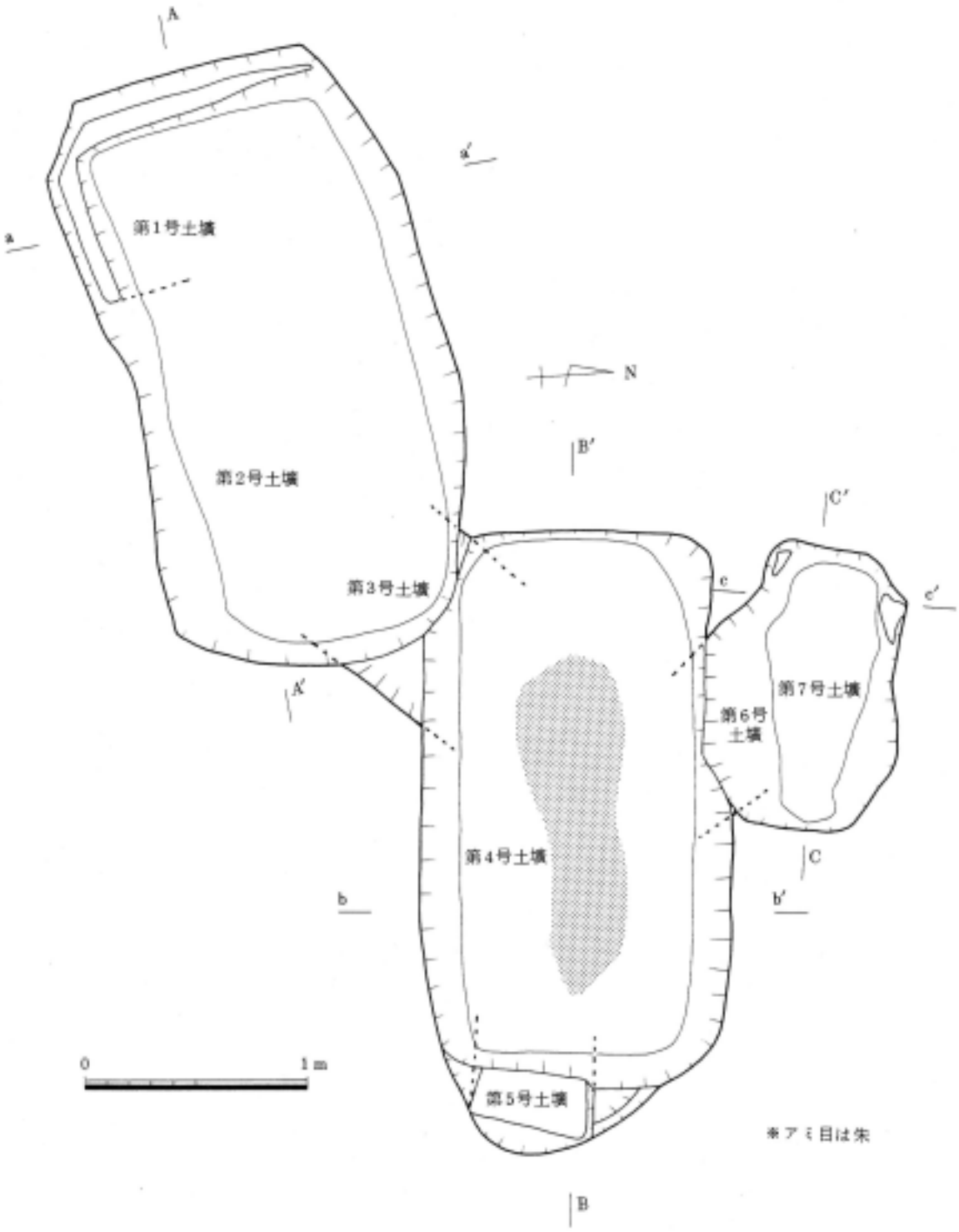
第11号土壙は，土器蓋土壙ともいえるもので，浅い土壙に遺体を埋置し，大型の壷を大きく上下に割って上半部を北側，下半部を南側に蓋をするようにかぶせ，そのすき間を小型の壷を割って埋めるような形で検出した。

また，土器の密集度は北側が高いことから，頭位は北側であったと考えられよう。

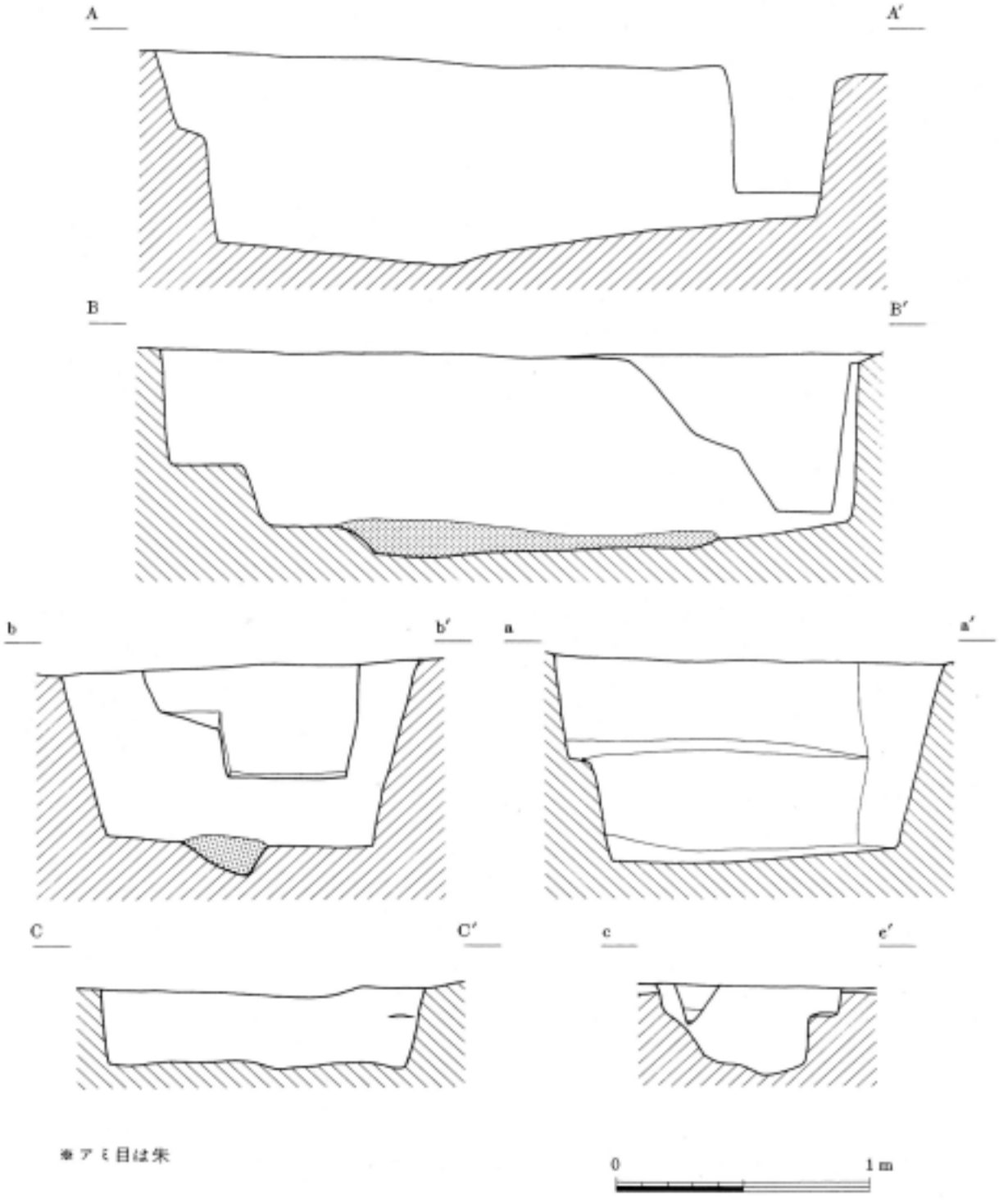
切り合い関係については，第１号～第７号土壙が相互に重複しているが不明確であった。



第15図　Ａ－２地点遺構配置図



第16図　A－2地点第1～7号土壙実測図

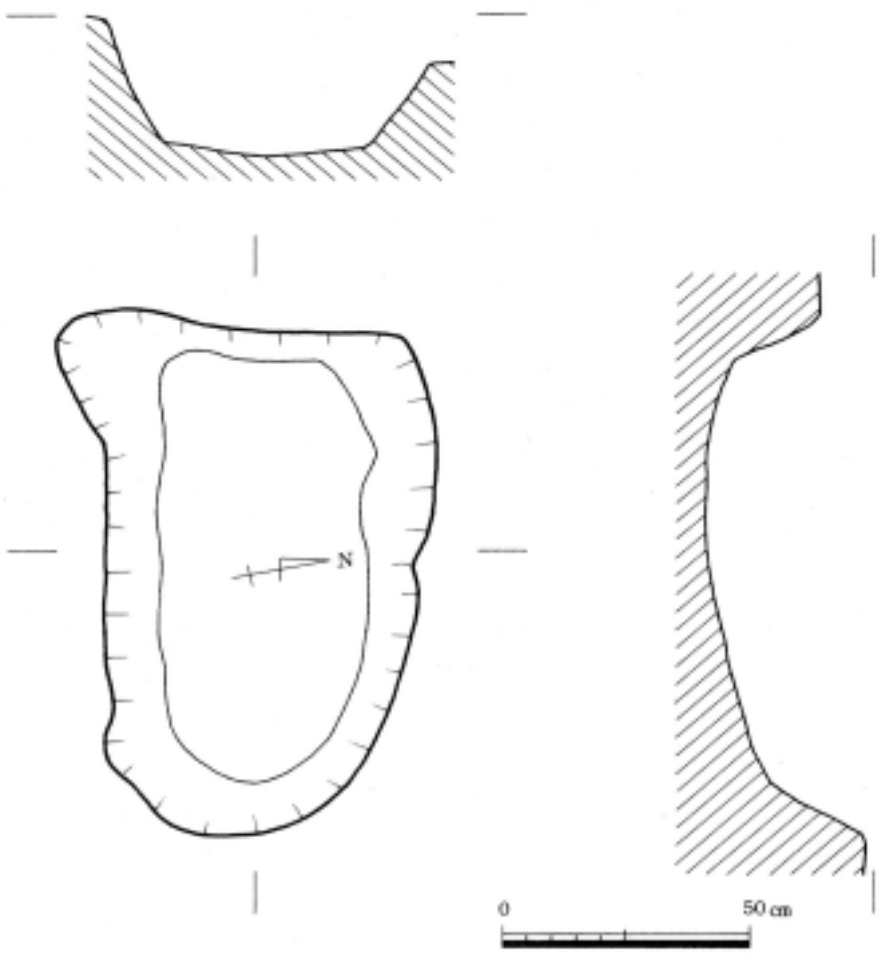


第17図　A－2地点第1～7号土壙断面実測図

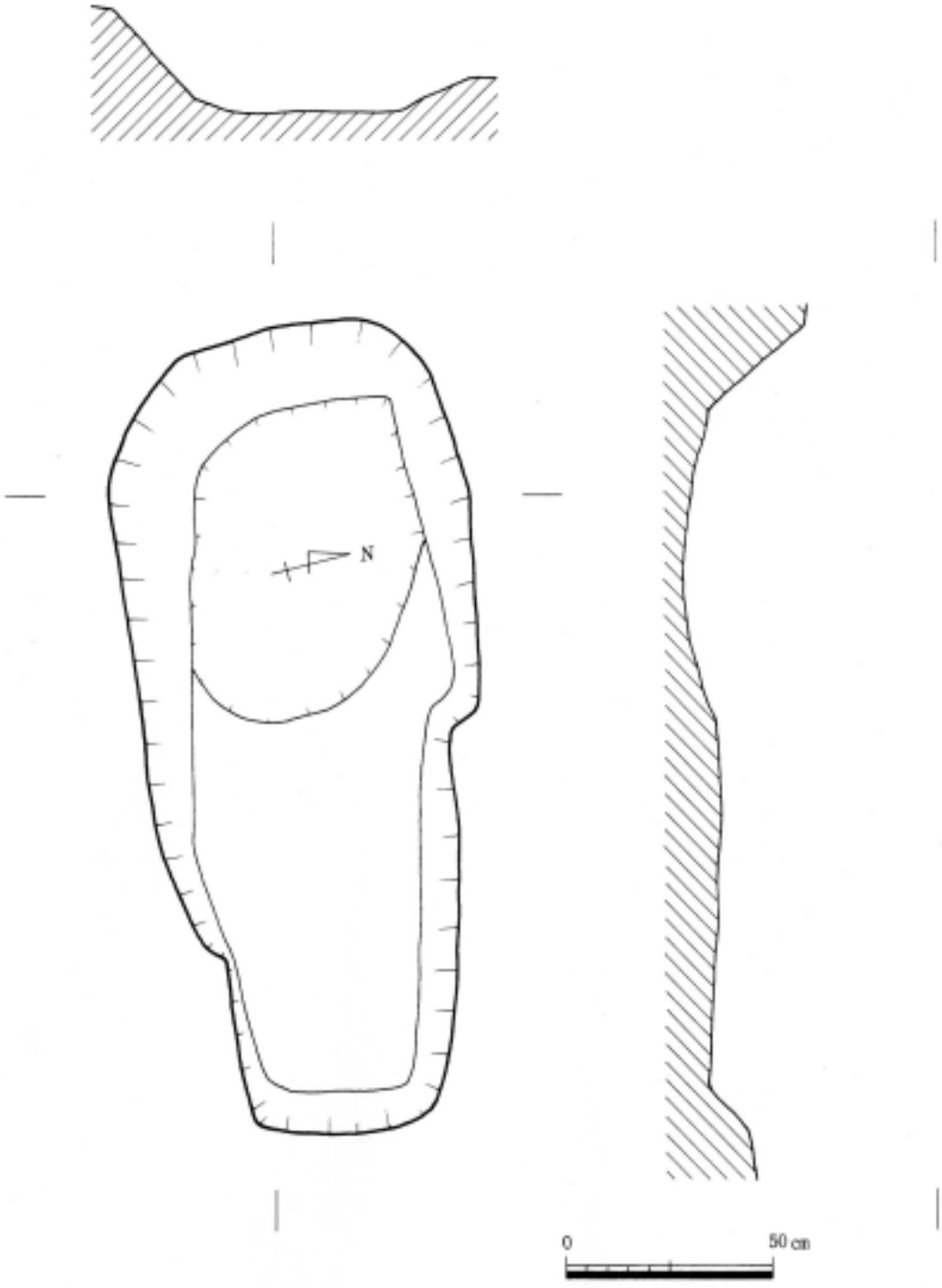
表2

A－2地点土壙計測表

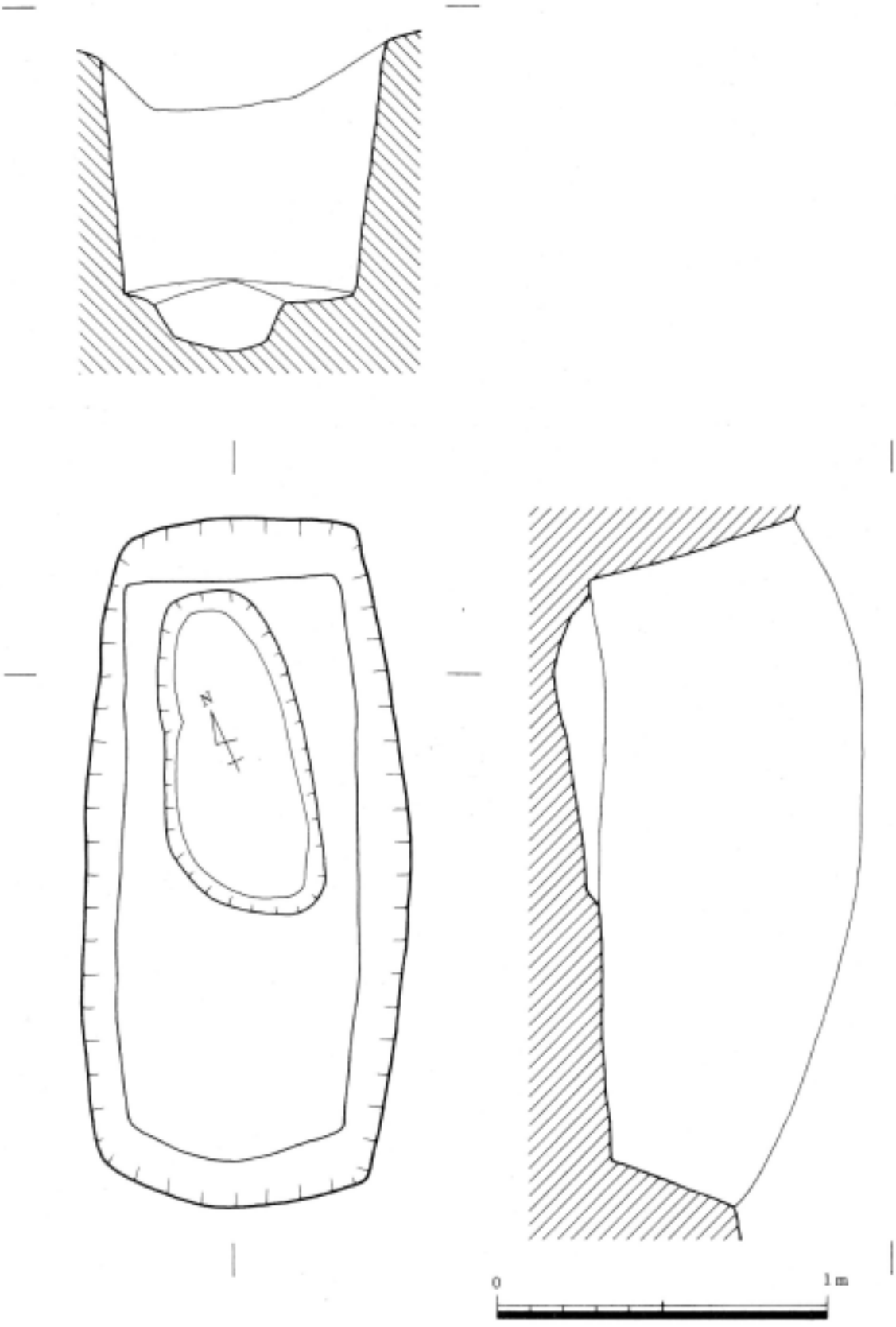
土壙番号	現　在　長 (cm)	現　存　幅 (cm)	現存の深さ (cm)	主軸の方位	その他
1		90	40	N1° E	2号と重複
2	270	140	85	N89° W	3号と重複
3		80	65	N54° E	4号と重複
4	250	140	85	S86° W	赤色顔料散布，5号，6号と重複
5		55	50	S73° E	4号と重複
6		65	15	N24° W	4号と7号と重複
7	125	65	35	N79° W	6号と重複
8	120	65	25	N78° W	
9	190	85	25	S76° W	
10	205	100	90	N25° E	
11	76	63	15	N70° W	土器蓋土壙



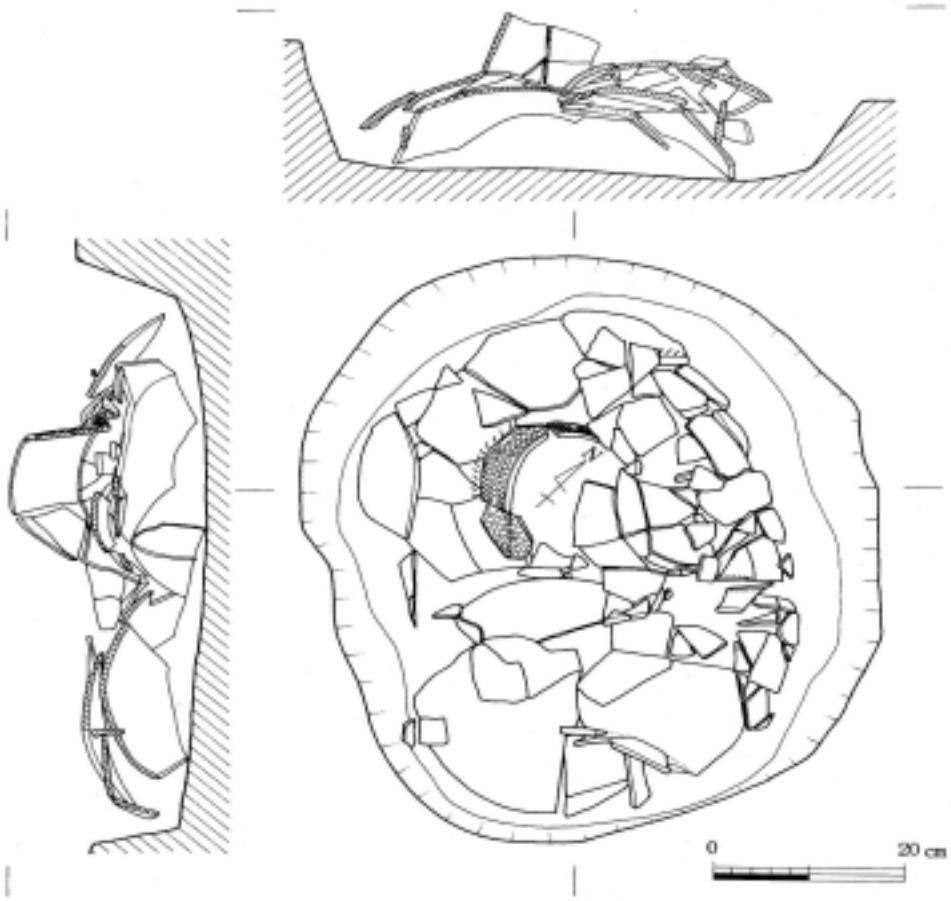
第18図　A－2地点第8号土壙実測図



第19図　A－2地点第9号土壙実測図



第20図　A－2地点第10号土壙実測図

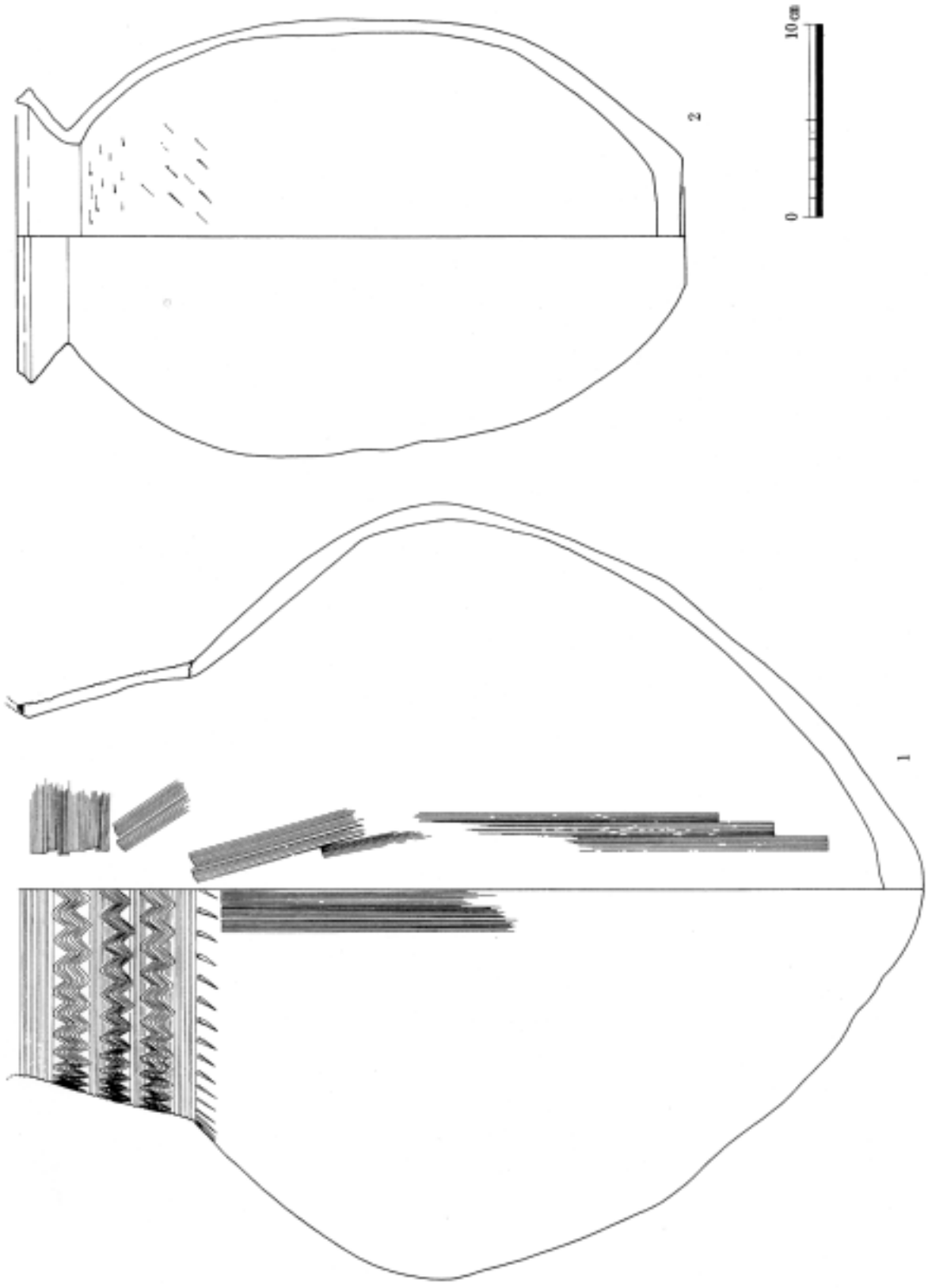


第21図　A－2地点第11号土壙実測図

遺　　物

本遺跡の遺物のうち，原形を復元し得るものは第11号土壙の土器2点のみであった。土器1の壷は，現存の器高43.3㎝，胴部最大径40.2㎝を測る。底部は，外見的には尖底を感じさせる丸底で胴上半部に最大径をもち，肩部から約8㎝の高さをもつ頸部はゆるやかに内傾しており，口縁部は欠失している。器表面の肩部以下はタテ方向のハケ目が見られ，頸部内面にはヨコ方向，それ以下はタテ方向のハケ目が見られる。文様は、肩部にヘラによるノ字状の刻み目が施され，頸部施文帯には，3～4条の凹線文帯を4組設け，その間に8本歯のクシ歯状工具による波状文を3組施している。色調は黄褐色を呈し，焼成胎土とも良好である。

土器2の壷は，口径14㎝，器高31.2㎝，胴部最大径32.6㎝，底径6.6㎝を測る。底部はわずかに凹底で胴部のふくらみは少なく，ほぼ直立気味に上方に伸びる。口縁部は「くの字」状に外反し，口唇部に至ってわずかに上方に肥厚し，端部中央はわずかに凹線様のくぼみをもつ。調整は磨滅が著しく不明であるが，内面頸部以下にわずかにヘラ削りの痕跡を留める。色調は濃い赤褐色を呈し，胎土は砂粒を多く含む荒いもので，焼成も軟調である。



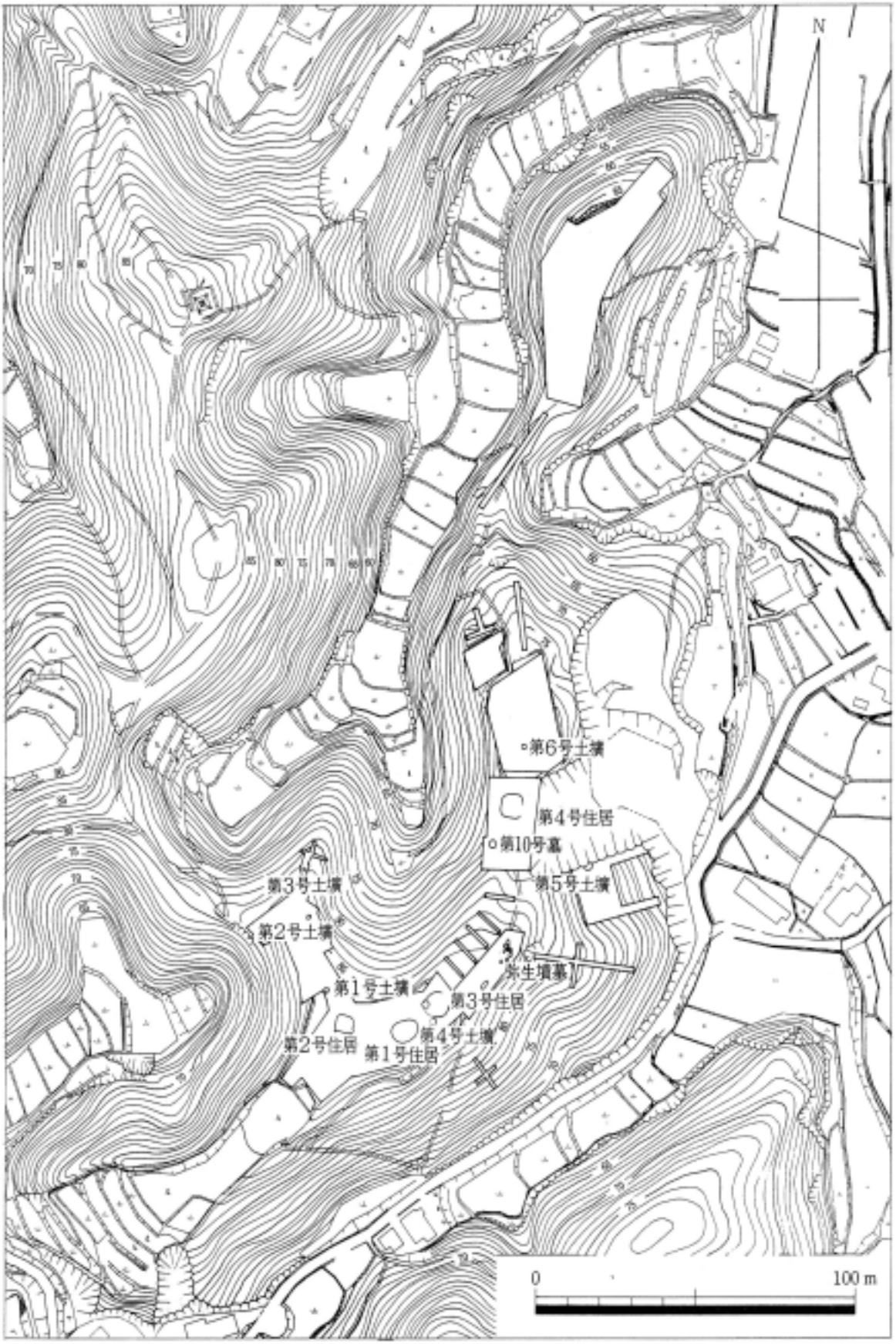
第22図　A－2地点第11号土壙出土土器実測図

小　　結

Ａ－２地点遺跡からは既述のとおり11基の土壙及び溝状遺構が検出されたが，遺物としては第11号土壙出土の壷２点及び少量の弥生土器片だけであったことから，この遺跡の営まれた年代を決定することは困難である。しかし，尾根の先端部を利用している点，同一の墓域の中に複数の主体部をもっている点や出土遺物等から考えて，弥生時代後期ないし古墳時代初頭と判断して大過ないであろう。

さらに，第１号～第10号土壙は主軸の方向をみると，第３号土壙を除く10基の土壙が，東西方向に主軸をもつグループと，南北方向に主軸をもつものとの２つの大きなグループに分けることができる。さらに，各グループを構成する土壙の形態などから，各グループの同時代性を推定することができよう。特に東西に主軸をもつグループは，相互に主軸の方向が近接している。これらのことから，本墳墓は時期的に大きく２つに分けて使用されたと考えることもできよう。

次に，第11号土壙についてみると，この土壙出土土器のうち土器１は，精製された土器であり，太田川流域では現在までのところ類例のない形態を示している点や，土器蓋土壙ともいえる施設に使用されていることから，特別に製作されたものと考えられる。しかし，頸部に施された凹線やクシ歯状工具によると考えられる波状文の組み合わせ，あるいは肩部にみられる「ノ」字状の刻み目の技法などから，弥生後期の特徴を備えている。土器２は，粗製であり，文様等も見られず，その使用のされ方から日用雑器の転用と考えられよう。この土器は，口縁部の形態や内面の調整技法等からみて，弥生後期のうちでもやや古い時期のものと考えられる。このことから，第11号土壙が弥生後期でも古い段階に造られたと考えられよう。（幸田）



第23図　B地点遺構及びトレンチ配置図

Ⅳ　B　地　点　遺　跡

B地点遺跡の概要（第23図）

本地点は，本遺跡群の南端，A地点より約500ｍ南に位置している。試掘調査及び，地形観察により，遺構は尾根頂上部を中心に北及び北東に延ぴる2本の支尾根上に存在することが想定された。遺構の存在が想定された尾根上の平坦部は４ヵ所に見られた。調査にあたっては，平坦部は尾根上脊中心に２分割し，さらに任意に細分割して調査区を設定し，最終的には完掘を行った。さらに，斜面についても，遺構の存在が想定される部分はトレンチを設定し，確認を行い，必要に応じて拡張を行った。

調査の結果，尾根頂上平坦部に３軒，北東に延びる尾根のほぼ中間の鞍部に１軒の計４軒の竪穴式住居跡を検出した。また，この住居跡の周辺からは主に貯蔵穴と考えられる土壙を７基，３号住居跡の東側の尾根平坦部から斜面にかかるあたりに墳墓10基を検出するとともに，多量の弥生式土器の外，砥石，人骨等が出土した。

遺　　構

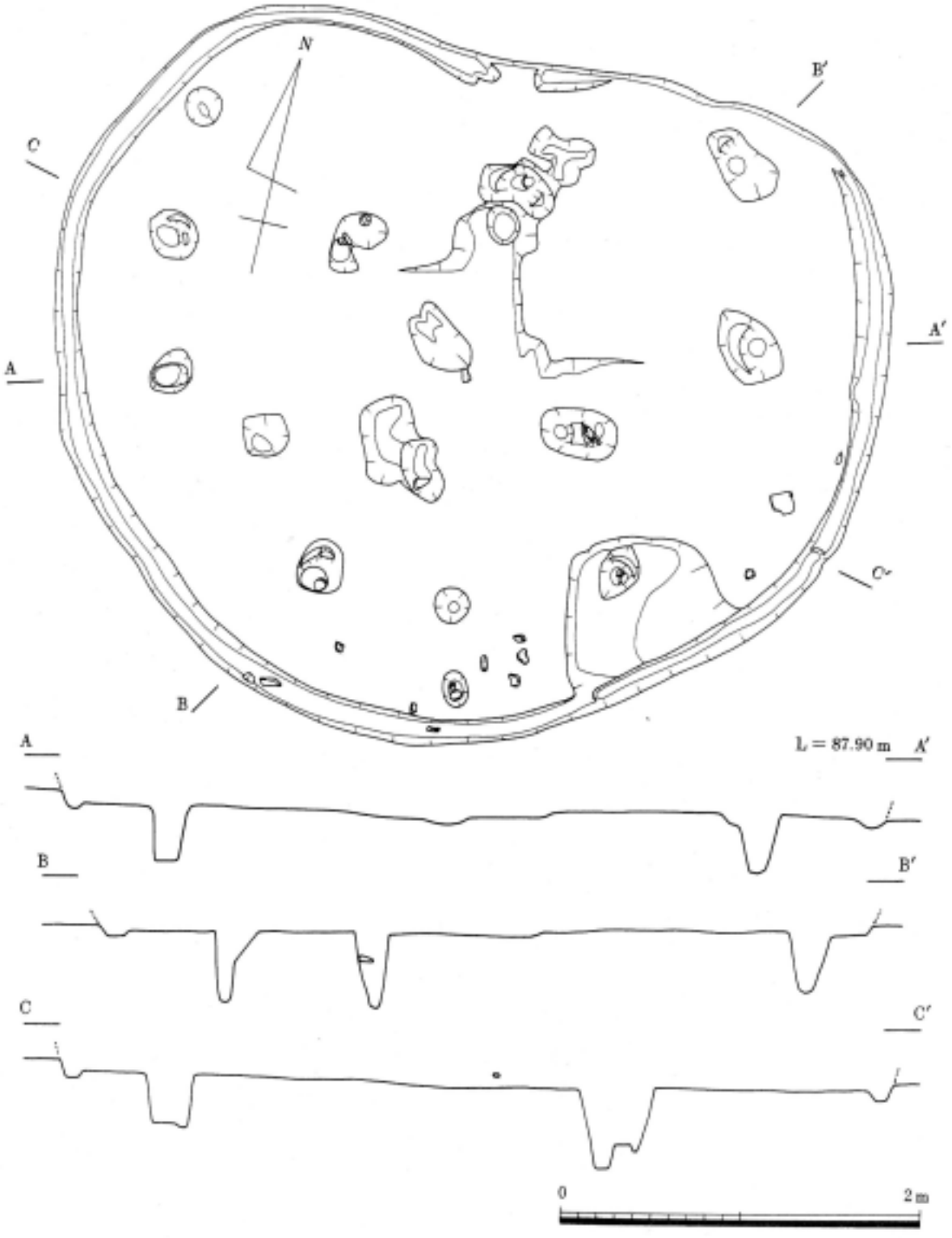
１．第１号住居跡（第24図）

本住居跡は，尾根頂上平端部のほぼ中央部で検出された本地点最大の住居跡である。地山を，北辺が直線を呈する長円形に掘り込んで作られ，長径9.2ｍ，短径7.5ｍを測る。壁の大部分は畑作による削平によって失われており，残存状態から，床面までの削平はうけていないと考えられる。壁溝は，北辺の一部を除いて，ほぼ全体にめぐらされており，幅20㎝～35㎝，深さ１㎝～13㎝を測る。柱穴は，壁より40㎝～110㎝離れた位置に，壁に平行して９本配置され，径40㎝～60㎝，深さ52㎝～99㎝を測る。柱穴間の距離は120㎝～280㎝を測るが，規則性に乏しい。床面中央部から，不整形のピットが検出され，炉跡と考えられる。埋土内には，木炭が含まれていたが，焼土は見られなかった。

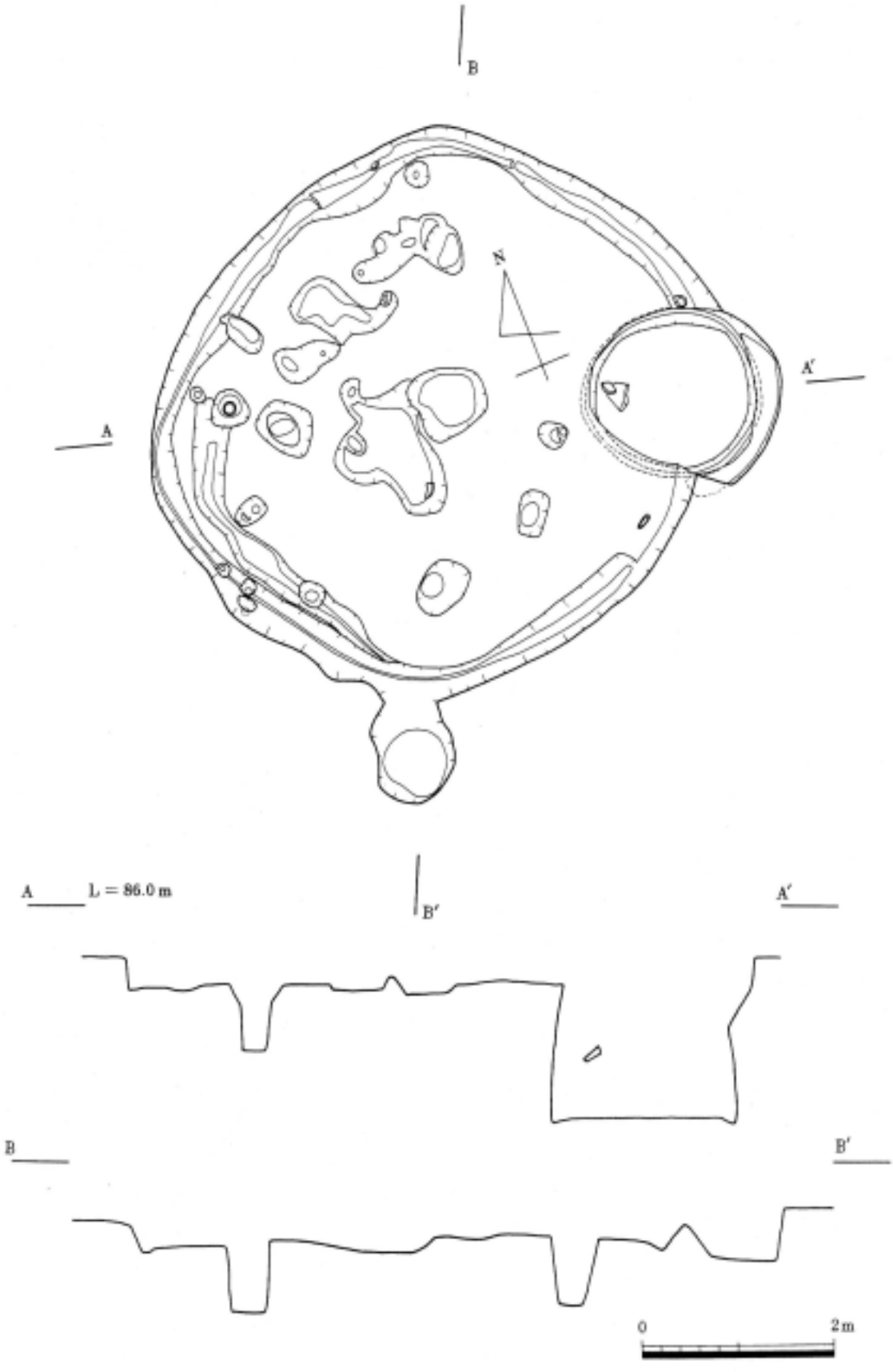
遺物は，南半部に散在して見られ，大部分は細片であったが，南辺中央部の壁直近の小ピット内から，口縁端部をわずかに欠失した長頸壷が横転した状態で出土した。

２．第２号住居跡（第25図）

本住居跡は，１号住居の西約13ｍ，尾根頂上部平端面の地端部の地山が，北側に向けてゆるやかに傾斜してゆくあたりに位置している。周囲は畑として利用されていたが，地山が傾斜しているためか，畑作による削平は認められなかった。地山を，円形に近い隅丸方形に掘り込んで作られており，5.7ｍ×5.3ｍを測る。壁高は，地山が傾斜している北側に至って低くなっており，地端部はわずかに見られるにすぎず，最高で約30㎝を測る。壁溝は，ほぼ全体にめぐらされており，北西側では２条となっており，幅20㎝～40㎝，深さ３㎝～５㎝を測る。柱穴は３本検出され，径50㎝～60㎝，深さ67㎝～69㎝を測る。床面中央部から65㎝×78㎝の焼土面が検出され，この範囲内に60㎝×70㎝，深さ15㎝を測る不整円形の土壙が検出された。埋土内からは，炭化物を含む黒褐色土が検出された。この土壙は炉跡と考えられる。南東コーナー部で，住居掘り方と重複して，口径1.8ｍ×２ｍ，底径2.2ｍ×1.9ｍ，深さ1.8ｍ～1.4ｍの断面袋状を呈する土壙を検出した。本住居に伴う貯蔵穴と考えられる。底面は水平になっており，下端に接して浅い溝がめぐらさ



第24図　B地点第１号住居跡実測図



第 25 図　B地点第 2 号住居跡実測図

れている。土壙掘り方肩部より約30㎝下った部分で幅15㎝の狭小な平坦面を有している。この平坦面は，住居床面とほぼ同レベルであるところから蓋の受け部となる可能性がある。土壙内からは，角礫と土器片が出土した。南西部からは，住居掘り方外側で，100㎝×80㎝，深さ50㎝の不整形の土壙を検出した。埋土内からは，土器細片が出土しており，本住居に伴うものと思われるが，性格は明らかにすることはできない。さて，本住居からは，３本分の柱穴しか検出されなかった。配置関係から考えれば，基本的には４本柱と考えられる。この場合，検出されなかった１本分は貯蔵穴内に配置されたものと考えられよう。貯蔵穴内に柱を建てた原因については明らかにすることはできないが，貯蔵穴内に出入りする際の階段，又ははしごとの兼用を考えた結果ではないかと考えられる。

住居跡内からは，少量の土器片と河原石が出土した。

３．第３号住居跡（第26図）

本住居跡は，第１号住居跡の東約５ｍの尾根線中央部に位置している。畑作により東半分は地山整形面より，約20㎝下げられており，この部分では掘り方が消滅し，壁溝がわずかに残存しているのみであった。なお，本住居跡は工事中に発見され，西端部が一部削平されていた。

地山を径7.4ｍの規模に円形に掘り込んで作られている。壁高は残存している西側で最高約20㎝を測る。壁溝は，ほぼ全体にめぐらされているものと思われるが，北東側で削平のため消滅している。残存している部分で幅約20㎝～30㎝，深さ約６㎝を測る。柱穴は，壁より100㎝～120㎝離れてほぼ円形に９本検出され，径40㎝～60㎝，深さ70㎝～80㎝を測る。西側で，堀り方の一部を重複して口径1.6ｍ，深さ1.4ｍの土壙を検出した。この土壙は，断面は袋状を呈し，底面は水平となる土壙で，本住居に伴う貯蔵穴と考えられる。

遺物は，南東側壁溝上で，ほぼ完形の鉢形土器１点の他少量の土器片が出土した。

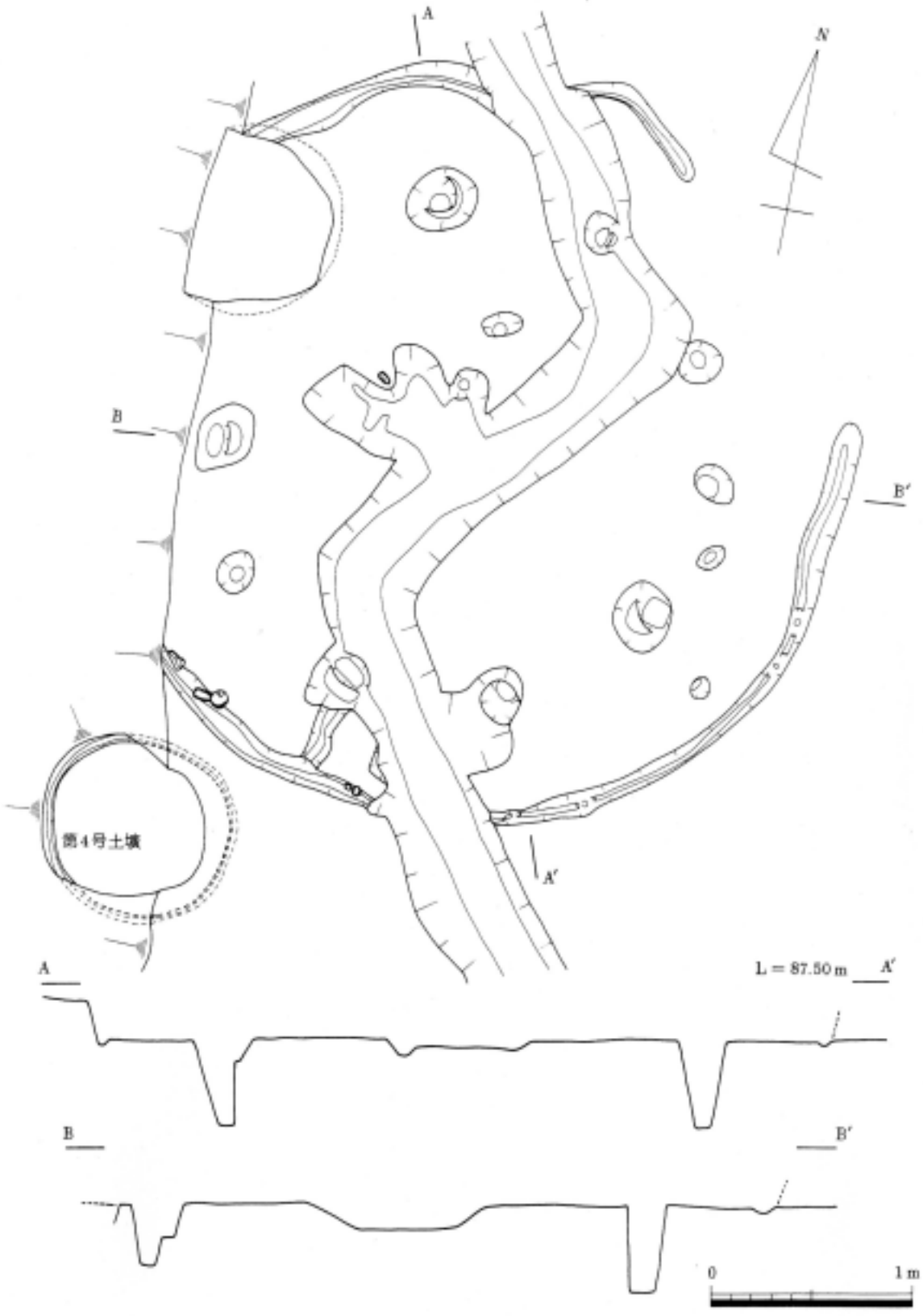
４．第４号住居跡（第27図）

本住居跡は，３号住居の北東約65ｍの尾根上鞍部となる部分に位置している。住居の東側は土取り工事によって大きく削平され，崖面となっていた。

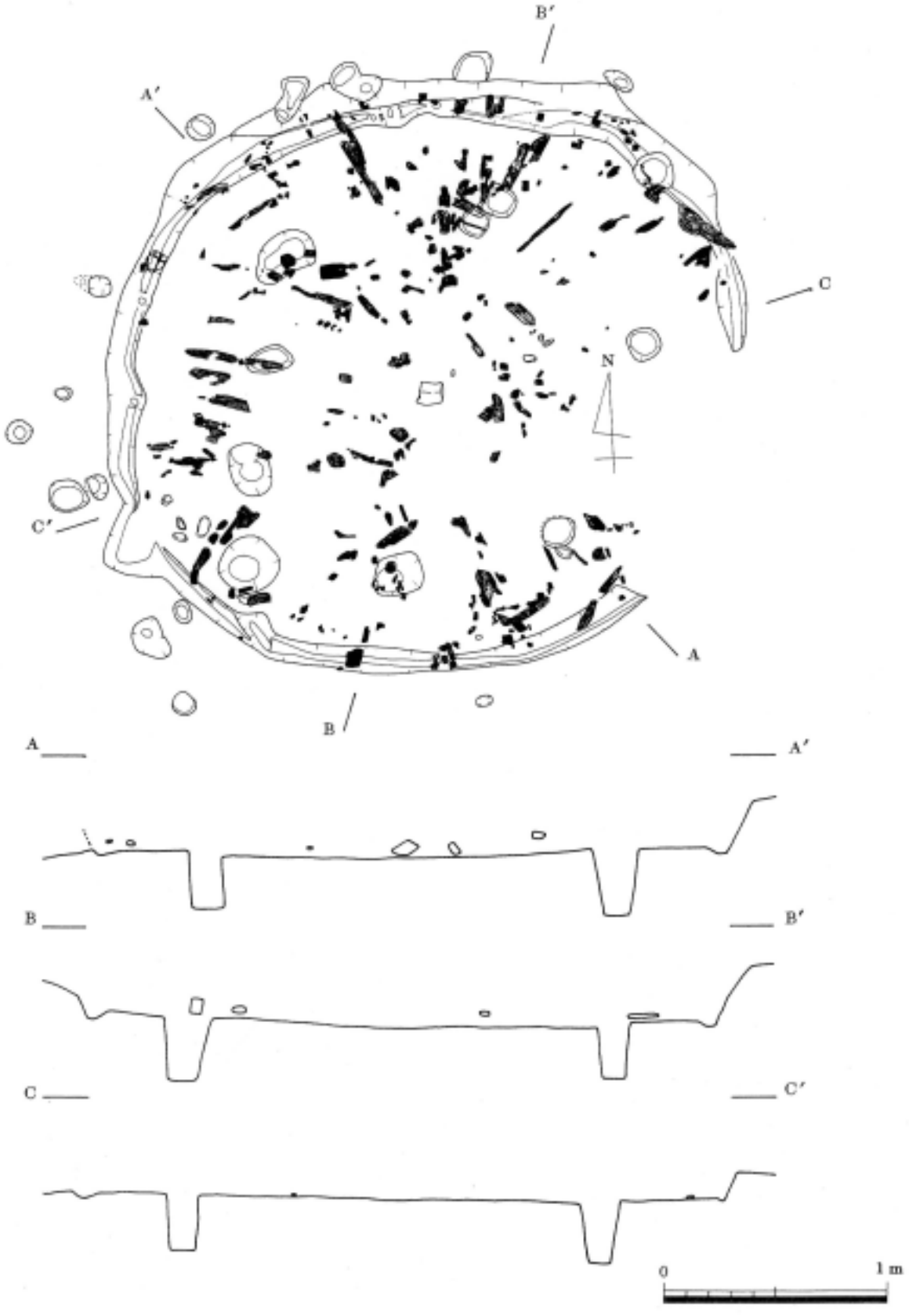
地山を径６ｍの円形に掘り込んでおり，壁は，東側の一部で土取りのため消滅しているが，残存する壁高は最高で約60㎝を測る。壁溝は，ほぼ全体にめぐらされており，幅20㎝～30㎝，深さ５㎝を測る。柱穴は壁より80㎝～120㎝の位置にほぼ円形に６本が配置され，径30㎝～40㎝，深さ49㎝～67㎝を測る。床面のほぼ中央部に角礫が検出さーれ，周辺がわずかに凹んでいる。周辺が赤変しているため明確ではないが，炉跡の可能性がある。

本住居内からは，多量の炭化材と厚さ約20㎝の灰層が検出された。床面及ぴ壁面は赤変している部分が見られた。このことから本住居跡は焼失したことが確認された。炭化材は，ほとんど原形を保っていないため，上屋構造の復元は困難であるが，検出された炭化材の状態から，種木が放射状に構架されたことが推定される。柱材は，明確ではないが，柱穴上から検出された炭化材を手がかりとすれば，径10㎝～15㎝の木材を使用したものと推定される。壁の構造について明確にはできなかったが，東辺から炭化材が壁によりかかる状態で出土し，炭化材と地山との間から赤変した土が検出された。このことを手がかりとすれば，住居の壁は，壁溝上に木杭を立て，杭と杭との間に，板材又は丸太をわたし，地山との間に土を入れた構造としていたことが推定されよう。

遺物は，北辺の壁溝上の，床面から甕形土器１点の他少量の土器片が出土した。



第26図　B地点第3号住居跡及び第4号土壙実測図



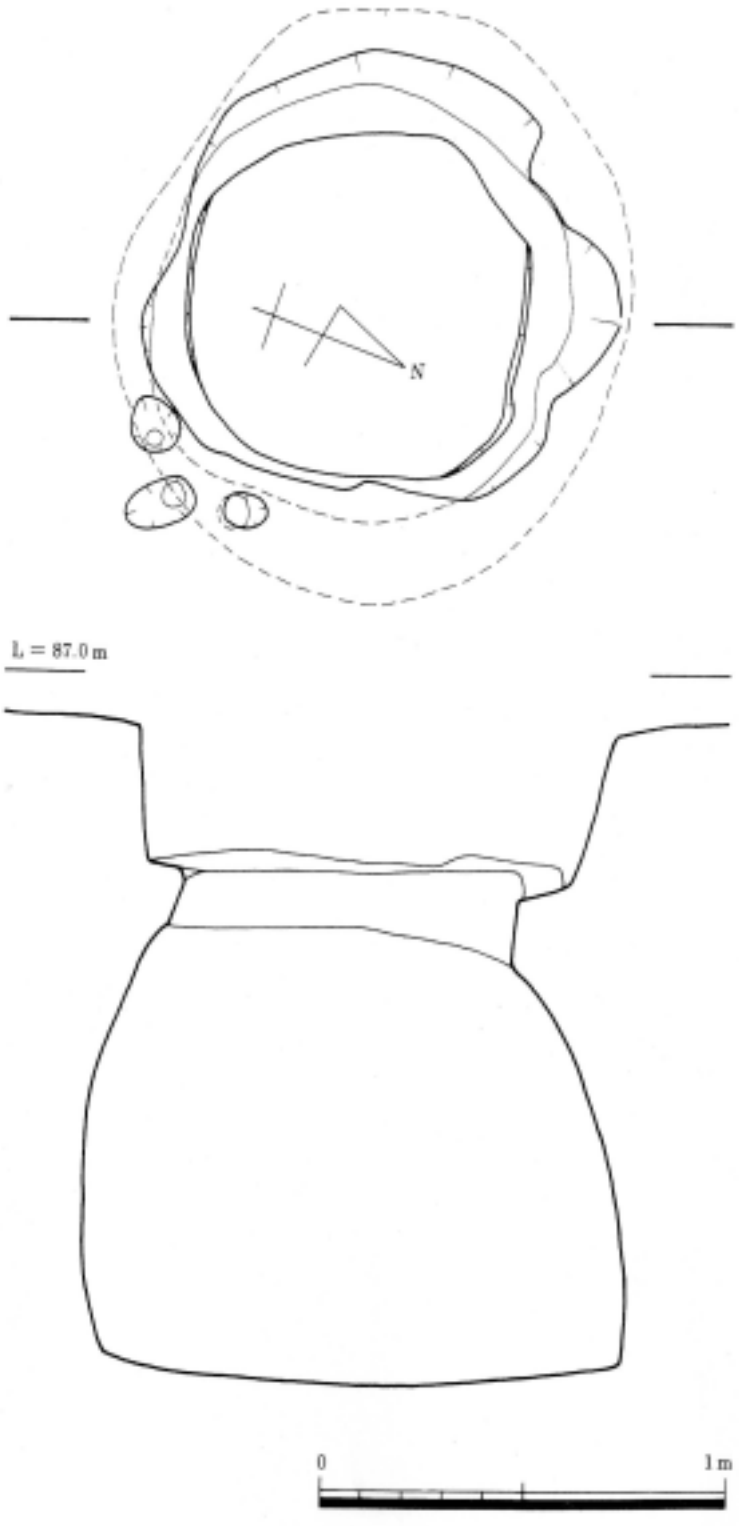
第27図　B地点第4号住居跡実測図

５．第１号土壙（第 28 図）

２号住居北側約８ｍの，尾根中央部から検出した断面袋状を呈する円形土壙である。形状から貯蔵穴と考えられる。埋土上面から弥生式土器片が少量であるが検出された。

地山を開口部径 118 ㎝，底径 128 ㎝，深さ 150 ㎝に掘り込んで作られている。開口部端部から約 30 ㎝下った部分に幅 80 ㎝の狭小な平坦面が検出された。この平坦部はほぼ水平を保っているところから，本土壙の木蓋の受け部と考えられよう。底面は水平としており，周辺部に浅い溝がめぐらされている。

本土壙の伴うと考えられる遺構は周辺からは検出されず，確認することはできなかった。



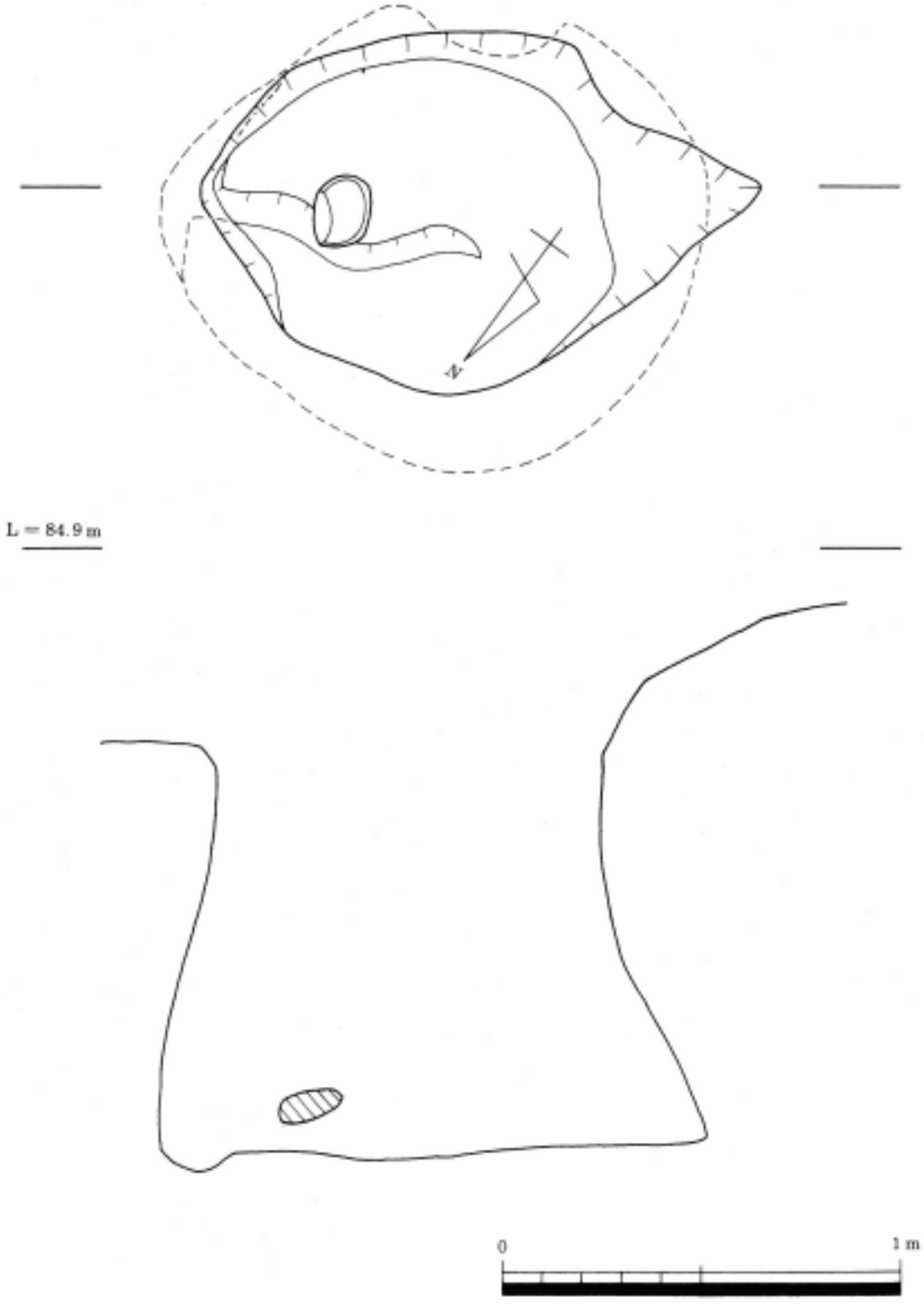
第 28 図　B地点第１号土壙跡実測図

６．第２号土壙（第 29 図）

第２号住居跡から北側に向けて延ぴた尾根平坦部先端のやや東側斜面に寄ったあたりで検出した断面袋状を呈する円形の土壙である。形状から貯蔵穴と考えられる。

地山を，口径 100 ㎝，底径 135 ㎝，深さ 120 ㎝～ 105 ㎝に掘り込んで作られている。断面は袋状を呈しており，底面はほぼ水平を保っている。底面縁辺部には浅い溝をめぐらせている。埋土内からは，弥生式土器細片と角礫が出土した。

本土壙に伴う住居跡は周辺からは検出されず，確認することはできないが，北側直近に地山を掘り下げた住居跡状の平坦面が検出されており，この遺構に伴うものかもしれない。



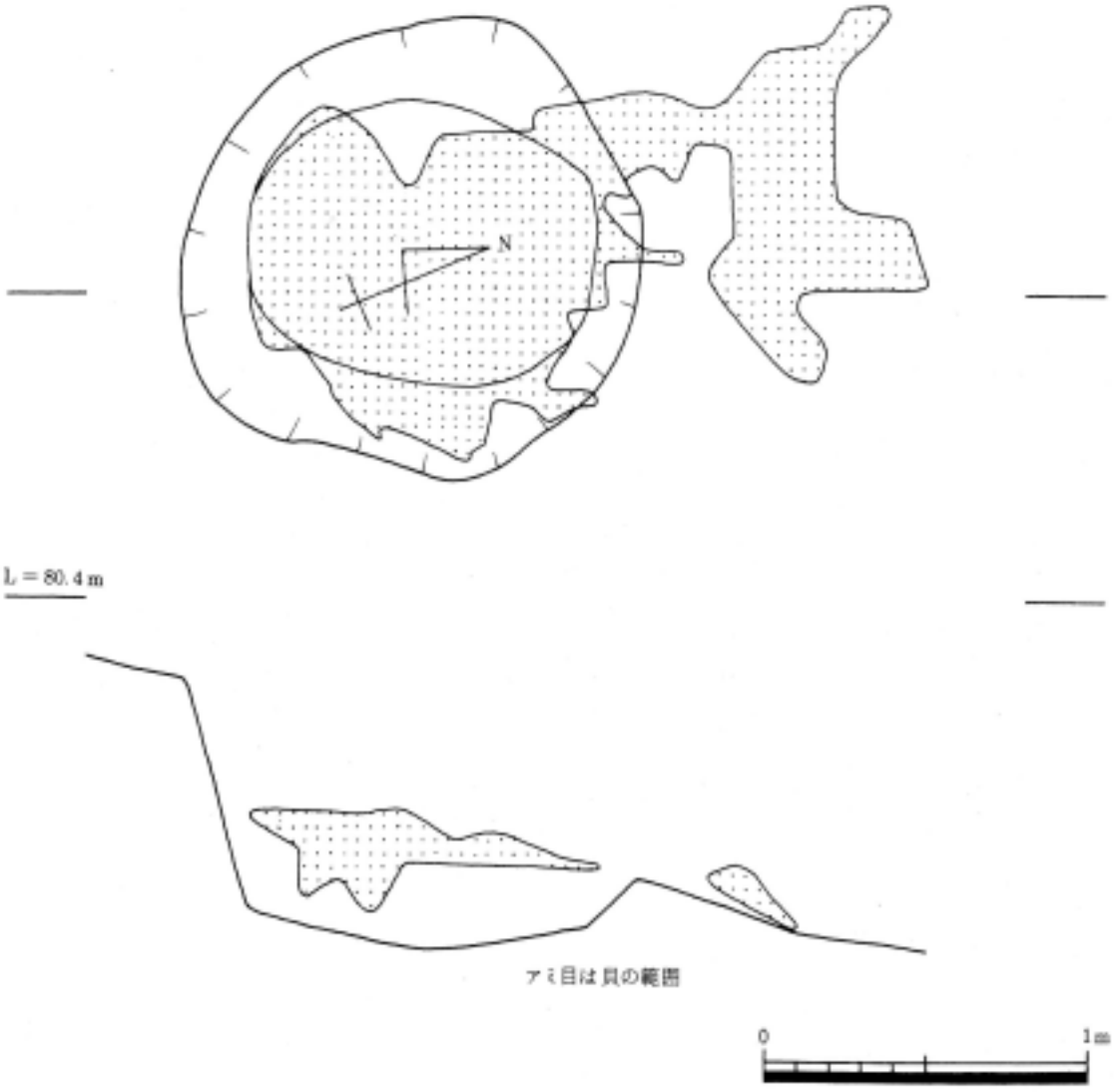
第29図　B地点第2号土壙跡実測図

7．第３号土壙（第 30 図）

第２号土壙の北側約15mの尾根上の若干傾斜がゆるやかになった部分で検出した浅い不整形の土壙である。掘り方は明瞭ではないが，地山を 130 ㎝× 140 ㎝，深さ 70 ㎝に掘り込んで作られている。この土壙内及び周辺から，土器を混入したカキを主体とした貝層の広がりが検出された。土器類は器形のうかがえるものが多いが，定形とはならず，不用品の廃棄のための土壙と考えられよう。しかし，本土壙が伴うと考えられる遺構は周辺からは確認できなかった。

8．第４号土壙（第 26 図）

第３号住居跡の南側に隣接して検出された断面袋状を呈する円形土壙である。形状から，貯蔵穴と考えられる。地山を，開口部径 180 ㎝，底径 190 ㎝，深さ 200 ㎝に掘り込んで作られている。底面はほぼ水平としており，縁辺部は浅い溝がめぐらされている。周辺からは第１号住居跡と第３号住居跡が検出されており，いずれに伴うかは確認できなかった。



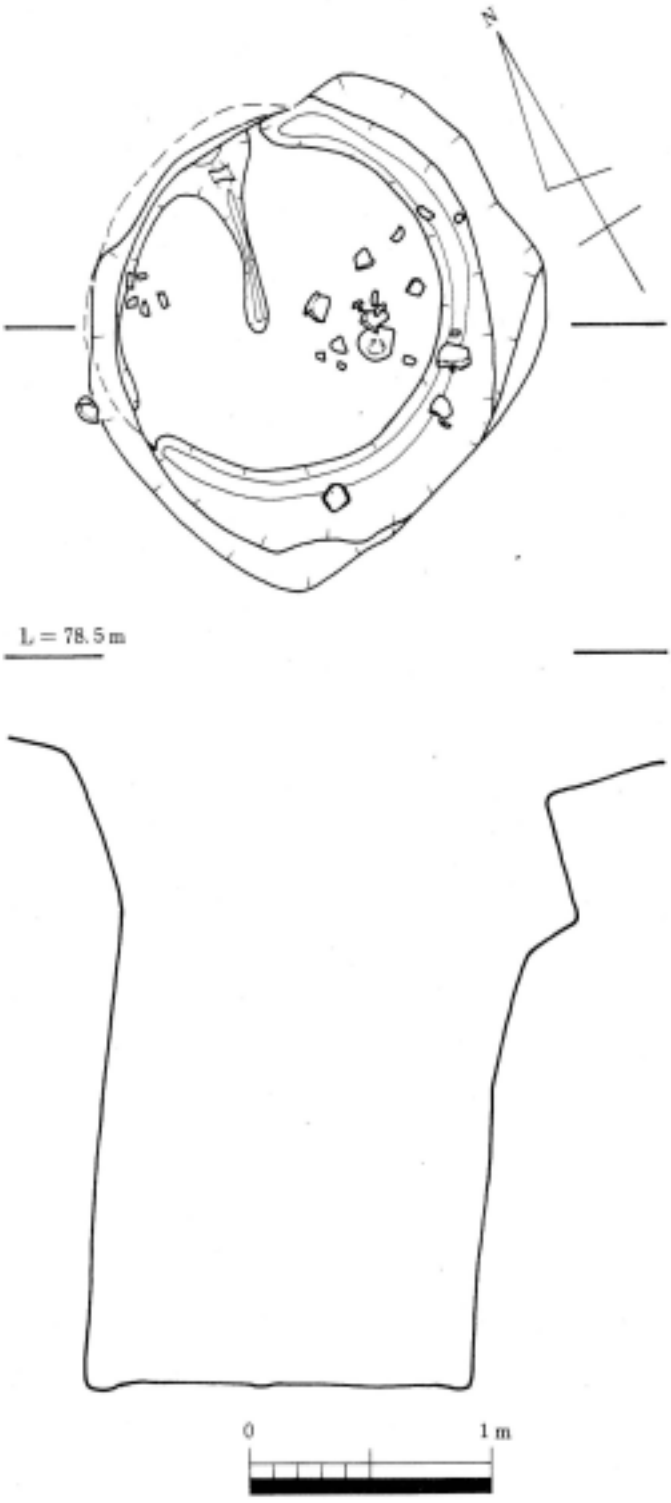
第 30 図　B地点第３号土壙実測図

９．第５号土壙（第 31 図）

第３号住居助の東側約 25 ｍの急斜面が，わずかに狭小なテラス状を呈する部分から検出した断面袋状を呈する円形土壙である。形状から貯蔵穴と考えられる。地山を開口部径 200 ㎝，底径 160 ㎝，深さ 250 ㎝に掘り込んで作っている。底面はほぼ水平を保っており，縁辺部に浅い溝をめぐらせている。埋土内からは，弥生式土器片が少量出土した。周辺からは，本土壙が伴うと考えられる遺構は検出されなかった。

10．第６号土壙（第 32 図）

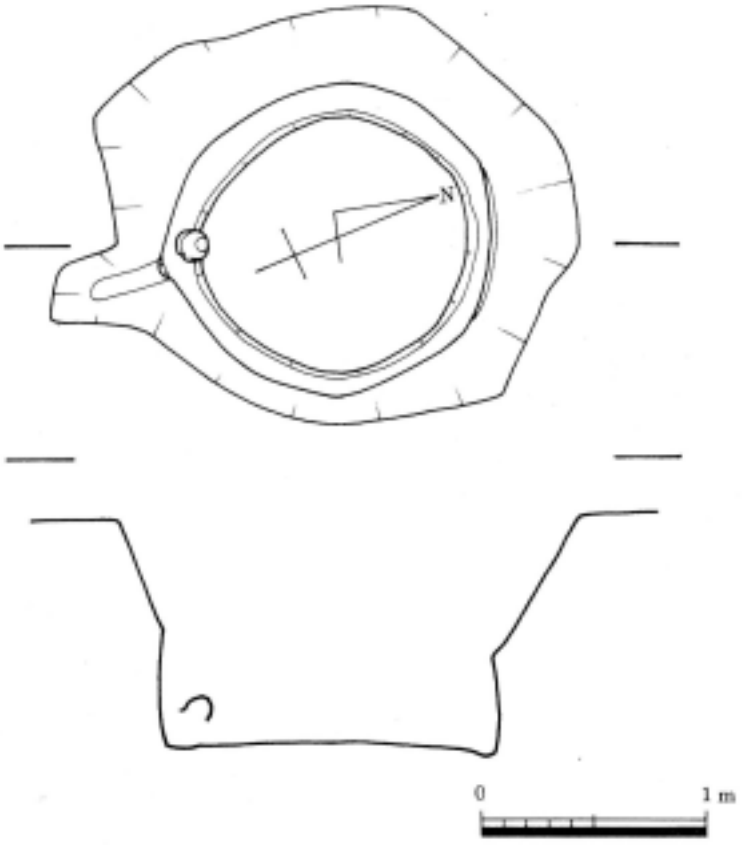
第４号住居赫の北東約 15 ｍの，尾根上平坦面のほぼ中央部から検出した，断面袋状を呈する円形の土壙である。形状から貯蔵穴と考えられる。周囲は畑として利用された痕跡がうかがえるが，遺構面までの削平は認められなかった。地山を口径 200 ㎝，底径 148 ㎝，深さ 108 ㎝に掘り込んで作っており」底面縁辺部に極めて浅い溝をめぐらせている。底面の東南隅で完形弥生式土器（鉢）１点が出土した。周辺は，比較的広い平坦面となっているが，住居跡又はその痕跡は見られず，本土壙が伴うと考えられる遺構は確認されない。しかし，４号住居に近い位置であるところから，４号住居跡に伴う可能性も考えられよう。



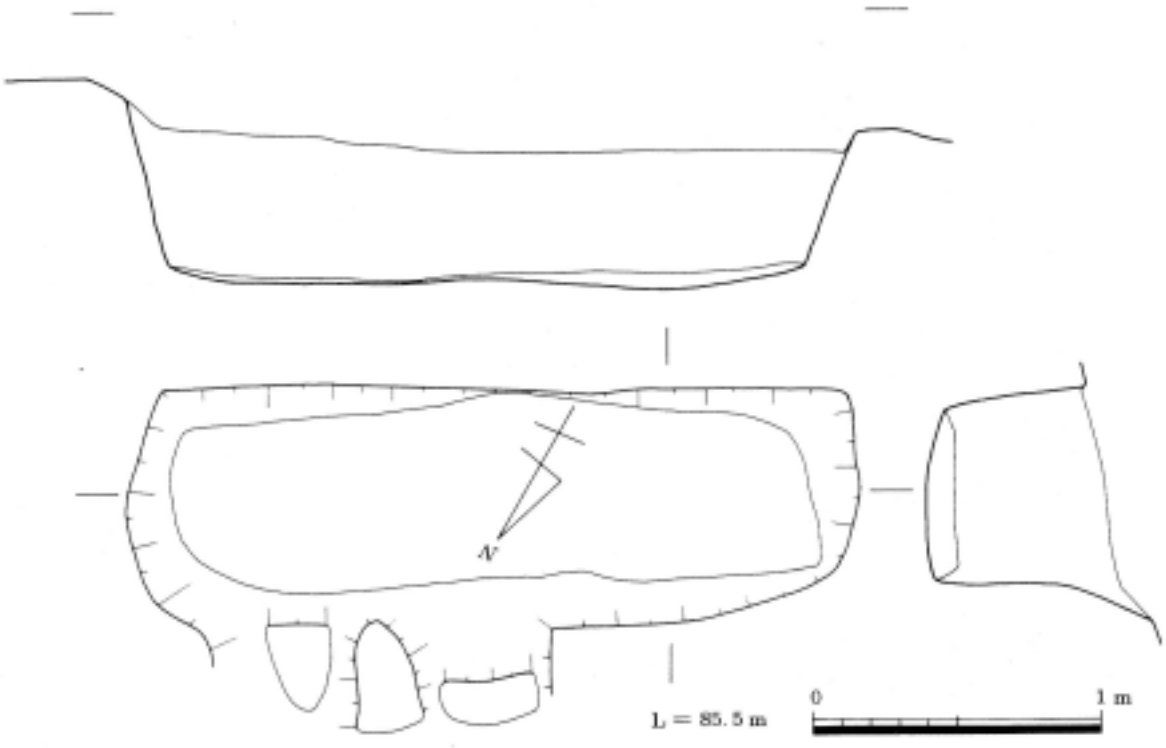
第 31 図　Ｂ地点第５号土壙実測図

11．第７号土壙（第 33 図）

第３号住居跡の東側約 12 ｍの斜面から検出した方形の土壙である。地山の高い方を高さ約 80 ㎝，長さ約 255 ㎝，幅１ｍに掘り込んで狭小な平坦面を作り，その平坦面の東端に寄つた部分に，地山を長さ 250 ㎝，幅 90 ㎝，深さ 80 ㎝の方形に掘り込んで作っている。埋土内からは遺物は出土せず，平坦面から弥生式土器細片が出土しているのみである。したがって，本土壙の時期，性格は明らかではないが，墓墳と考えられる。



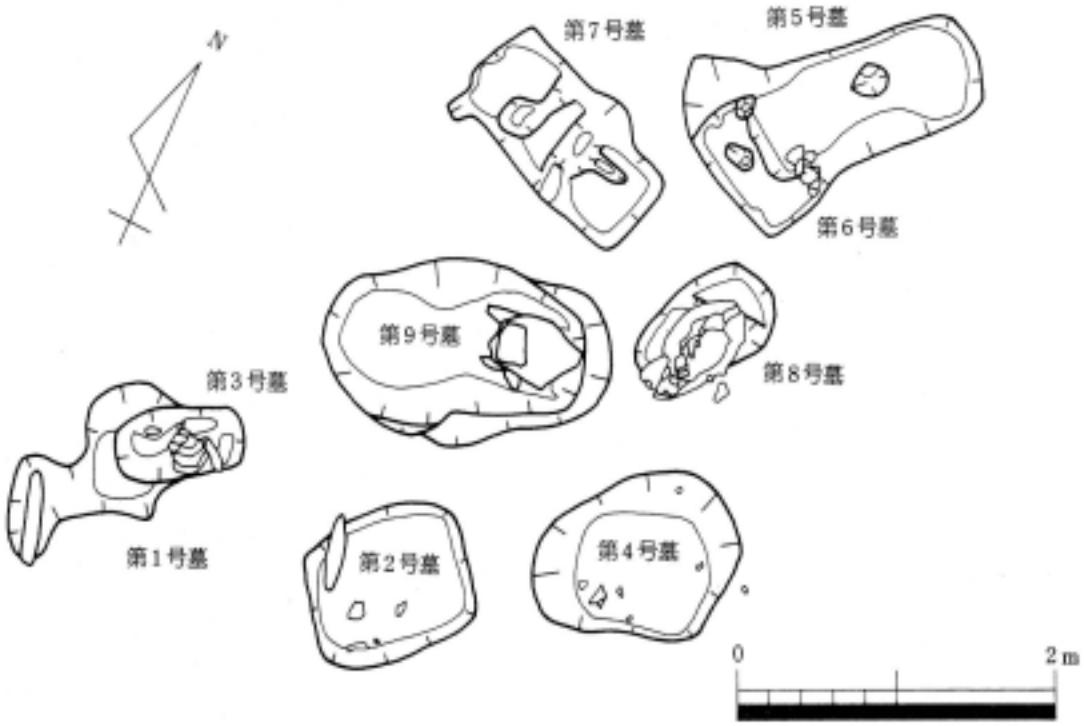
第32図　B地点第６号土壙実測図



第33図　B地点第７号土壙実測図

弥　生　墳　墓（第34図）

本地点からは，弥生時代の墳墓が第１地点，第２地点の２ヵ所から検出された。第１地点は３号住居の東方約20ｍの，尾根中心線よりやや南側斜面に寄った部分の，４ｍ×７ｍの範囲に集中して検出した。埋葬主体の内訳は，土壙７，壷棺１，石棺１の９基が確認された。これら埋葬主体の配置，主軸方向には規則性は見られず，盛り土，溝等の墓域を区画する施設は全く検出されなかった。第２地点は第１地点の北東約28m，第４号住居跡の西側約10ｍの斜面から検出した。主体部は第10号墓と呼称する１基で断面は袋状に近い形態を呈する土壙である。第４号住居跡の直近にあたり，位置，形状から貯蔵穴の転用と考えられる。



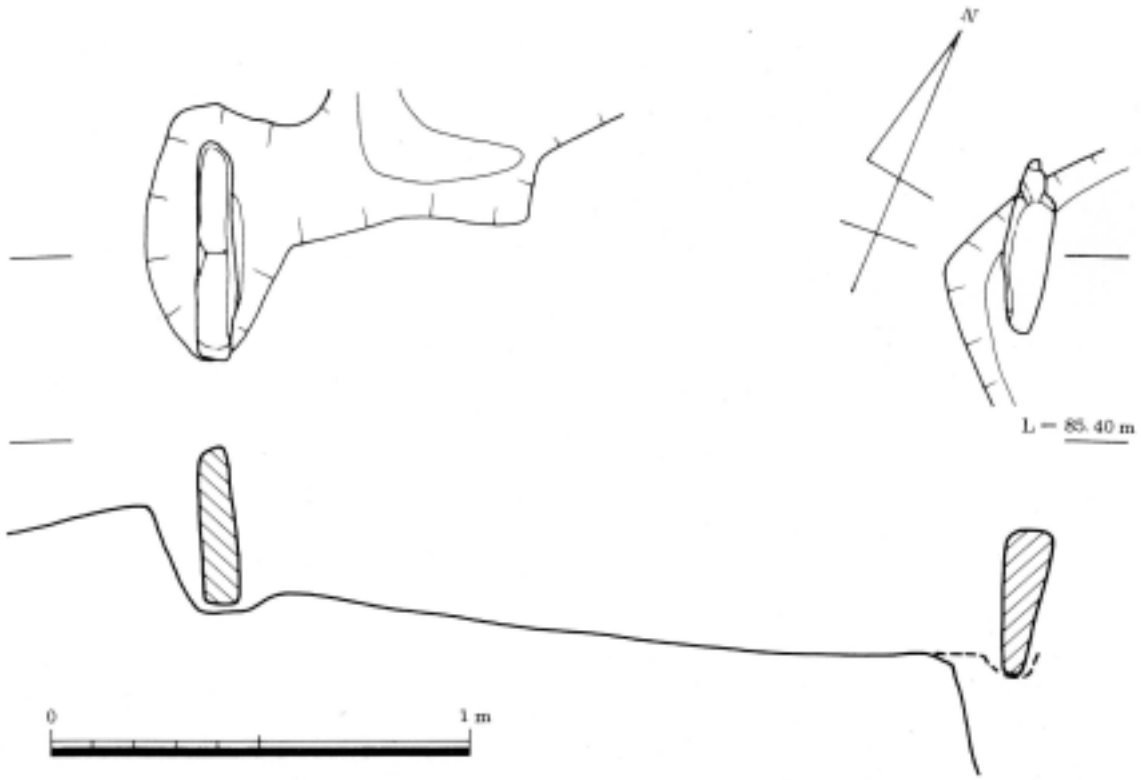
第34図　B地点弥生墳墓配置図

12．第１号墓（第35図）

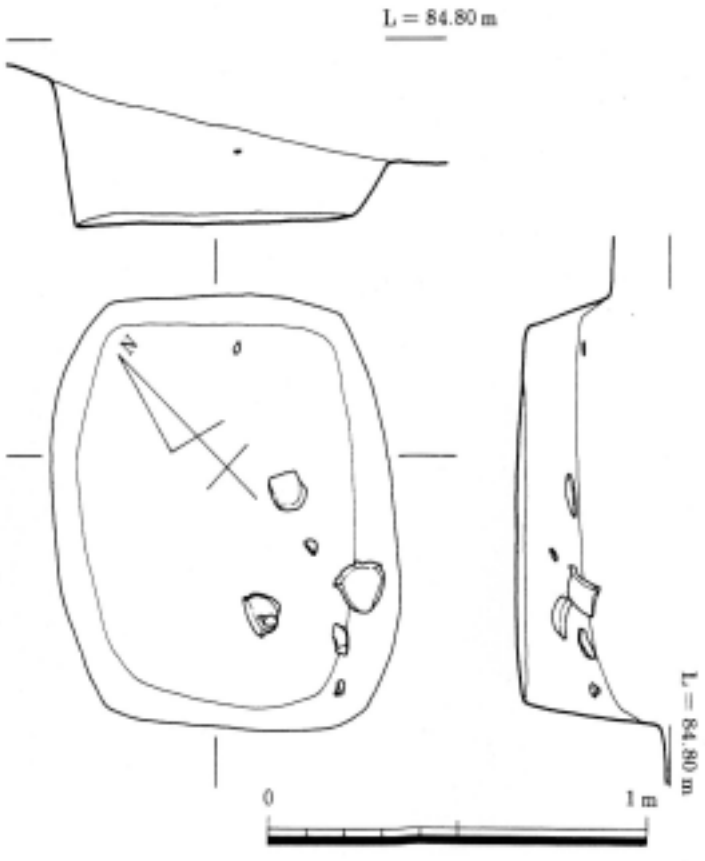
第１地点の西端に位置する。第２号墓，第３号墓と重複しているため堀り方は明瞭にすることは困難であるが，土壙と考えられる。掘り方の範囲内と推定される範囲から，長さ46㎝～58㎝，幅39㎝～42㎝，厚さ９㎝～11㎝の板状の石材が，約1.8ｍ離れた位置から２枚立った状態で検出された。この石材は，検出状態から，両側の小口にあたるものと考えられる。この石材を手がかりとして考えれば，掘り方は長さ220㎝，幅70㎝の方形の土壙と考えられよう。埋土内からは遺物は出土しなかった。

13．第２号墓（第36図）

第１号墓の東側に第１号墓と重複して検出した方形の土壙である。現存する掘り方は，104㎝×90㎝，深さ42㎝～15㎝を測る。主軸はN45°Eをとる。墳内からは，鉢形土器１点を含む弥生式土器片が出土した。



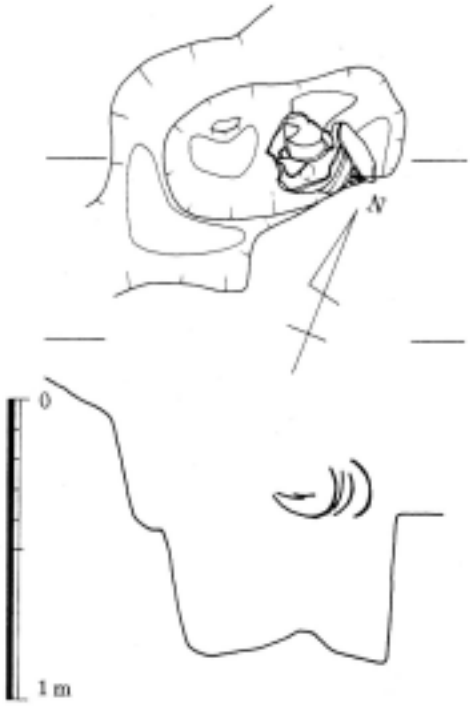
第35図　B地点第1号墓実測図



第36図　B地点第2号墓実測図

14．第３号墓（第 37 図）

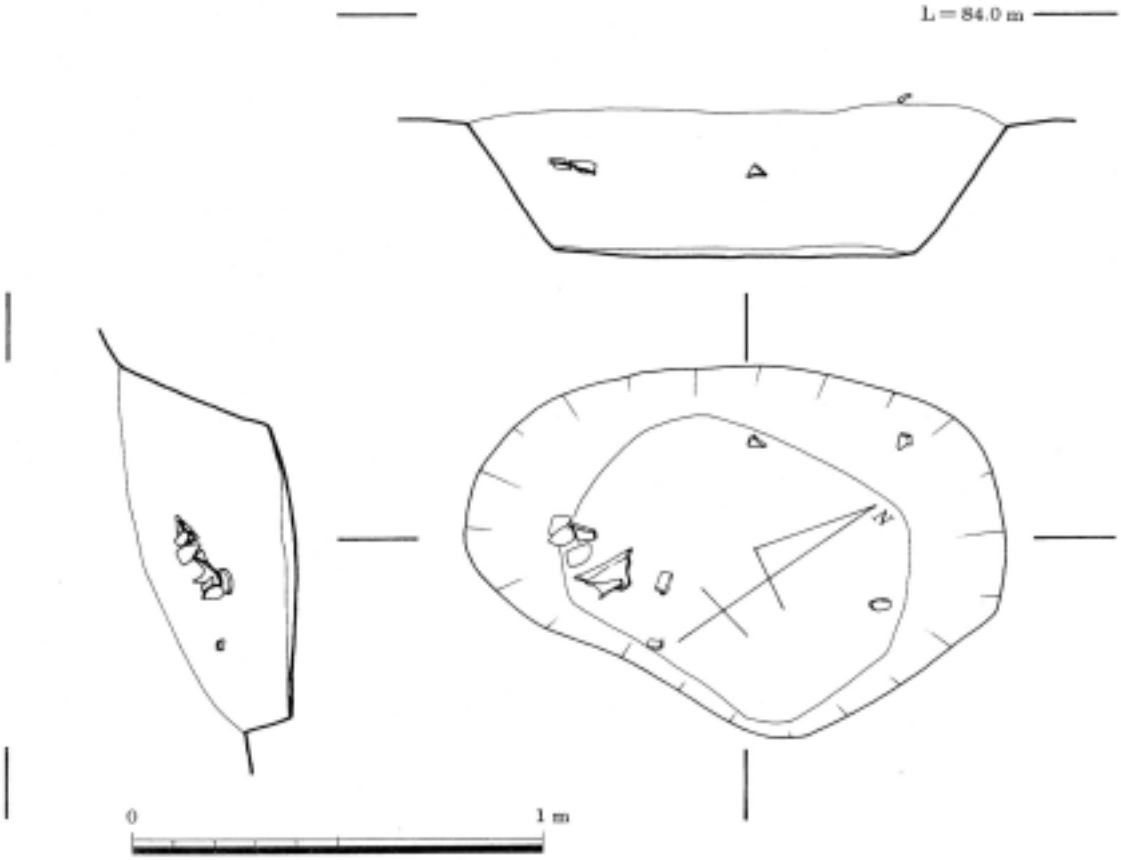
第１号墓の北側に，１号墓と重複して検出された土壙である。掘り方は不整円形を呈し，長軸 100 ㎝，短軸 50 ㎝，深さ 60 ㎝～ 33 ㎝を測る。主軸は N51 ° E をとる。墳内のほぼ中央部で壷形土器１点が出土した。この土器は破砕した後，その破片を積み重ねた状態で出土しており，供献用と考えられる。この土壙は，その形状から墓墳とするには疑問が残り，土器についても，１号墓に伴うことが考えられるが，検出状態からは明確にすることはできなかった。



第 37 図　B地点第３号墓実測図

15．第４号墓（第 38 図）

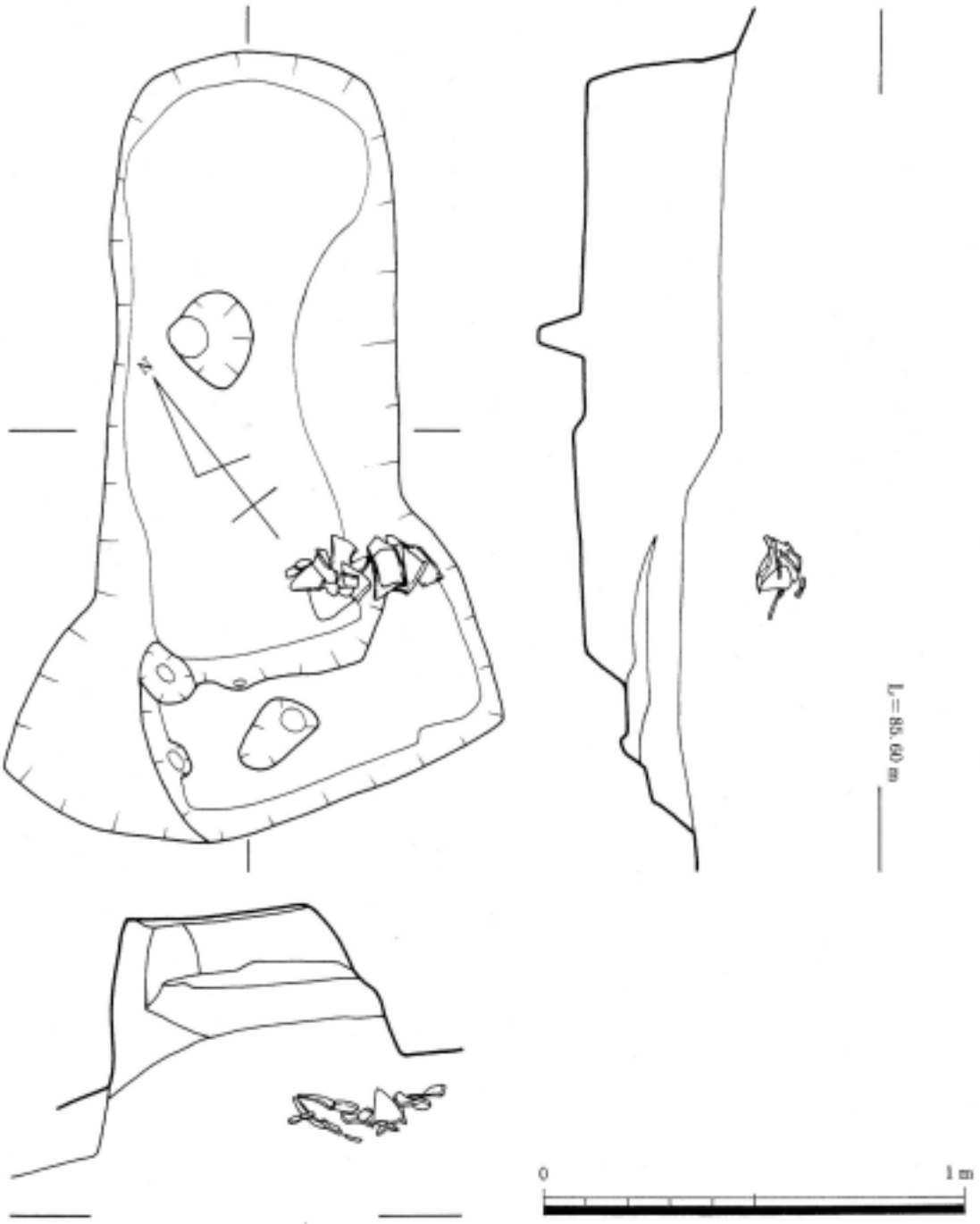
第２号墓の東側に隣接して検出された不整円形の土壙である。長軸 130 ㎝，短軸 IOO ㎝，深さ 42 ㎝～ 12 ㎝を測る。主軸は S39 ° W をとる。墳内からは，床面から 20 ㎝～ 30 ㎝浮いた状態で弥生式土器片が出土した。



第 38 図　B地点第４号墓実測図

16．第５・６号墓（第39図）

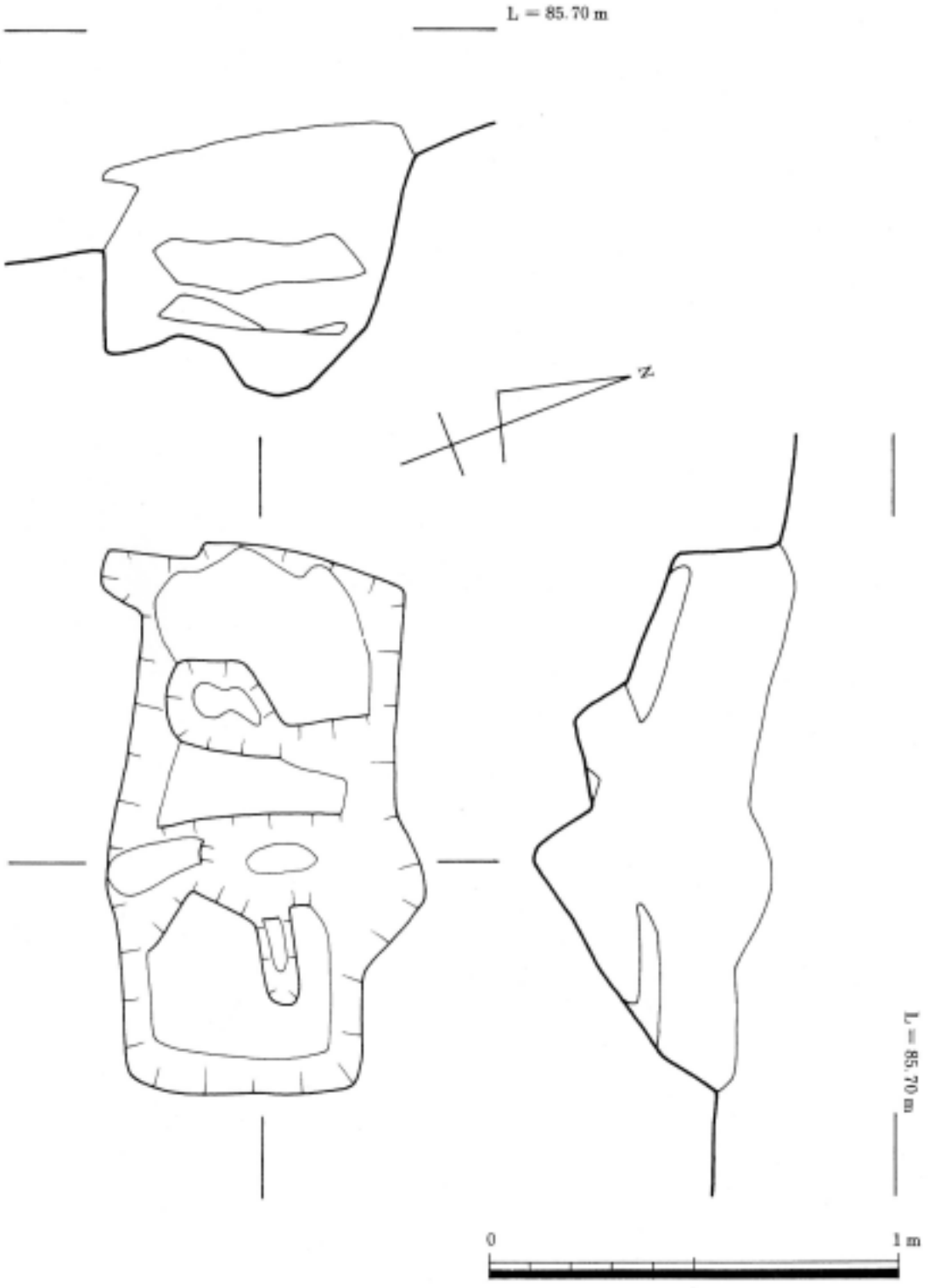
第４号墓の北約３m，第８号墓（壷棺）の北側に隣接して検出した方形の土壙である。検出状態から，方形の土壙２基の重複と考えられる。５号墓は，幅約70㎝，深さ約35㎝，長さは重複のため明瞭ではないが，推定約150㎝を測る。主軸はN30°Eをとる。床面のほぼ中央部から径20㎝，深さ約10㎝のピット１を検出した。６号墓は，５号墓の西側小口で重複し，長さ約80㎝，幅推定約50㎝，深さ12㎝～15㎝を測る。主軸はN80°Wをとる。墳内からは弥生式土器片が両土壙の重複部分で出土した。出土状態から，どちらの土壙に伴うものかは明らかにすることはできない。



第39図　B地点第５・６号墓実測図

17．第７号墓（第40図）

第６号墓の西側，第９号墓（石棺）の北側に隣接して検出された方形の土壙で長さ135㎝，幅約70㎝，深さ25㎝～60㎝を測る。主軸はN63°Wをとる。床面は中央部が深くなり整っていない。墳内からは遺物は出土しなかった。

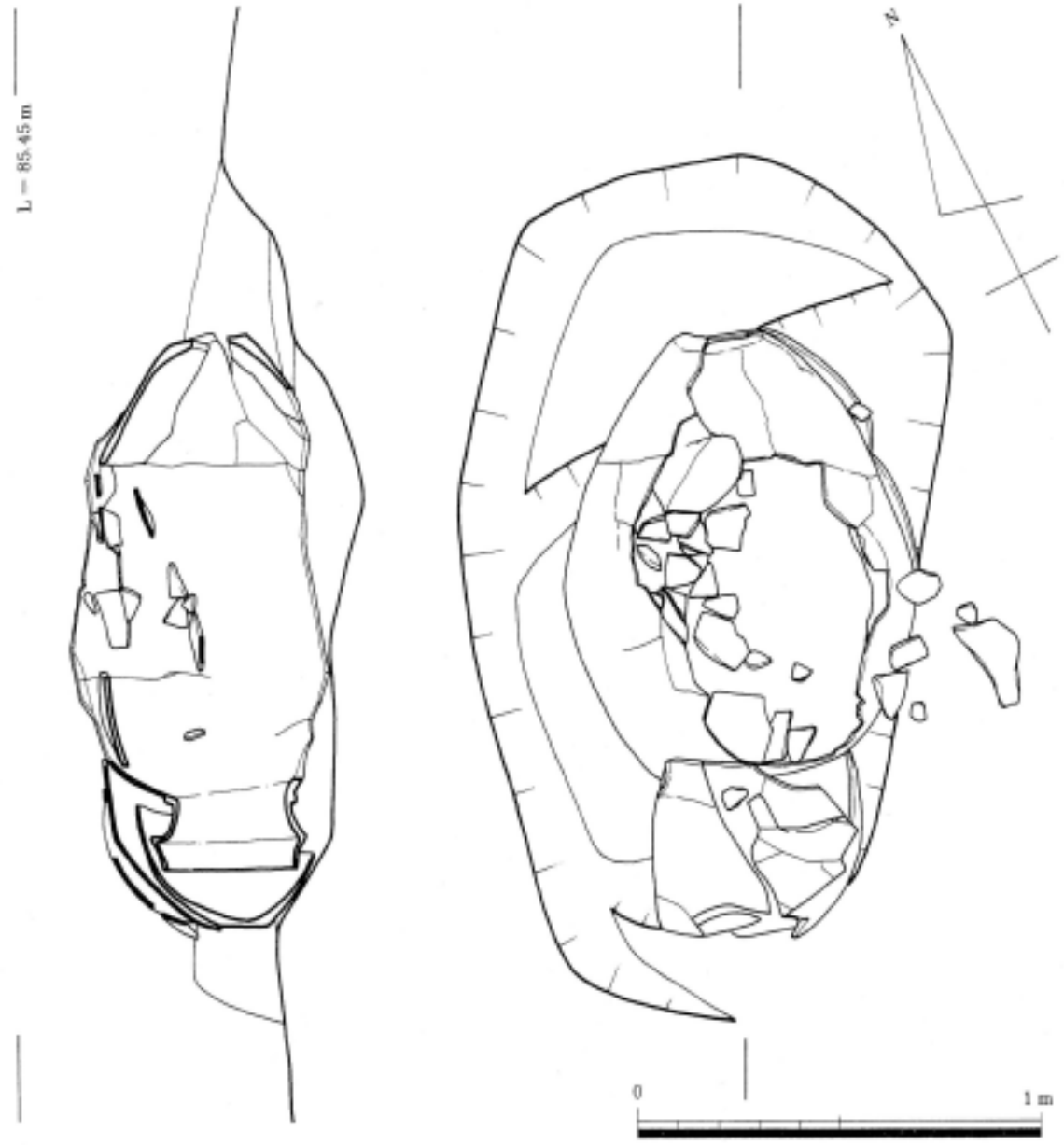


第40図　B地点第７号墓実測図

18．第８号墓（第41図）

第１地点のほぼ中央の土壙に囲まれた部分から検出された壷棺である。表土直下から検出され，畑作により上半部が破壊されており，破片が柏内に落ち込んでいた。

地山を，長軸約90㎝，短軸約60㎝，深さ３㎝～５㎝の浅い長円形に堀り込んで墓壙としている。床面は凹凸が著しく，整った墓壙ではない。この墓壙の南西側に寄せて大型の壷形土器を横に埋置している。主軸はN27°Eをとる。棺身として使用した土器は，大型の複合口縁をもつ壷形土器を使用しており，口径17㎝，高さ65㎝，最大胴径45㎝を測る。この土器の胴部の約１／３を縦方向に割って，遺体にかぶせるようにして埋葬している。底部は穿孔したものと思われる。埋置した後，別の壷形土器を破砕し，胴部から底部にかけての部分を蓋として複合口縁部にかぶせ，残りの部分をその接合部あたりにかぶせている。この蓋として使用した土器は，器壁がもろいため復元することはできなかった。棺内からは遺物は出土しなかった。

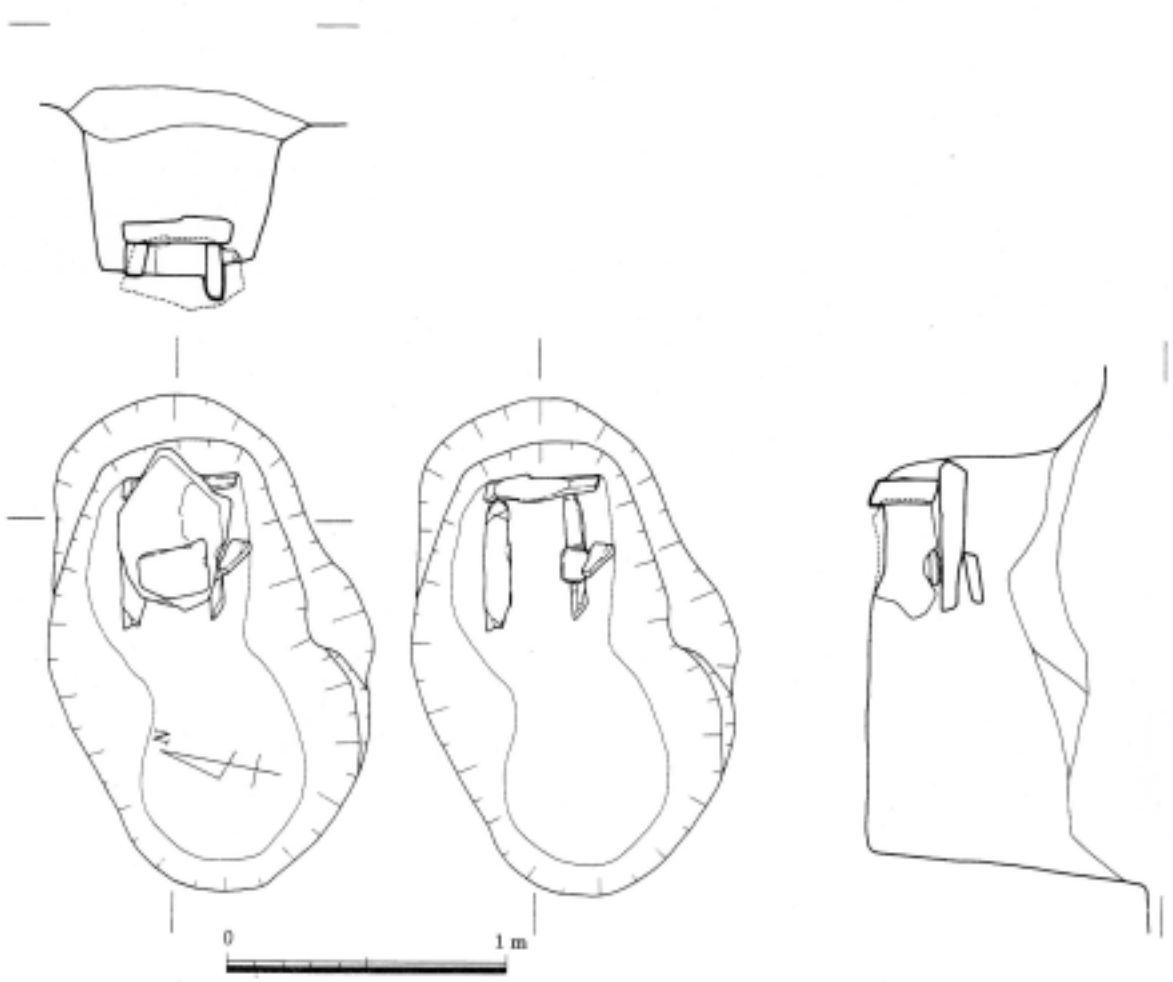


第41図　B地点第８号墓実測図

19．第９号墓（第 42 図）

第８号墓に隣接して検出された深い土壙内に埋置された，小形箱式石棺であ.る。地山を，長さ 185㎝，幅 115㎝，深さ 100㎝～ 60㎝の長円形に掘り込んで墓壙としている。この墓壙の東側に寄せて石棺を構築している。石棺は，板状の石材脅５枚使用して構築している。内法は，長さは不明，幅 21㎝～ 23㎝，深さ 20㎝を測る。側壁は，南北各１枚ずつを使用している。北側の石材は，長さ 49㎝，幅 12㎝，厚さ 10㎝を測る。東側小口は，側壁にほさむ形で構築しており，高さ 41㎝，幅 26㎝，厚さ 10㎝を測る。蓋石は２枚重ねて置いている。下側の石材は長さ 60㎝，幅 40㎝，厚さ 10㎝を測る。上側の石材は長さ 25㎝，幅 22㎝，厚さ５㎝を測る。この蓋石の間からは，白色粘土が検出された。西側小ロの石材は欠失している。内部から遺物は出土しなかった。規模から幼児用と考えられる。

さて，掘り方の形状を検討すると，西側部分は，円形に近い形状を呈し，東側部分は方形に近い形状を呈しており，接点あたりで，土壙は若千狭くなることが認められる。この形状と石棺の西側小ロが欠失していることを考えあわせると，本墳墓は２基が重複している可能性が考えられる。即ち，石棺構築後，両側に土墳を掘り込んで，石棺の西側の一部を破壊したと考えられよう。この場合，蓋石として使用した石材の内，上側の石材は西側小口の石材であった可能性が考えられる。しかし，検出状況から明らかにすることはできなかった。



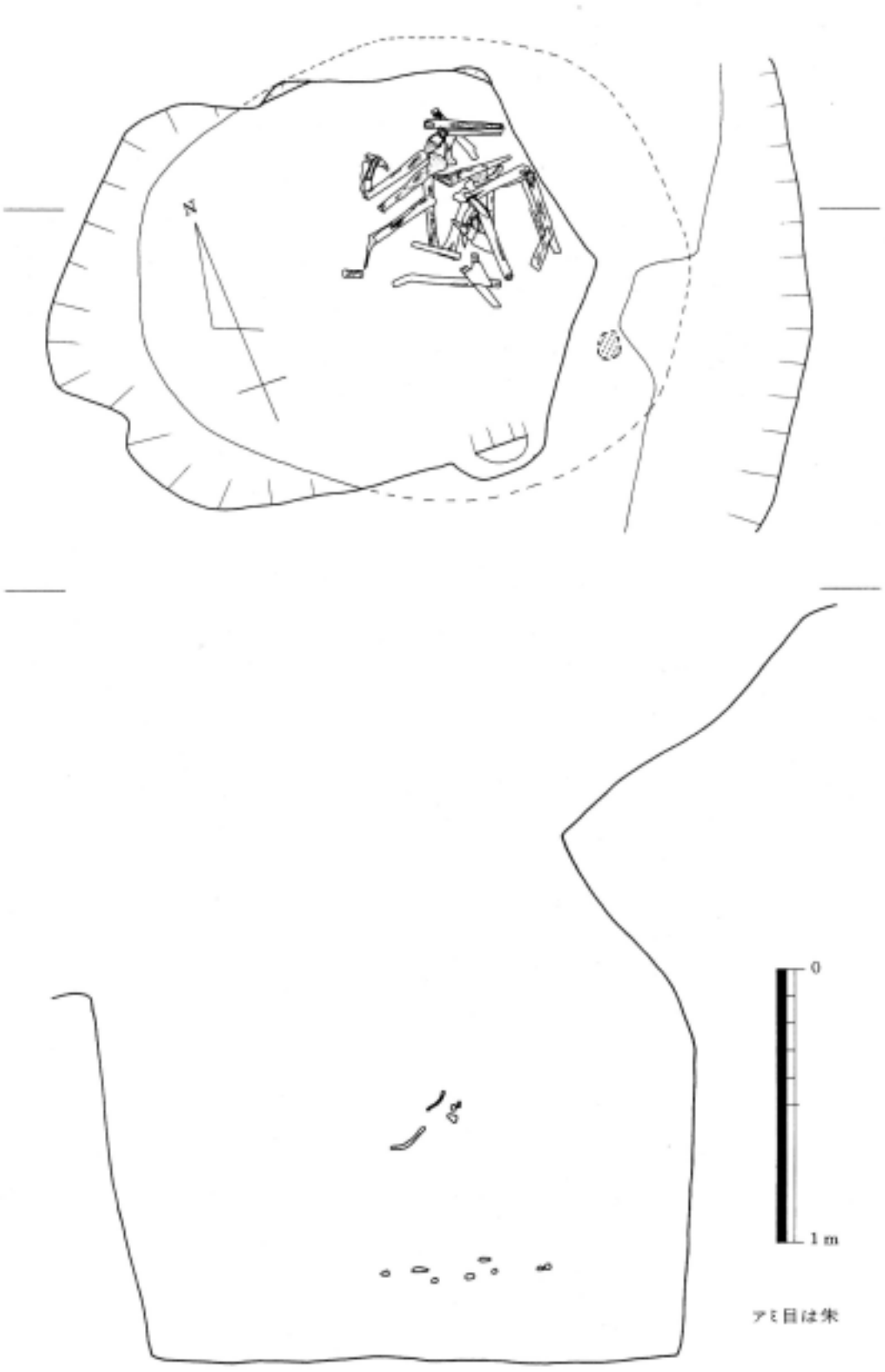
第 42 図　B地点第９号墓実測図

20．第10号墓（第43図）

第４号住居の西側約10ｍの斜面から検出した土壙である。地山を口径170㎝～160㎝，底径約170㎝，深さ190㎝～130㎝に掘り込んで作っている。掘り方の上半部は不整形を呈するが，下半部はほぼ円筒形に整った形状を呈している。埋土内からは，甕形土器２点の他，人骨が多数出土した。形状と位置から，第４号住居に伴う貯蔵穴を転用した墳墓と考えられる。

人骨は，上下２層に分かれて検出した。上層は床面より約70㎝浮いた位置から，頭骨と数点の骨が出土し，下層は床面から約30㎝浮いた状態で，少なくとも３体分の大腿骨を中心とした，比較的大きく長い骨がほぼ水平に約60㎝×60㎝の範囲から出土した。この骨の出土状態は・意識的に各部位を選別したことをうかがうことができ、死者が白骨又はそれに近い状態となった時点で選別し埋葬したことが考えられる。上下２層となっていることにより，２度の埋葬が行なわれたことが考えられる。しかし，それぞれに伴うと考えられる，各１点ずつの甕形土器の特徴が共通であること，各々の骨の内訳が全く異なることなどから，上下２層の骨は同時に死んだ死者の骨であることが考えられよう。したがって，上下２層の埋葬は２度の埋葬とはいえ，同時に死んだ複数の死者に対する，同時に近いほどの時間差での埋葬と考えられる。なお，下層の骨に近接して，水銀朱が微量であるが検出された。

さて，この骨の周辺から，炭化物と灰が多量に出土した。このことは骨と共に炭化物と灰を其に集めて埋葬したと考えられる。このことは，直近に位置する焼失した第４号住居との関連を強く示していると思われるが，骨に火をうけた痕跡が見られないため，明確にすることはできなかった。（桧垣）



第43図　B地点第10号墓実測図

B地点出土土器観察表

表3

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
1	1住	長頸壷	現存高 18.5 胴部最大 13.8 底径 5.5	頸部から口縁部にかけてはわずかに広がるが，ほぼ円筒形を呈す。胴部は球状を呈する。底部は貼り付けてあり凸状を呈し不安定である。	頸部はしぼって成形しており，しぼり痕が顕著である。頸部外面は目の細かいタテ方向のハケ目，胴部外面は細かいハケ目横又はナナメ方向。底部はハケ状工具によるナデ。肩部にはヘラによる細かい「ノ」の字状の刻み目を施し２条の凹線を施している。	頸部内面　褐色 外面　淡黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
2	2住	甕	口径　14.2	口縁部は「くの字」状に外反し，口唇部は肥厚する。	口唇部には２条の凹線を施し肩部には「ノ」字状の刻み目が見られるが，工具は磨滅のため不明。口縁部内外面は横ナデ。肩部施文帯以下はヘラナデ，胴部内面はヘラ削り。	内面　淡黄褐色 外面　赤褐色 胎土　良好 焼成　良好
3	2住	甕	口径　15.8	口縁部の開きは小さく頸部から直立気味に立ち上がり，口縁端部がわずかに開く。器壁はかなり厚い。	外面は磨滅のため調整は不明である。口縁部内面は横ナデ，胴部内面はヘラ削りの後ナデ。	内外面とも淡黄褐色 胎土　良好 焼成　軟調
4	2住	甕	口径　11.0	口縁部は「くの字」状に外反し口唇部はわずかに肥厚する。	口唇部には２条の凹線がある。肩部には「ノ」字状の刻み目があるが，内外面とも磨滅が著しく調整等は不明。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　軟調
5	2住	甕	口径　15.6	口縁部の開きは小さく口縁端部は肥厚するが，平らに仕上げている。	磨滅のため調整は不明。	内外面とも淡黄色 胎土　良好 焼成　軟調
6	2住	不明	底径　3.5	底部は凹底である。	磨滅が著しく調整は不明。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　軟調
7	3住	鉢	口径　15.7 器高　10.3 底径　5.5	口唇部の開きはなく，器壁は全体として肉厚である。	磨滅が著しく調整は不明。体部外面に繊維痕と思われるものがある。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　やや軟調
8	4住	甕	口径　11.4 推定高 14.5	口縁部はゆるいカーブをもって開き口縁端部内側にわずかに凹みをもって上方へ肥厚する。胴部の開きは小さく器壁は全体として肉厚である。	内面頸部以下は縦及び横方向のヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部以下は縦方向のハケ目の後横ナデ。	内外面とも赤褐色 胎土　良好 焼成　やや軟調

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
9	4　住	甕	口径　14.6	口縁部は大きく開き，口縁端部はわずかに上下に肥厚する。胴部の開きはほとんどない。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ，肩部以下はクシ歯状工具による押し引き施文，施文帯以下は縦方向のハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
10	3　土壙	甕	口径　19.2 胴部最大径 20.0	口縁部は「くの字」状に外反し，口縁端部はわずかに上下に肥厚し２条の凹線をもつ。胴部の開きは少ない。器壁は薄手である。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ，外面肩部にはヘラによる上下２段の羽状文状の刻み目を施す。外面全体にハケ目の後ヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　良好
11	3　土壙	甕	口径　16.7	口縁部の開きは少なく胴部の開きも少ない。器壁は全体に厚手である。	内面頸部以下はヘラ削り後ナデ，口縁部内外面は横ナデ，他はヘラナデ。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
12	3　土壙	甕	口径　15.0	口縁部は「くの字」状に外反し，口縁端部はわずかに上下に肥厚し，中央はわずかに凹む。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁内外面は横ナデ，外面頸部下にクシ歯状工具による押し引き施文がある。それ以下は縦方向のハケ目の後ヘラナデ。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
13	3　土壙	甕	口径　15.1	胴部の開きはほとんどなく口縁部の開きも少ない。器壁もほぼ均一の厚さをもつ。	内面頸部以下はヘラ削り後ナデ，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部以下はハケ目の後ナデ。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　良好
14	3　土壙	甕	口径　19.0	口縁部は「くの字」状に外反し，端部に至ってわずかに下方に肥厚する。胴部はやや開く。	内面頸部以下はヘラ削り後ナデ，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部下にクシ歯状工具による押し引き施文があり，それ以下はハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
15	3　土壙	甕	口径　10.8	口縁部はゆるやかなカーブをもって開き，口縁端部はわずかに上下に肥厚する。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部以下はヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　良好
16	3　土壙	甕	口径　14.0	口縁部はゆるやかなカーブをもって開くが，胴部の開きはやや大きい。	内面頸部以下はヘラ削り，他は横ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　難聴
17	3　土壙	甕	口径　16.3	口縁部の開きは少なく直立気味であるが，胴部の開きはやや大きい。口縁端部はわずかに肥厚する。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部下にヘラによる刻み目文があり，それ以下は縦方向のハケ目。	内外面とも淡黄褐色 胎土　良好 焼成　やや難聴

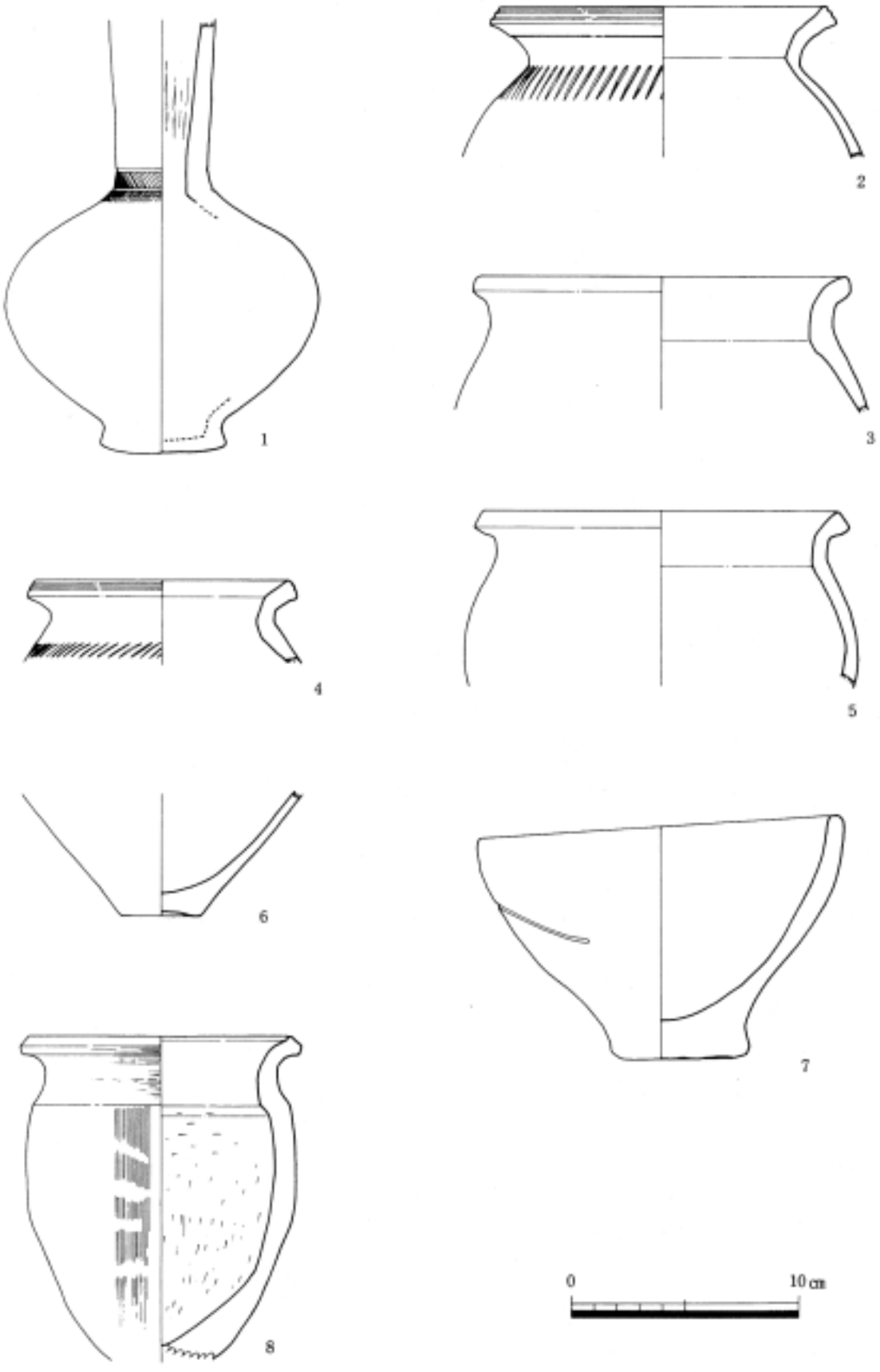
No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
18	3　土壙	甕	口径　12.2	口縁部の開きは少なく胴部の開きも少ない。口縁端部は上下にわずかに肥厚する。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部以下は磨滅のため不明。	内外面とも淡黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
19	3　土壙	甕	口径　25.4	口縁部は「くの字」状に外反する。胴部の開きは少ない。大形の甕である。	内面頸部以下は磨滅のため，調整は不明。口縁部内面は横ナデ，外面は縦方向のハケ目の後横ナデ。外面頸部下には８本歯と思われるクシ歯工具による刺突文。それ以下は横ナデ。	内外面とも淡黄褐色 胎土　やや不良 焼成　比較的良好
20	3　土壙	甕	口径　22.0	口縁部は直立気味にわずかに開き，口縁端部は大きく肥厚する。胴部はやや開く。	内面頸部下はヘラ削り，他は磨滅のため不明。外面頸部下に上下２段にわたって羽状文状のクシ歯状工具による押し引き施文	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　やや軟調
21	3　土壙	甕	口径　9.5 胴部最大径 12.0	口縁部はゆるやかに開き，胴部の開きはやや大きい。口縁端部は丸みをもつが，わずかに１条の凹線がみられる。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内面から外面肩部にかけては横ナデ，それ以下はヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　良好
22	3　土壙	甕	口径　11.2	口縁部はゆるやかなカーブをもって開き，胴部はやや開く。	内面頸部以下は左右方向へのヘラ削り，口縁部内面から外面肩部まではハケ目の後横ナデ。肩部以下はヘラナデ。	内外面とも淡褐色 胎土　良好 焼成　良好
23	3　土壙	甕	口径　20.4	口縁部は「くの字」状に外反し，胴部の開きは少ない。口縁部の厚みはほぼ均一である。	内面頸部以下の下半は縦方向のヘラ削り，上半は口縁部接合のための粘土の貼り付け後横方向のヘラ削り。口縁部内面から外面肩部までは横ナデ，それ以下はハケ目の後横ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土　やや不良 焼成　良好
24	3　土壙	甕	口径　13.6 胴部最大径 13.2	口縁部の開きは少ないが，胴部の開きがさらに少ないため全体として口縁の開きを大きく感じさせる。	内面頸部以下はヘラ削り後ヘラナデ，口縁部内面はハケ目の後横ナデ。口縁部外面は横ナデ，それ以下はハケ目。	内面　淡褐色 外面　淡黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
25	3　土壙	甕	口径　12.9	口縁部はゆるやかなカーブをもって開き，厚みも均一である。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内面はハケ目の後横ナデ，口縁部外面は横ナデ，それ以下はハケ目の後横ナデ。	内面　淡褐色 外面　黄褐色 胎土　良好 焼成　やや不良

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
26	3　土壙	甕	口径　18.9	口縁部は「くの字」状に外反し，胴部の開きもやや大きい。器壁の厚みは胴部に比して口縁部はかんり肉厚である。口縁部は均一の厚みをもつ。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面及び外面両肩部の施文帯以下は磨滅のため不明。施文は肩部にクシ歯状工具による押し引きが見られる。	内面　淡褐色 外面　黄褐色 胎土　良好 焼成　やや不良
27	3　土壙	甕	口径　18.0	器壁は薄く，口縁端部はわずかに肥厚し２条の凹線をもつ。	内外面とも横ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
28	3　土壙	甕	口径　21.3	口縁部の開きは大きく胴部はほとんど開かない。口縁部に器壁は厚く端部が最も厚い。胴部の器壁は口縁部に比してかなり薄い。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面はハケ目の後横ナデ，外面頸部下にクシ歯状工具による押し引き施文があり，それ以下は縦方向のハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
29	3　土壙	甕	口径　18.6	口縁部は均一に厚みをもって「くの字」状に開く口縁部から胴部へかけて２つの掘曲点をもち，全体として頸部がやや長く感じられる。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部以下は縦方向のハケ目の後ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土　やや不良 焼成　良好
30	3　土壙	甕	口径　21.0	口縁部は「くの字」状に外反し，口縁端部はわずかに上下に肥厚する。	内面頸部以下はヘラ削り，他は横ナデ，外面頸部下に貝殻施文がみられるが，検出部が小さく明確ではない。	内外面とも黄褐色 胎土　やや不良 焼成　やや軟調
31	3　土壙	鉢	口径　9.2 器高　5.1	手づくねの土器で内面には多くの指頭圧痕がある。内湾は少なく，壁は厚手で口縁端部は丸く仕上げている。	内面は指頭押圧後ナデ，外面は縦方向のハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
32	3　土壙	鉢	口径　13.7	内湾気味に直立する胴部は口縁部に至ってわずかに外方に折り曲げている。	内面屈曲部以下はナデ，屈曲部から上方へ約5㎜幅でハケ目がわずかに残り，それから上方及び外面屈曲部までは横なで，それ以下はハケ目。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好
33	3　土壙	鉢	口径　14.0 器高　8.2	内湾の度は強く頸部下ではほぼ直立しながら下方に大きく折り曲げ口縁部としている。端部は平たく仕上げている。	内面頸部以下はヘラ削り後ナデ，口縁部内外面は横ナデ，外面頸部以下はハケ目の後ナデ。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　良好

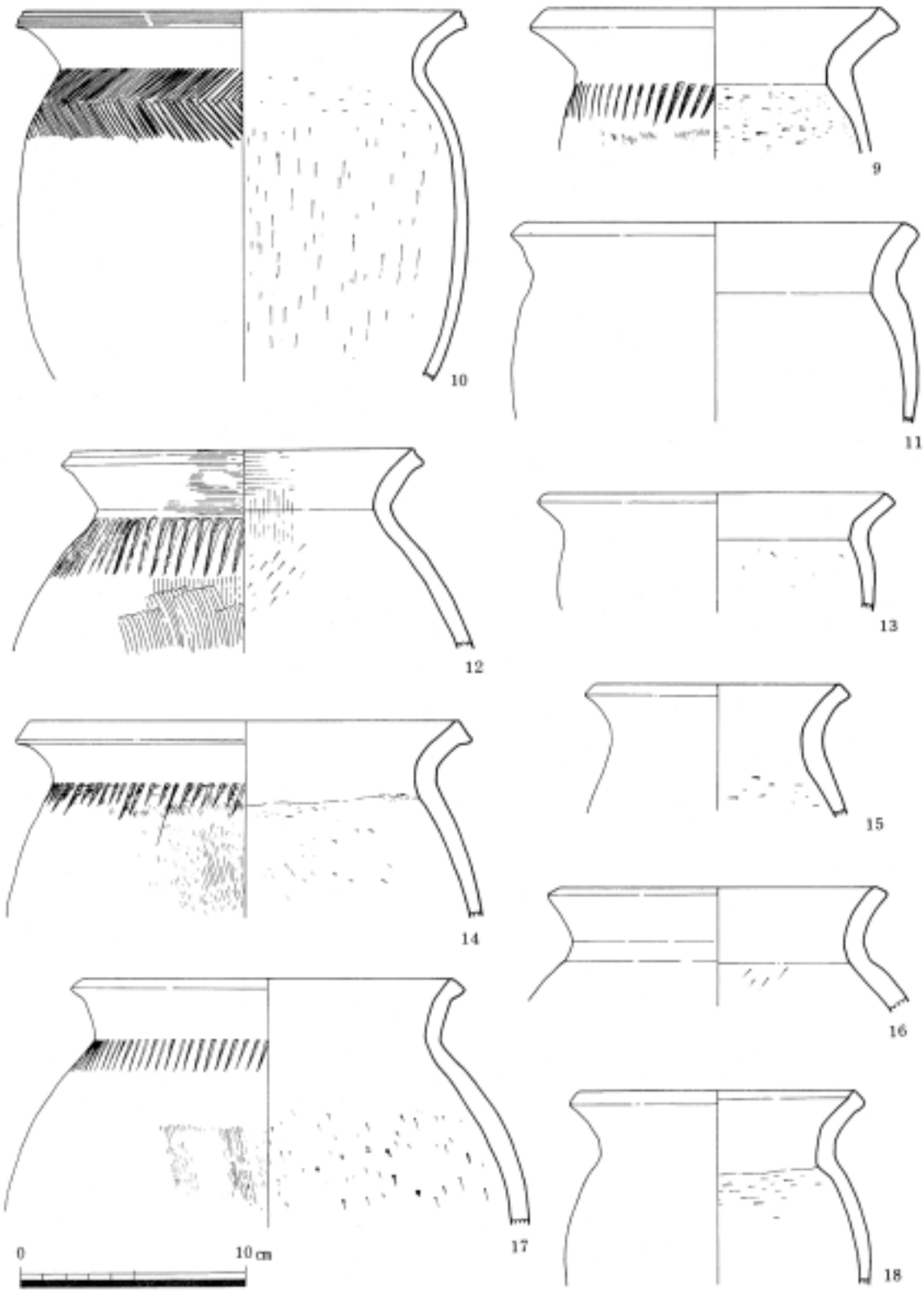
No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
34	3 土壙	鉢	口径 12.0	内湾気味に直立し，口縁部は丸く仕上げている。口縁部内側はわずかに削られている。	内面はほぼナデを行い，口縁端部から約5㎜の幅をもってヘラナデがある。外面は口縁端部から1㎝の幅をもって横方向のハケ目の後ナデ，それ以下は縦方向のハケ目。	内面 淡褐色 外面 淡黄色 胎土 良好 焼成 良好
35	3 土壙	鉢	口径 11.1	内湾気味に直立し，口縁部は平らに仕上げている。口縁部内側はわずかに斜めに仕上げられている。	口縁部内面は横ナデ，それ以下はヘラ削りの後ナデ，外面上半は横ナデ。下半はハケ目の後ナデ。	内外面とも淡黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
36	3 土壙	鉢	口径 10.5	器壁は外上方に向かってほぼまっすぐ伸びる。口縁部は丸く，内側はわずかに斜めに仕上げている。	磨滅が著しく不明。	内外面とも淡褐色 胎土 良好 焼成 軟調
37	3 土壙	鉢	口径 13.7	内湾気味に直立し，口縁部はわずかに外反し，端部は平らに仕上げている。	口縁部内面はハケ目の後ナデ，それ以下はナデ，外面口縁部は縦ナデ，以下はハケ目。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 良好
38	6 土壙	鉢	口径 12.0 器高 7.7 底径 4.5	底部は平底で，内湾気味に直立し，口縁部に至って大きく外反し口縁端部に１条の凹線をもつ。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内外面及び外面肩部までは横ナデ，他は磨滅のため不明。	内外面とも黄褐色 胎土 良好 焼成 軟調
39	5 土壙	甕	口径 12.0	胴部から直立してきた器壁は口縁部に至ってゆるやかなカーブをもってわずかに外反する。口縁端部は平らに仕上げている。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内面及び外面肩部までは横ナデ，以下は磨滅のため不明。	内外面とも褐色 胎土 良好 焼成 軟調
40	10号土壙掘り方上端	甕	口径 11.1 器高 14.3 底径 4.5	底部は平底で胴部は膨みは少ない。口縁部は小さいが「くの字」状に外反している。端部は平らに仕上げている。	内面頸部以下はヘラ削り，他は磨滅が著しく不明。	内外面とも赤褐色 胎土 良好 焼成 軟調
41	10号土壙人骨上部	甕	口径 11.3 器高 17.5 底径 3.3	底部は平底で胴部の膨みは少ない。口縁部は小さく，ゆるやかなカーブをもってわずかに外反する。器壁は底部が厚く，口縁部に至るにしたがって薄くなる。胴部中央には焼成後外側からの穿孔が行われている。	内面頸部以下はヘラ削り，口縁部内面下半に指頭痕が残るが横ナデがみられる。外面肩部までが横ナデ，以下は縦方向ナデ。	内外面とも褐色 胎土 良好 焼成 やや軟調

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器 形 に つ い て	調整，成形について	備　　考
42	弥生墳墓群からの出土であり壷棺である。	壷	口径　17.0 器高　62.2	丸みをもった底部から胴部にかけて大きく脹む。口縁部は二重口縁を呈し，立ち上がり部は短かい。頸部に貼り付いて突帯をめぐらしている。胴部は約1/3が縦に切られ，棺としてかぶせていた。底部は焼成後穿孔されている。	内面頸部以下はハケ目，口縁部内外面は縦ナデ，外面肩部まではハケ目がみられるが，それ以下は磨滅のため不明。二重口縁立ち上がり部の外面上半にクシ歯状工具による４条の波状文がみられ，下半にはヘラによる刺突文が上下２段にみられる。突帯部は斜格子の刻みがみられる。	内外面とも黄褐色 胎土　良好 焼成　軟調
43	弥生墳墓群３号墓	壷	口径　17.0 器高　42.7	丸みをもった底部から胴部にかけて内湾気味に直立する。口縁部はあさがお状に開き端部は平らに仕上げている。	内面頸部以下はヘラ削りの後ナデ，口縁部内外面は横ナデ，外面全体ナデ，口縁端部はヘラにより刻み，肩部にはクシ歯状工具による４条の波状文がみられる。	内外面とも淡黄色 胎土　良好 焼成　良好
44	２０区 ４号墓	鉢	口径　14.6 器高　9.9 底径　4.5	厚手の底部は平底であり，内湾気味に直立する坏部は口縁部に至って外方に向かって急角度に屈曲し，端部はわずかに上方に向かって伸びている。	調整は磨滅が著しく不明。	外面　淡赤褐色 内面　淡黄褐色 胎土　やや不良 焼成　軟調

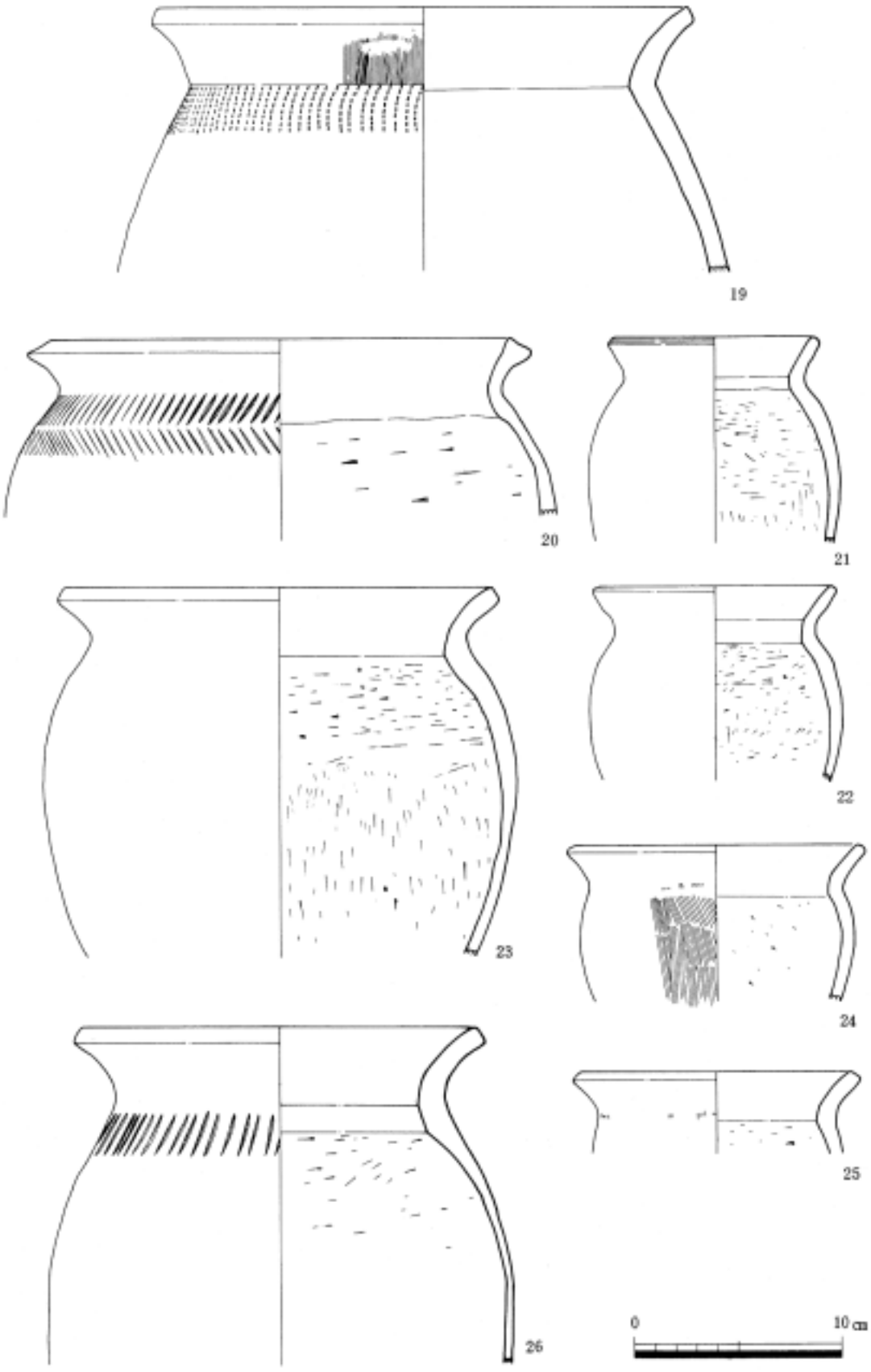
（幸田）



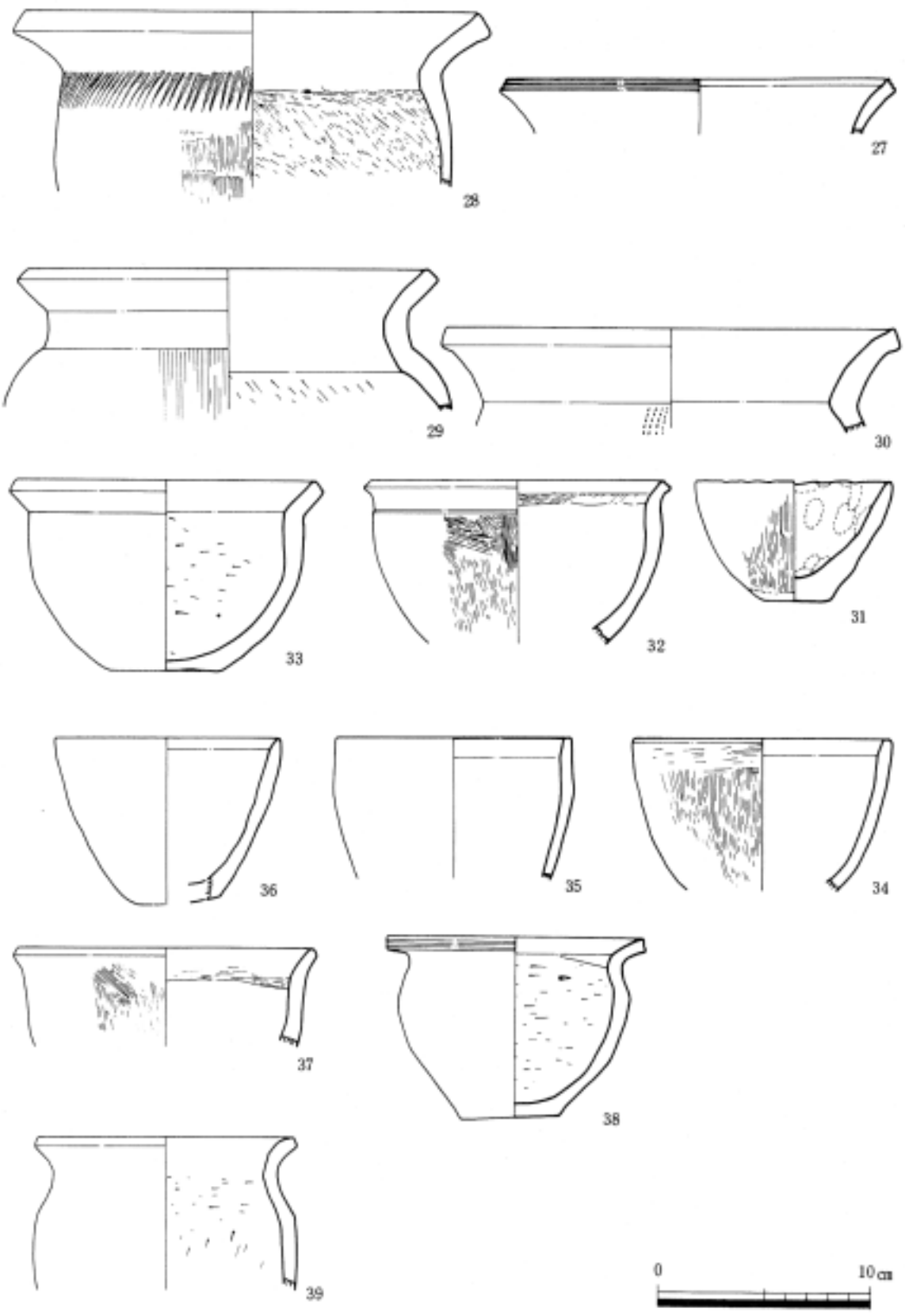
第44図　B地点出土土器実測図（1）



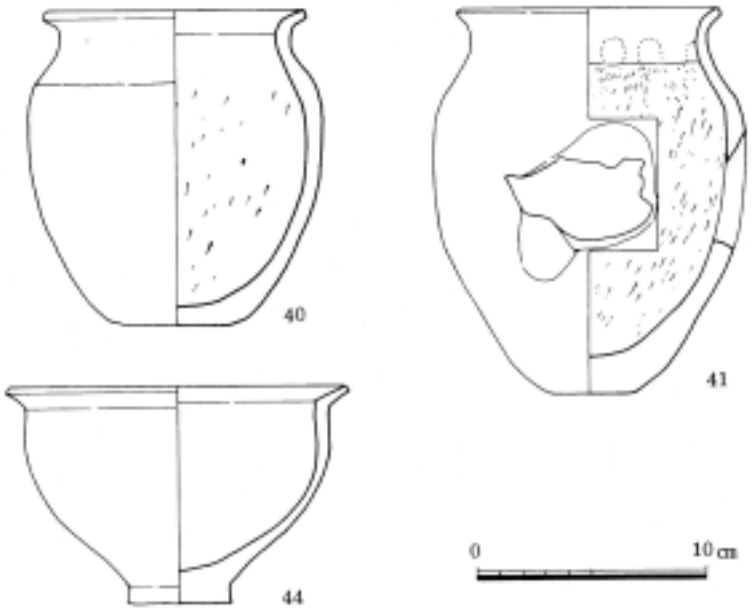
第45図　B地点出土土器実測図（2）



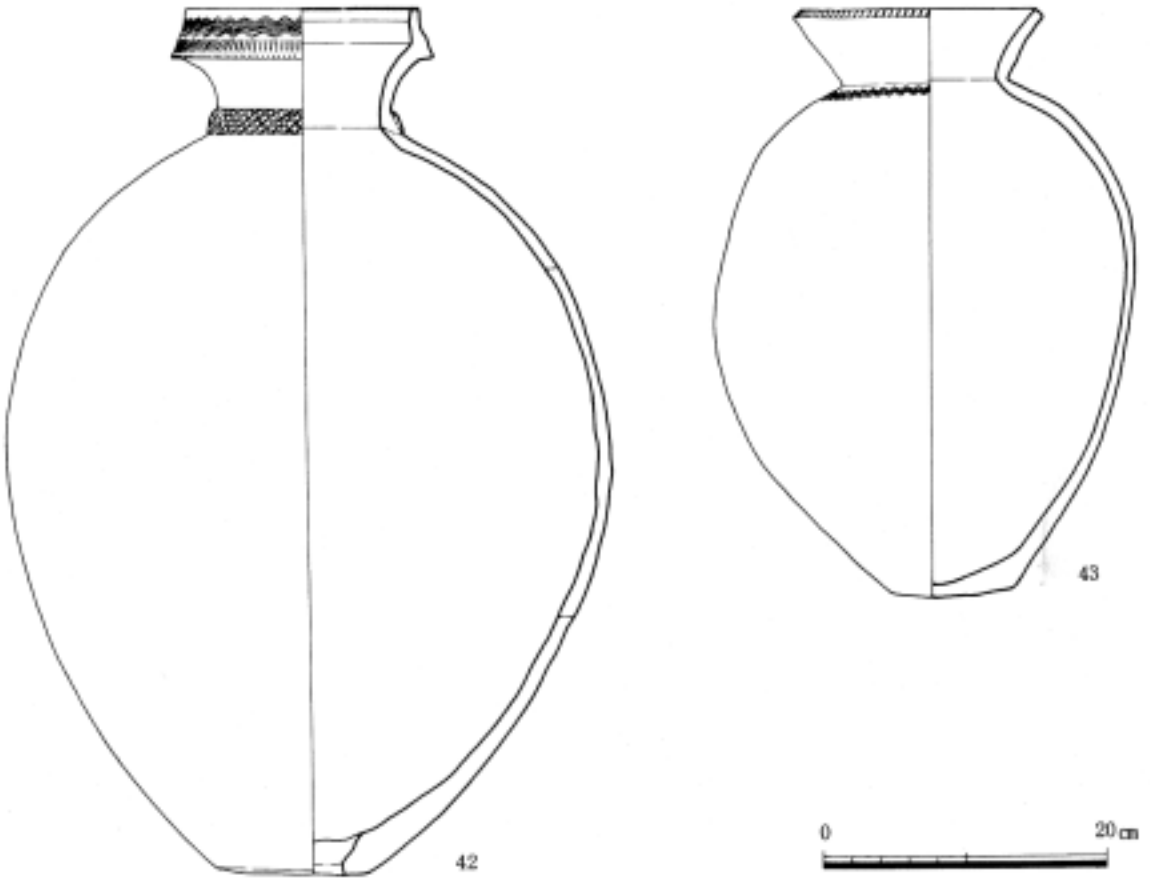
第46図　B地点出土土器実測図（3）



第47図　B地点出土土器実測図（4）



第48図　B地点出土土器実測図（5）



第49図　B地点出土土器実測図（6）

小　　結

本地点からは，これまで述べてきたように，尾根上が畑地として削平をうけていたにもかかわらず，竪穴式住居跡，土壙，墳墓が検出され，弥生時代後期の集落であることが確認された。

住居跡は，第１グループ第１号～３号住居跡，第２グループ第４号住居跡に分けることができよう。両グループ其に，周辺に広い平坦部が展開しているものの検出されたのは既に延べた遺構にすぎない。

このような小集落は，遺跡の両側及び前面に見られる狭小な谷を生産基盤として成立した集落であると考えられ（注1），現在までの調査成果と類似した傾向を示していると言えよう。周辺における同時期と考えられる集落跡は，大井Ｂ地点遺跡，山手Ａ，Ｂ地点遺跡，寺迫遺跡，西山遺跡，北山遺跡があげられるが，これらの集落跡との関連については明らかにすることはできない。しかし，共に諸木川水系に成立した集落跡であることから，何らかの関連は考え得るであろう。本地点検出の集落跡は，このような集落跡群の内の１つの生産単位としてとらえ得る集落であろう。

さて，この集落が営まれた時期については，その手がかりを出土した土器に求められよう。出土した土器の特徴は，次の点があげられる。①「くの字」状の口縁部の端部に2～3条の凹線をめぐらせたもの，②「くの字」状の口縁部の端部を平たくおさめたもの，③内面はヘラ削りを施す。この様な特徴は，上深川Ⅰ類，Ⅱ類に類似しているといえよう。しかし，４号住居出土の土器は，口縁部が薄くなりつつ端部を平たくおさめており，若干新しい傾向を示すところから，１～３号住居に対して，若干新しいと考えられよう。したがって第１グループは，弥生時代後期前半から中葉にかけて営まれ，第２グループは第１グループより若干新しい時期と言えよう。

本地点から検出した墳墓の内，第１地点は，第１グループと第２グループの住居跡の間に位置している。この墳墓群の周辺は平坦面が見られるが，住居跡は検出されなかった。墓域を区画する施設は見られないが，墳墓を意識していた結果である可能性が考えられよう。出土した土器は，第1～3号住居跡内出土の土器と共通の特徴を指摘することができ，第１グループである第１～３号住居に伴う墳墓であると考えられる。埋葬主体の規模は小規模であり，幼小児用の墳墓であると考えられる（注2）。周辺の幼小児用の埋葬の例は，土器を使用した例が多く，本地点の例のように土壙の例は見られない。埋葬施設である土器の使用方法は法則性が見られないが，幼小児の埋葬地点力注居跡の近辺という共通点が指摘きれる。したがって，幼小児の埋葬については，埋葬場所について共通の意識があったことが考えられるが，埋葬施設については，規制ないしは共通の意識がなかったことが考えられよう。

第２地点は，第４号住居に伴う貯蔵穴を転用した墳墓と考えられる。埋土内から出土した骨は，少なくとも３体分の骨が確認されたことから，別の場所で死んだ後に骨だけを集めて埋葬したものと考えられる。しかも，骨を全て集めるのではなく，目だつ部分のみを２度に分けて埋葬したことが出土状態からうかがえる。このような例は太田川下流域では初例であり，本地点独自の埋葬例であるかどうかは，今後の類例の増加を待って検討したい。この墳墓の直近に焼失した第4号住居跡が検出されており，人骨と共に炭化物，灰層が出土していることから，この住居との関連が強いことが考えられよう。

さて，これらの墳墓の営まれた時期にっいては少量であるが，出土した土器によって推定できよう。第１地点出土の土器の特徴は，「くの字」状の口縁部の端部を平たくまとめるという点であり，第２地点出土の土器の特徴は，「くの字」状の口縁部がわずかに薄くなりつつ端部を平たくおさめるという点である。このことから，第２地点は、第1地点より若干新しい時期に営まれたものと考えられよう。したがって，第１地点は弥生時代後期中頃，第２地点は弥生時代後期後半と考えられよう。　　（桧垣）

（注）

１．河瀬正利「歴史のあけぼの」
『高陽町史」1979年

２．高陽町内では次の例が知られる。

⑴ 西願寺山墳墓群Ｂ地点　壷棺１

⑵ 寺迫遺跡　土器棺墓３

⑶ 落合遺跡　壷棺１

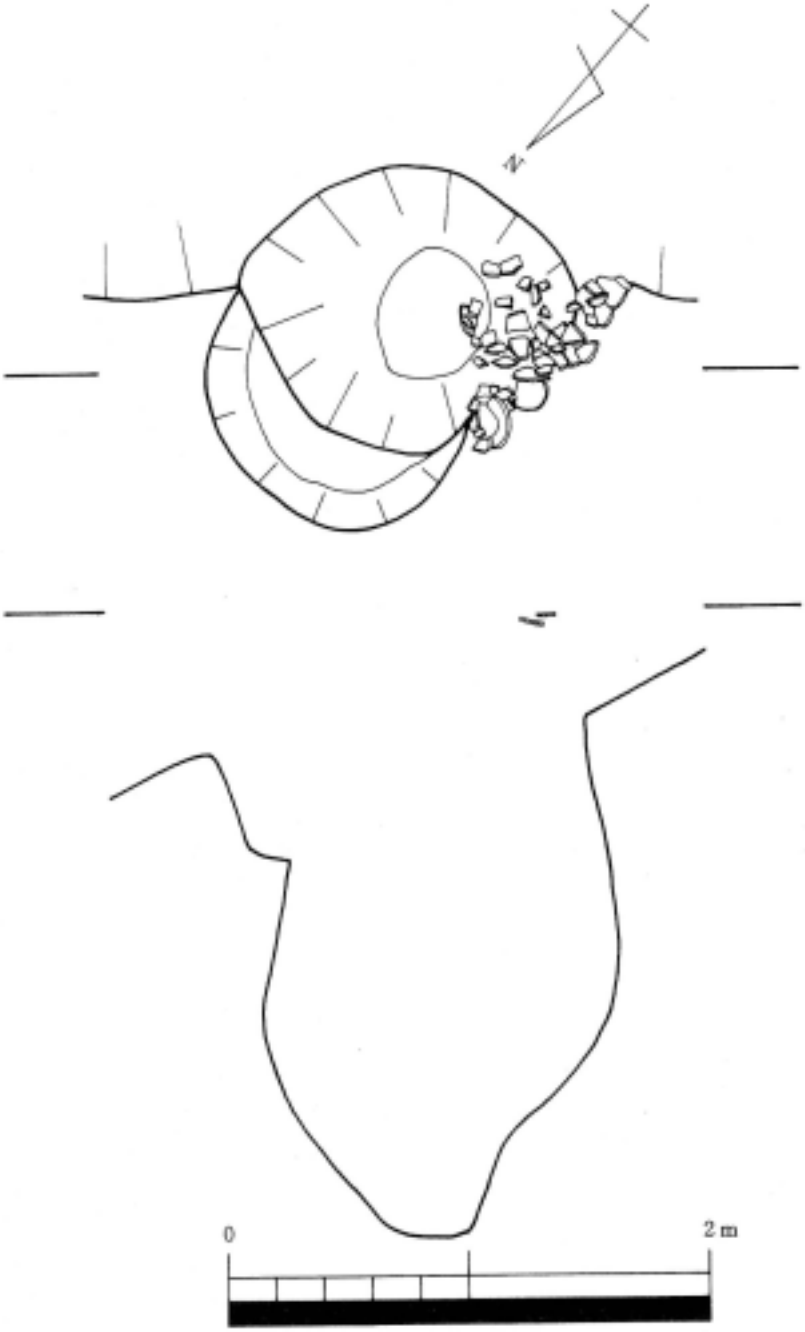
⑷ 末光遺跡Ａ－２地点　土器蓋土壙

Ⅴ　C　地　点　遺　跡

C地点遺跡の概要（第50図）

本地点は，A－1地点の東方約40mの尾根斜面から検出された。土取り工事による崖面から，員層と掘り方の一部が露出していたため発見されたものである。調査の結果，円形の土壙であることが確認された。

遺　　構



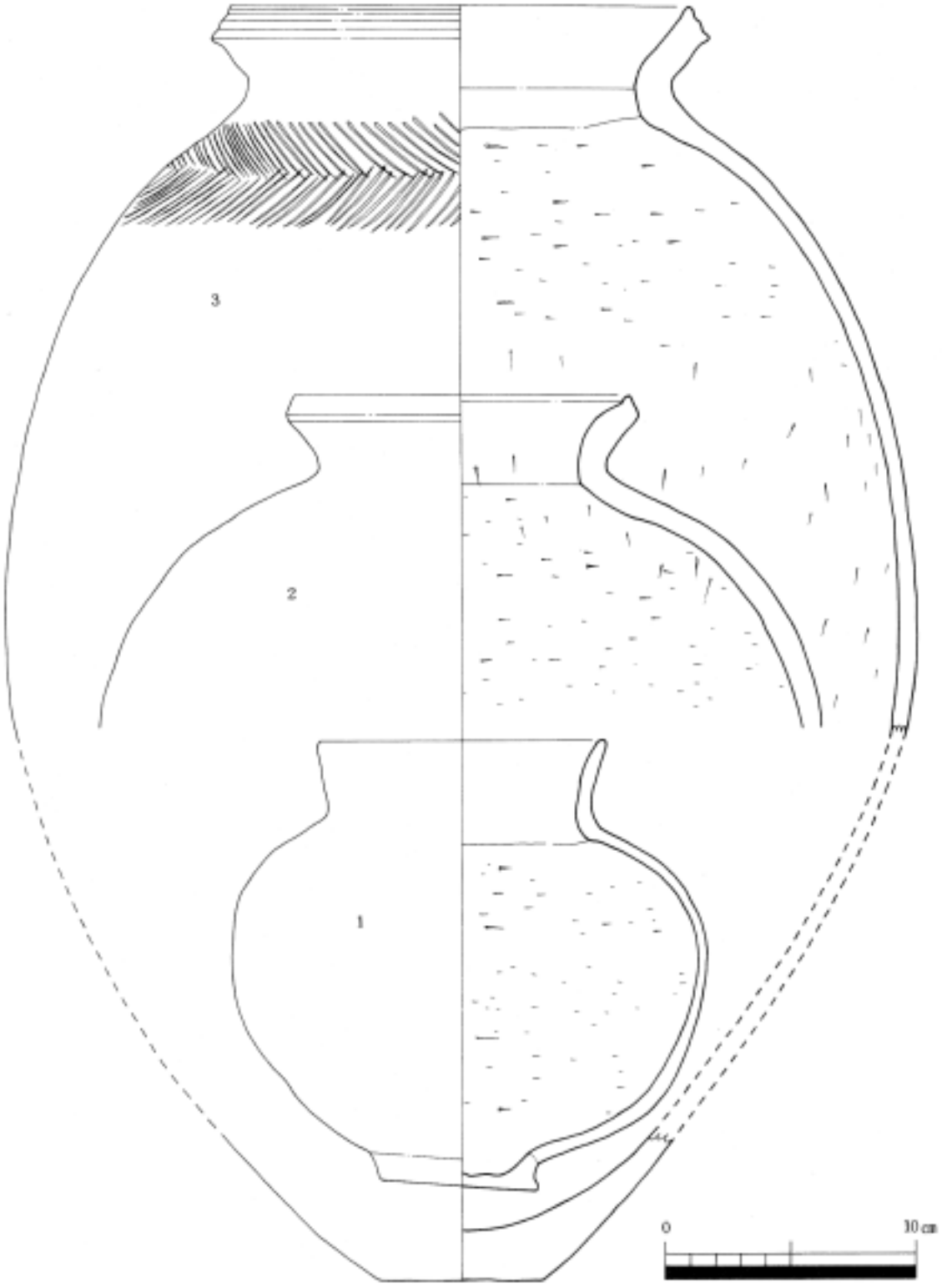
第50図　C地点土壙実測図

本土壙は，地山を口径100㎝（推定），底径30㎝，深さ220㎝に掘り込んでいる。断面は，中央よりやや下部で最大径140㎝を測る長円形を呈している。掘り方の東半分は土取りによって破壊され，北側は，野壷と思われる土壙によって破壊されており，残存状態は良好とはいえない。埋土上面から土器が破片の状態でまとまって出土し，土器の下から少量の貝殻（ハマグリ，カキ），炭化物が出土した。形状から貯蔵穴と考えられるが確認はできない。

出土した土器の内，図示できたのは３点であった（第51図１，２，３）。１はほぼ完形の壷形土器である。口径12㎝，底径6.3㎝，器高17.6㎝～17.2㎝，胴部の上半部で最大径18.8㎝を測る。胴部はやや扁平な球形を呈し，口縁部はやや外反しつつ，器厚をわずかに減じつつ端部は丸くおさめている。底部は貼り付けており，高台状としている。口縁部は内外面とも横ナデ，胴部外面はヘラナデ，内面はヘラ削りの後粗いナデを施している。底部は貼り付け後、接合部の外面は横ナデ，底面はヘラ削りによって仕上げ，内面は棒状工具によって押きえている。内外面とも燈褐色を呈し，胎土，焼成ともに良好である。

２は，壷形土器である。口径13.4㎝を測る。器高は不明である。「くの字」状の口縁部の端部は平たくおさめている。外面は磨滅のため不明であるが，内面は口縁部は横ナデ，頸部屈曲部以下はヘラ削りを施している。内外面とも淡褐色を呈し，胎土は良好であるが，焼成はやや軟弱である。

３は，壷形土器である。口径18.2㎝，底径7.5㎝，推定器高50㎝，胴部中央で最大径36.2㎝を測る。「くの字」状口縁部の端部を上下にわずかに肥厚きせ，浅い２条の凹線をめぐらせている。頸部屈曲部より1.5㎝下部にヘラ状工具による刻みを２条めぐらせている。施文は上段を行った後，下段を施している。口縁部は内外面とも横ナデ，胴部外面は施文部以下はヘラ状工具によるナデを，内面はヘラ削り後粗いナデを施している。内外面とも燈褐色を呈し，胎土，焼成とも良好である。



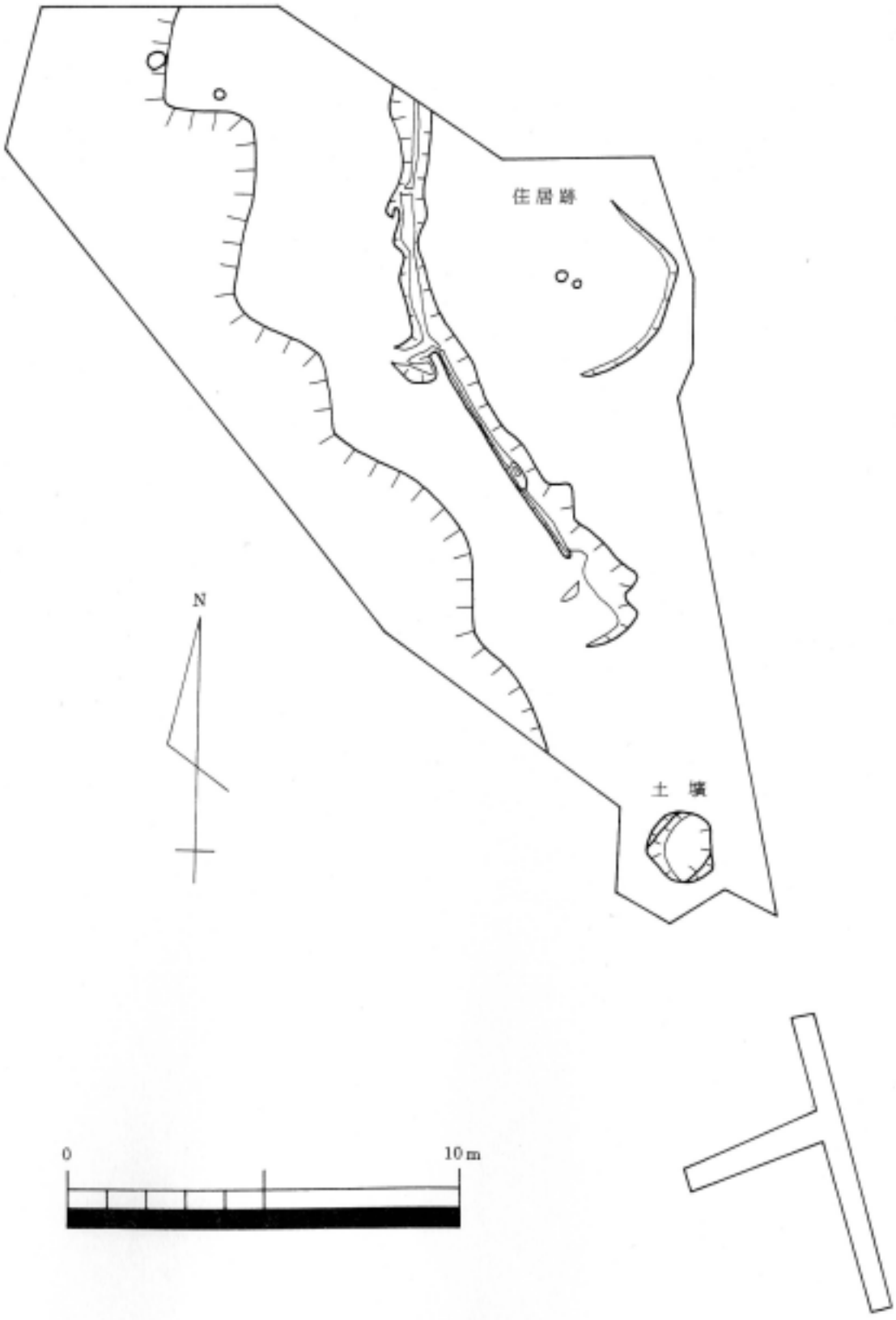
第51図　C地点出土土器実測図

小　　結

本地点は，土壙のみが確認されたため詳細を把握することはできなかった。しかし，土取りによる削平をうける前の地形は，良好な尾根が延びていたと考えられ，この尾根上に住居跡が存在していたことが推定される。したがって，検出した土壙は，この住居に伴う貯蔵穴ではないかと推定きれる。

土壙の使用された時期については，出土した土器を手がかりに求められる。出土した土器の口縁部は「くの字」状の口縁部の端部を平たくし，凹線を施すものと施さないものが見られる。これらの特徴から，上深川Ⅰ，Ⅱ類に類似していることが考えられる。しかし第51図1で図示した土器は器形が球形に近く，口縁部は薄くなりつつ丸くおさめるという若干新しい傾向を示しているようである。したがって，本地点の土壙の使用時期は，弥生時代後期中葉から後半にかけての時期と考えられよう。（桧垣）

Ⅳ　D　地　点　遺　跡



第52図　D地点遺構配置図

D地点遺跡の概要（第52図）

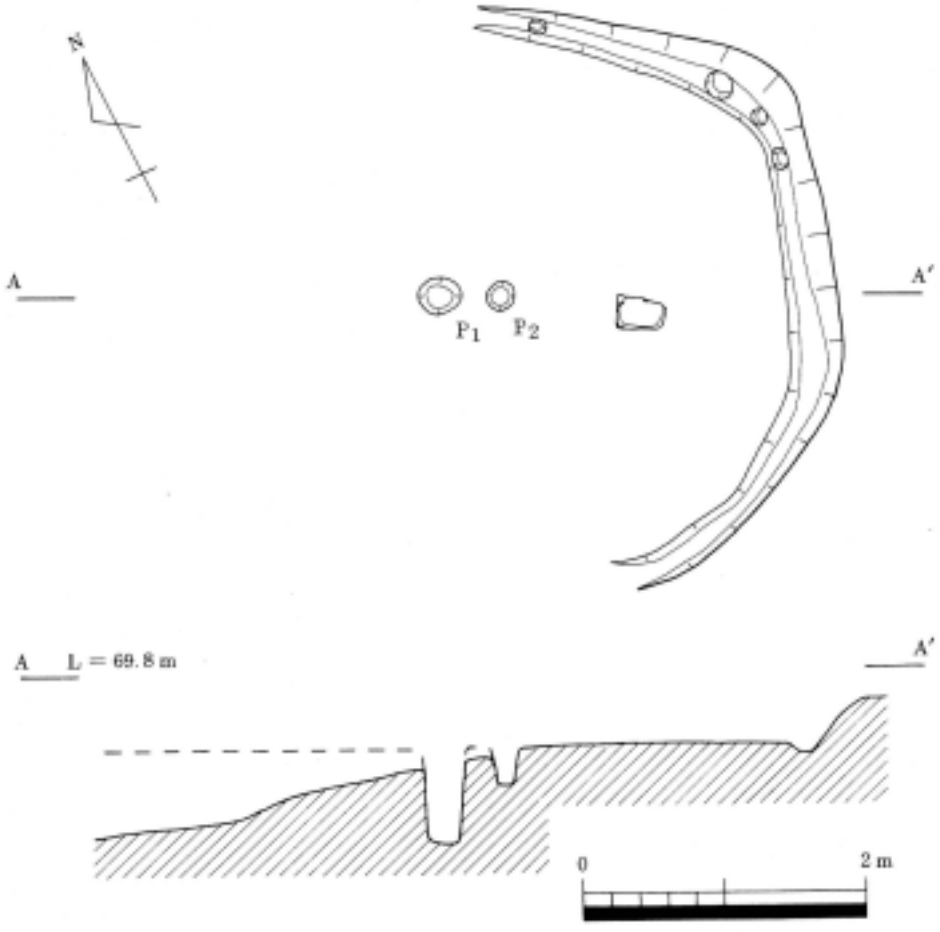
D地点は，A－2地点の約180m西南にあって，北にのびる小丘陵の西斜面に位置している。試掘調査により，住居跡の存在が確認されていたため，調査区を4区設定し，必要に応じて拡張を行ない，最終的には全面排土を実施した。その結果，竪穴式住居跡1基，土壙1基が検出された。

遺　　構

1．住居跡（第53図）

本住居跡は，D地点の東側，標高69.5mを測る小丘陵の西斜面に位置している。この住居跡は，尾根線近くの斜面に立地している関係上，東寄りの半分を最大30㎝ほど掘り込んで床面としており，西寄りの半分は盛土を施し構築したと考えられる。平面プランは，床面が半分程度しか検出されていないため定かではないが，東寄りの壁面から考えた場合，4.2×4.2mほどの隅丸方形に近いプランが想定できる。しかし，後述するP1を中心として考えた場合，4.2×5.6m程度の隅丸長方形に近いプランが想定できることから本住居赫の場合は後者と考えるのが妥当であろう。

柱穴と考えられるピットは2ヶ所あり，P1は残存部で径30㎝，深さ60㎝を測るが，本住居跡が斜面に



第53図　D地点住居跡実測図

位置していることを考え合わせるならば，実際には床面より70㎝程度掘り込んでいたことが想定される。Ｐ2はＰ1の東約30㎝の場所あり，径20㎝，深さ25㎝を測る。Ｐ1，Ｐ2の規模及び位置関係からみて，Ｐ1本住居跡の主柱穴とＰ2はＰ1の副柱穴と考えられる。この住居跡からは上記のピット以外には，柱穴と考えられるピットは検出されておらず，基本的に１本柱で屋根が架けられていたことが予想される。

また，床面の東側には，幅10～25㎝，深さ5～10㎝ほどの壁溝がめぐらされており，壁溝内からは径10㎝，深さ10～15㎝ほどの小ピットが４ヶ所認められた。さらに，Ｐ2のやや北東よりで40×30㎝程度の範囲で不整形の焼土が検出されている。

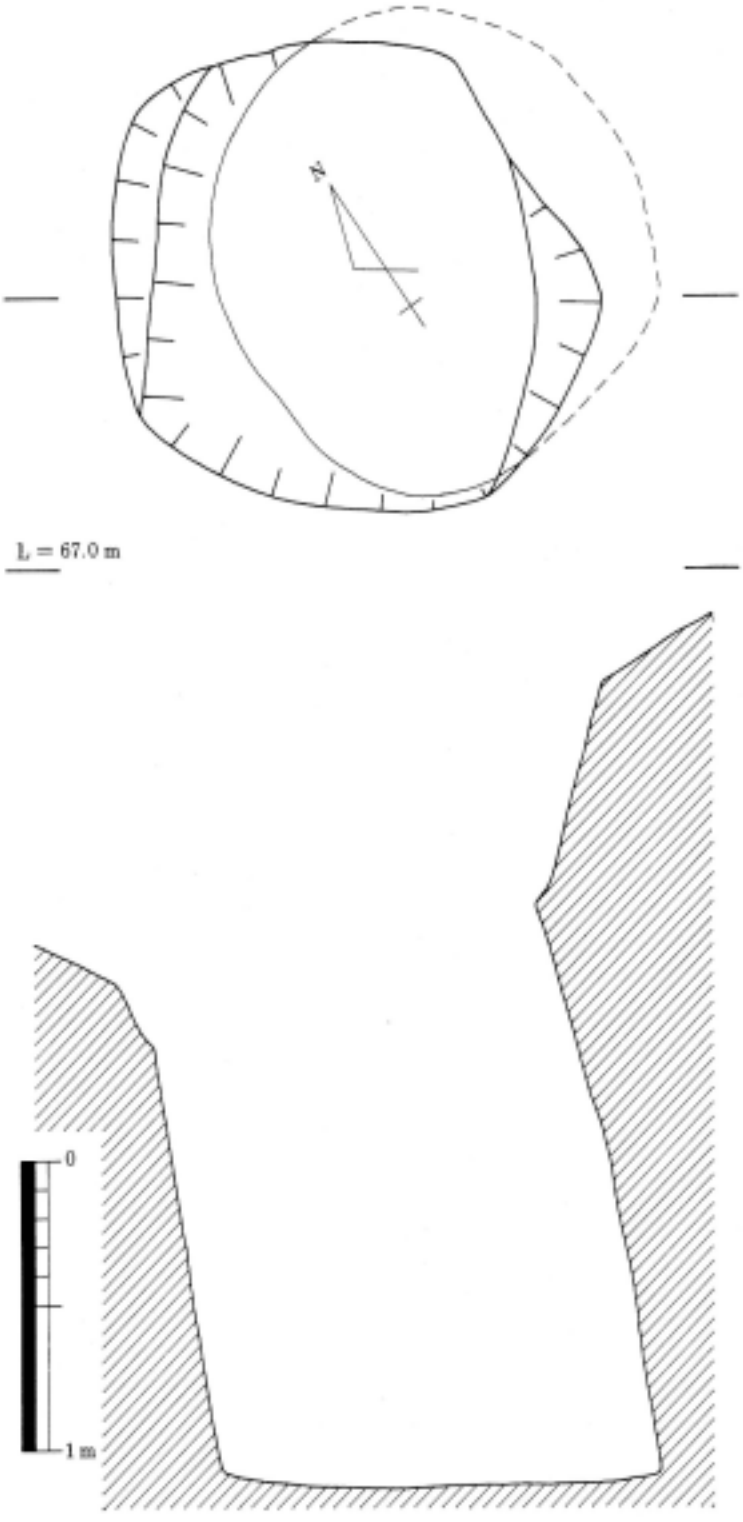
遺物は，土器片が若干検出されたがそのほとんど細片であり器形が判断できるものは１点のみであった。

２．土壙（第54図）

本土壙は，住居跡の北約15ｍの丘陵西斜面に位置している。上縁部は径180×165㎝の不整形を成しており，底部はほぼ平坦で径160×170㎝の円形に近いプランを呈している。深さは斜面に立地している関係上，東側で最大で280㎝を測る大型の土壙である。

また，土壙内より遺物はわずかに検出されたが，いずれも細片であったため器形を判断するには至らず，土壙の営まれた時期については明確にし得なかった。

本土壙と前述した住居跡との関係については，①住居跡の規模が小型～中型の部類に属するのに対し，土壙は大型の部類に属する。②住居跡と土壙の距離が約15ｍと離れすぎている。ことなどから考えて，本土壙は貯蔵穴的な性格を有しているもの



第54図　D地点土壙実測図

の，住居跡とは直接関連はないものと思われる。

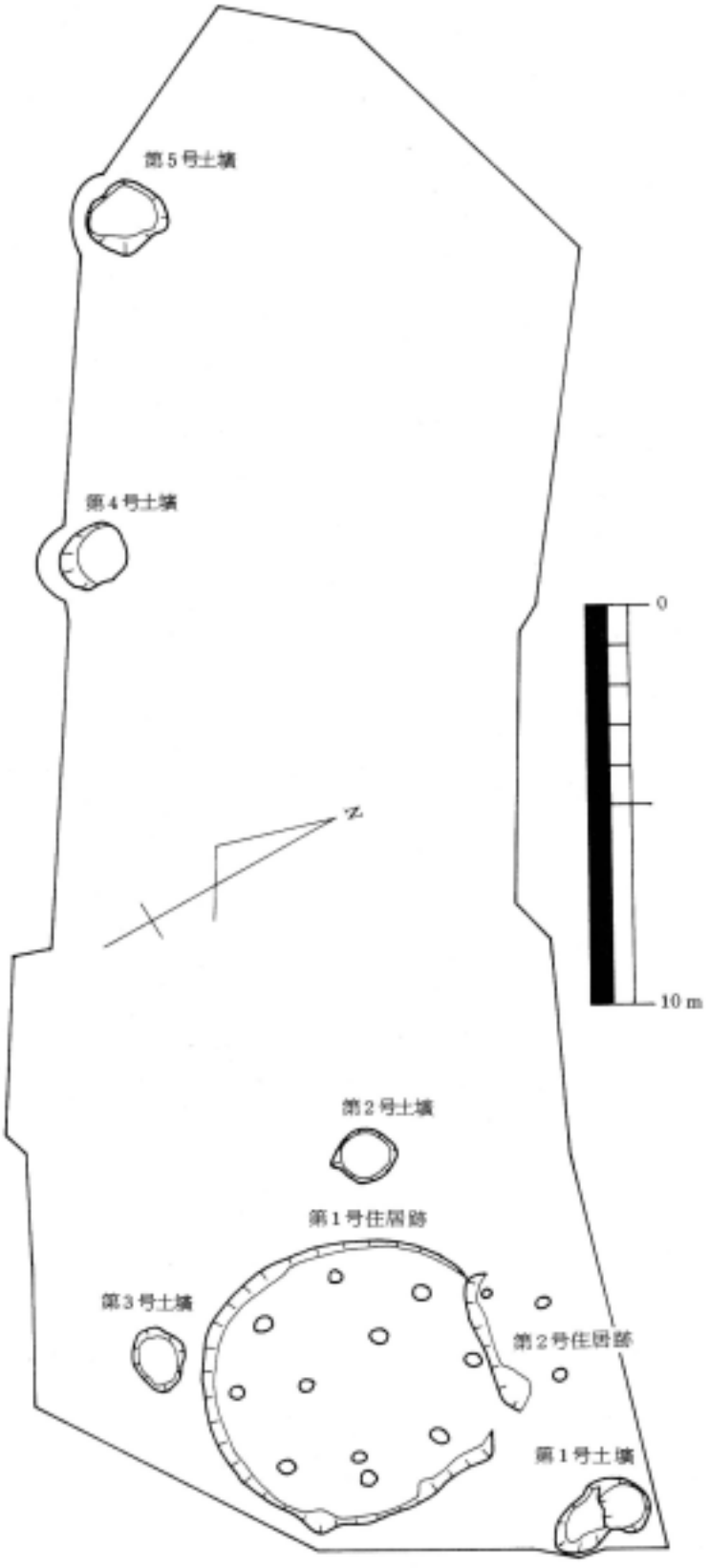
小　　結

D地点遺跡からは，住居跡１基，土壙１基が検出された。このように検出された遺構が少なかった理由としては，D地点遺跡が現存する北に延びる丘陵自体が非常に狭小であり集落が立地するには，悪条件であったことがあげられよう。きらに，D地点遺跡の約15m北は，すでに調査開始以前に土取り工事によって，丘陵の大部分が削平されていた。この場所は，削平前の地形図を観察するかぎりにおいては，D地点遺跡より良好な丘陵が存在していたことが予想され，この地に集落が営れていた可能性もある。そのうえ，D地点の西方約120mの本丘陵と隣接する丘陵の先端部付近には，比較的広い平坦面が認められ，この平坦面からは，住居跡の存在が確認されている。

これらのことから考えて，住居跡等の生活関連遺構は，本地点より立地条件のよい隣接する丘陵の先端部付近ないしは，本丘陵先端部付近を中心に営れたものと考えられる。

さて，本地点の住居跡の営まれた時期については，遺物が皆無に近い状態であったために明確にはし得ない。であるが，住居跡内から検出された甕形土器の破片は，口縁部が「くの字」状に外反し，口縁端部には顕著な肥厚はみられず平坦で凹線がはいらないという弥生時代後期中葉頃の特徴をもっている。また，高陽町域で現在までに検出された住居跡は，弥生時代後期のものがほとんどであり，これは本住居跡の営まれた時期を考える上でわずかにでも傍証になろう。以上のことより，本住居跡の営まれた時期は弥生時代後期，それも立地条件の悪さなどを加味して考えると，後期中葉以降短期間使用されたと考えるのが妥当であろう。

（橋本）



第55図　E地点遺構配置図

Ⅶ　E　地　点　遺　跡

E地点遺跡の概要（第55図）

E地点は，ニヶ城山から北にのびた尾根がその軸線を北西に変えた地点の丘陵上に位置している。試掘調査の成果に基づいて，尾根線を中心に南北に分け，さらに各々４区の調査区を設定し，必要に応じて拡張を行い，最終的には全面排土を実施した。その結果，竪穴式住居跡２基，土壙５基を検出した。

遺　　構

１．第１号住居跡（第56図）

第１号住居跡は，E地点の南東隅近くの尾根線上，標高約65ｍの場所に位置しており，平面形は径7.2～6.8ｍを測る円形に近いプランを呈している。壁高は，南側で最大30㎝を測るが，住居跡の立地の関係上，北側にいくに従ってしだいに低くなり，北側の一部では壁が見られなくなる。床面も北側の一部では盛土を施し構築している。

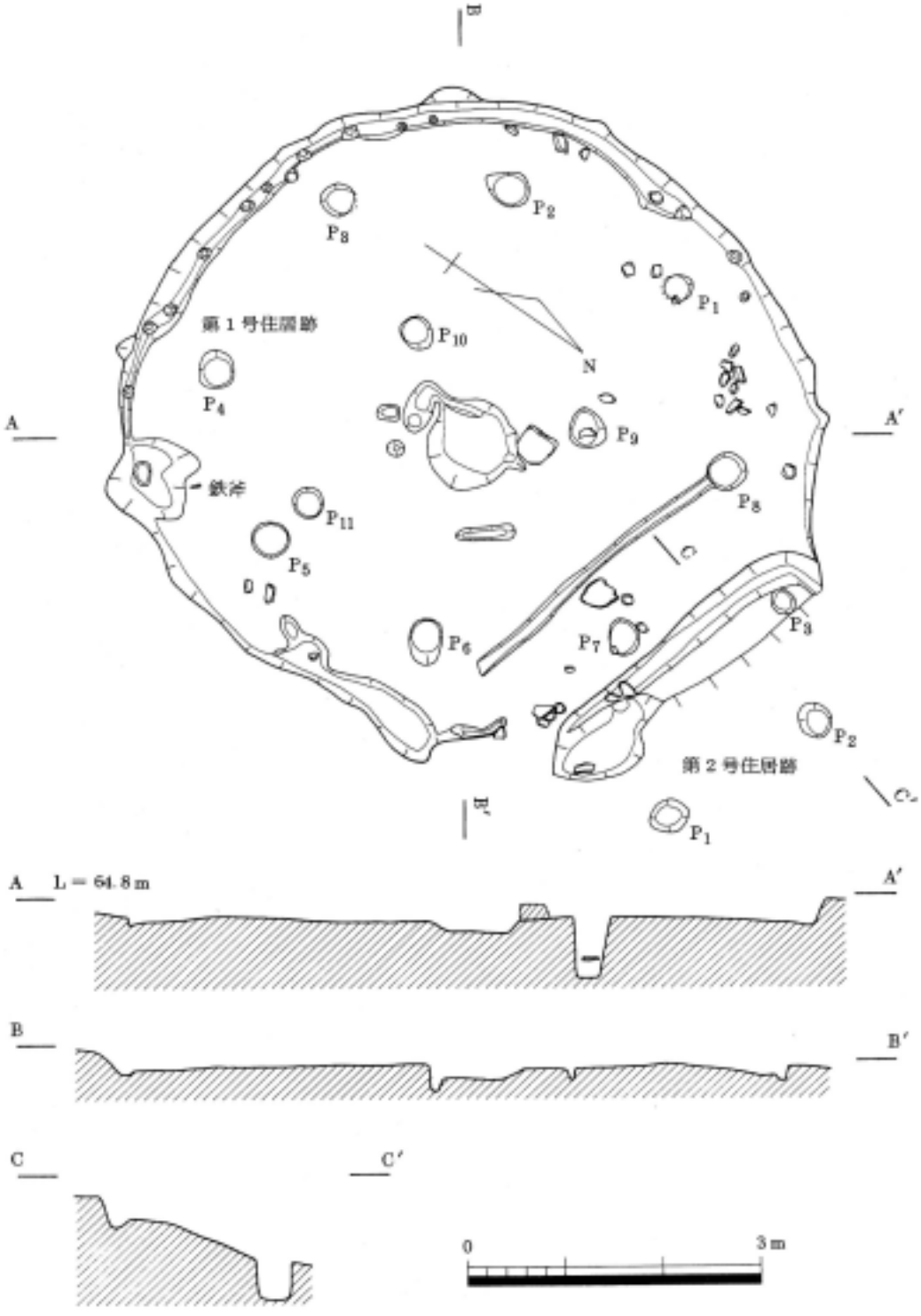
柱穴と考えられるピットは，Ｐ１～Ｐ11の11ヶ所認められ，これらは径30～40㎝，深き50～66㎝を測る。本住居跡は柱穴の位置関係から，２通りの屋根の構造が考えられる。まず，Ｐ１～Ｐ８を主柱とみた場合には，各々隣接する柱穴間が180～220㎝，平均200㎝，壁面からの距離は80～100㎝を測り，それらの柱穴はほぼ円形にめぐらされている。これらのことから，Ｐ１～Ｐ８を主柱とみた場合には，種を放射状に地面まで葺きおろした寄棟造りの屋根を想定できる。また，Ｐl，Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ９・Ｐ10を主柱とみた場合には，Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６をむすぶと200×450㎝の長方形ができ，Ｐ９・Ｐ10はその長方形の長軸上に見られ，Ｐ１－Ｐ２・Ｐ５－Ｐ６・Ｐ９－Ｐ10は各々平行になる。このことから，この６本の柱穴を基本にＰ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ８を加えた計10本柱で構築された可能性が考えられ，棟の方向を東一西方向にもつ切妻造りの屋根が想定可能である。なお，Ｐ11はＰ５の西約20㎝の場所に位置することから考えて，Ｐ５の副柱として使用されたものであろう。上記の二通りの場合のうち，本住居跡は柱穴11本をすべて使用した切妻造りの屋根を架けた可能性が強い。

壁溝は，南側半分と東側の一部に認められた。南側の壁高は，幅10～25㎝，深さ５㎝程度を測るもので，壁溝内には径10～18㎝，深さ10～20㎝ほどの小ピットが14ヶ所みつかった。これは，B地点第４号住居跡の例から考えて，壁溝内に杭をうちこみ，壁面に矢板をたてかけたことを示唆している。東側の壁溝は，幅が最大30㎝深さ15㎝を測る。また，床面の中央部には，径90㎝ほどの範囲で不整形の掘り込みが認められた。ここからは焼土等が検出されなかったが，炉跡の可能性も残っている。

次に，本住居跡の出入口について考えてみると，①Ｐ１～Ｐ３の隣接する柱穴間は平均200㎝を測るが，Ｐ３－Ｐ４間は220㎝を測り，他の柱穴間より若千長い。②このＰ３－Ｐ４間の南よりの壁溝には，小ピットが７ヶ所認められる。これは，壁溝内にある小ピットの半分をしめており，特にこの壁面部分にのみ，堅固な補強が施されていることが感じられる。③床面からは，河原石が多く見つかったが，Ｐ３－Ｐ４の南よりには河原石が皆無であり，床面を踏みかためた痕跡が認められる。④住居跡の南側直下には岩ノ上川が流れ，小河谷を形成しており，この方向を意識したことは十分考えられる。以上の点からＰ３－Ｐ４間の南側に出入口が存在した可能性が強い。

なお，床面の北寄りから幅約10㎝，深さ5㎝，長さ320㎝を測る一直線状の溝がみつかっており，これは，後述する第2号住居跡に伴なうものと考えられる。

遺物は，若干量の土器片と鉄器数片を検出した。



第56図　E地点第1・2号住居跡

２．第２号住居跡（第 57 図）

第２号住居跡は，第１号住居跡の北側の一部と切り合った形で検出された。本住居跡は，傾斜面に立地している関係上，壁面は南側の一部しか認められず，壁高は最大で 35 ㎝を測る。平面プランは，床面のほとんどが盛土によって構築されているため定かではないが，南側の壁面及びＰ１，Ｐ２の位置関係から考えた場合，一辺 3.6 ｍほどの隅丸方形に近いプランが想定できる。

柱穴と考えられるピットは，３ヶ所みられ，Ｐ１－Ｐ２は径 40 ㎝，現存する深さは 40 ～ 50 ㎝を測る。しかしながら，斜面に立地していることを考えると，Ｐ１，Ｐ２は，築造当時約 70 ㎝掘り込んでいたことが想定できる。Ｐ３は住居跡の南西隅にあり，径約 30 ㎝，深さ 55 ㎝を測る。これらのことより，Ｐ１，Ｐ２は規模，位置関係より考えて主柱と想定され，本住居跡は基本的に２本柱で構築されていたものと推測される。Ｐ３は，'その位置関係，規模等から副柱として使用されたと考えるのが妥当であろう。

壁溝は南側にしか認められず，遺残する壁溝は，幅 10 ～ 20 ㎝，深さ約 10 ㎝を測る。また，床面の南東隅より，径 100 × 50 ㎝，深さ 30 ㎝程度の不整形の堀り込みが検出されたが，焼土等の検出はなく，その性格は不明である。

遺物は，わずかに検出されたが，器形を判断しうるものは，１点のみであった。

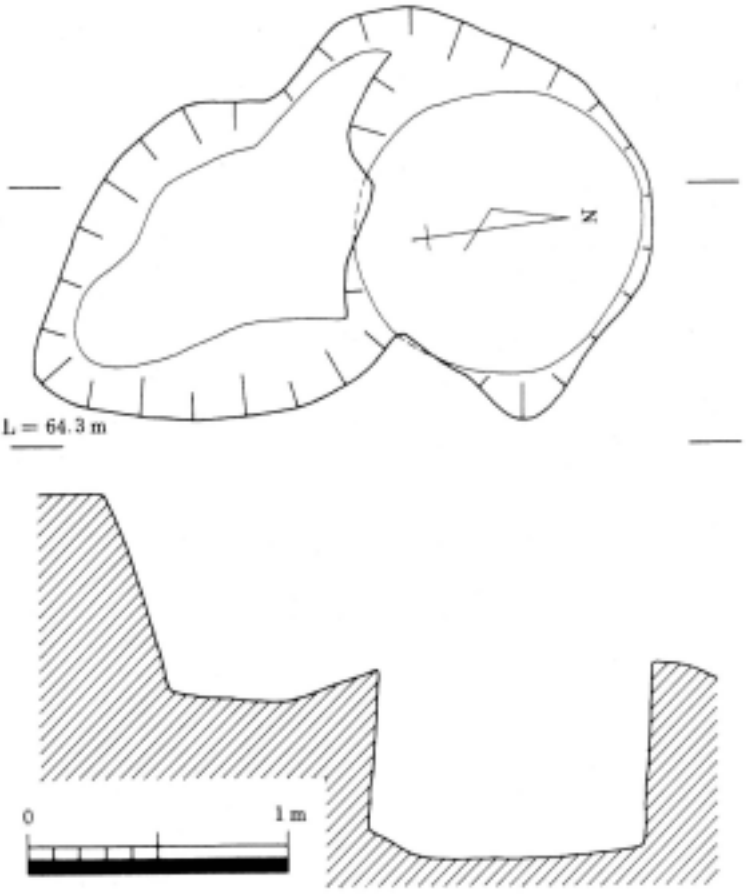
なお，前述したように，第１号住居跡の床面北寄りからは溝が検出されたが，これは第２号住居跡と平行しており，多分に本住居跡を意識したかのような造り方をしている。さらに，第２号住居跡が斜面に位置していることを加味して考えると，尾根線あたりからの水や土砂の流入を防ぐために何らかの方策が図られていた可能性も考えられよう。

３．第１号土壙

（第 58 図）

第１号土壙は，第２号住居跡の東約 2.5 ｍの斜面にあって，２基の土壙が重複している。この重複している２基の土壙の正確な規模は定かではないが，北側の土壌の上縁部は，径 150 × 120 ㎝の不整形で，底部は若干の丸みをもち，径 105 ㎝の円形を成し，深さは最大 70 ㎝を測る。この北側の土壙はその形状，レベル等から考えて，第２号住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

また，南側の土壙については，上縁部径 150 × 120 ㎝，底部径 100 × 60 ㎝，深さ 70 ㎝を測るものである



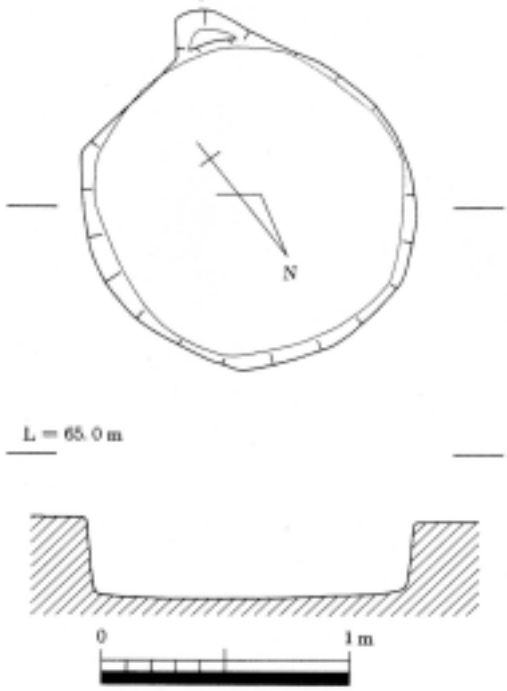
第 57 図　Ｅ地点第１号土壙実測図

が，形状が非常にいびつであり，土器等の検出もみられないため，貯蔵穴的な性格はないと思われる。

４．第２号土壙（第 58 図）

第１号住居跡の西約 1.5 ｍの場所から検出されたこの土壙は，上縁部径 135 ㎝，底部はわずかに丸みをもち，径 125 × 130 ㎝のほぼ円形のプランを有し，深さは最大で 35 ㎝を測る。なお，その位置関係よりみて，本土壙は第１号住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

遺物は，若干量の土器片を出土したが，そのすべてが細片であるため器形を判断するに至らなかった。

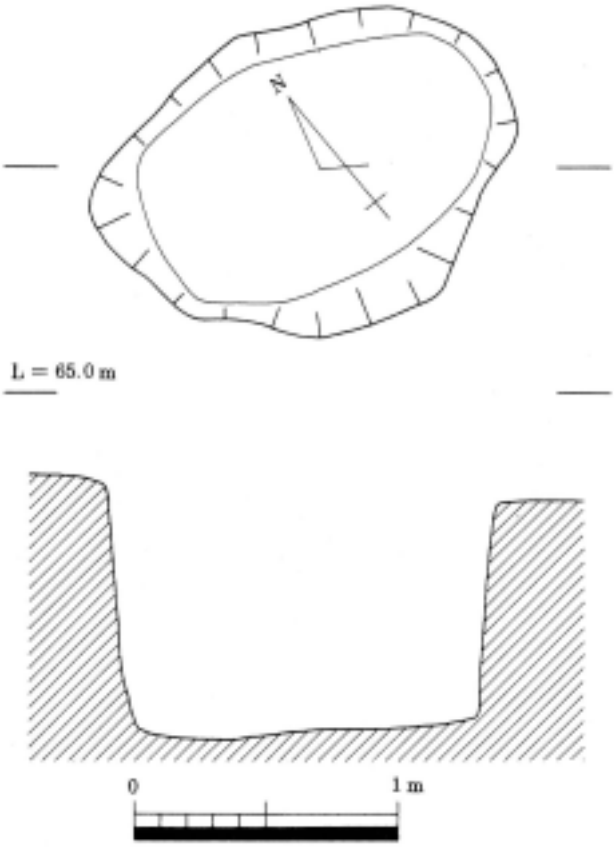


第 58 図　E 地点第２号土壙実測図

５．第３号土壙（第 59 図）

第３号土壙は，第１号住居跡の南約１ｍの場所から検出されたもので，上縁部のプランは不整形で径 165 × 120 ㎝を測る。底部はわずかに丸みをもち，径 140 × 90 ㎝の長円形のプランを有し，深さは約 100 ㎝を測る。本土壙は，その位置関係からみて，第１号住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

遺物は，土器片を数片検出したが，いずれも細片であるため器形を判断するに至らなかった。



第 59 図　E 地点第３号土壙実測図

６．第４号土壙（第 60 図）

第３号土壙の西約 18 ｍの斜面から検出されたもので，上縁部のプランは不整形で径 175 × 140 ㎝，底部はわずかに丸みをもち，径 140 × 120 ㎝の長円形のプランを有し，深さは最大で 105 ㎝を測る。

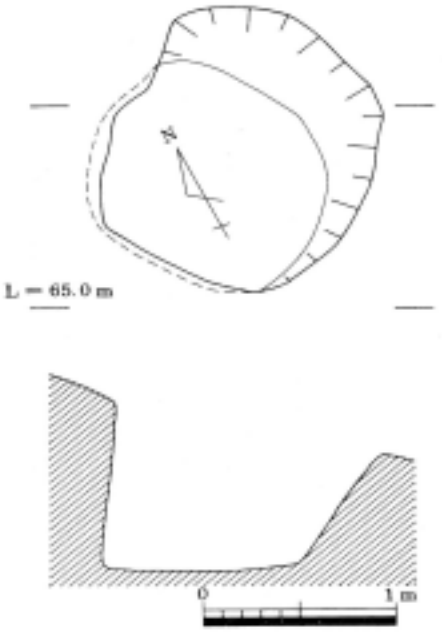
なお，土壙内より遺物は検出されなかった。

７．第５号土壙

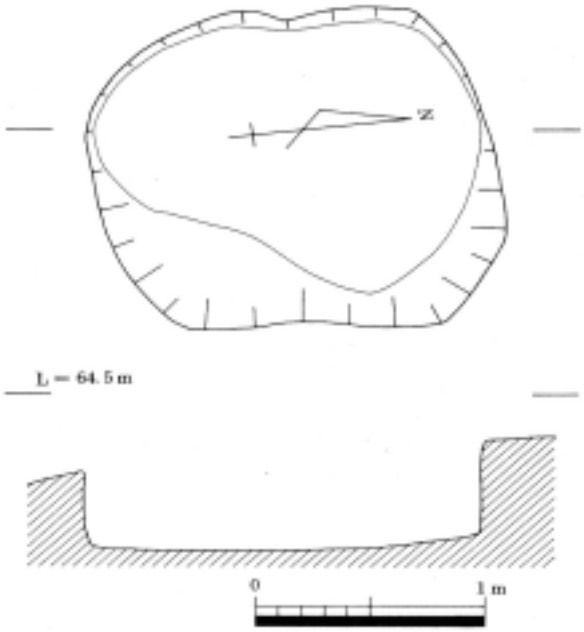
第５号土壙は，第４号土壙の北西約７ｍの傾斜面から検出されたもので，平面形は不整形のプランを有している。上縁部は，径 175

× 155㎝，底部はわずかに丸みをもち，径165 ×
135㎝，深さは最大で50㎝を測る。

なお，土壙内より遺物は検出されなかった。



第60図　E地点第４号土壙



第61図　E地点第５号土壙実測図

遺　　物

E地点からは，若干量の土器片がみつかった。このうち，図示できるものは13点であり，その詳細は，表のとおりである。また，第１号住居跡より，鉄器２点が検出された。

１．鉄器１（第62図）

鉄器１は，全長7.7㎝，刃部最大幅3.8㎝，袋部最大幅3.7㎝を測る有袋鉄斧である。形状は，厚さ４㎜程度の鉄板を両端から折り曲げた楕円形の袋部を持っている。刃部は，鋭利に仕上げられているが，使用が頻繁であったためか，片減りが認められる。また，袋部の内面から上部にかけて木質が残存している。そのうえ、袋部外面にも木質が残存しており，袋部の表面に樹皮状のものを巻きしめた痕跡が認められる。

２．鉄器２（第63図）

鉄器２は，現存部の長さ4.45㎝，身部幅1.8㎝，身部厚さ0.35㎝を測る鉄鏃の身部から茎部にかけての残片である。また，身部の断面は菱形を呈しており，身部には明瞭な鎬が認められる。さらに，関部には造りだしが見られる。なお，この鉄鏃は大村直氏の分類によれば，柳葉式の一種と規定されており，そのうち(注)の乙類と考えられるものである。

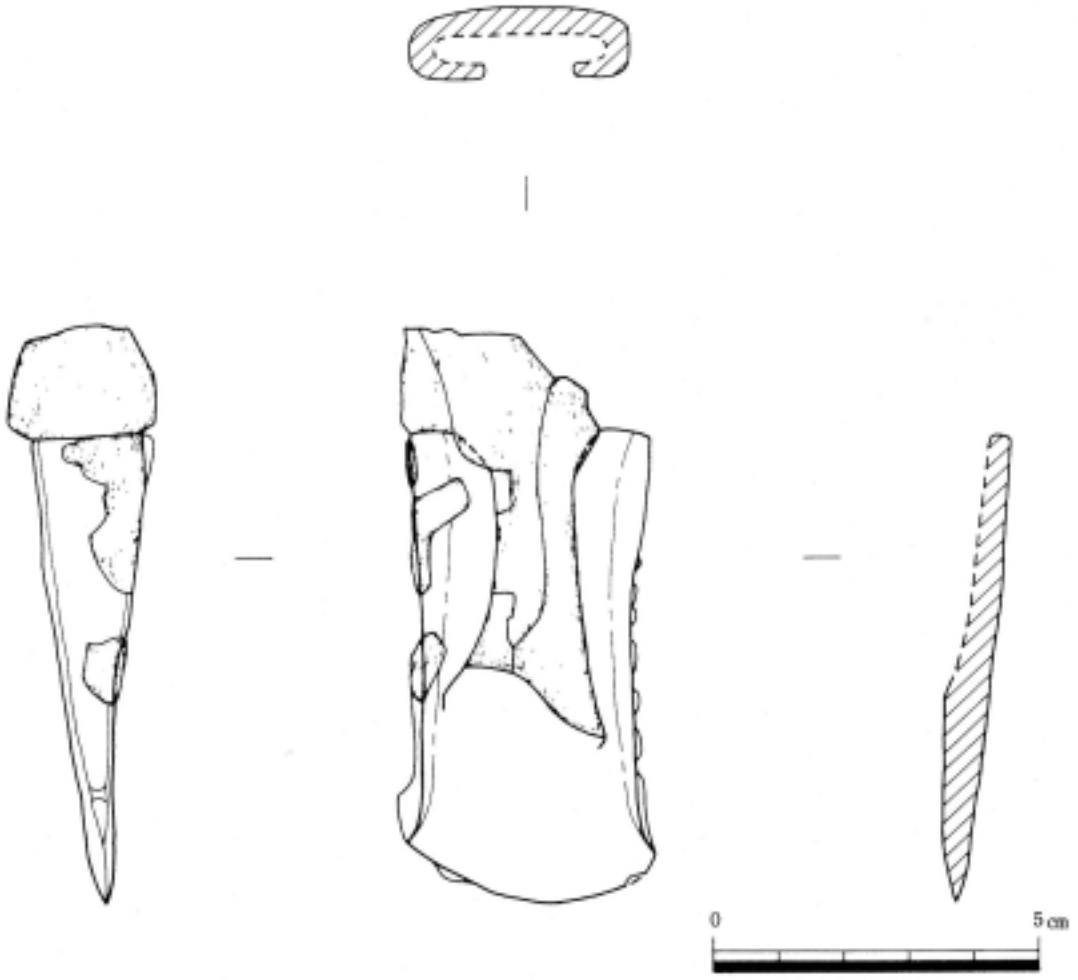
（注）大村直「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』1983.12

E地点　出土土器観察表

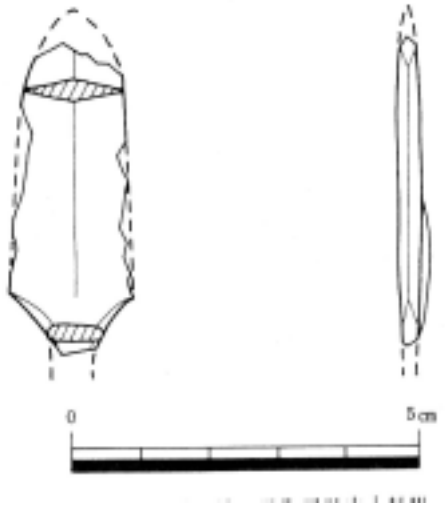
表4

No.	出土位置	器種	法量（cm）	器形について	調整，成形について	備考
1	1　住	鉢	口径　10.4 器高　7.3 底径　2.0	口縁部は「くの字」状に外反し，端部は丸くおさめている。	胴部外面はヘラ磨き，脚台部は指でつまんで整形しナデ調整，その後内面も含め全体に化粧土を付け，ナデを施している。頸部直下にはクシ歯状工具による刺突文がめぐらされている。	内外面　明黄褐色 胎土　若干砂粒を含むが良好 焼成　良好
2	1　住	鉢	口径　11.6 器高　9.8 底径　3.5	口縁部はやや内湾し，端部は丸くおさめている。底部は平底である。	内外面ともヘラ磨きの後，ナデ調整を施している。	内外面　明黄褐色 胎土　石英，長石を含む 焼成　やや軟調 外面にスス付着
3	1　住	壷	口径　12.2 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部はやや丸みを帯びながらも平たくおさめている。	外面から口縁部内面にかけえ横ナデ，外面頸部以下はハケ目調整，内面胴部以下はヘラ削りを施している。	内外面　黄褐色 胎土　1㎜大の砂粒を含む 胴部下半にスス付着
4	1　住	鉢	口径　12.7 器高　不明	ゆるく外反する口縁部をもち，端部は器厚を保ちつつ丸くおさめている。	外面は磨滅が著しいが，胴部はナデ調整を施している。口縁部内面は横ナデ，頸部以下はヘラ削り。	外面　淡黄褐色 内面　黄褐色 胎土　3㎜大の石英砂粒を含む 焼成　良好
5	1　住	鉢	口径　15.2	口縁部はやや内湾し，端部は丸くおさめている。	外面はタテ方向のハケ目調整，内面はヘラ削り後ナデ調整を施している。	外面　淡赤褐色 内面　黒褐色 胎土　若干砂粒を含むが良好 焼成　良好
6	1　住	壷	口径　13.8 器高　不明	外反する口縁端部は内側上方へ強く折り曲げ複合口縁とし，端部は丸くおさめている。	外面口縁部下方はタテ方向ヘラ削り，内面口縁部下方はヘラ磨きを施した後，全体をナデ調整口縁部上方に３～４条のクシ目の波状文が見られる。また，頸部には凸帯が認められる。	内外面　黄褐色 胎土　大粒の石英長石粒を含む 焼成　良好
7	1　住	壷	口径　22.7 器高　不明	口縁端部は肥厚は見られず平たくおさめている。	外面口縁端部付近は，横方向のハケ目調整，以下はタテ方向のハケ目調整の後，外面はナデ調整，内面は横方向のナデ調整を施している。	内外面　淡黄褐色 胎土　小砂粒を含む 焼成　良好

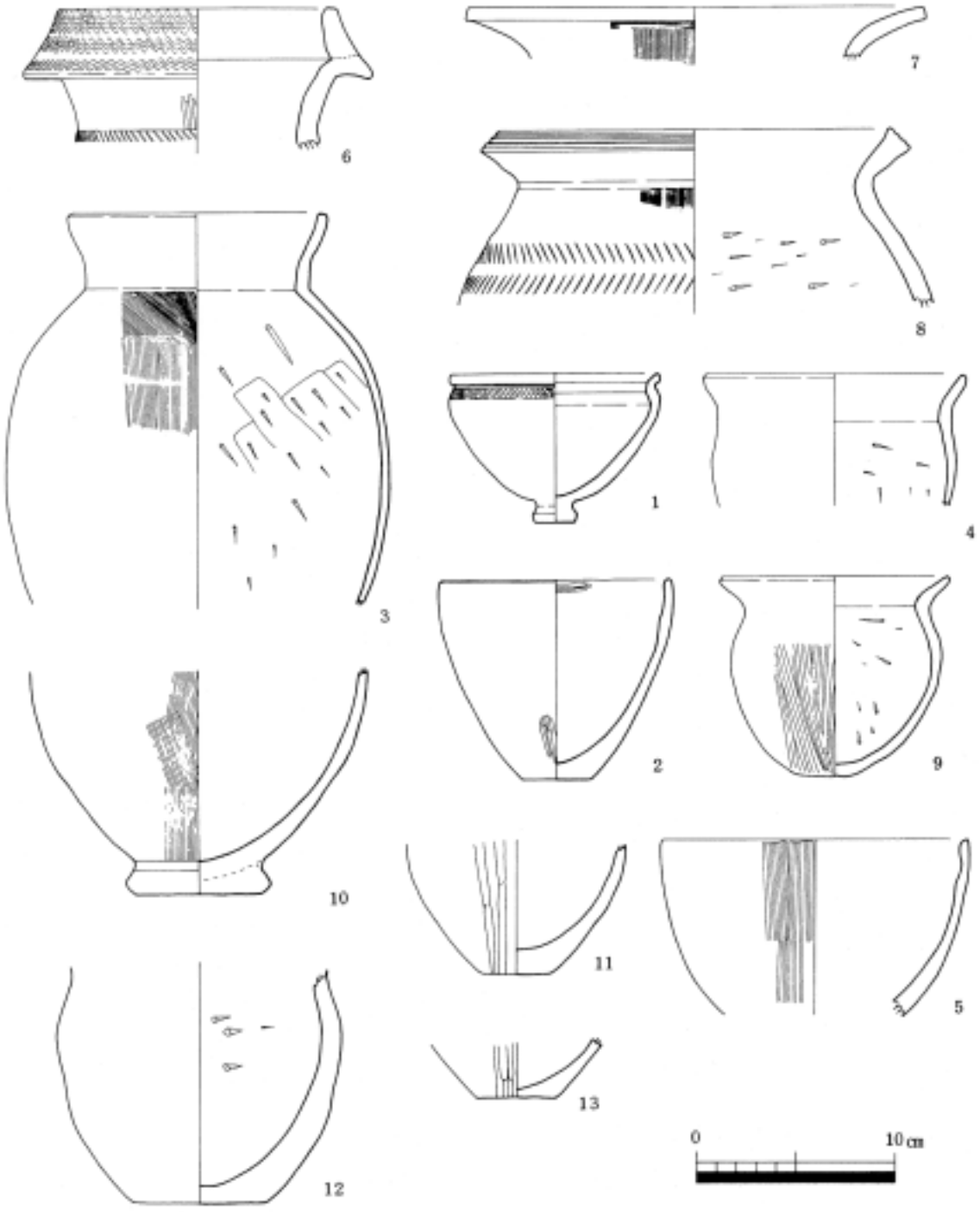
No.	出土位置	器種	法量（cm）	器 形 に つ い て	調整，成形について	備　　考
8	2　　住	壷	口径　19.5 器高　不明	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部に３条の凹線がみられる。	外面頸部以下はタテ方向のハケ目調整の後ナデ調整，口縁部は内外面とも横ナデ，内面頸部以下は横方向のヘラ削りを行っている。頸部直下にはヘラ状工具により刻みが施されている。	外面　淡黄褐色 内面　淡赤褐色 胎土　大粒の石英，長石砂粒を含む
9	1　　住	壷	口径　11.2 器高　9.9	「くの字」状に外反する口縁部をもち，端部は丸くおさめている。	外面は磨滅が著しいため定かではないが，胴部はハケ目調整，内面口縁部はハケ目調整の後ナデ，以下はヘラ削りを施している。	外面　黄褐色 内面　赤褐色 胎土　4～5㎜大の砂粒を含む 焼成　軟調 外面に黒斑が見られる。
10	1　　住	鉢？	底径　6.3	平底の底部としている。	外面はクシ歯状工具で縦方向の調整の後ナデを行っている。底部には接合時の痕跡が認められる。	内外面　黄褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　良好
11	1　　住	不明	底径　3.5	平底の底部としている。	外面はヘラ削りの後，ヘラナデ，内面はヘラ削りを施している。	内外面　赤褐色 胎土　大粒の砂粒を含む 焼成　良好 外面にスス付着
12	1　　住	不明	底径　6.7	平底の底部としている。	外面はナデ，内面は横方向のヘラ削り後ナデを施している。	内外面　赤褐色 胎土　大粒の石英砂粒を含む。 焼成　良好
13	1　　住	不明	底径　4.0	底部はやや凹底を呈する。	外面はヘラ削り後ナデを施している。	外面　灰褐色 内面　淡黄褐色 胎土　長石砂粒を含む 焼成　良好



第62図　E地点第１号住居跡出土鉄斧



第63図　E地点第１号住居跡出土鉄鏃



第64図　E地点出土土器実測図

小　　結

E地点からは，住居跡２基，土壙５基が検出きれた。第１号住居跡と第２号住居跡の築造順位は，第２号住居跡南壁付近の第１号住居跡床面同一レペルから土器が検出されており，第１号住居跡のＰ7付近から出土した土器と接合可能であった。このことより考えて，第２号住居跡が廃棄された後に，第１号住居跡が営まれたことがわかる。

次に，この２基の住居跡の営まれた時期について考えてみたい。第１号住居跡から出土した甕形土器の口縁部には肥厚が見られず，平坦なものと端部がわずかに丸みをもつものが認められる。また，壷形土器は，口縁部の上方を内に折り曲げた施文部に波状文をつけ，頸部に貼り付け凸帯をもつという特徴をもっている。これらの土器の特徴は，弥生時代後期中葉から後半にかけてのものと思われる。さらに，第１号住居跡から検出された鉄鏃は，兵庫県奈カリ与遺跡のものと身部の断面が菱形である点，明瞭な縞が認められる点，関部には造りだしが見られる点で，共通する形態を持っており規模も似かよっている。(注)これらのことより考えて，第１号住居跡は，弥生時代後期後半，それも終末に近い頃に営まれたものと思われる。また第２号住居跡は
前述したように少なくとも第１号住居跡より古い時期に営まれたものである。第２号住居跡から検出された遺物は，口縁部が「くの字」状に外反し，ロ縁端部が上下に肥厚し，３条の凹線がはいっている甕形土器の破片のみであったため，時期は明確にし得ないが，概ね弥生時代後期それも中葉以前に営まれたものと考えられる。

さて，土壙についてみると，第１～３号土壙からは細片ながら土器が出土しており，その位置も住居跡と近接していることから，第１，２号住居跡の貯蔵穴的な性格が考えられる。であるが，第４，５号土壌は遺物も認められず，その近辺から住居跡等の遺構も検出きれなかったため，その性格は明らかにし得ない。しかし，この部分は特に後世の削平をうけており，何らかの遺構が存在した可能性も残されるため，第４，５号土壙は貯蔵穴的な性格を有していたものかも知れない。（橋本）

（注）兵庫県教育委員会「奈カリ与遺跡の調査」『三田市，北摂ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概報』1980

Ⅷ　岩　上　城　跡

遺跡の概要（第65図）

岩上城跡は，E地点の存在する丘陵の先端部に位置するもので，第４郭と考えられていた郭の一部が造成計画地内に含まれるため，その計画地部分についてトレンチ調査を行い，さらに，城跡全体については，地権者の同意を得て測量調査を行った。

その結果，郭４，小郭１，帯郭１，縦堀２の存在が想定され，堀切１の存在が確認された。

遺　　構

１．第１郭

第１郭は，現地表面の標高約51ｍを測り，本城跡の最高所に位置しており，現状は畑として耕作されている。規模は，現況で長軸23ｍ，短軸12.5ｍを測る本城跡最大の郭である。

また，第１郭の西南約1.5ｍ下には，本郭を取り囲むように長軸約20ｍ，短軸２ｍの規模をもつ帯部が配されており，第１郭の北東約3.5ｍ下には，長軸7.5ｍ，短軸約1.5ｍの小郭が配されている。帯郭の北，第２郭の南側及び第１郭の北側からは，それぞれ，縦堀１，縦堀２が認められた。

２．第２郭

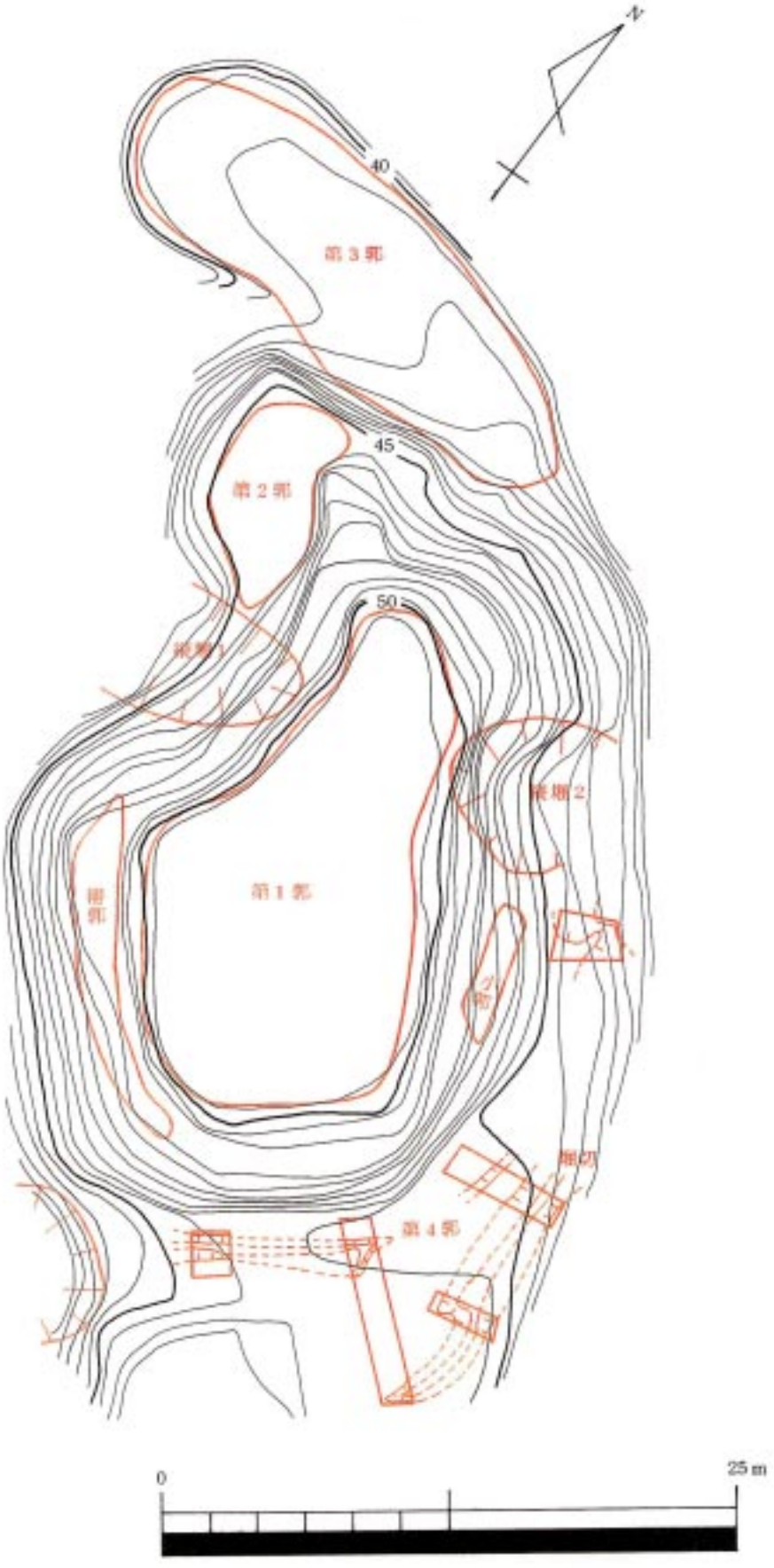
第２郭は，第１郭の北西に配された郭で，第１郭との比高差は現況で約５ｍを測る。本郭は，現在墓地として使用されており，規模は長軸10ｍ，短軸4.5ｍを測る。

３．第３郭

第３郭は，第２郭の北に配された郭で，第２郭との比高差は約３ｍを測る。現状での規模は，長軸25ｍ，短軸８ｍを測る第１郭に匹敵する規模をもつ郭である。

４．第４郭

第４郭は，第１郭の東に配された郭で，第１郭との比高差は６ｍを測る。長軸20ｍ，短軸５ｍ程度と予想されていた本郭は，調査の結果，長軸18ｍ，短軸3.5ｍほどの郭であることが確認され，この郭の北東には，幅約２ｍ，深さ1.8ｍほどの堀切が見っかった。



第65図　岩上城跡地形測量及び遺構配置図

小　　結

岩上城跡は，古文書等の文献では見いだすことができないが，このあたりでは，以前よりこの地を城山と呼称しており，代々山城であることが語り継がれていたようである。

本城跡の築造方法は，広島市内に見いだされる多くの山城と同様に，丘陵の先端部に山城を築き，その後方部を断ち切って築城している。この山城の南西側は急峻な斜面で，直下には岩ノ上（落合）川が流れ，北東側も急峻な斜面になっており，自然の地形を最大限に利用して築城されている。また，北東側は南西側のように小河川が流れていないかわりに，第４郭の北東に堀切を造り，より堅固な防御施設をほどこしている。大手にあたると考えられる北西側には，第２，３郭を配し，守りを堅固にしている。搦手にあたる南東部は，第１郭と尾根鞍部との比高差約６ｍを測り，トレンチ調査の結果，さらに１ｍ程度の掘り込みが認められたが，これに続く背後の尾根は緩傾斜であり，手を加えた痕はみられないことからも，他の部位と比較して，搦手の防御能力が低いという観は否めない。

以上のように，本城跡は，第４郭の一部の調査であったため，城跡全体を把握するには至らなかった。そのうえ，山城に関連する遺物も検出しなかったため，岩上城跡の使用年代についても明らかにし得なかった。ではあるが，トレンチ内より弥生土器がわずかに検出されており，本城跡は中世山城のほかに，弥生時代の遺構が存在する可能性をもっていることが明らかになった。　　（橋本）

IX　広島市末光遺跡群Ｂ地点出土の弥生時代人骨

長崎大学医学部解剖学第二教室
松　下　孝　幸

は　じ　め　に

末光遺跡は広島市安佐北区高陽町大字末光字瀬垣山に所在する遺跡で，1980年（昭和55年）に発掘調査が行われ，Ｂ地点にある第10号土壙から弥生時代人骨が出土した。

弥生時代人骨の出土例は西日本，とくに九州に多く，また保存状態も比較的良好である。従ってこの地域での弥生時代人骨の研究は他の地域に比べて，比較的進展しており，九州の北半分と山口県の西部地域については，弥生時代人骨の二つのタイプが存在することが明らかにされている。一つは北部九州，山口県西部の高顔，高身長を特徴とするタイプ，もう一つは長崎県を中心とする西北九州地域の低，広顔で，低身長を特徴とするタイプである。前者については，金関（1988，1989，1966）は大陸からの渡来民との混血の結果，高顔，高身長という特徴が生じたと推論している。

中国地方で大量の弥生時代人骨が出土しているのは，山口県の西海岸からだけであり，中部地域および東部地域からはほとんど弥生時代人骨の出土例がなく，この地方の弥生人の特徴は全く不明である。北部九州・山口県西部にみられる高顔，高身長タイプの弥生人の由来を解明するためにも，この中国地方の弥生時代人骨の特徴を明らかにしておく必要がある。

幸い広島市教育委員会社会教育課に本遺跡出土人骨も含め，弥生時代人骨が保管してあり，これらの人骨について研究調査をする機会を与えていただいた。本人骨の保存状態は著しく悪いものであったが，大腿骨の一部について人類学的観察および計測が可能であったので，その結果を報告したい。

資　　料

人骨は出土したままの状態で保管してあったが，保存状態は著しく悪いものであった。土壙に残存していたのは主に四肢骨であったが，これらは層状をなしており，数体分の四肢骨が埋葬されたものと考えられる。人骨の保存状態から，形質人類学的資料として観察や計測に耐えられるものではなさそうであったので，骨の種類と体数を明らかにするために，現状のままで，できる限り詳細に観察を行い，その上で人骨を取り上げることにした。保存状態が著しく悪いため，体数を明らかにすることはきわめて困難であったが，大腿骨の数から，少なくとも３体分と推定した。大部分の人骨は観察も計測も不可能なものであったが，大腿骨の骨体２本が観察および計測不可能であった。

表５に示すとおり，この２本の大腿骨のうち１本は男性で，もう１本は女性の大腿骨である。

なお，この人骨の所属時代は，別稿で述べられているとおり，考古学的所見から弥生時代後期と考えられている。

比較資料としては，広島県の弥生時代人骨の例として，佐久良弥生人

表５　大腿骨

人骨番号	性　別	年　令
大腿骨１	男　性	不　明
大腿骨２	女　性	不　明



第66図　遺　跡　分　布　図

（松下，1984）を，北部九州，山口地方の例として，土井ヶ浜弥生人（財津，1956），二塚山弥生人（松下，1979）を，西北九州の例として，大友弥生人（松下，1981）を用いた。

所　　見

第10号土壙に残存していたのは，頭蓋および四肢骨であったが，保存状態は著しく悪いものであった。

頭蓋は頭蓋冠が残存していたが，観察も計測もできないものであった。四肢骨は大腿骨，脛骨，腓骨，距骨を確認したが，大部分は取り上げることができなかった。大腿骨は２本だけを計測ができる状態で取り上げることができたので，これらを「大腿骨１」，「大腿骨２」とした。

（１）大腿骨１（男性）

右側骨体近位半が残存していた。径はそれほど大きいものではないが，粗線は，幅は狭いものの後方へ著しく突出しており，柱状を呈している。

計測値は表６に示すとおり，骨体中央部と推定される部分での矢状径は29㎜（右），横径は26㎜（右）で骨体中央断面示数は111.54（右）となり，柱状形成はかなり強い。また上骨体断面示数は70.97（右）となり，骨体上部は扁平である。

骨体の径が大きく，頑丈なことから，性別は男性と考えられるが，年令は不明である。

表６．大腿骨計測値（㎜）

人骨番号		大腿骨１（右）	大腿骨２（左）
		男性	女性
6.	骨体中央矢状径	29	23
7.	骨体中央横径	26	24
8.	骨体中央周	86	73
9.	骨体上横径	31	－
10.	骨体上矢状径	22	－
6/7	骨体中央断面示数	111.54	95.83
10/9	上骨体断面示数	70.97	－

次いで，広島市の佐久良，山口県の土井ケ浜，佐賀県の二塚山，大友の各遺跡から出土した弥生時代人大腿骨と比較してみた。表７に示すとおり，骨体中央矢状径は佐久良２号石棺１号人骨よりは小きいが，佐久良１号石棺人骨よりも大きく，他の比較資料と大差ない。骨体中央横径は二塚山弥生人よりは小さいが，佐久良２号石柏１号人骨より大きく，その他の比較資料とは大差ない。骨体中央周も二塚山弥生人よりは小さいが，佐久良１号石柏人骨より大きく，その他の比較資料とはほとんど大差ない。骨体中央断面示数は佐久良１号石棺人骨，土井ヶ浜弥生人，二塚山弥生人よりも大きいが，佐久良２号石棺１号人骨よりも小さく，大友弥生人の平均値にきわめて近い。また上骨体断面示数は土井ケ浜弥生人，二塚山弥生人，大友弥生人よりも小さく，骨体上部の庸平性はかなり強い。すなわち，本大腿骨は粗線の発達がきわめて良好であり，こうした特徴は佐久良２号石棺１号人骨の大腿骨にも認められ，骨体の矢状径と横径とがともに大きく頑丈な二塚山弥生人の大腿骨とは異なり，大友弥生入の大腿骨に比較的近いようであるが，骨体の上部はこれよりも扁平である。

表７．大腿骨計測値（男性，右，㎜）

		末光	佐久良		土井ヶ浜弥生人（財津）		二塚山弥生人（松下）		大友弥生人（松下）	
		大腿骨1	1号石棺人骨（松下）	2号石棺1号人骨（松下）	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	29	25 (左)	31 (左)	56	28.6	25	30.40	41	28.85
7.	骨体中央横径	26	26 (左)	24 (左)	56	26.1	26	28.12	41	26.07
8.	骨体中央周	86	82 (左)	86 (左)	56	86.6	25	91.84	41	87.22
9.	骨体上横径	31	－	－	53	31.8	22	32.23	42	30.62
10.	骨体上矢状径	22	－	－	53	25.6	21	26.62	42	24.83
6/7	骨体中央断面示数	111.54	96.15 (左)	129.17 (左)	55	109.8	25	108.71	41	111.72
10/9	上骨体断面示数	70.97	－	－	51	81.0	21	82.50	42	81.34

（2）大腿骨２（女性）

左側骨体が残存していた。径は小さく，粗線の発達ぽきわめて弱い。

計測値は表６に示すとおり，骨体申央部と推定される部分での矢状径は23㎜（左），横径は24㎜（左）で，骨体中央断面示数は95.83（左）となり，骨体中央部の断面形は横広の楕円形を呈している。

骨体の経がやや小さいことから，性別は女性と考えられるが，年令は不明である。

次いで，「大腿骨１」の場合と同じように他の資料と比較してみると，表８のとおり，骨体申央矢状径，骨体中央横径および骨体中央周は土井ヶ浜弥生人，二塚山弥生人および大友弥生人よりも小さく，とくに骨体中央周は著しく小さい。骨体は矢状径よりも横経の方が大きいので，骨体中央断面示数は小さい値となり土井ヶ浜弥生人，二塚山弥生人および大友弥生人よりも小さな値を示している。すなわち，本大腿骨は諸径が小さく，粗線の発達も悪いので，骨体の径は矢状径よりも横径の方が大きいものである。

表８．大腿骨計測値（女性，右，㎜）

		末　光	土井ヶ浜弥生人		二塚山弥生人		大 友 弥 生 人	
		大腿骨２	（財津）		（松下）		（松下）	
			n	M	n	M	n	M
6．	骨 体 中 央 矢 状 径	23	33	25.6	14	26.57	30	26.00
7．	骨 体 中 央 横 径	24	33	25.0	14	25.86	30	25.03
8．	骨 体 中 央 周	73	33	79.6	14	82.71	28	80.32
9．	骨 体 上 横 径	－	26	30.4	10	30.10	32	29.06
10.	骨 体 上 矢 状 径	－	31	22.8	10	23.30	32	22.75
6/7	骨 体 中 央 断 面 示 数	95.83	33	102.8	14	102.79	30	104.05
10/9	上 骨 体 断 面 示 数	－	31	75.7	10	77.66	32	78.42

（3）腓骨（男性）

右側骨体の遠位半が残存していた。外側面が破損しているので計測はできないが，径はやや大きく，また骨体は扁平である。

骨体の径がやや大きいことから，性別は男性と考えられるが，年令は不明である。

（4）距骨（性別不明）

右側の距骨滑車の上面と外果面の一部が残存していた。径はあまり大きいものではなさそうであるが，保存状態が悪いので詳細は不明である。

性別，年令はともに不明である。

総　　括

広島市安佐北区高陽町大字末光字瀬垣山にある末光遺跡の発掘調査が1980年（昭和55年）に行われ，B地点の第10号土壙から弥生時代人骨が出土した。保存状態は著しく悪いものであったが，大腿骨は計測できるものがあり，また広島市では弥生時代人骨の発見例は少なく，貴重な資料なので，できるだけ詳しく観察し，他の資料と比較検討した。その結果を要約すれば次のとおりである。

1．残存していた人骨の保存状態は著しく悪かったので，体数を明らかにすることはきわめて困難であったが，大腿骨の数から，少なくとも３体分と推定される。

2．この人骨は弥生時代後期に属する人骨である。

3．残存していた人骨のうち，骨の種類を同定することができたものは，頭蓋大腿骨，脛骨，腓骨，距骨であり，そのうち観察が可能なものは大腿骨，腓骨，距骨で，計測ができたのは大腿骨のみであった。

4．男性大腿骨の計測値は，骨体中央矢状径が29㎜（右），横径は26㎜（右）で，骨体中央断面示数は，111.54（右）となり，柱状形成はかなり強いもので，また上骨体断面示数は70.97（右）となり，骨体上部は扁平である。

5．女性大腿骨の計測値は，骨体中央矢状径が23㎜（左），横径は24㎜（左）で，骨体中央断面示数は95.83（左）となり，骨体中央部の断面形は横広の楕円形を呈しており，粗線の発達はきわめて悪い。

6．腓骨は右側骨体の遠位半が残存していたにすぎないが，径は大きく，骨体は扁平である。男性の腓骨と推定される。

7．以上の様に，末光遺跡出土の弥生時代人の男性大腿骨には強い粗線の発達が認められ，また骨体上部は扁平であり，腓骨も扁平であった。このように男性の四肢骨には縄文人的な形質が認められたが，女性大腿骨の粗線の発達は著しく悪く，骨体は横径が矢状径よりも大きく，その断面形は横広の楕円形を呈していた。こうした特徴が広島県の弥生人の其通した特徴なのかは興味ある問題であるが，現在広島市の佐久良遺跡と丸子山遺跡出土の弥生時代人骨について検討を行っているので，それぞれの報告書の中でこの問題についても考察を行ってみたいと考えている。

《欄筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた広島市教育委員会社会教育課の方々，ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

参　考　文　献

1．金関丈夫1959：弥生時代の日本人。日本の医学－第15回日本医学会総会学術集会記録－，1:167-174。

2．金関丈夫，永井昌文，佐野一，1960：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について。人類学研究7：1-36。

3．金関丈夫，1966:弥生時代人。日本の考古学，3：460-471。

4．松下孝幸，1979:二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山（佐賀県文化財調査報告書第46集):242-255。

5．松下孝幸，1981:佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書第1集)。

6．松下孝幸，1981:宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書):93-109，114-118，145-146。

7．松下孝幸他，1982：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第７次発掘調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告第２集):19-30。
8．松下孝幸，1984：広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨。佐久良遺跡発掘調査報告（広島市の文化財第27集）付編
9．Maltin-Saller，1957：Lehrbuch def Anthropologie. Bd. 1. Gust av Fisher Verlag，Stuttugart 429-5970
10．内藤芳篤 1981：弥生時代人骨。人類学講座５，日本人１，雄山閣，東京，57-99。
11．財津博之，1956：山口県土井ヶ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究，3：320-349。

X　考　　察

弥生墳墓第10号墓について

本遺跡B地点第10号墓は，太田川流域においては初見であり，埋葬形態に特色が見られることから，若干の考察を加えてみたい。

既に述べたように，本例は土壙であり，その形状は断面袋状を呈しており，第４号住居跡に近いことから考えて，本来は第４号住居に伴う貯蔵穴と考えられよう。本例は，貯蔵穴としての用途が終了した時点で墓墳として利用したと考えられる。

壙内からは，上・下２層に分かれて人骨が出土した。各層は，ほぼ水平を保って検出されたが，その骨の部位の構成は異なっている。上層は，頭骨及び小片で，下層は少なくとも３体分の成人の大腿骨を中心に構成されている。骨の検出状況，部位構成から他所で白骨又は白骨に近い状態となった骨の目立つ部分のみを集めて埋葬したものと思われる。上下２層の存在から，２度の埋葬が行われていることが確認されるが，各層に伴うと考えられる土器からは時期差は見られない。したがって，２度の埋葬とはいえほとんど時期差のないほど近接した時期に埋葬したと考えられる。

人骨と共に灰層と炭化物が出土している。このことは，人骨を集める際に共に集めて埋置したものと考えられる。複数の成人が埋葬されている点，炭化物，灰層が見られる点，第４号住居跡が焼失している点とを考え合わせると，本墓の被葬者は第４号住居内で死亡した可能性が強く考えられよう。この場合，人骨が火をうけていない点が疑問点として残るが，蒸し焼き，又は臼骨化しない程度で焼死したと考えるならば，火をうけていないことも首肯できよう。

太田川流域における弥生時代の墳墓の例からは，土壙墓，石棺墓，木棺墓が通常の埋葬形態であって，本例のように貯蔵穴の転用と考えられる例は他に見られない。したがって，現在のところ本例は異例の埋葬形態と言うことができ，その位置づけは将来の類例の増加を待って検討してゆきたい。（桧垣）

焼失住居について

本遺跡B地点第４号住居跡は，焼失したものであることが確認された。住居内から出土した炭化材，焼土塊及ぴ住居の立地から，上屋構造及び本住居の性格について若干の考察を加えたい。

炭化材は，住居内床面から多量に出土し，検出状態から，極木状を呈するもの，柱状を呈するものが見られた。炭化材は，住居壁面に近い部分ほど，その形状をよく保っている。これは，焼失による崩落の高低差によるものであろう。樺木状の炭化材は，周辺から，住居中央に向かって大概放射状を呈するように検出されており，極木材の長短はあるものの，大概放射状に構築したと推定される。使用された種木材は，検出された炭化材から，５～10㎝前後と推定される。柱材と考えられる炭化材は，各柱穴の近辺から出土しており，全体の長さは明確にすることはできないが，２ヵ所の柱穴上の炭化材が，柱穴のほぼ中央に近い位置に立った状態で検出されており，その出土状態から，柱材として使用したものと考えられよう。出土した炭化材は各10㎝，15㎝を測り，?木材よりやや太い木材を柱として使用したと考えられる。

床面上には，厚い灰層の堆積が確認された。この黒色土は，屋根の葺材が焼失したものと考えられるが，完全に灰化しており，材質は明らかにすることはできない。この黒色土中から，壁に接して及び近接した位置から焼土塊が検出された。壁面に接する焼土塊は，所々にその上面に炭化材が検出されている。このこと

は，この焼土塊が壁面を構成していたものと思われる。すなわち，本住居の壁は，地山壁面が崩落するのを防ぐため，壁溝上に木杭をめぐらし，その間に板材又は丸太材をわたし，地山との間に土を入れた構造としたことが推定される。木杭と木杭の間にわたした材木は板材のようであるが明確にすることはできなかった。床面からは，焼土面が比較的広範囲に見られた。このことは，本住居が完全に焼け落ちた結果と考えられ，火災に対して消火活動を行わないか，行い得なかづたのではないかという疑問を抱かせる。

炭化材の分布を見ると，南端部に若干炭化材の分布の少ない部分が見られる。このあたりは土取りによって削平をうけた部分にあたるが，検出状態から，削平をうけていない部分も含まれており，削平を考慮に入れても，炭化材の分布は少ないと言えるであろう。このことは，本地点弥生墳墓第10号墓の被葬者が，本住居の居住者又は使用者の可能性が強いことを考え合わせた時，次のように考えることができよう。第10号墓の炭化物，灰と其に人骨が集骨して埋葬されていることから，この炭化物の少ない部分から骨を集めた可能性がある。このことは，他の部分の炭化材に撹乱の様相が見られないことからも首肯できよう。この部分に人骨が集中していた可能性を考えれば，本住居の入口はこの南端部に位置していたと考えられよう。即ち，火災時に脱出をはかった居住者が，入口に集まった状態で焼死したと考えられよう。

さて，本住居の立地を見ると，わずかではあるが尾根が鞍部となる部分に位置している。このような立地は，任居の立地条件から見ると不利な位置ということができよう。このことは，本住居床面が，表土より約２m下部から検出されており，大量の土砂が堆積したことが確認されたことからも首肯できよう。したがって，本住居の位置選定に際して意識的に選定したことがうかがわれる。このような立地の例は，近年の調査例からも発見されている。（注）これらの例は，いずれも他の住居から離れた位置に単独で位置する例が多く，通常の住居とは別の性格を有する住居の可能性が高いと考えられる。本住居内からは，その性格について推定させる遺物が出土していないため，明らかにすることは困難であるが，第10号墓において，成人３体以上の人骨が検出されていること，及び本例のような立地にある住居例が焼失又はそれに近い状態で検出された例がきわめて高率であることがその性格にっいて考えるときヒントを与えてくれそうである。（桧垣）

（注）

1．九郎杖遺跡住居跡　隅丸方形　焼失
2．大谷遺跡Ａ地点２号住居跡　隅丸方形　焼失（?）
3．中畦遺跡１号住居跡　円形　焼失
4．此山遺跡住居跡　隅丸方形

土壙について

末光遺跡群から検出された土壙は，計39基を数える。一般的に土壙は，その形態や埋土の状況，検出される遺物等により，墓墳，貯蔵穴，農耕用の穴，水溜用の穴，落し穴，ゴミ捨て穴などの用途が考えられる。本遺跡群から検出された土壙のうち，22基は墓墳と考えられているものである。また，残りの17基のうち，12基は住据跡との位置関係やその形態などから，貯蔵穴と報告されているもので，本稿では，この貯蔵穴と住居跡との関係について論じてみたい。

貯蔵穴と考えられる土壙の規模と住居跡との位置関係については，表９のようになる。このうち，住居跡内に存在するものと住居跡に近接するものは計６基あり，Ｂ地点第２号住居跡から１基，同第３号住居跡から２基，Ｅ地点第１号住居跡から２基，同第２号住居跡から１基が検出されている。この６基の土壙は，そ

の位置関係から考えて，それぞれの住居跡に付属する貯蔵穴と推測される。また，住居跡と直接関連するかどうか定かではないが，B地点第１号土壙のように木蓋の受け口の痕跡をもつものや，同第２・５・６号土壙のように底面周辺に溝をもつものなど，その形態から貯蔵穴と考えられる丁寧な造作を施した土壙が，本遺跡群からは６基検出されている。これらの土壙は，住居跡に最も近いB地点第１号土壙でさえ，住居跡か

表９　土壙の規模と住居跡との位置関係

No.	検出名称	規　模（cm）			底面積	住居跡からの	備　考
		長さ（底部）	幅（底部）	深さ	（㎡）	距離（m）	
1	B地点 第１号土壙	120 (130)	120 (130)	150	1.33	２号住居跡より８m	木蓋の受け口の跡がある。
2	B地点 第２号土壙	100 (135)	95 (120)	120	1.28	２号住居跡より20m	底面上より土器片河原石を検出。 底面周辺には溝が認められる。
3	B地点 第４号土壙	180 (190)	180 (190)	195	2.83	３号住居跡隣接	
4	B地点 第５号土壙	200 (160)	200 (160)	250	2.01	４号住居跡より25m	大型土器片検出。 底面周辺部には溝が認められる。
5	B地点 第６号土壙	200 (140)	200 (140)	110	1.54	４号住居跡より15m	底面上から大型土器片検出。 底面周辺部には溝が認められる。
6	B地点 第10号墓	170 (170)	160 (170)	190	2.27	４号住居跡より10m	底面上50・70cmから土器片。 人骨検出。
7	B地点 第２号住居跡内土壙	200 (220)	180 (190)	140	3.30	２号住居跡内	底面上80cmから土器片検出。 底面周辺には溝が認められる。
8	B地点 第３号住居跡内土壙	160 (180)	160 (180)	140	2.54	３号住居跡内	
9	D地点 土　　壙	180 (160)	165 (170)	280	2.14	住居跡より15m	底面より土器細片検出。
10	E地点 第１号土壙 北　　側	150 (105)	120 (105)	70	0.87	２号住居跡より2.5m	底面より土器細片検出。
11	E地点 第２号土壙	135 (130)	135 (125)	35	1.28	１号住居跡隣接	土器細片検出。
12	E地点 第３号土壙	165 (140)	120 (90)	100	1.04	１号住居跡隣接	土器細片検出。

ら８mの距離に立地しており，他の土壙は住居跡から10m以上離れて立地している。以上のように，本遺跡群から検出された貯蔵穴と考えられている土壙は，住居跡に付属すると思われるものと住居跡から離れた地点に立地するものとに分けられよう。

住居跡に付属すると思われる土壙は，前述したように６基検出されているが，逆に末光遺跡群から検出された12基の住居跡のうち，貯蔵穴を伴う住居跡は４基しか認められず，貯蔵穴を伴う住居跡の数が少ないように思われる。そのうえ，A地点からは５基の住居跡が検出されているわけであるが，貯蔵穴と考えられる土壙は１基も検出されておらず，本遺跡群内の他の遺跡と比較するとき，貯蔵穴がみられない点において，貯蔵の方法に若干の疑問を残す。

さて，末光遺跡群から検出された住居跡の規模は表10のようになる。そのうちＢ地点からは４基の住居跡が検出されている。このうち第１～３号住居跡は同時期のものとされている。これらの住居跡のうち，第１号住居跡は末光遺跡群内で最大規模を誇るものであるが，この第１号住居跡からは貯蔵穴と考えられる土壙は検出されていない。しかし，第１号住居跡の約半分の床面積しかもたない第2号住居跡からは，上縁部径200×180㎝，底径220×190㎝，深さ140㎝を測る末光遺跡群最大の土壙が検出されていることは注目される。加えて，この土壙は，本来柱穴のあるべき位置に掘り込まれており，同様の例は，市域において，畳谷遺跡から３基検出されているが、そのうち２基は住居跡と同時期のものではなく，１基のみ力注居跡に伴うものと報告されている。その貯蔵穴は深さが約50㎝と浅く，住居跡内の柱穴とほぼ同様の深さであるため（注1），貯蔵穴内に柱をたてることは，たやすかったと考えられる。これと比較して，末光遺跡群の貯蔵穴の上縁部は住居跡の床面積の約10分の1を占め，その深さも約140㎝と深いことから考えて，住居跡内にこれだけの規模の貯蔵穴が存在することにより，住居跡の使い勝手が非常に悪いものになり，住居跡と貯蔵穴の有り方に疑問を生ずる。また，第３号住居跡からは，付属すると考えられる２基の貯蔵穴が検出されている。このように，複数の貯蔵穴を伴う例としては，末光遺跡群Ｅ地点第１号住居跡，高陽台Ａ地点第３号住居跡（注2），真亀Ｃ地点第１号住居跡ないし第２号住居跡・同Ｄ地点住居跡・同Ｇ地点第２号住居跡等あげられる（注3）。これら複数の貯蔵穴をもつ住居跡のうち，最小規模の高陽台Ａ地点第３号住居跡は，床面積が約23ｍ2を測るもので，高陽町域から検出された貯蔵穴を伴わない住居跡の平均床面積は約24ｍ2とほぼ同様の規模であるが，高陽台遺跡群内においては比較的大型の規模に属するものである。他の複数の貯蔵穴をもつ住居跡の平均床面積は34ｍ2で，貯蔵穴をもたない住居跡とは，その床面積において明らかな差異が認められる。

ところで，末光遺跡群から検出された貯蔵穴と考えられる12基の土壙のうち，50%にあたる６基は床面積2ｍ2以上の大型のもので，そのうち，５基はＢ地点に集中して見出される。これと比較して，これまでの報告例にみられる本遺跡群以外の諸遺跡から検出された大型のものは，わずかに５基しか検出されておらず，全体の約10%強にすぎない。このことは，この末光Ｂ地点遺跡が，高陽町の他の遺跡より，貯蔵物が豊富で

表10 住居跡の規模と平面形

名　　称	規　模（m）	平面形	名　　称	規　模（m）	平面形
Ｂ地点第１号住居跡	9.2×7.5	長 円 形	Ｄ 地 点　住 居 跡	4.2×5.6	隅丸方形
Ｂ地点第２号住居跡	5.7×5.3	隅丸方形	Ｅ地点第１号住居跡	7.2×6.8	円　　形
Ｂ地点第３号住居跡	7.4×7.4	円　　形	Ｅ地点第２号住居跡	3.6×3.6	隅丸方形
Ｂ地点第４号住居跡	6.0×6.0	円　　形			

（Ａ地点については，平面形・規模等が定かでないため削除）

あった可能性を考えさせる。

前述したように，末光遺跡群から検出された貯蔵穴は，住居跡内ないし住居跡に隣接したものと住居跡から離れて存在するものに分けられる。このうち，B地点第１～３号住居跡付近からは第１・２号土壙が検出されており，あたかも第１～３号住居跡全体で管理されたかのような印象を受ける。これらの土壙は，住居跡内ないし住居跡に隣接した土壙に比べて，小規模であるが，これが管理形態の差なのか貯蔵物の内容の差なのかは，今後資料の増加とともに徐々に解決されていこう。（橋本）

（注）

１．広島県教育委員会『広島県文化財調査報告』1983

２．広島市教育委員会『高陽台遺跡群発掘調査報告」1982

３．広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977

総　　括

末光遺跡群は，Ａ～Ｅ地点及び中世山城で構成されるものであることは既に述べたとおりである。このうち，Ａ～Ｅ地点遺跡はＡ－２地点を除いて住居跡を主体とする弥生時代後期の遺跡であり，Ａ－２地点は弥生時代から古墳時代にかけての埋葬遺構という内容である。また，これらの遺跡は諸木川と岩上川という太田川本流に注ぐ小河川にはさまれた標高50～100ｍの丘陵上に点在している。

さて，ここで末光遺跡群発掘調査の結果明らかにされた問題点をいくつかあげてみると，第１にＢ地点検出の弥生墳墓及びＡ－２地点の墳墓の性格づけという点，次にＢ地点検出の第４号住居跡及び第10号墓との関係，さらに第４号住居の性格づけという問題もあり，また，本遺跡検出の住居跡の分布とそれに関連して貯蔵穴の分布及び性格づけなどの諸点がある。以下この３点に絞って若干の考察を加えてみたい。

Ｂ地点遺跡検出の弥生墳墓は９基の土壙墓ないし壷棺墓を中心として構成されており，出土土器から弥生後期中葉を中心に営まれたものと考えられる。また，被葬者は墓墳の形態，規模から考えて幼小児を中心としたものである。ただし，第１号墓は小口部分の石材のみの出土であり墓墳の規模は確認できなかったが，長軸２ｍを測ることから成人用のものと考える方が妥当であろう。一般に幼小児の埋葬は，民俗例などから（注１）住居に近接して行われることが多いといわれている。このことから本墳墓に近接する住居は，第１～３号住居と第４号住居があるが，このうち弥生墳墓と同時期といえるものは，出土土器から考えて第１～３号住居のグループであり，この弥生墳墓を構成する埋葬施設のうち多くの部分が第１～３号住居に関連する可能性が強いといえよう。しかし，遺物を出土しない土壙墓もあり，また，３軒の住居に対して８基の幼小児用墓は多すぎるように思われる点など，第４号住居及び後述する第４号住居周辺に予想される住居との関連も残されている。

次にＡ－２地点の墳墓についてみると，この墳墓は，土器蓋土壙といえるもの１基を含んではいるが，全て土壙墓で構成されており，墓域の背後を尾根線に直交する溝で区画している。こうした墳墓の構成及び立地は周辺地区にも見られるが，このうち西願寺遺跡Ａ地点は土壙墓42基からなる墳墓でありＡ－２地点の例（注２）に類似している。

さて，太田川下流域及び広島市域で知られている弥生墳墓としては，可部町の丸子山遺跡，白木町の佐久良遺跡，安古市町の恵木遺跡等があげられる。このうち恵木遺跡からは箱式石棺及び土壙墓が検出されており，箱式石棺を幼小児用，土壙を成人用としている。（注３）しかし，丸子山例は全てが箱式石棺であり，成人，（注４）幼小児の区別はみられない。（注５）このことは，佐久良例でもほぼ同じ傾向を示している。振り返って末光例をみ

ると，Ａ－２地点，Ｂ地点とも成人，幼小児の明らかな葬制上の区別はみられない。加えて以上の墳墓例は土壙墓あるいは箱式石棺という単一の葬制が行なわれているものと，両者あるいは壷棺墓などが混在するものとに分かれる。こうした違いが時期的ないし地域的差なのか，墳墓を営んだ集団内の何らかの規制なのかについては現段階においては即断し得ない。

次に，Ｂ地点検出の第４号住居と第10号墓の関連及び第４号住居の性格について触れておきたい。第4号住居は，Ｂ地点第１～３号住居の北約65ｍの地点に位置している。この地点は南から北へ向って延びる尾根の稜線上でかつ鞍部となる場所である。また，第10号墓は既に述べたように第４号住居の西方10ｍの斜面に立地した断面袋状を呈する土壙である。さてここで第４号住居と第10号墓との関係について考えてみる。第10号墓からは上下二層に分かれて成人3体以上の大腿骨を中心にした骨が出土しており，上下二層は出土土器から同時期のものと考えられる。また人骨とともに，多量の炭化物や灰が検出されており，第４号住居との関連を考えさせる。加えて，第４号住居についてみると，住居内東側に炭化材の攪乱がみられ，これはあたかも，この場所で焼死した者の骨を集める際に生じたもののように考えられる。これらのことから，第10号墓が第４号住居で焼死した複数の人物を集めて埋葬するために利用された施設であるとした点は首肯できる。

この場合，第４号住居が焼失し，内部で成人３体以上の焼死があったとするならば，第４号住居が日常生活に必要な什器類がみられないまま焼失しており，生活のにおいを感じさせないという点に問題が残る。これは第４号住居の性格を考える上で重要な点である。そこで第４号住居の性格について考えてみたい。すでに述べたように第４号住居は尾根の稜線上の鞍部になる地点にある。住居の南は比較的急峻な傾斜を成し，この住居検出時には大量の土砂が流れ込んでいた。北は住居からの比高１ｍ内外のレベル差をもって良好な平坦面がある。また，東側は土砂採取のため大きく削り取られており，旧地形はほとんど残っていないが，地形図から推定すると，ここが比較的平坦な小支尾根を形成していたことがわかる。この地点からは弥生土器の表採もされており，かつ第５号土壙の存在からこの場所に本来若干の住居が存在していたものと予想される。以上の点から第４号住居が日常生活の場として営なまれたものではないことがうかがえよう。そこで第４号住居が焼失している点を考慮に入れると，たとえぱ第４号住居は頻繁に火を使用するある種の場所として日常生活の場から意識的に離して設定されたと考えられ，第４号住居の性格が幾分限定されるようである。一例をあげるならば集落内祭祖の場といったような内容のものがあげられよう。こう考えるならば，第10号墓の本来の機能である貯蔵穴としての袋状土壙が第４号住居に伴うとは考え難く，第４４号住居東斜面に存在の予想される住居との関係を考えるべきであろう。しかし，いずれにしても，推論の域を出ないため，今後十分な検討を進める必要があろう。

最後に住居跡及び貯蔵穴の分布について考えていきたい。本遺跡群からはＡ－１地点５軒，Ｂ地点４軒，Ｄ地点１軒，Ｅ地点２軒の計12軒の住居麟が検出された。また貯蔵穴と考えられる土壙はＡ－１地点０，Ｂ地点８基，Ｄ地点１基，Ｅ地点３基の計12基であった。

Ｂ地点は諸木川に向って開く谷奥の尾根上にあり，特に西側の谷は湧水点をもち，湿潤で可耕地として適していたといえよう。さらにＢ地点の背後はニヶ城山へ続く森林地帯となっている。また，Ｂ地点の４軒の住居のうち第１～３号住居については互いに近接しており，出土遺物はそれらが，同時期のものであることを示している。この第１～３号住居は尾根西側の谷水田あるいは諸木川への谷の開口部周辺を生産基盤として成立していた集団と考えられる。また貯蔵穴と考えられる土壙は第２・３号住居内に各１基，第３号住居に接するようにして第４号土壙があり，第１・２号土壙は住居と離れた地点に存在している。こうした分布から考えられることが，貯蔵穴の管理形態によるものか，貯蔵物の違いによるものかについては明らかに

し得なかった。しかし，いずれにしても，これらの土壙が生産物の貯蔵用であるなら，その数，容量あるいは住居との数的関係，位置的関係は，その集団の生産力と対応するものとみるべきであろう。こうした観点に立つならば，小集団内における住居と貯蔵穴の関係を明らかにすることは，小集団間の社会的関係のあり方を知る上で重要な手掛りとなろう。この意味で，末光B地点遺跡は良好な資料を提供したといえるであろう。

なお，最後になるが，今回の発掘調査にあたっては実に多くの方々のご協力，ご援助，ご指導を頂いたことをここに改めて記して感謝め意を表わしたい。（幸田）

（注）

1．佐原真「農業の開始と階級社会の形成」（岩波講座日本歴史 1）1975
2．広島県教育委員会「西願寺遺跡群」1974
3．恵木遺跡発掘調査団「恵木遺跡発掘調査報告」1982．3
4．石田彰紀「丸子山遺跡」（「日本考古学年報」第 29 号）1978
5．広島市教育委員会「佐久良遺跡発掘調査報告」1984．3



末光遺跡群全景（航空写真）



a． A－1 地点第 1 号住居跡



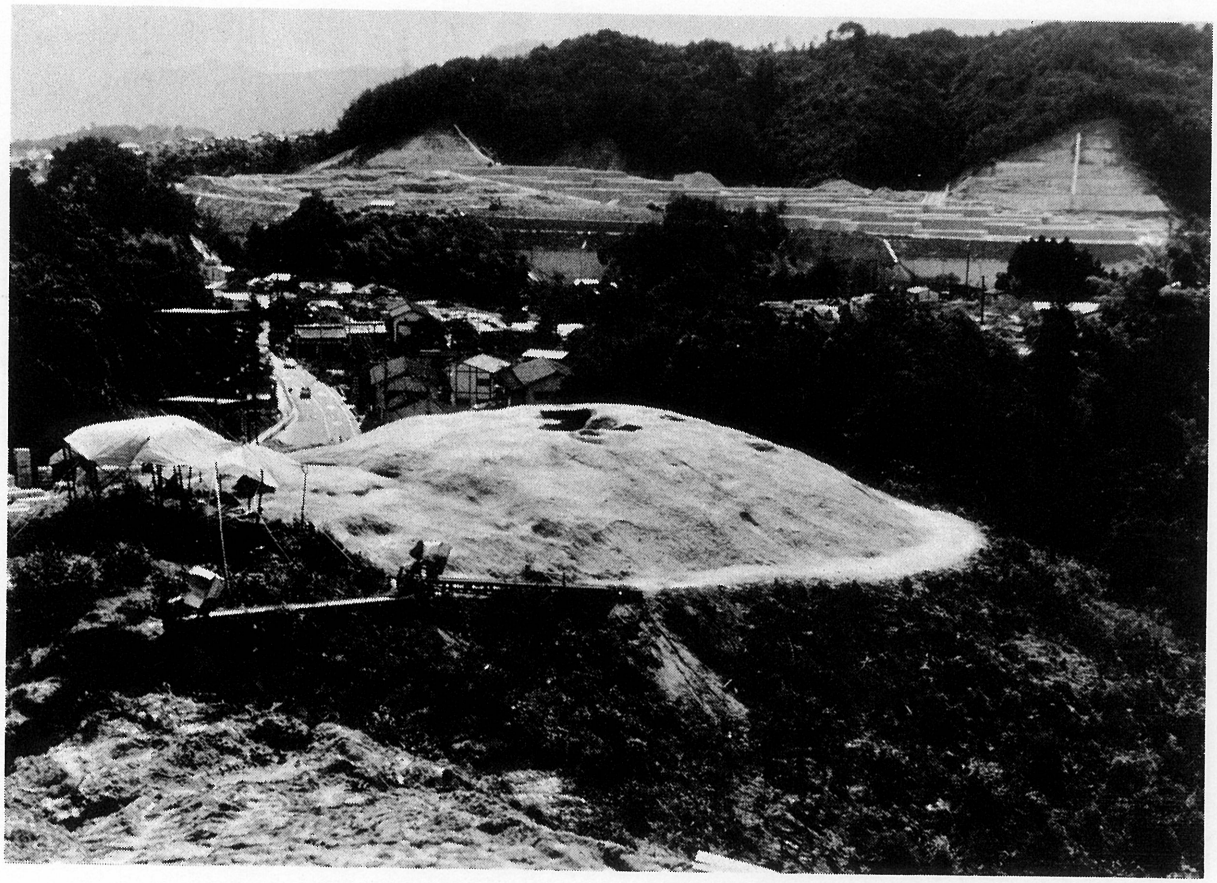
b． A－1 地点第 2 号住居跡



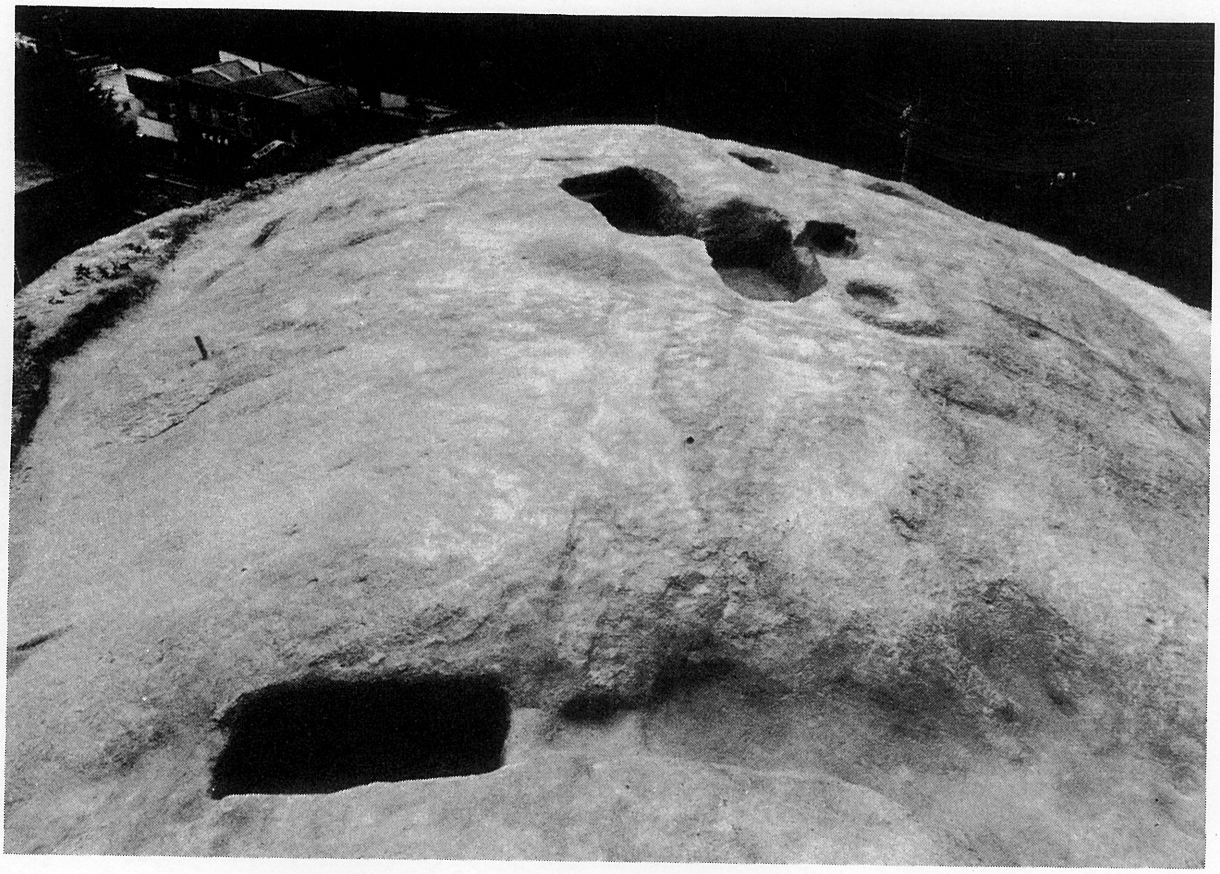
a. A－1 地点第 3 号住居跡



b. A－1 地点第 4 号住居跡



a. A－2地点遠景（調査後）



b. A－2地点近景（調査後）



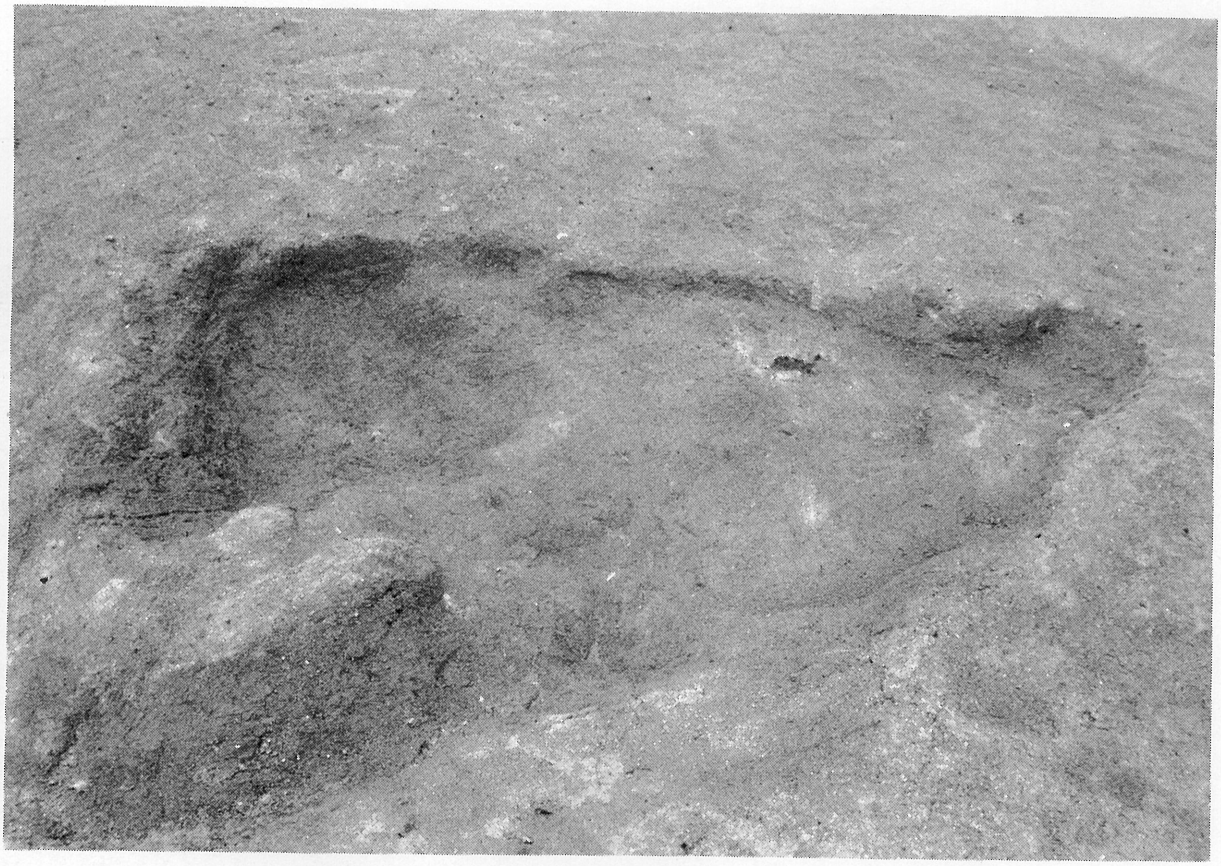
a. A－地点 第1・2号土壙



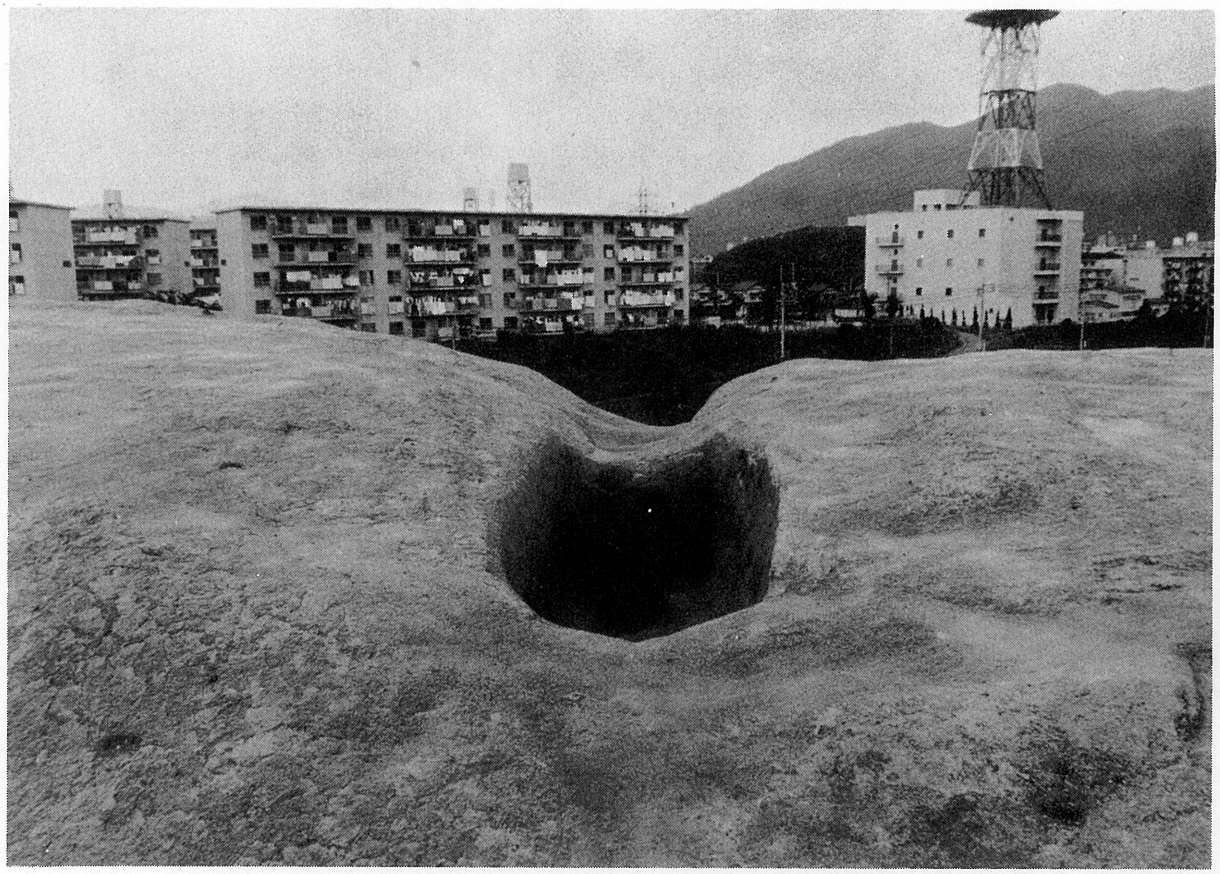
b. A－地点 第3～7号土壙



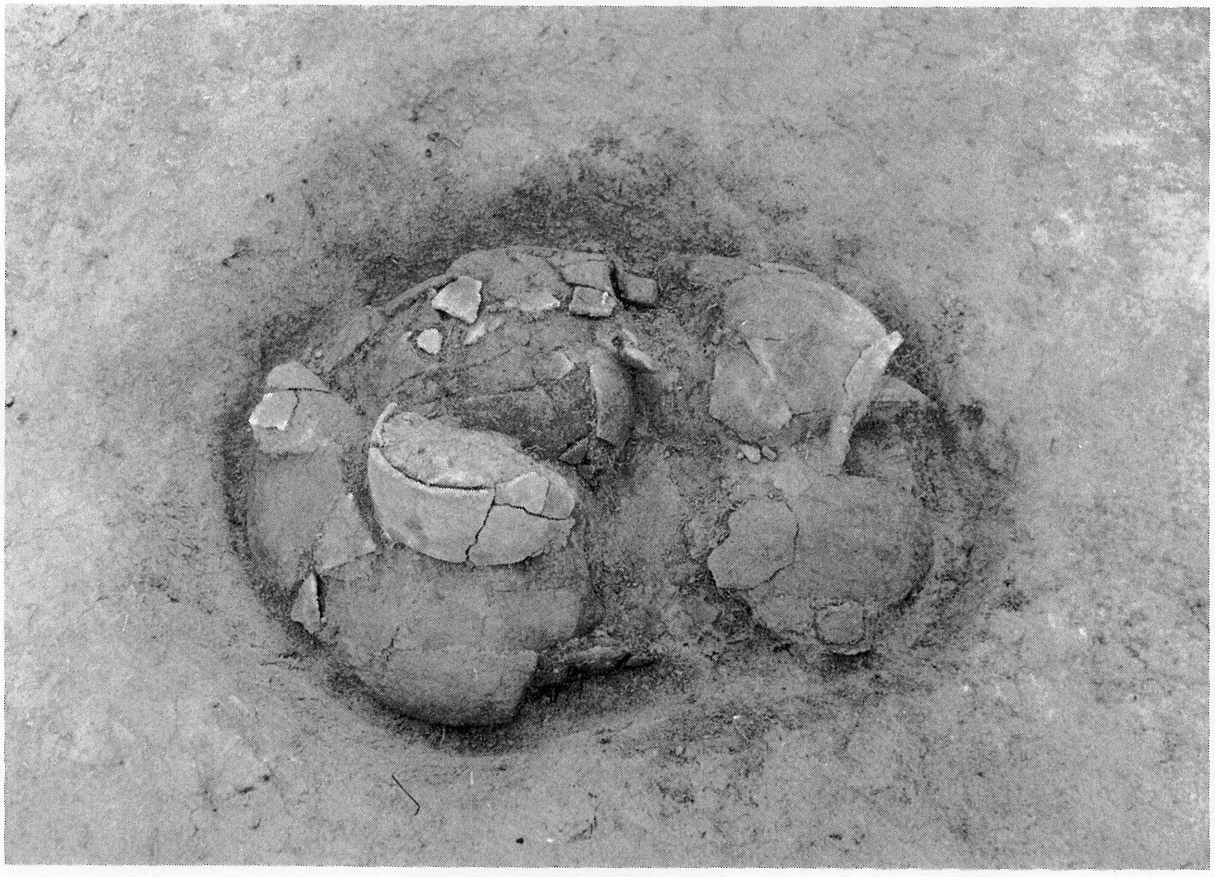
a. A－2地点　第8号土壙



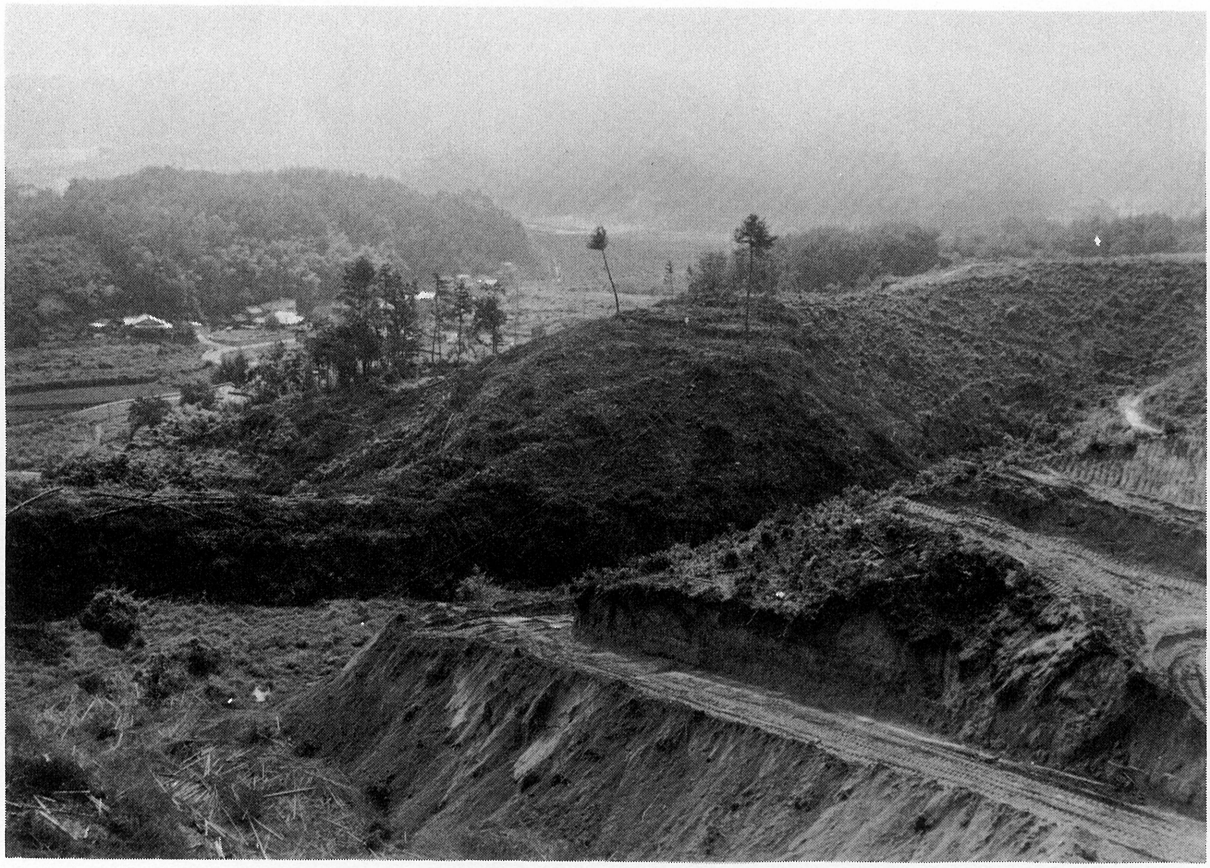
b. A－2地点　第9号土壙



a. A－2地点　第10号土壙



b. A－2地点　第11号土壙



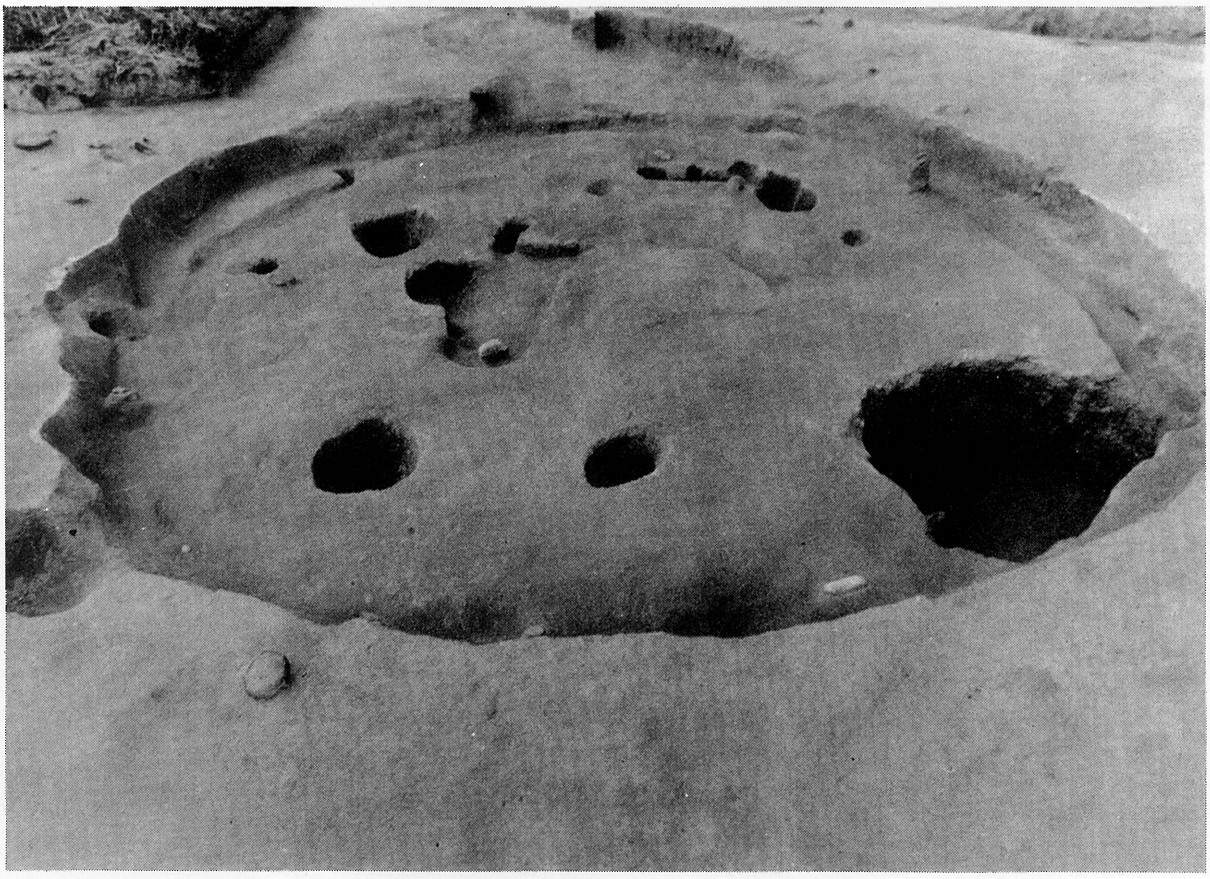
a. B地点　遠　　景（調査前）



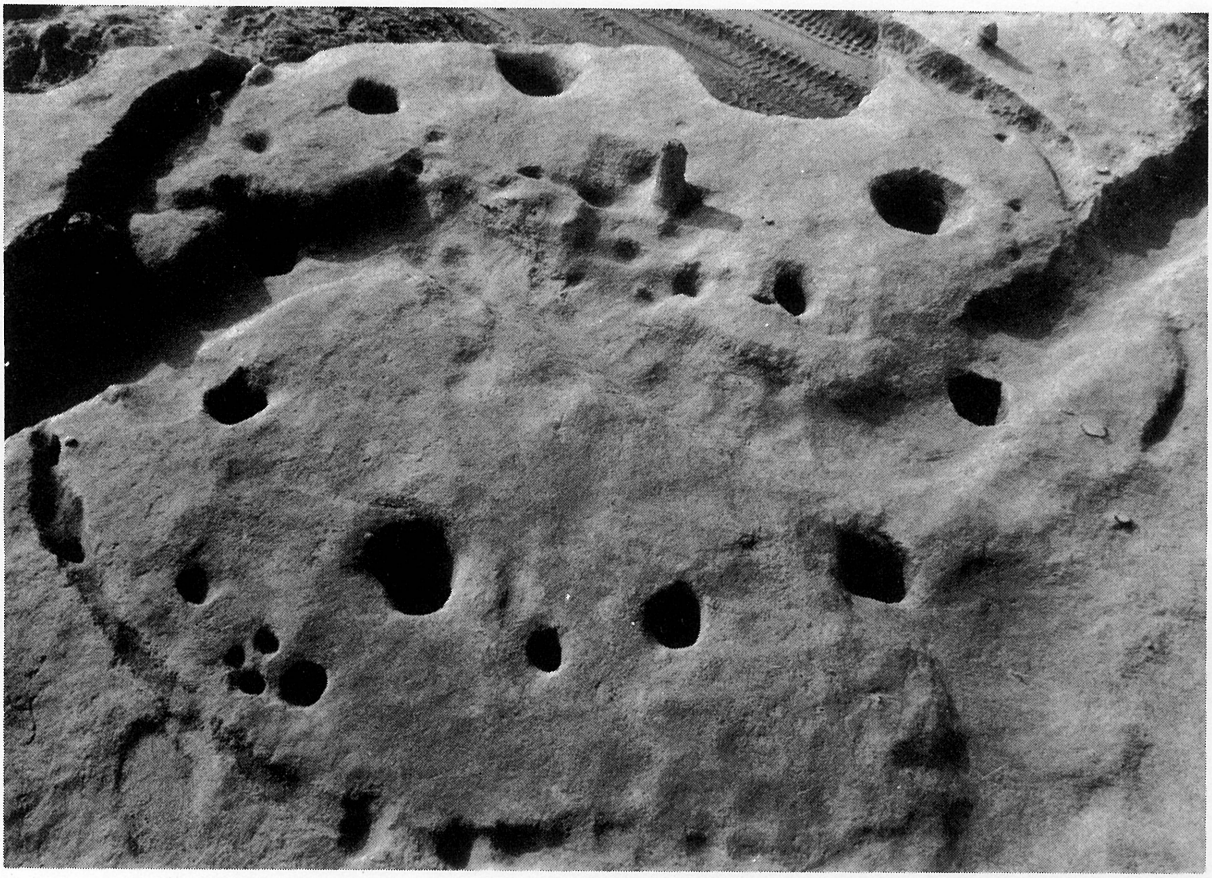
b. B地点　近　　景（調査前）



a. B地点　第1号住居跡



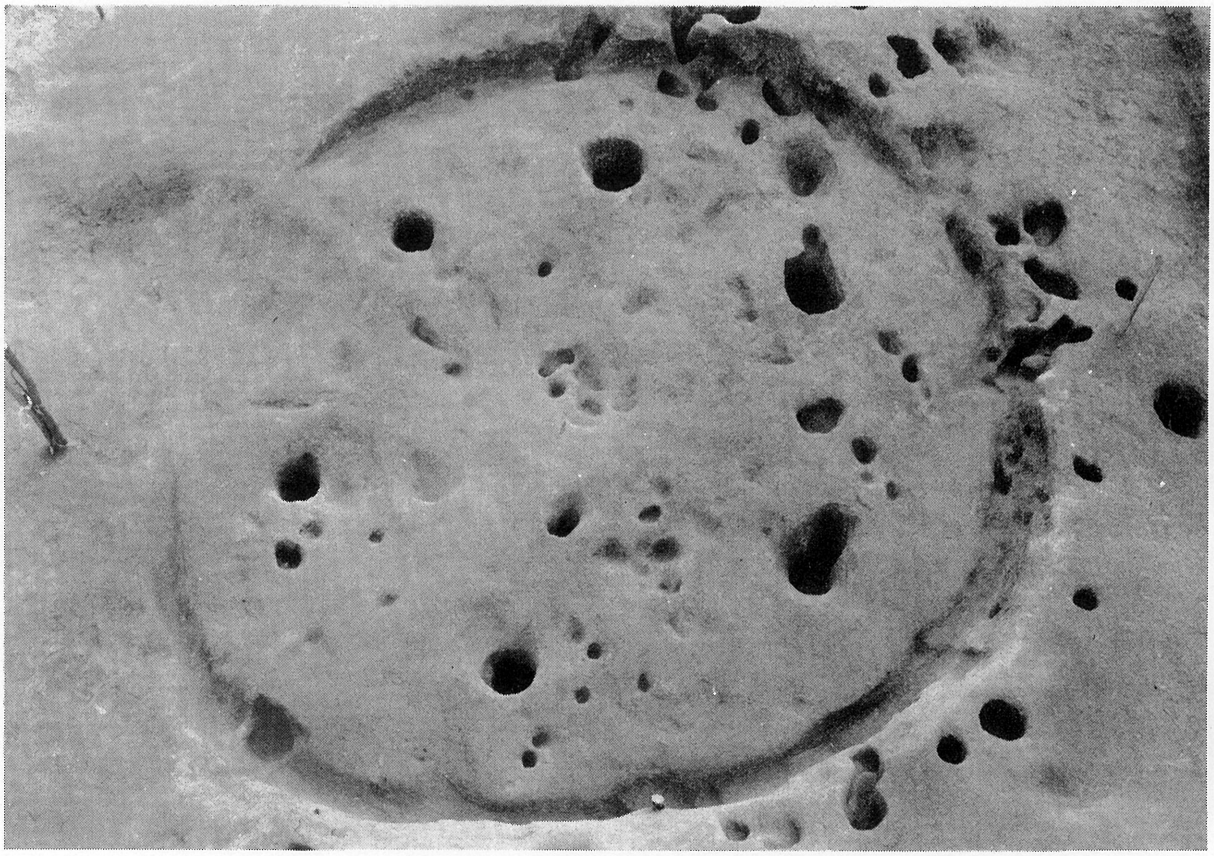
b. B地点　第2号住居跡



a. B地点　第3号住居跡



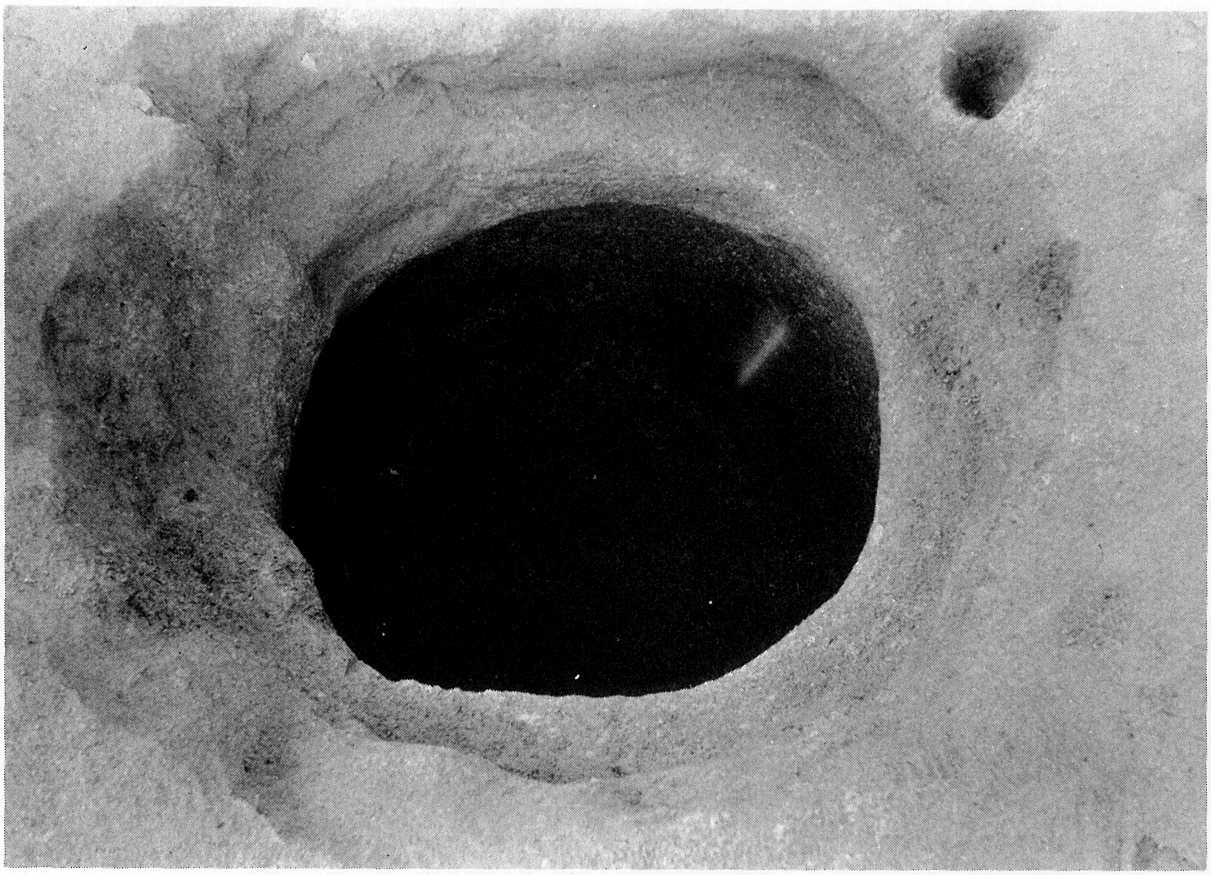
b. B地点　第4号住居跡



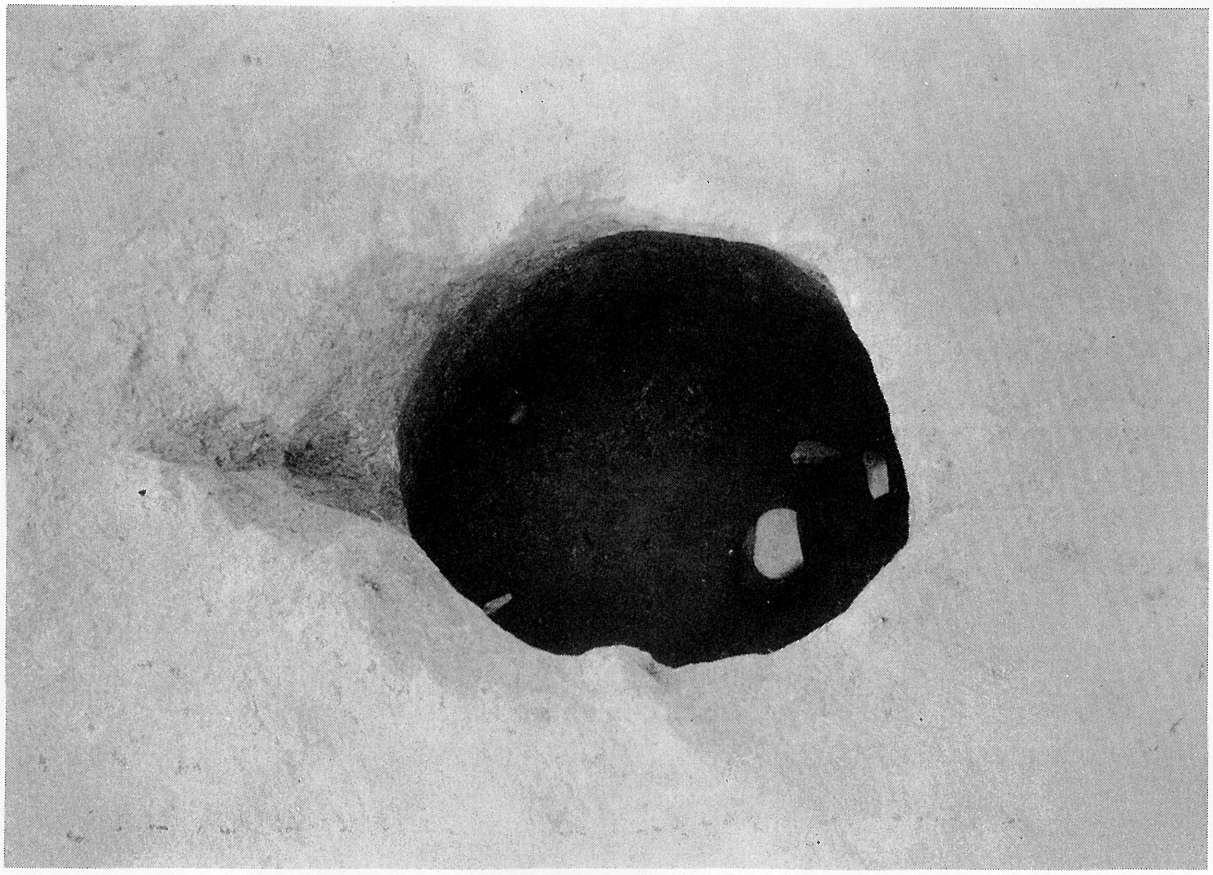
a. B地点　第4号住居跡



b. B地点　第4号住居跡



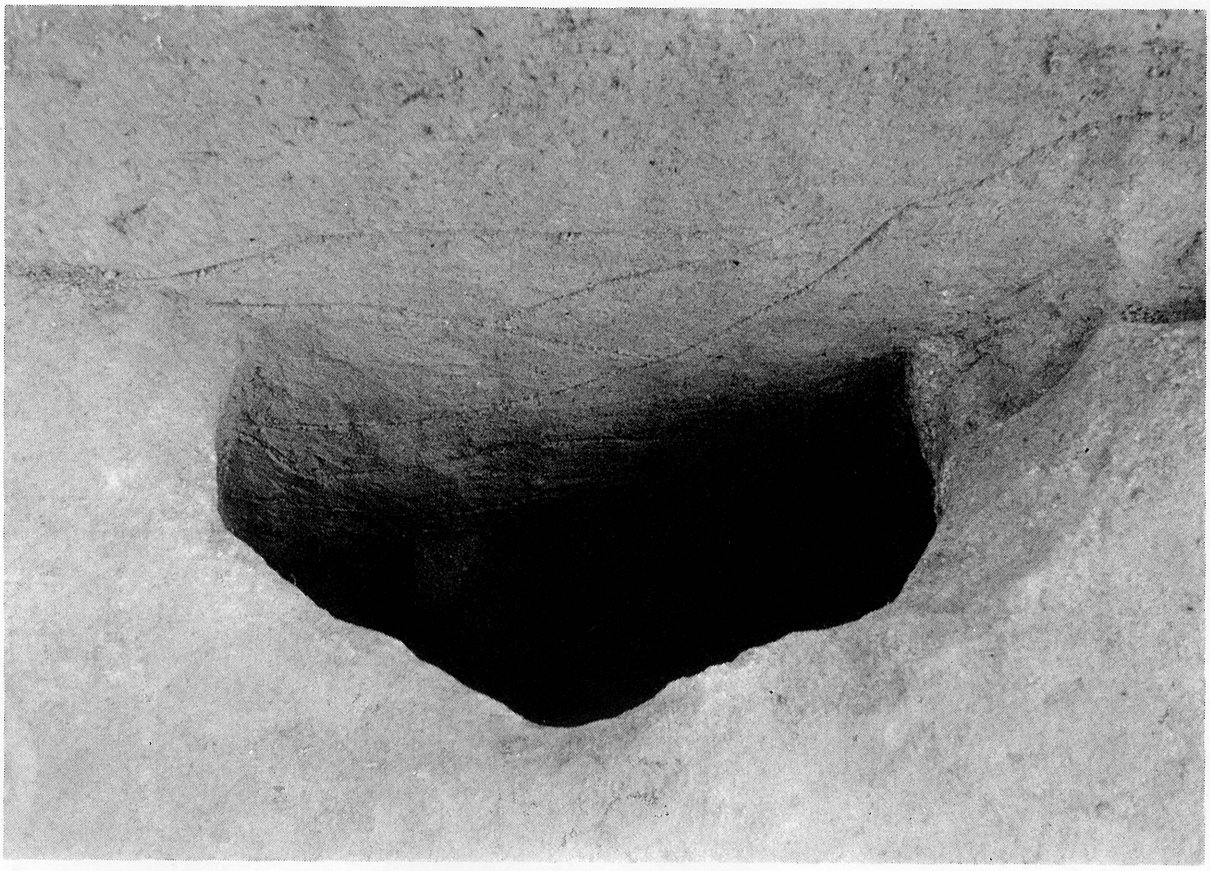
a. B地点　第1号土壙



b. B地点　第2土壙



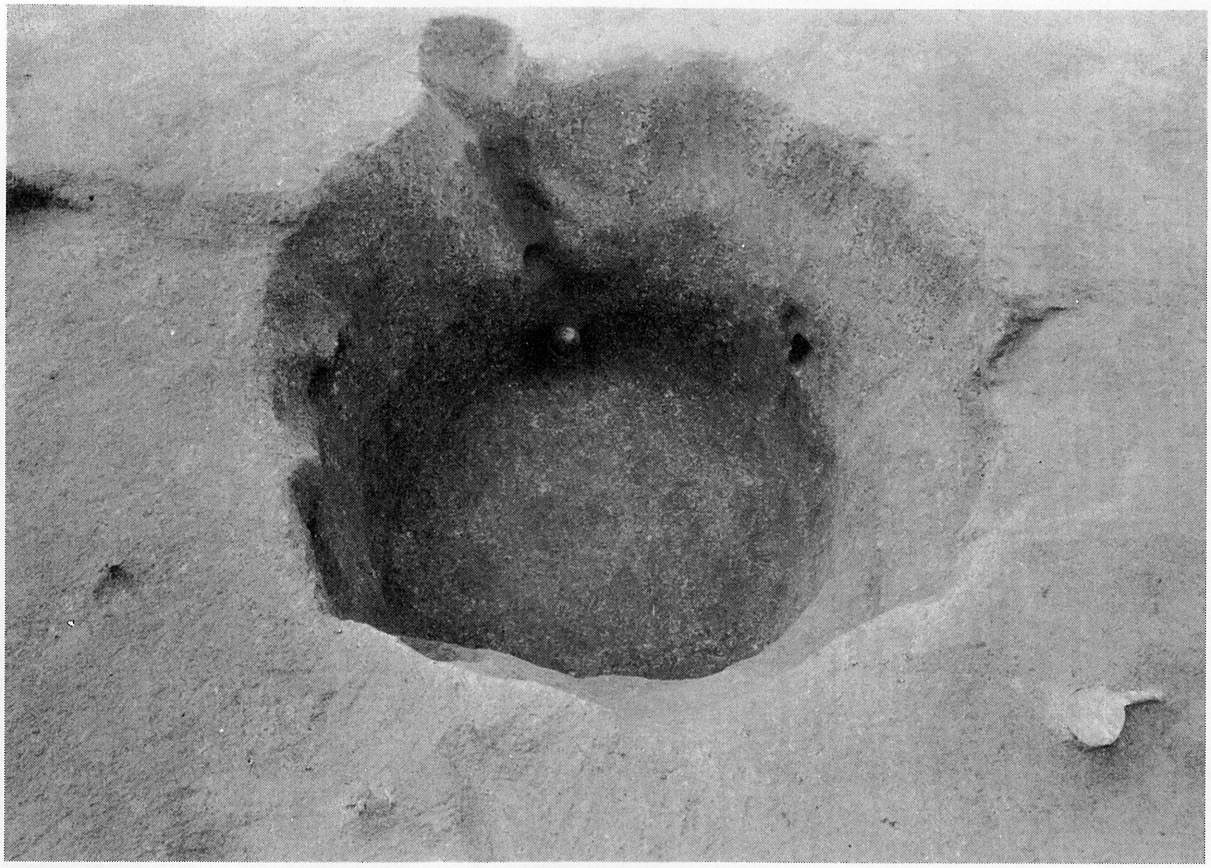
a. B地点　第3号土壙



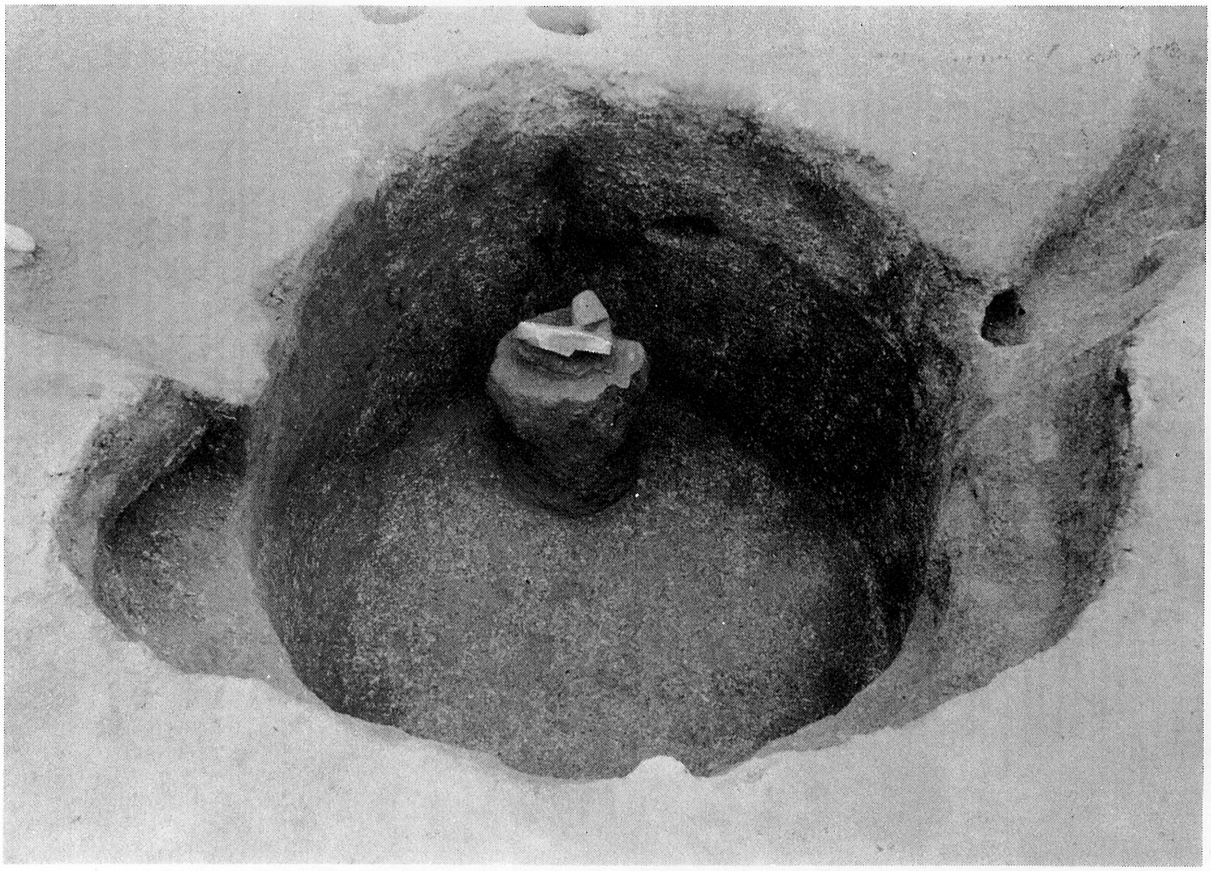
b. B地点　第4土壙



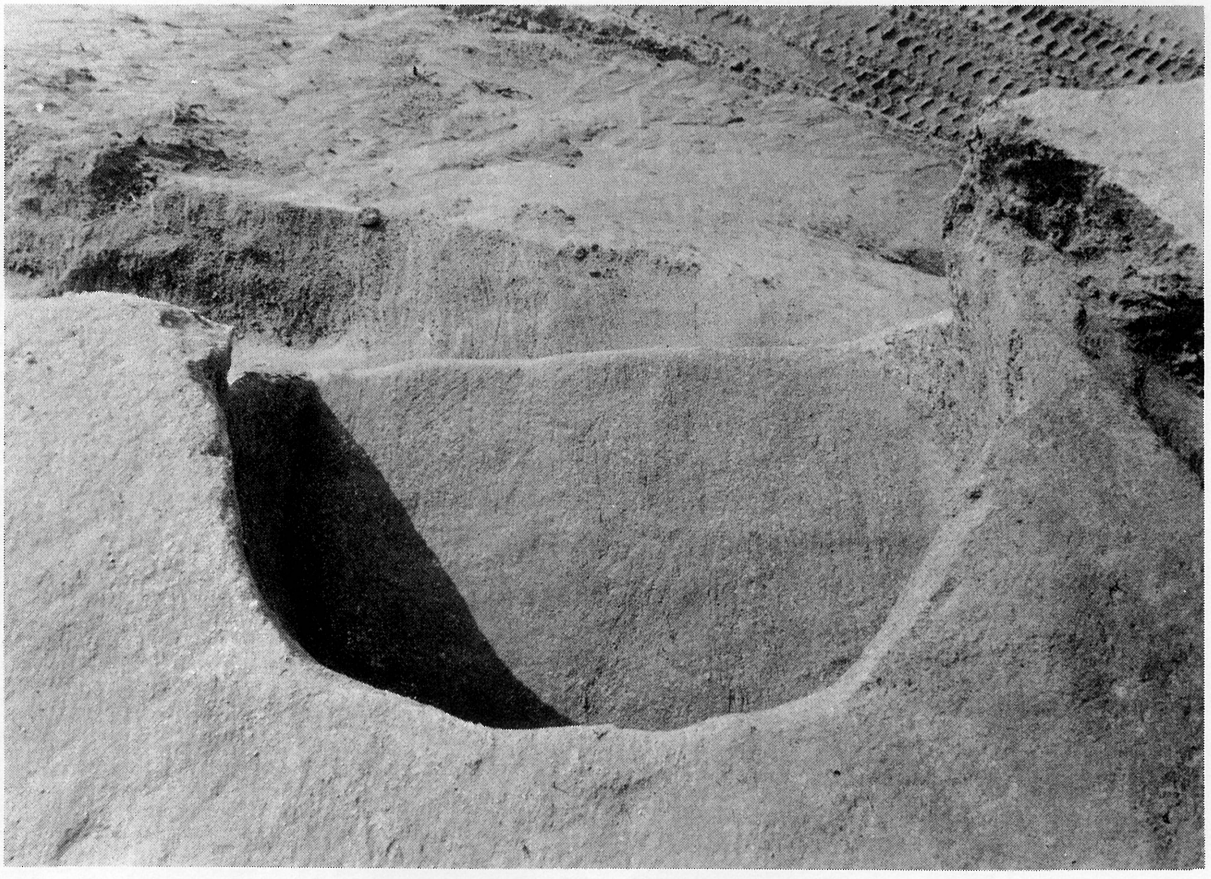
a. B地点　第5号土壙



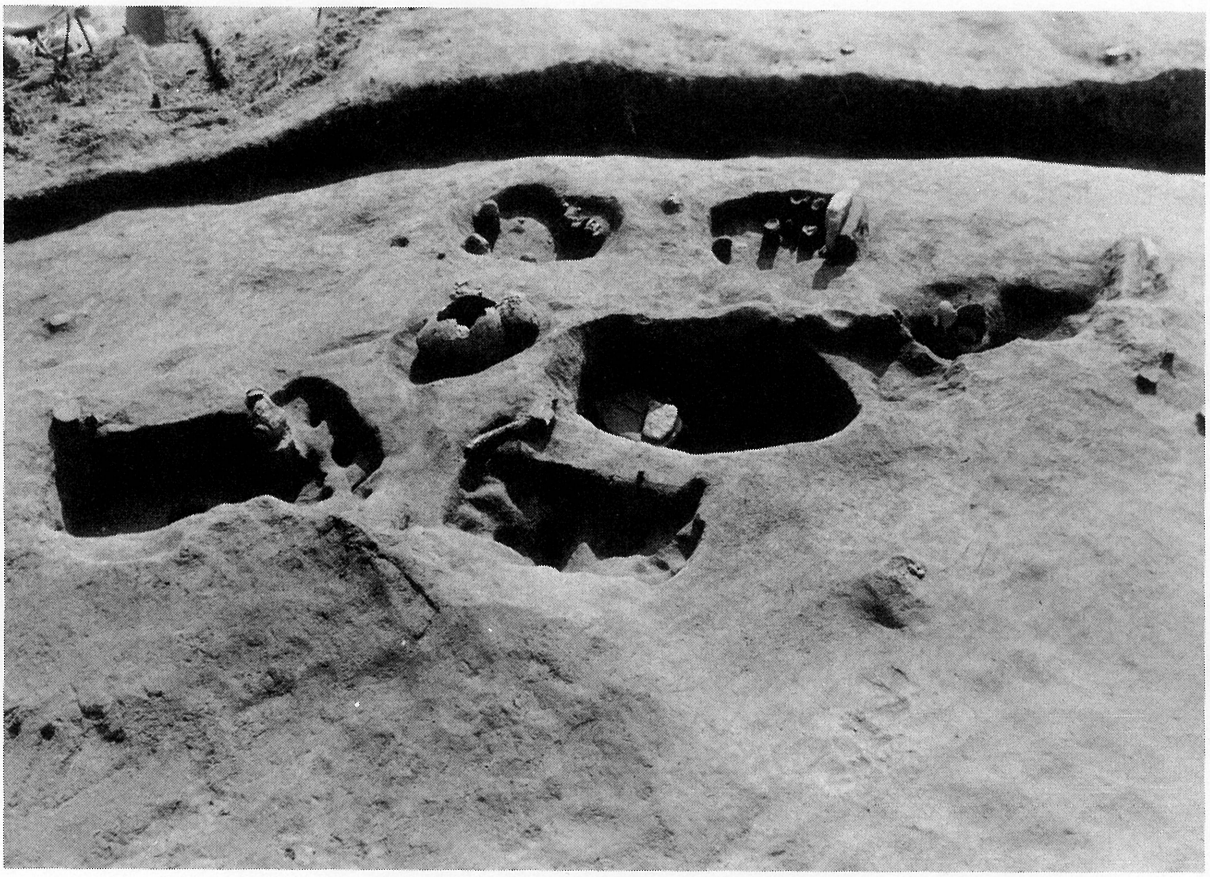
b. B地点　第6号土壙



a. B地点　第2号住居跡内土壙



b. B地点　第3号住居跡内土壙



a. B地点　弥生墳墓群第1～9号墓



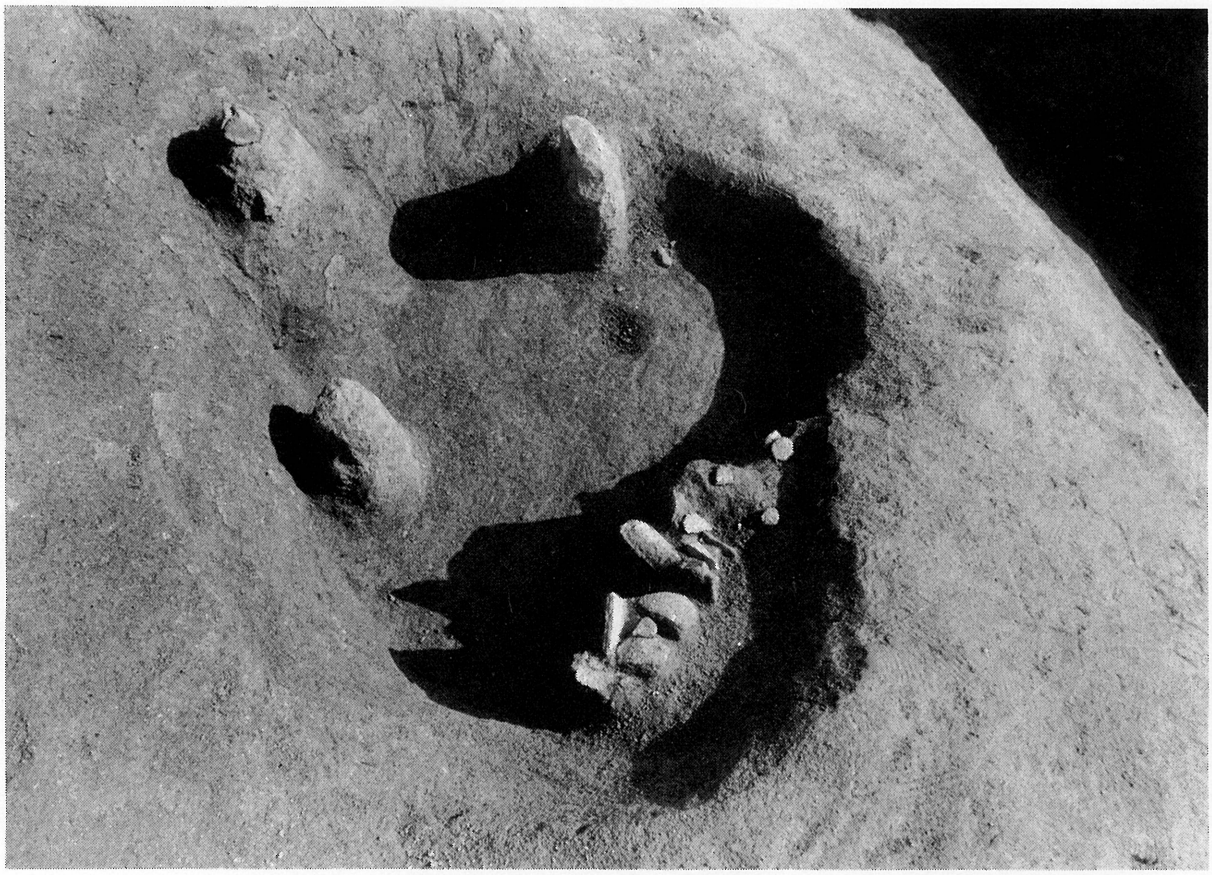
b. B地点　弥生墳墓群及び第7号土壙



a. B地点 第1・3号墓



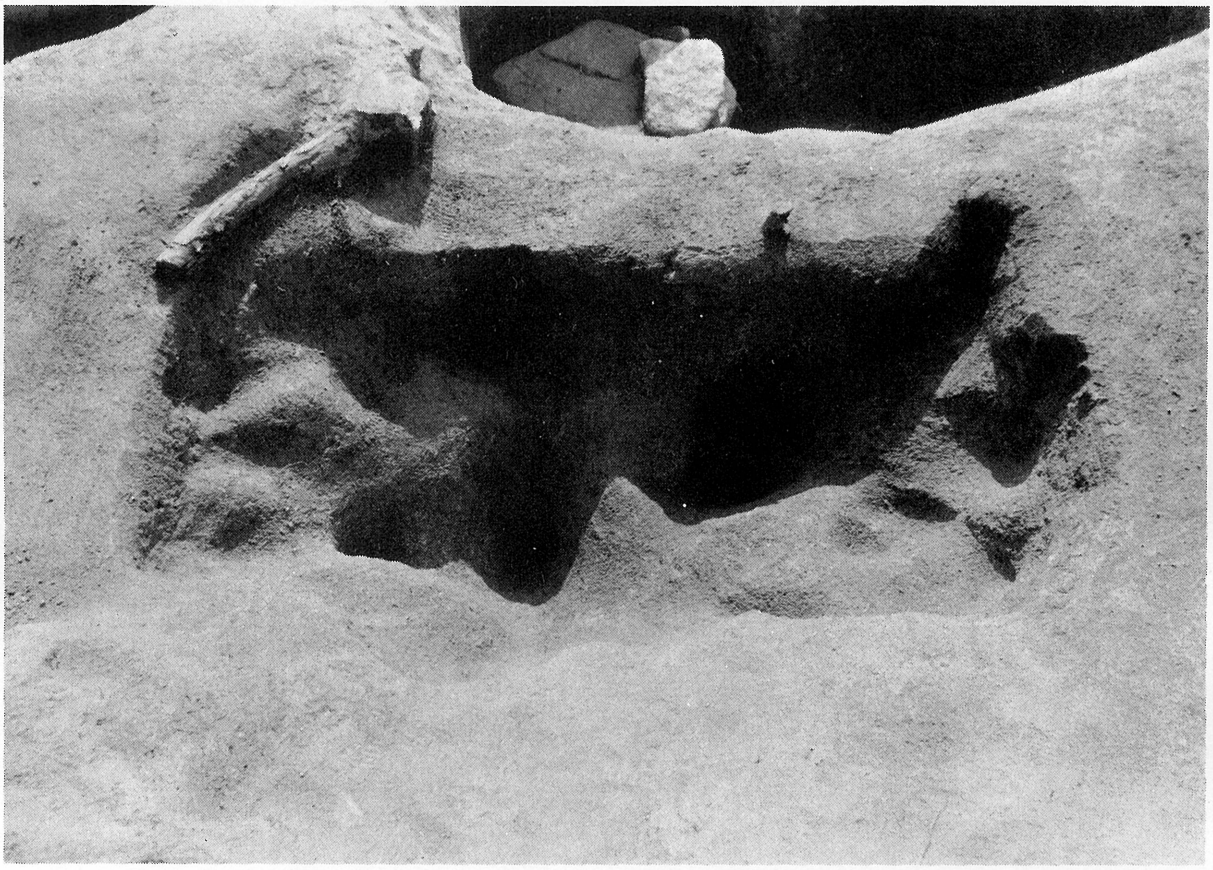
b. B地点 第2号墓



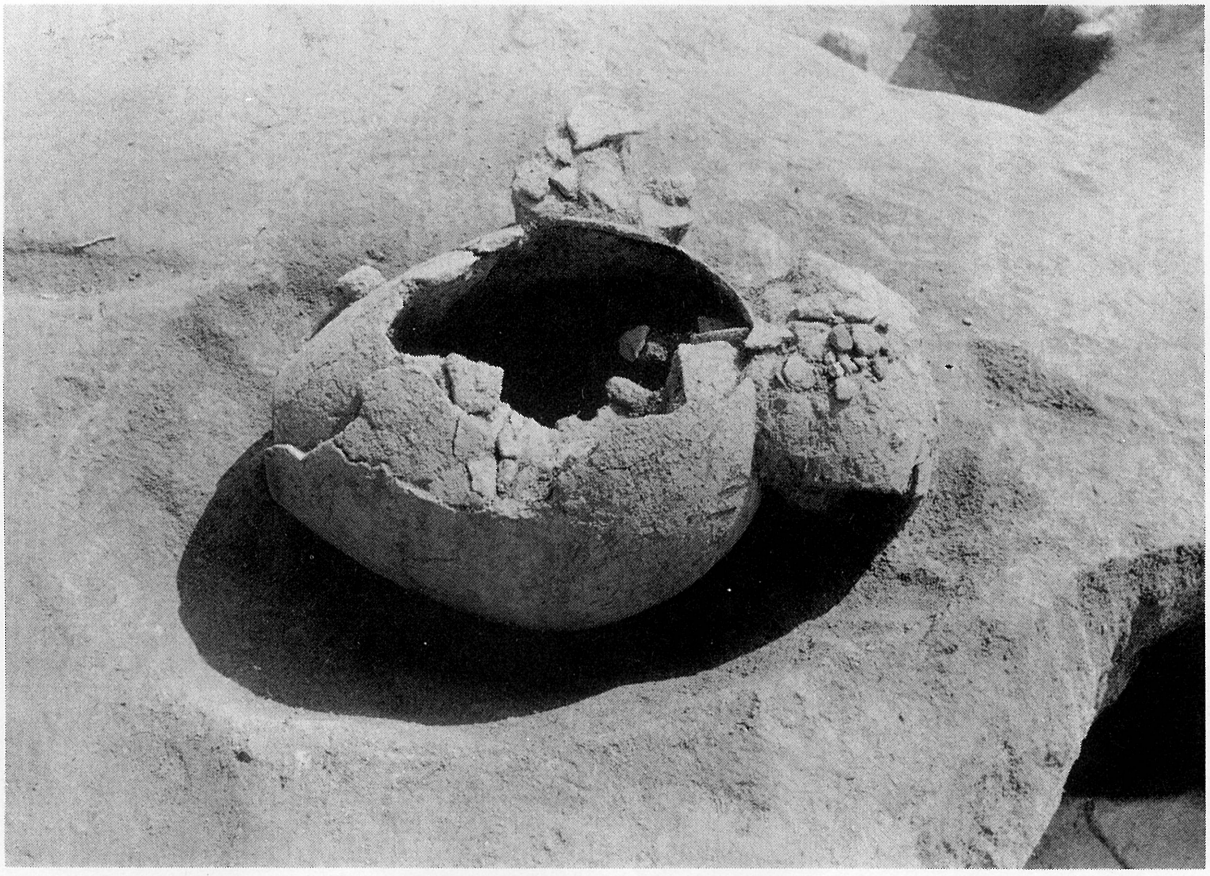
a. B地点　第4号墓



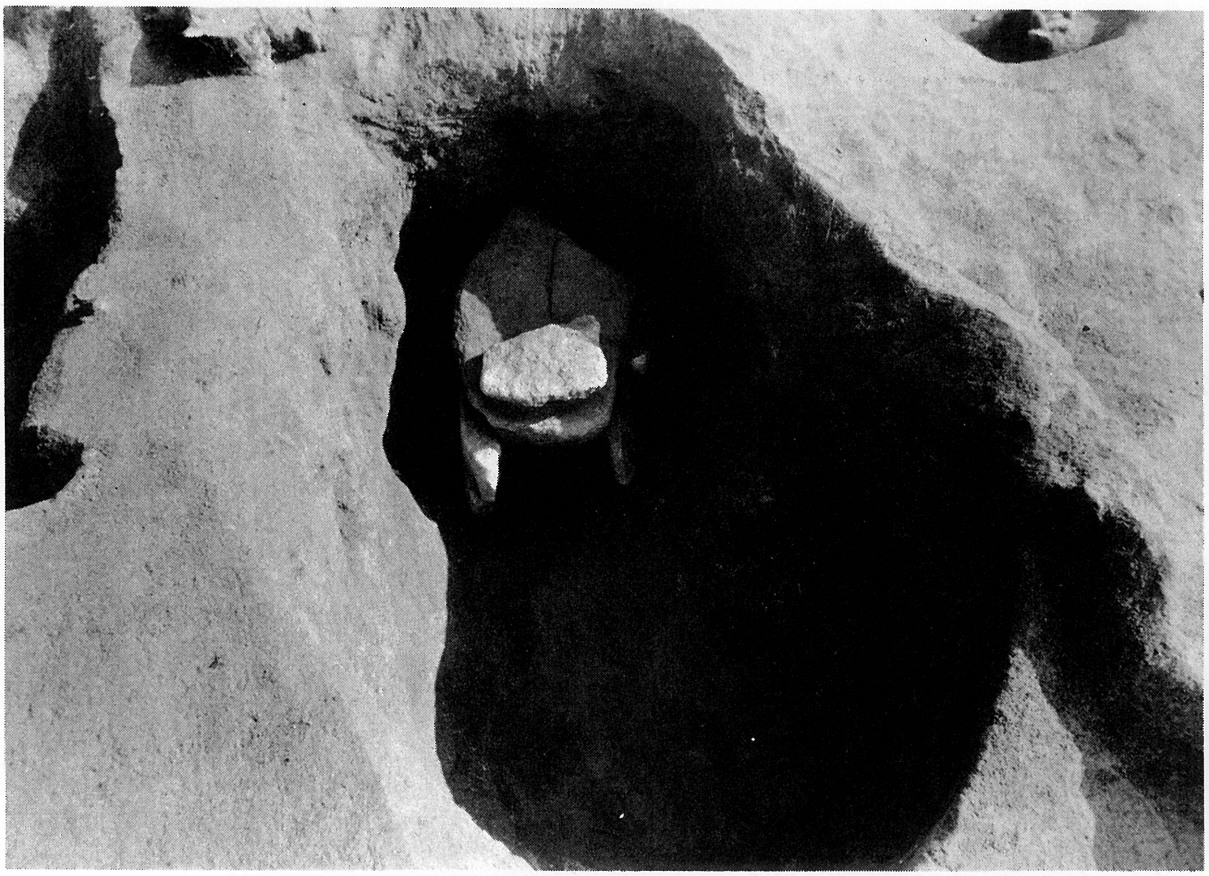
b. B地点　第5・6号墓



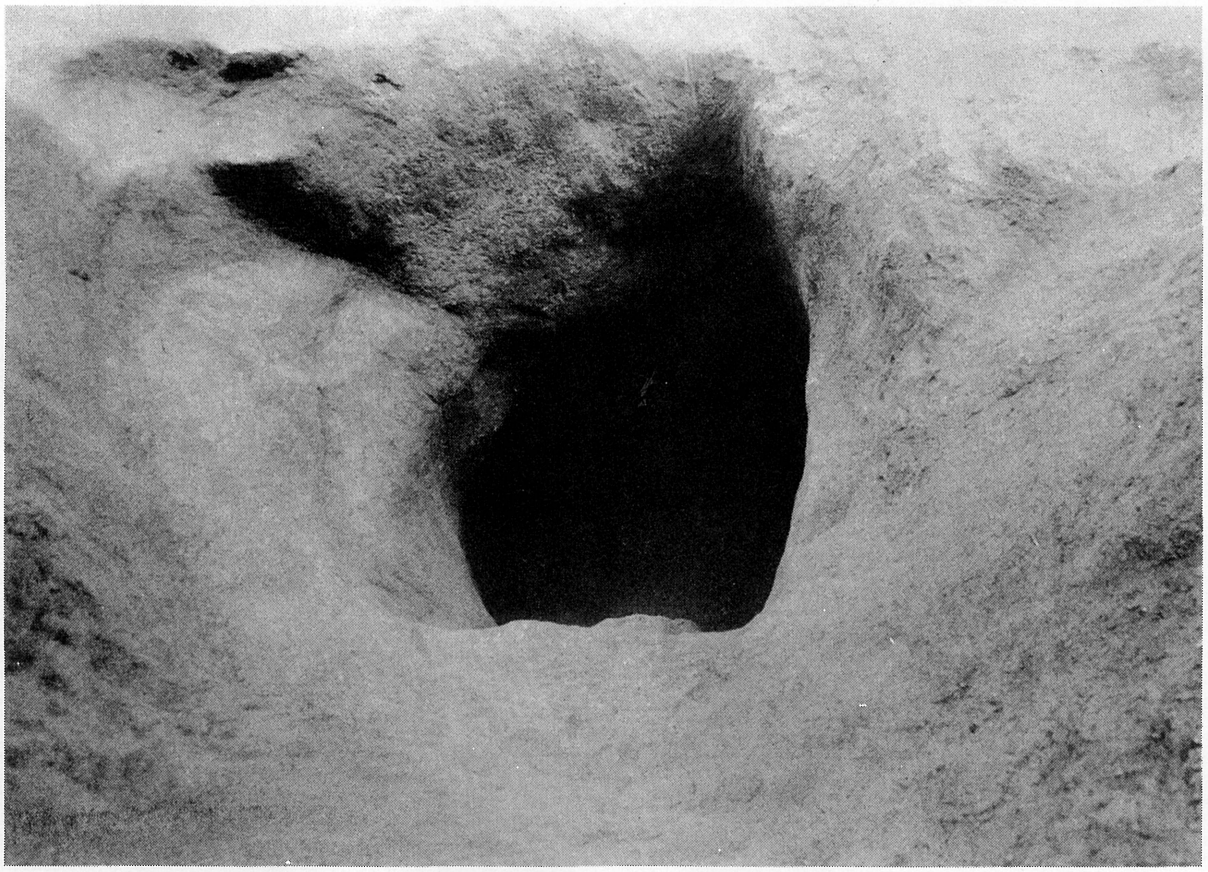
a. B地点　第7号墓



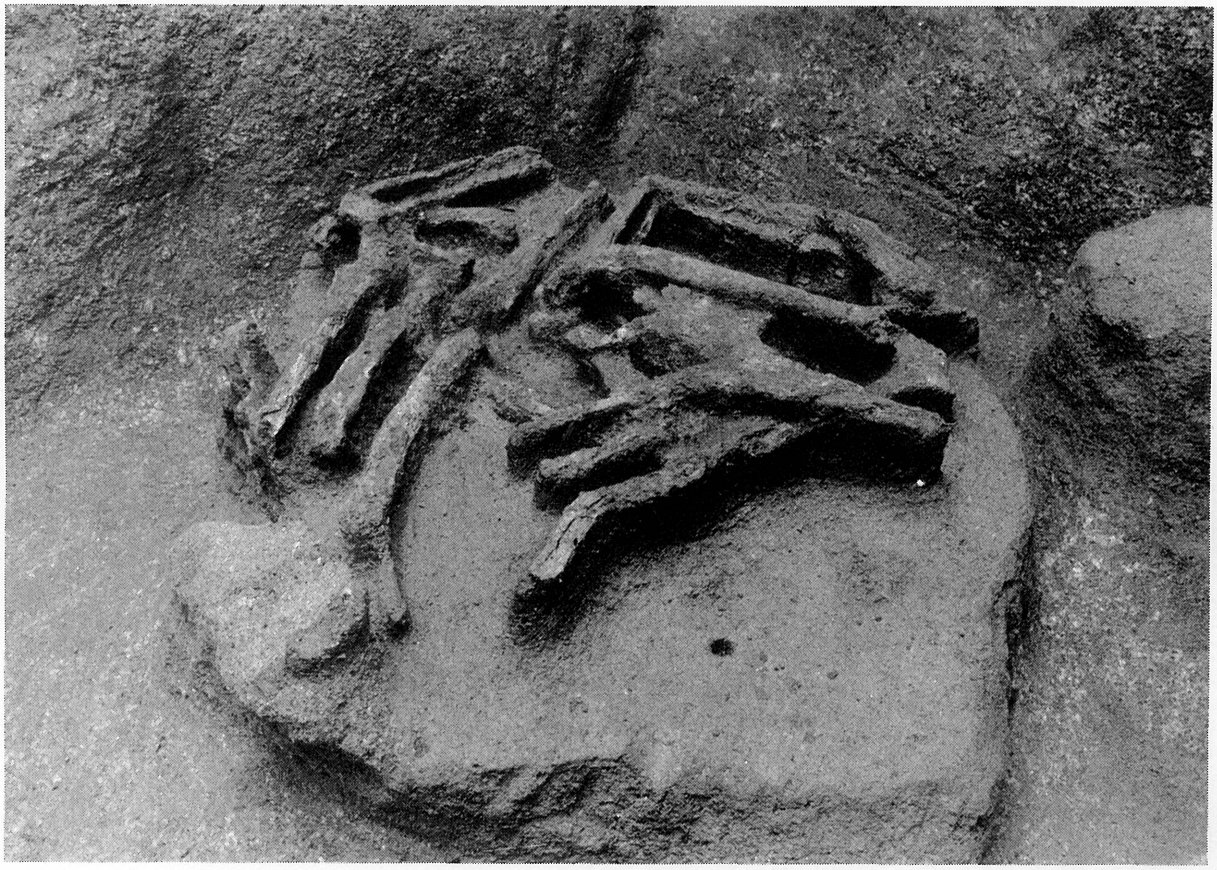
b. B地点　第8号墓



a. B地点　第9号墓



b. B地点　第10号墓



a. B地点第10号墓下層人骨出土状態



b. B地点　第10号墓上層人骨出土状態



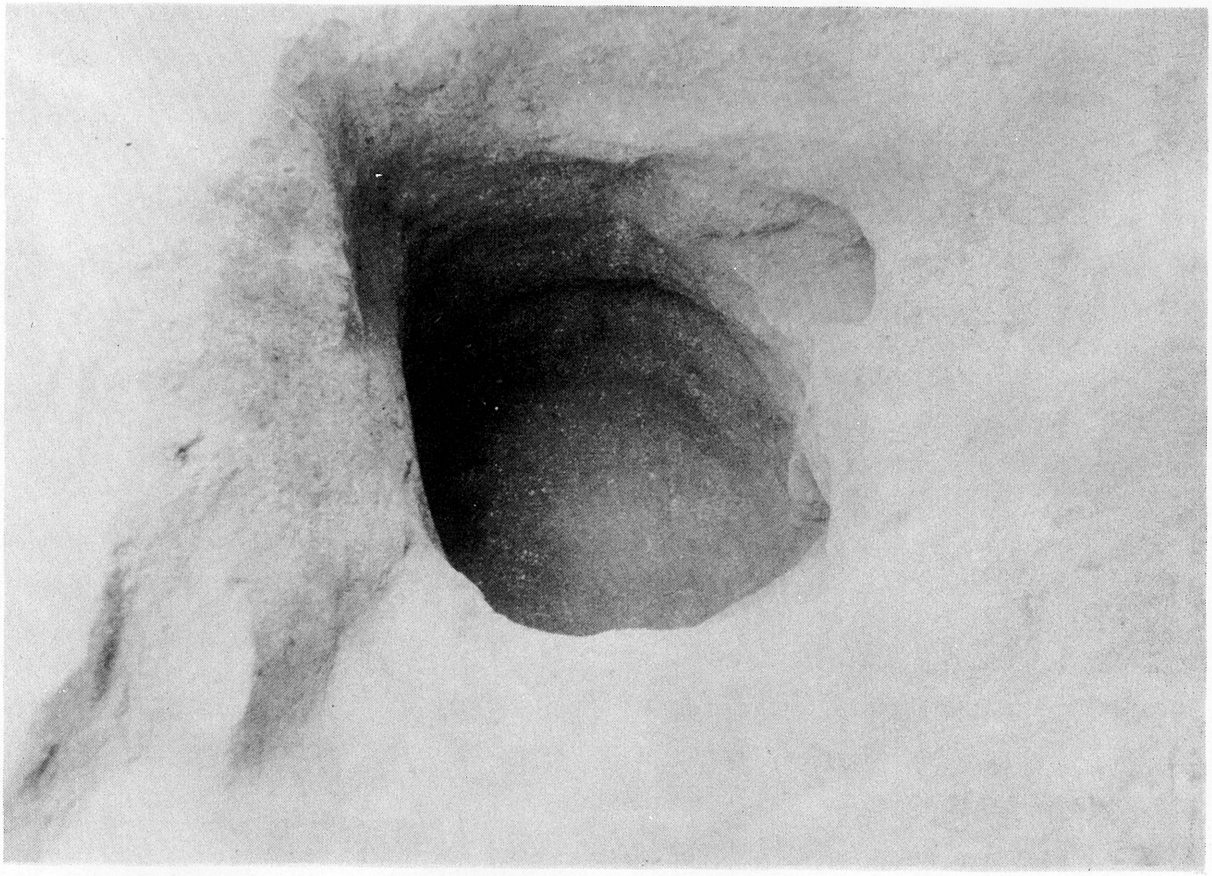
a. D地点 全　　景（航空写真）



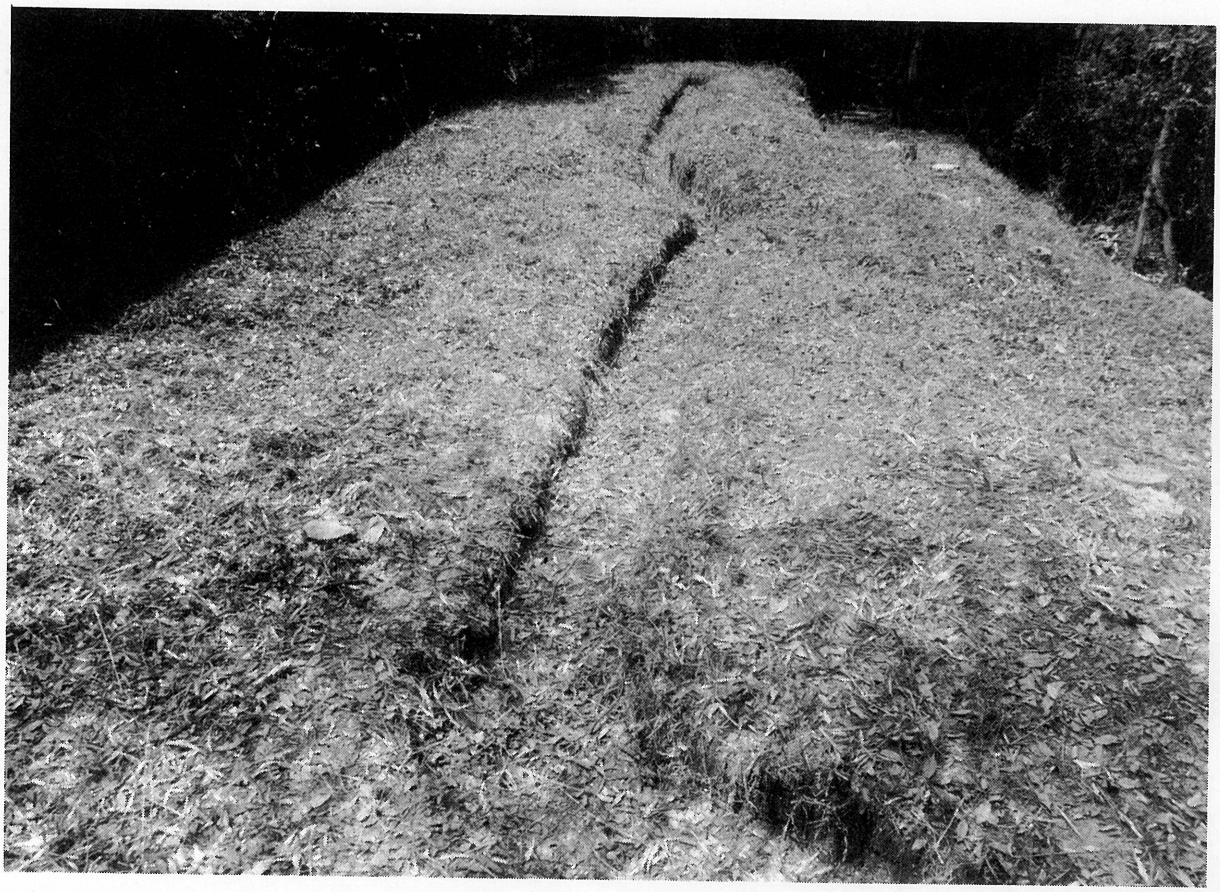
b. D地点 近　　景（調査前）



a. D地点　住居跡



b. D地点　土　壙



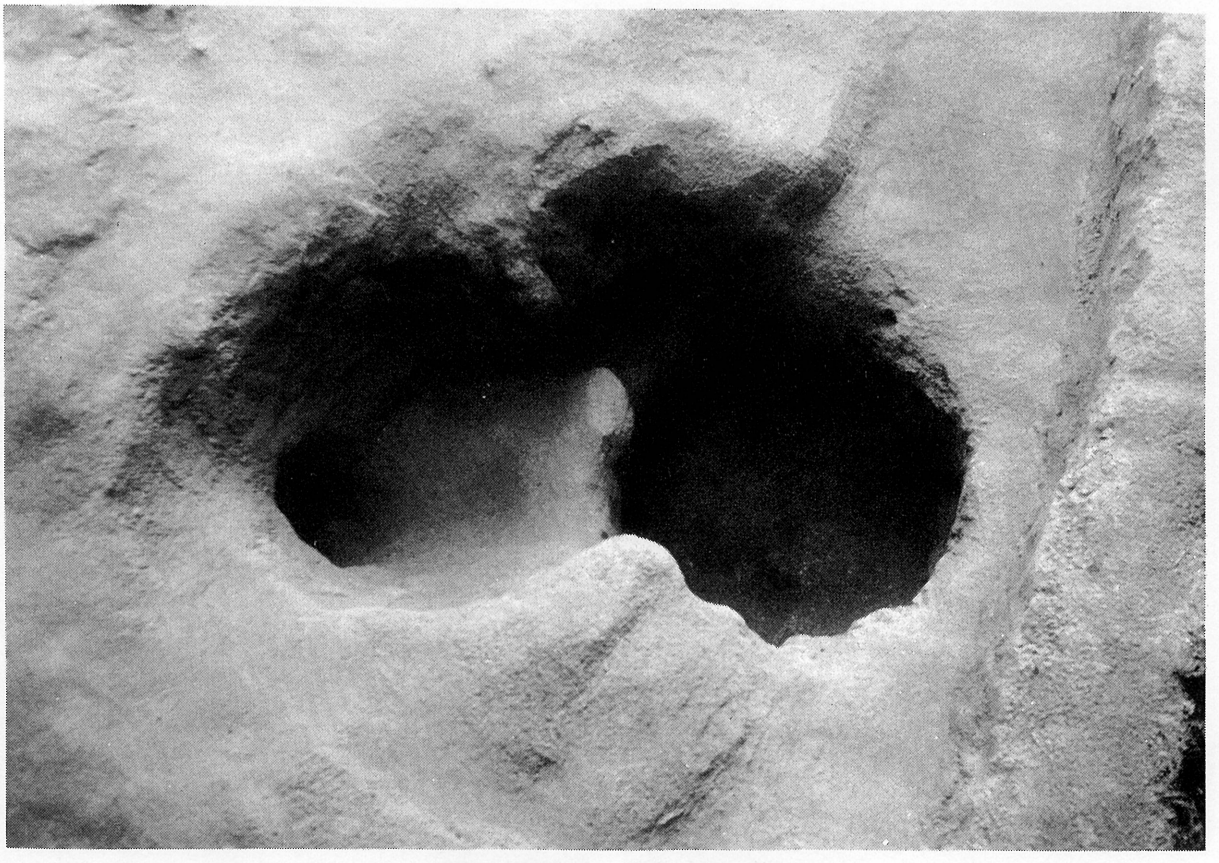
a. E地点近　景（調査前）



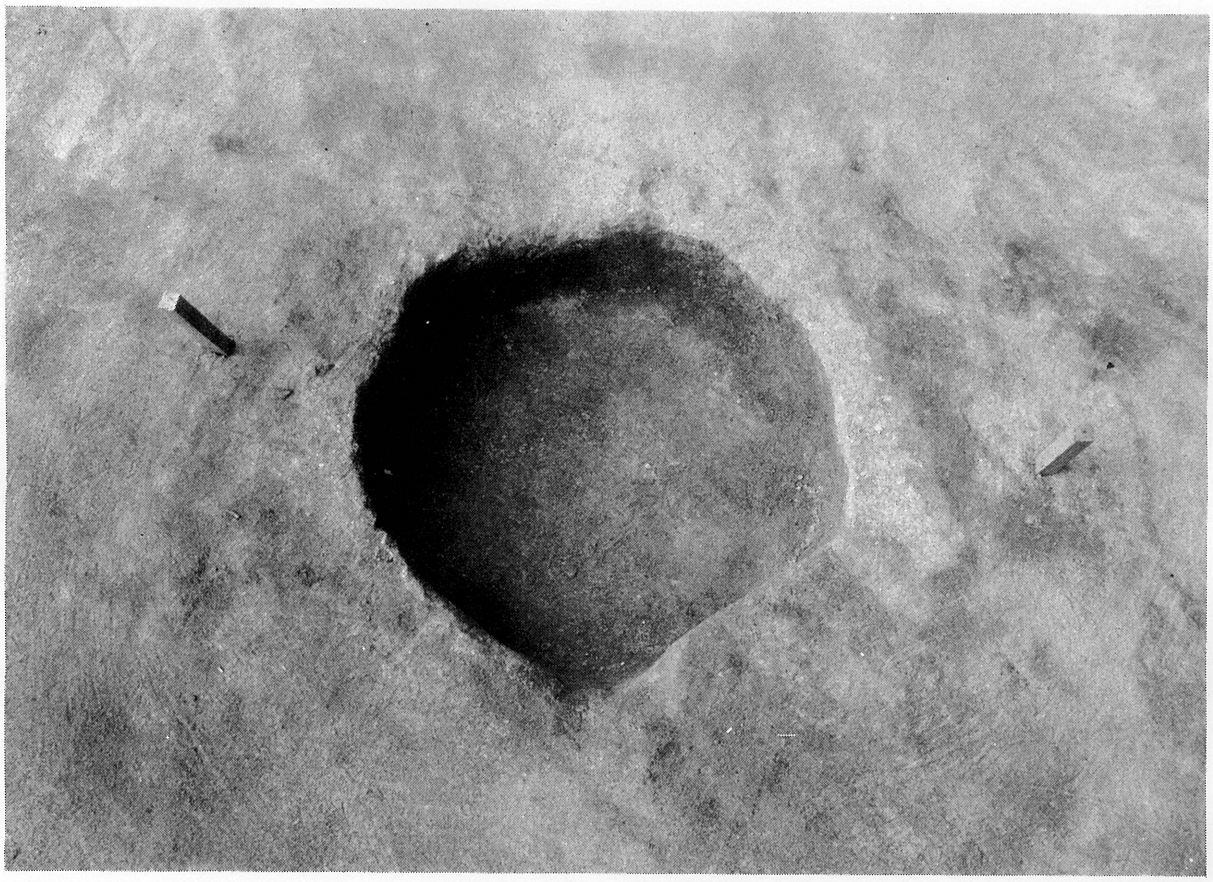
b. E地点近　景（調査後）



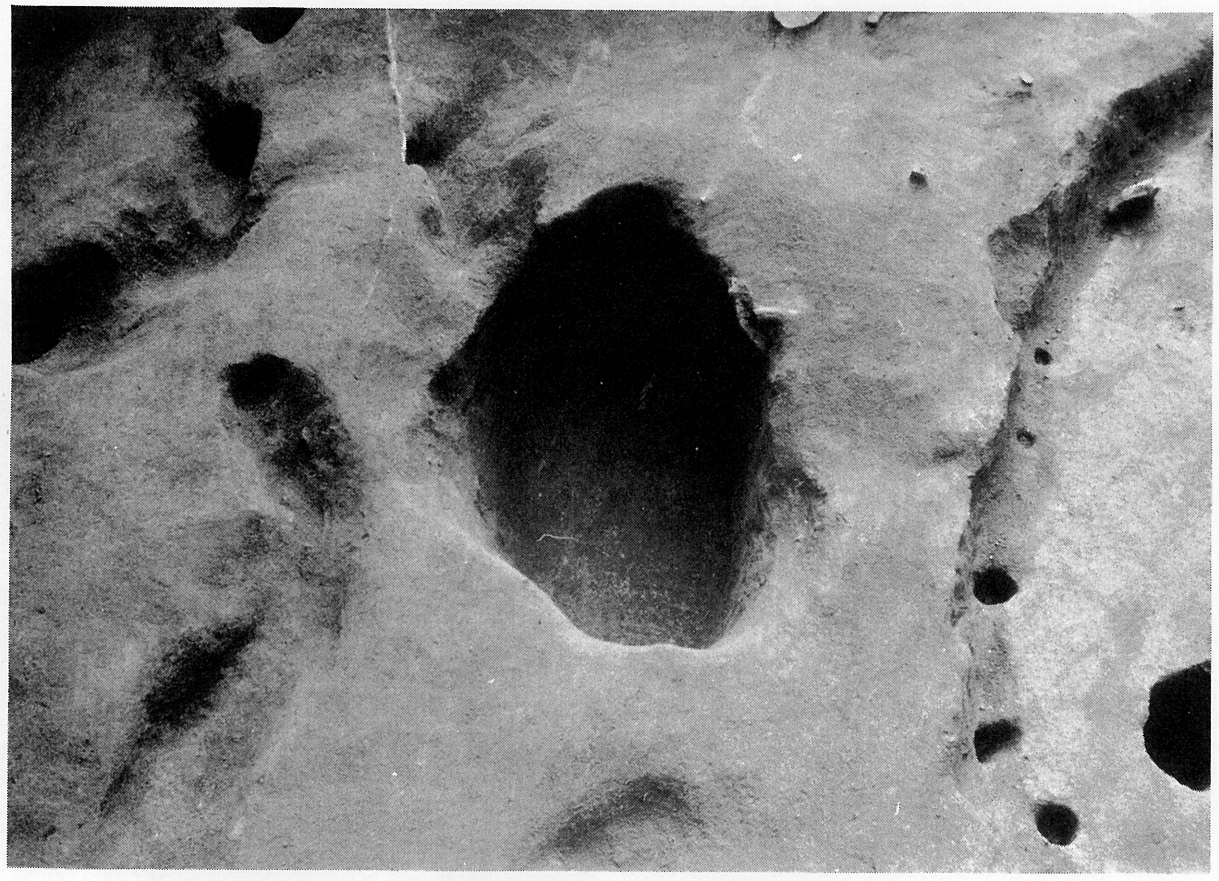
a. E地点　第1・2号住居跡



b. E地点　第1号土壙



a. E地点　第2号土壙



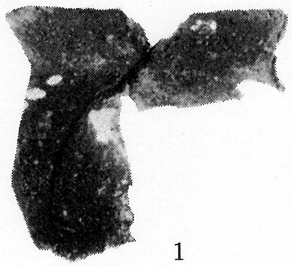
b. E地点　第3号土壙



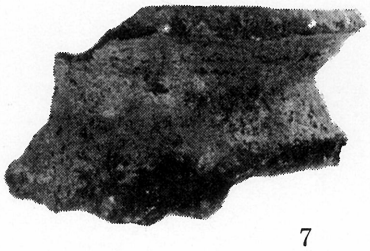
a. E地点　第4号土壙



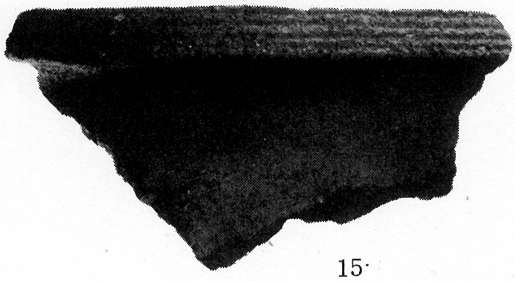
b. 岩上城跡遠景



1



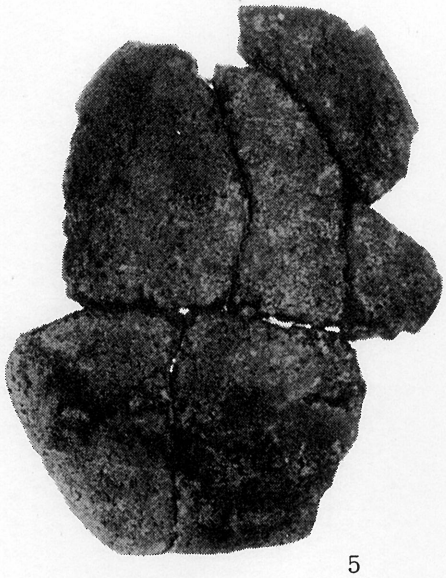
7



15



16

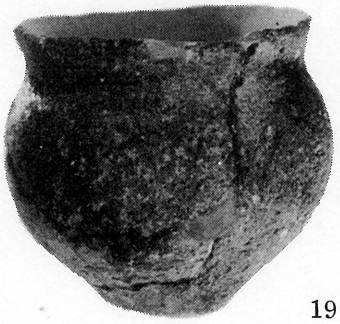


5

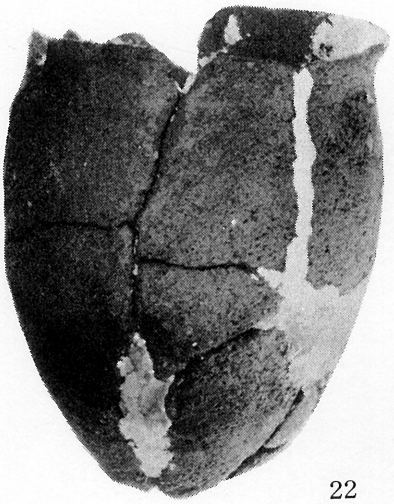


18

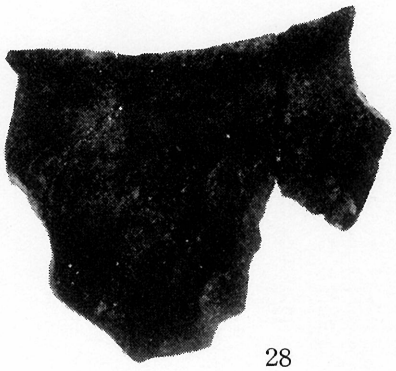
A－1地点　出土土器



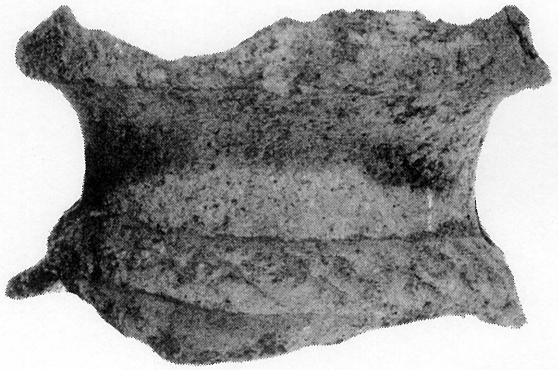
19



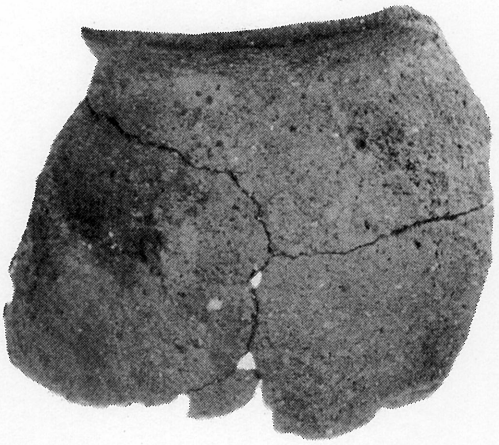
22



28



35



38



39

A－1 地点　出土土器

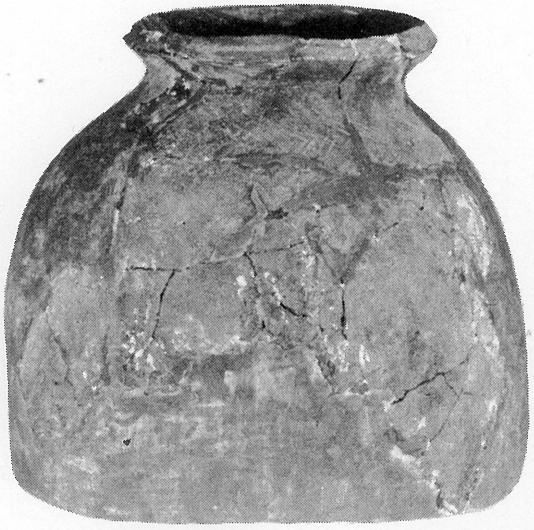


1



2

A－2地点　出土土器



3



1

C地点　出土土器

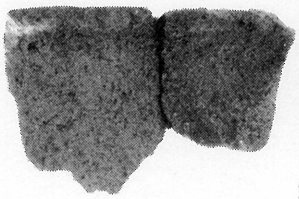
A－2地点及びC地点出土土器



1



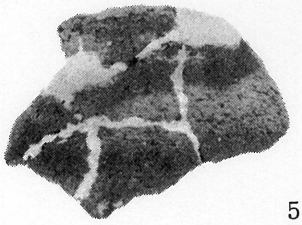
2



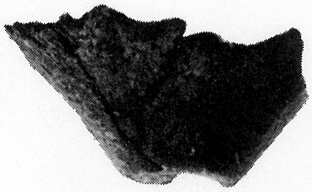
3



4



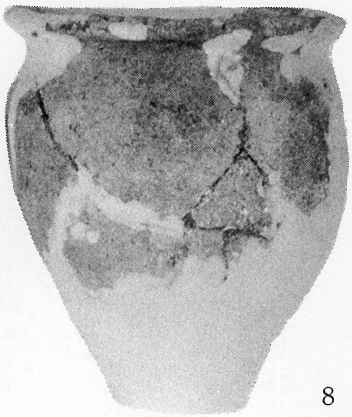
5



6



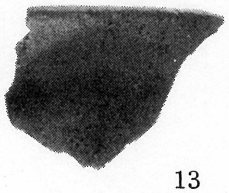
7



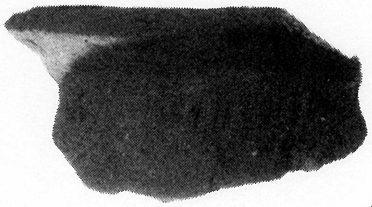
8

（縮尺は1/3）

B地点　出土土器



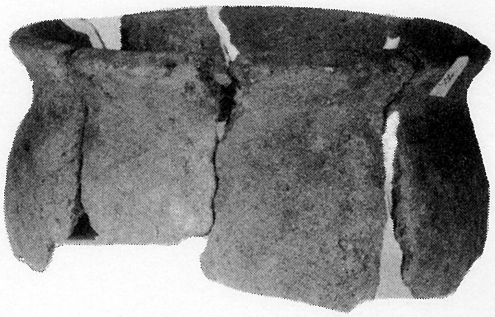
13



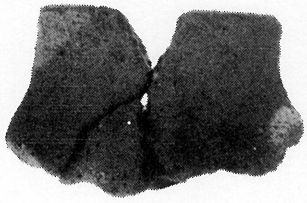
9



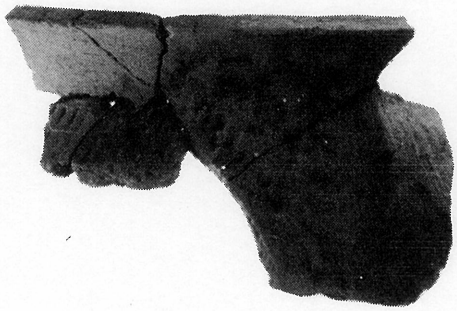
14



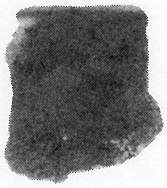
11



15



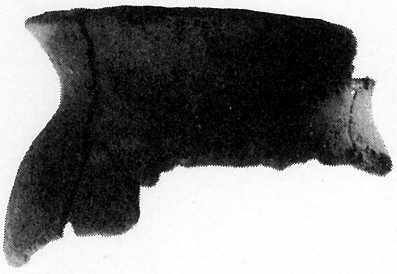
12



16

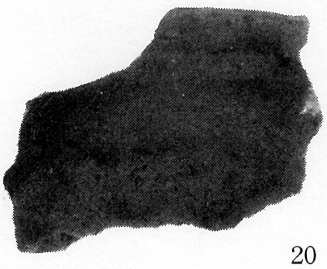


17

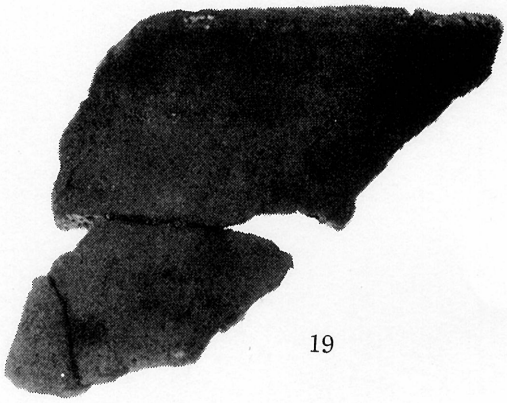


18

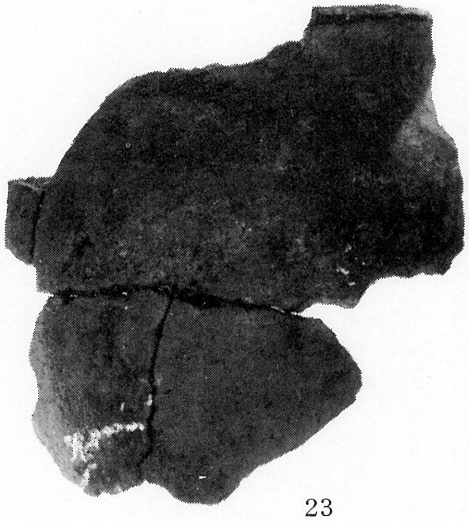
B 地点　出土土器



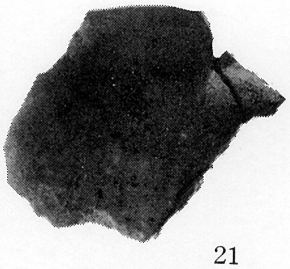
20



19



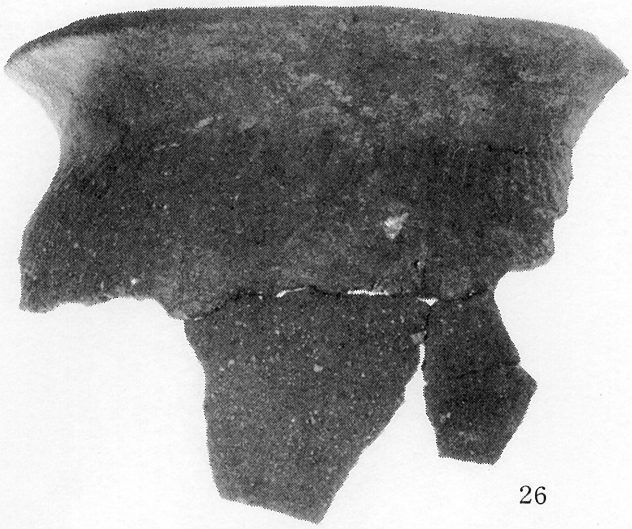
23



21



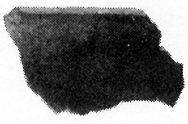
22



26



24

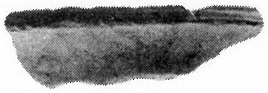


25

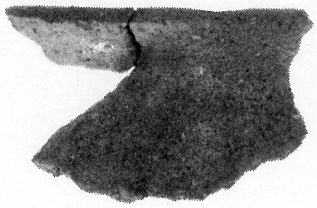
B 地点　出土土器



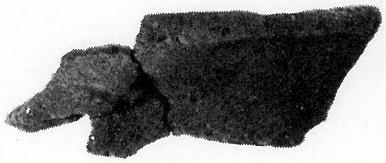
28



27



29



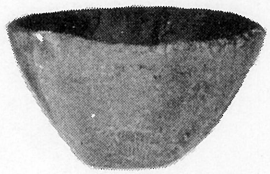
30



33



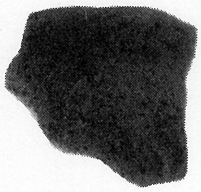
32



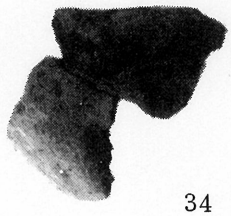
31



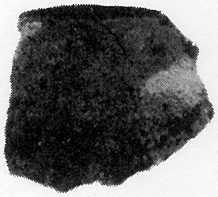
36



35



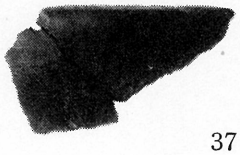
34



39



38

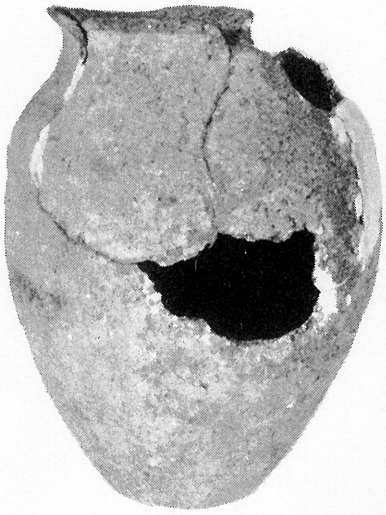


37

B 地点　出土土器



40



41



42

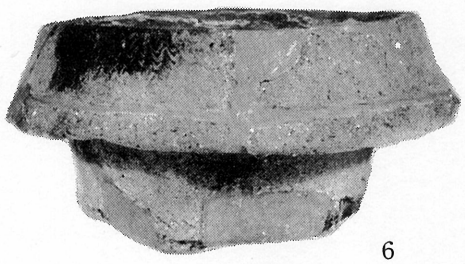


43



44

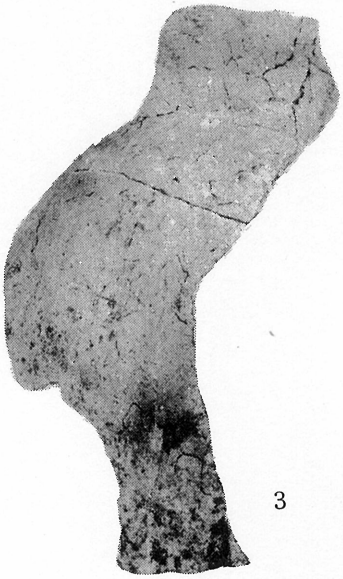
B 地点　出土土器



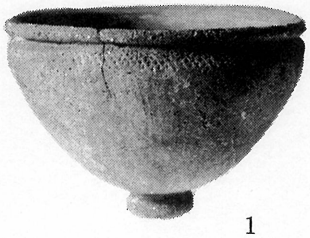
6



8



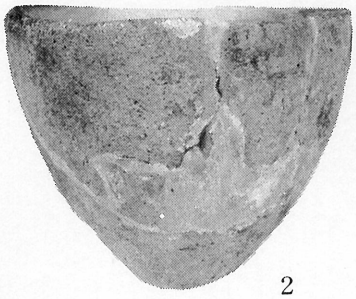
3



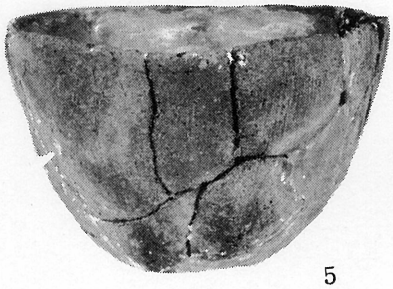
1



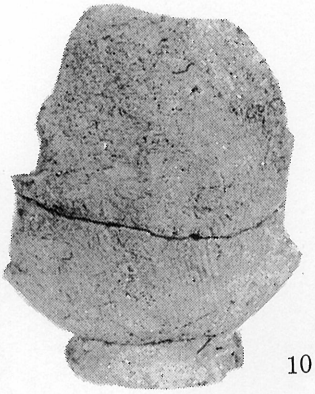
9



2



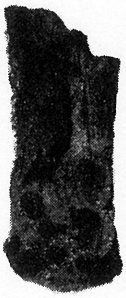
5



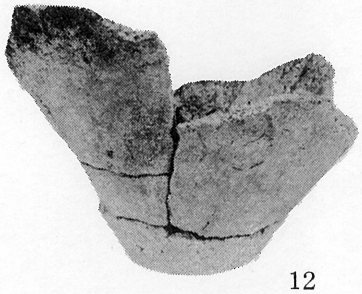
10



11



（鉄斧）

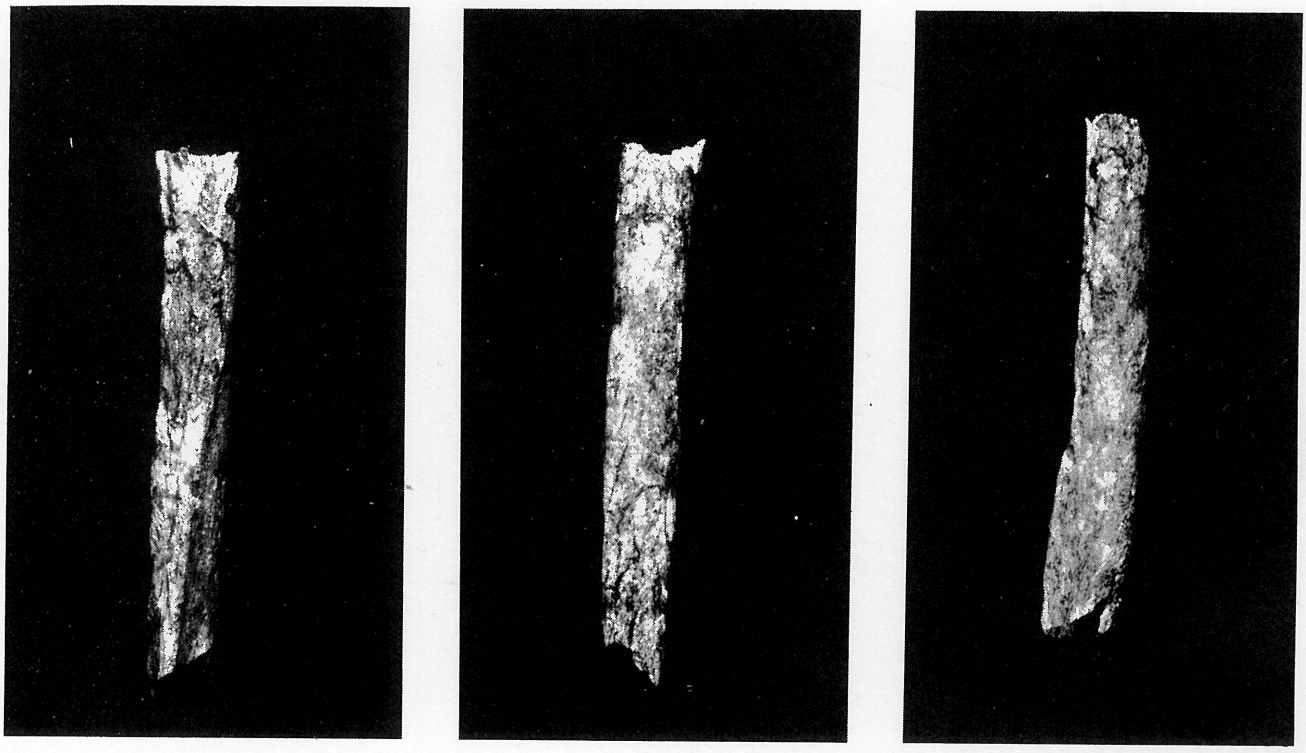


12



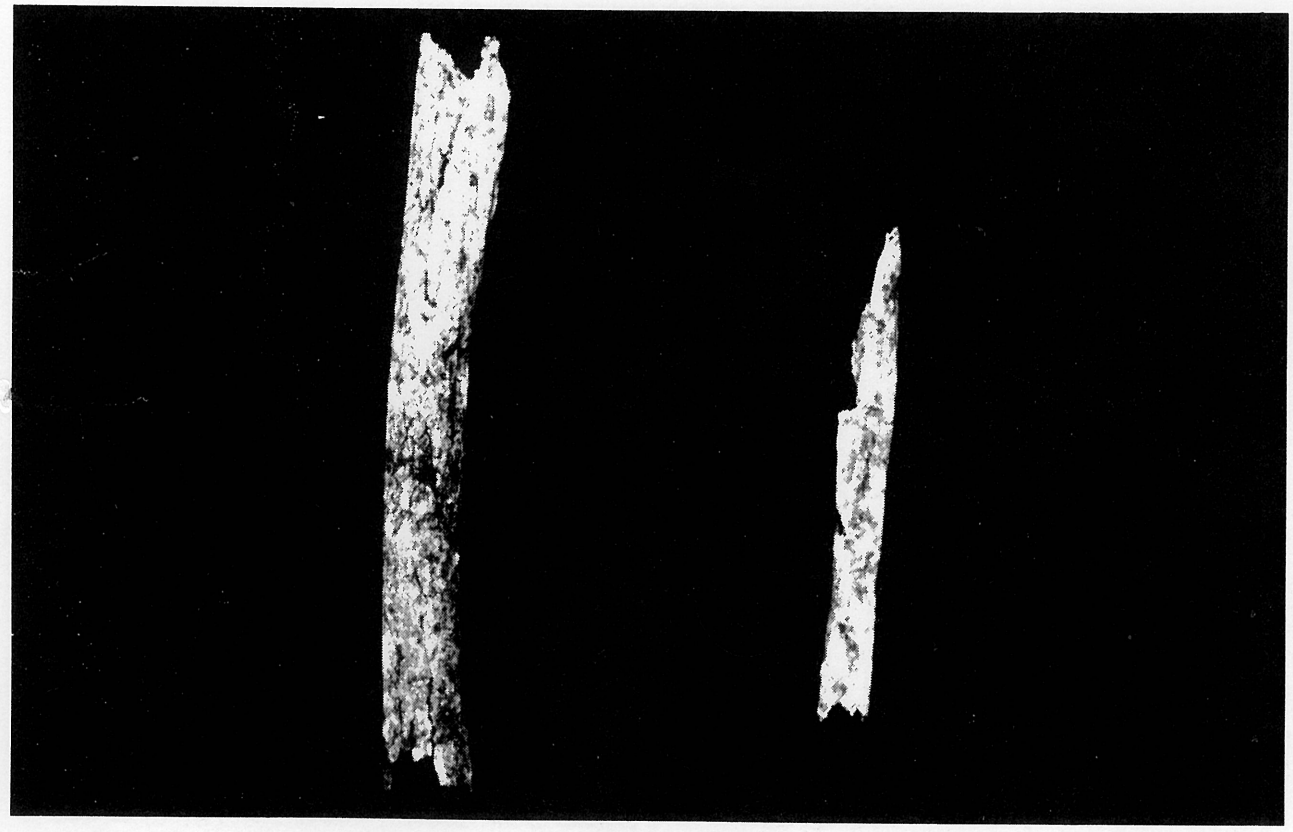
13

E地点　出土土器及び鉄器



①　　②　　③

大腿骨１（男性）〔左＝後面，中央＝前面，右＝側面〕



④

左＝大腿骨２（女性）右＝腓骨（男性）

広島市の文化財 第28集

広島市安佐北区高陽町所在

末光遺跡群発掘調査報告

1984年3月

編　集
発　行　広島市教育委員会
（社会教育部社会教育課）
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
TEL（082）245－2111（代）

印刷所　電子印刷株式会社
広島市中区堺町一丁目1番5号
TEL（082）232－3770